
正義の味方と夢見る聖者

T・M

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

正義の味方と夢見る聖者

【Nコード】

N45930

【作者名】

T・M

【あらすじ】

正義の味方と夢見る聖者。似ているようでちょっと違う、赤い衣を纏った2人の男と、赤毛の無垢な少年の物語。

正義の味方／理想を目指す現実主義者は、夢を語らない。

夢見る聖者／現実を駆ける夢想家は、正義を求めない。

それでは、無垢な少年は……？

拙作はネギま！の作品世界を舞台としたクロスオーバー作品です。

設定の擦り合わせや筆者独自の設定解釈、後付け設定、ご都合主義等々が含まれます。また、クロスオーバー作品を御存知ならば察しがつくとは思いますが、死者が出ます。これらの点で不快なものがあある場合は、読むことをお勧めしません。

それでも読んでみようとという方、ありがとうございます。

プロローグ

Part 1 Unlimited Blade Works

この世のものとは思えぬ光景だ。

目の前に広がる『世界』を見て、真つ先にそんな言葉が浮かんだ。目に付くものは、一切の生命の宿らぬ赤い荒野、鈍らから名作までが揃った無数の剣の群れ、赤く黒く焼けた空。そして、世界の最果てに燃え盛る煉獄の炎と、世界の中心に立つ、この剣の国の王。それらを認識してから数秒後、突然の事態に誤作動を起こしてしまった脳髓が、漸く最も確認すべき事項を思い出した。慌てて、背後を振り返る。

自分の命を狙っている2人に無防備な背中を晒す危険性を考慮する余裕すら、今は無くなっていた。

この世に生を受けてから、ずっと、物事を知るのが好きだった。好きで好きで堪らなくて、気が付いたら狂っていた。

1つのことを知れば、それに関わること、また別のこと、幾つものことを知りたくなる。

無知が埋まれば未知が現れ、既知が増えるほどに未知も増え続ける。

その連鎖がたまらなく楽しく、喜ばしく、愛おしくて、気が狂わずにはいられなかった。

狂った精神に合わせて、知り得た様々な術によって自らの肉体を改良し続け、身近な環境は常に最適化し続けた。より早く、より多く知る為に。

しかし、時が経ち、知識と未知が増え続けるほどに、途方もない欲望が自らの裡に膨れ上がっていた。

知りたい。

この世の。
この宇宙の。
世界の全てを
知りつくしたい

その欲望に気付いてしまえば、もう抗いようなど無い。
ただ漠然と何かを知ることには費やしてきた情熱と執念の全てを、
その欲を叶えるための行動に移し換えた。
そうして準備を整え続けること　正確な年月は忘れたが　数
百年。

漸く、漸く自分の最初で最後の願いを叶える、最初で最後のチャ
ンスに辿り着いたというのに。

現実にはあまりにも非情であり、無情であった。

「あ……ああ………　あああああああああ……！」

『この世の全てを知る』、そんな荒唐無稽で実現することなど不
可能に近い願い。それを叶える為に作り上げた装置は、見るも無残
な有り様だった。

形こそ保っているが、それは最早崩壊寸前、制御不能に陥ってい
ることが一目で分かった。

装置の制御部分を担っていた工房と、その中核の魔法陣。装置へ
と接続し、大術式によって生物から搾取した魔力と土地を流れる魔
力を供給し、余剰の魔力を還元して安定させる役目を負わせていた
龍脈。

それら、自身を除いた最も重要な部分から世界ごと強引に引き剥
がされた装置は、もう手の施しようが無い。

修繕することも、修正することもできはしない。

「嘘だ……嘘だ………　こんなの、こんなの嘘だ！　嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ
嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ！！」

装置の前に跪き、狂った精神が猛るに任せ、単調な言葉を発し続
ける。

数百年にも渡って心血を注ぎ、己の持ちえる全てを費やして作り上げ、掴み取った最初で最後の機会が、たった一瞬で、半世紀も生きていない人間によって粉々に打ち砕かれてしまった。

ならば、その願いを抱いた心までも砕かれるのは必然であった。すると、男の絶叫に呼応するかのように、装置が暴走を始めた。

世界の全てを知る為の　世界の外側へと逸脱する為の機能が、誤作動を起こしたのだ。

魔力は足りているが、時間も場所も滅茶苦茶だ。こんなことで、世界の外側へ逸脱するための道が開かれるはずが無い。

いや、それどころか。

制御もできず、何の防御策も講じられないこの状況で世界の狭間に放り出されれば、世界の内側に存在の痕跡や魂すら残さずに消滅するだろう。

「こんなの……こんなの、何かの間違いだ。そうさ、これは間違いないんだ……」

男は現実を受け入れられず、認められず、朦朧とする意識のまま、ふらふらと、世界に孔を穿っている装置に縋り付こうとして

「これは……何かの間違いだああああああああ……！！」

装置が空けた孔へと吞まれ、その華奢な肉体は瞬く間に崩壊した。

畜生、畜生。

知りたい、知りたいよう。

もっとたくさん知りたいよう……。

この世の全てを知りたいよう……。

……もう、無理か。

なら、それならさあ。

この僕がもう終わりなら、せめて………僕の知識の全てを……

.....。

男の肉体が崩壊してから数瞬の間を置いて、煉獄の炎に包まれた世界は崩壊し、世界の全ては孔へと呑まれた。

「バツ……力、なあ！ こんな所で死ねるか！！ こんなことであえ死んでたまるかあああ！！」

「……ま、まだ……俺は……死ねない……」

息吹く生命無き世界に残された2つの命も例外なく、その願い諸共に呑み込まれた。

Part 2 NOMANS LAND

ノーマンズランド、新都市“テラ”。

ノーマンズランド全土を震撼させ、全宇宙の人類とプラントの間に大いなる一石を投じた『方舟事件』から約1年半。

その間に、ワイプドライブ技術によって銀河の各所から地球連邦の船団が続々と到着し、ノーマンズランドを地球連邦政府の一員と

して迎えた。

その一環として、過酷極まる環境のノーマンズランドへの支援の名目で様々な人、物資、技術、プラントが流入することになった。そのノーマンズランドの地上の拠点が『新都市』と呼ばれる都市なのだ。

ここはノーマンズランドには無い物ばかりがあり、その全てがメイド・イン・地球。ノーマンズランド製の物と同じような物品があったとして、その品質は天地の開きよりも圧倒的に格が違う最高級品。

そうなると当然、そういった『お宝』目当ての盗賊や荒れくれ者がひっきりなしに現れる。だが、それらを悉く街に侵入される前に撃退するほど、この街のセキュリティ・システムは優れている。

だが、今夜ばかりは違った。

侵入者 ではなく、脱走者の追跡と、ある実験の暴走事故が重なり、街の中核に存在する研究施設は蜂の巣をつついたような大騒ぎになっていた。

「ふう。どうやら、追手は上手く撒けたみたいだね」

「ええ。幸い、こつちの方には人が少なかつたようです」

警備兵に追われるまま、右へ左へ、上へ下への大逃走劇を演じていた2人は、そこでやっと一息ついていた。

1人は、遠くからでも目を引く深紅のコートを着込んだ黒髪の男性。

もう1人は、黒い帽子とマントが目を引き、顔の右目の方に特徴的な刺青を入れている、巨大な荷物を背負っている灰色の髪の男性。ヴァツシュ・ザ・スタンピードとリヴィオ・ザ・ダブルファング。稀代の超特大賞金首へと返り咲いた人間台風「ヒューマノイド・タイフーン」と、その彼に同行しては振り回されている見習い牧師だ。

彼らが砂漠を歩き倒れていたところを救助され、身元が判明するや保護の名目の下に新都市の中でも特別な研究施設に監禁されたの

は5日前のこと。体力もすっかり回復した2人は、先日からどうやって脱走しようかと思案していたところに今回の事件が起こり、これは幸いにと騒ぎに乗じて強硬手段で脱走に及んだ。

だが、流石は地球連邦政府のお膝下。脱走とほぼ同時に察知されてしまい、つい先刻まで1時間にも及ぶ逃走劇を演じていたのだ。

追手も振り切った今は、さっさとこの街からおさらばするだけというわけには、どうにもいかないようだ。

「で、どうしますか？ ヴァッシュさん」

「勿論、暴走している彼女 プラントのところに行く」

施設内を逃げ回っている内に、混乱の中錯綜する情報が、自然と2人の耳にも入ってきた。

この施設で行われている実験とは、プラントを用いた物質転送実験であり、そのプラントが暴走を始めたことが、この騒ぎの原因なのだ。

そんなことを聞いては、引き下がってなどいられない。

「君はどうする？ 先に逃げてもいいんだぜ？」

「まさか。あなたを1人で行かせたら、それこそ心配で夜も眠れませんが」

ヴァッシュの言葉に、リヴィオは溜息交じりに、即座に頷いた。

「ありゃ、ずいぶんと信用が無いんだね、僕」

「いえ。あなたを信頼しているからこそ、心配にならざるを得ないんですよ」

ヴァッシュ・ザ・スタンピードの関わったトラブルは、必ず只では終わらない。

人的被害を極力小さく抑えられても、その代わりとばかりに物的被害は予想を遙かに上回ることになるのが常だ。

でなければ、財力や権力よりも暴力が物を言うこの星で一番の平和主義者に、天文学的な懸賞金がつくはずもない。

リヴィオの返事に苦笑しながらも、ヴァッシュは返事を聞くとすぐに走り出した。リヴィオも遅れずそれに続く。

構造の分からない複雑な施設内を、幾度も行き止まりに阻まれながら、それでも迷うことなく着実に、2人は目的地の方向へと真っ直ぐに駆け抜けていく。

先導するヴァッシュユが行き止まりに出してしまうことはあっても迷うことが無いのは、勘でもなければ運でもない。彼とプラントが惹かれあっている。一種の感応状態にあるからだ。

途中、施設からの脱出を図っている人間たちと遭遇することもあったが、その都度上手く立ち回って振り払った。

やがて、地下の実験場に近づくほど人の気配は少なくなり、いよいよ最後の昇降機の付近にもなると人の気配は完全に消えていた。

その事実には、ヴァッシュユは悲しげに眼を伏せた。

プラントは、一部の特別な存在を除いて自律行動はできない。人の協力なくして、動くことは避難することは不可能だ。

人間にとつて、所詮、プラントは道具でしかないのかと、悩みながらも歩みを止めず、昇降機に乗り込む。

昇降機は内部が一瞬擬似的な無重力になるほどの速度で降下、というよりも落下し、数秒で地下実験場へと続く扉を開いた。

そこに広がる光景に、ヴァッシュユは思わず目を見開いた。

「プラント、2号から20号まで完全退避完了！」

「1号プラント、未だに熱量増加中！こちらの修正プログラムも受け付けてくれません！」

「これは……畜生！原因はファイアオールだったのかよ！？入力されるプログラム全部がウィルスの類と誤認されちまつてる！」

「プラント、21号から26号、28号から30号まで避難完了です！」

「27号はどうした!？」

「0号の暴走に影響を受けているようで、非常に不安定な状況です！このまま避難させるのはかえって危険です！」

「ああ、くそ！ 最悪俺たちまで彼女達と一緒にお陀仏か!?」
「いいじゃねえか！ 野郎ばかりで死ぬよりは、よっぼど華がある
つてもんよ！」
「それもそうだが、誰も死なないのが一番だ！ 最後まで諦めるな
よ！」

そこには、何十人もの技術者たちが居た。彼らは避難勧告を無視して現場に留まり、プラントの避難と、件の暴走しているプラントの救出の為に行動してくれていたのだ。

先程、勝手に諦めていた自分が馬鹿だった。人間とプラントの関係は、そんなに冷え切ったものではなかったのだ。

ヴァツシユは心の赴くまま、躊躇わず感涙した。

「ど、どうしたんですか!？」

「いや、なんでもないよ……ただ、なんだか嬉しくってさ」

言いながら昇降機を降りると、2人に気付いたらしい技術者が1人、こちらに走って来た。

「あんた、ヴァツシユ・ザ・スタンピード!? どうしてここに!？」

「いや、ちょっとね……。暴れん坊のお嬢さんを落ち着かせようと思ってる」

「暴れん坊のお嬢さん……って」

ヴァツシユの言葉を聞いて、技術者の男性は同じ言葉を自分でも繰り返し、その意味を理解して驚愕の表情を浮かべた。

「まさかあんた、彼女と精神感应しようってのか!？」

「うん、そのつもり」

「無茶な……いくらあんたが自律種【インディペンデンツ】とはいえ、髪や毛どころか体毛全部が真っ黒だっというじゃないか！ そんな状態で精神感应なんかしたら、どうなるか！」

技術者はそう言って、ヴァツシユの提案を無謀と断じた。だが、他人に忠告された程度であっさり引き下がるようなら、ヴァツシ

ユ・ザ・スタンピードは“人間台風”などと呼ばれはしない。

「……すまない、本当に時間が無いみたいだ。リヴィオ！」
「失礼」

リヴィオに呼び掛け、ヴァッシュは技術者を押し退けるように進み、そのままの勢いで東奔西走している技術者達を掻き分けて奥へと突き進んだ。

「あ、おい！ あんたら、よせ！！」

その声に気付いて、他の技術者達もヴァッシュを制止しようとしたが、悉くかわされるか、リヴィオに弾き飛ばされるかだ。

何千人という賞金稼ぎから今日まで逃げ遂せて来たヴァッシュと『ミカエルの眼』最強の尖兵であるリヴィオに対して、単なる技術者である彼らでは役者不足も甚だしい。一般的な地球民には酷な話ではあるが、場数が違いすぎるのだ。

ヴァッシュとリヴィオはそうして瞬く間に技術者達を掻い潜り、目的の暴れん坊のお嬢さん 暴走状態のプラントの目前にまで辿り着いた。

流石に周囲に人影はなく、誰かが追って来る様子もない。つまり、それぐらいに危険な状況だとこの施設の人間は感じているのだ。

しかし、ヴァッシュは事態がより深刻であることを感じていた。暴走している彼女の力は、最盛期のヴァッシュやナイブズ程ではないが、かなり大きい。それこそ、彼女の暴走している力が解放されれば、この研究施設を丸ごと“持って行って”しまうのではないかとヴァッシュに思わせるほどだ。

だが、今さらそんな大規模な退避など間に合わない。この状況をどうにかするには、彼女の暴走を収める以外に無い。

「リヴィオ、君まで突き合わなくてもいいんだよ？」

ヴァッシュが最後の警告を発しても、リヴィオは「それじゃあ」と言っただけを返すようなことはせず、寧ろ「どんとこい」とばかりに笑って見せた。

「水臭いことを言わないで下さいよ、ヴァッシュさん。ここまで来

たら一蓮托生、地獄の底までだって付いて行きますよ」

「そうか……分かった。それじゃあ、万が一にも邪魔が入らないように見張りと護衛、よろしく」

リヴィオからの返事に、ヴァッシュはピースを返す。

プラントが収められているガラスのような防護壁に手を触れ、そのまま彼女と顔を向き合わせる位置に額を当てて目を瞑った。

やることは、基本的にバド・ラド団に襲われたサンドスチームの時と変わらない。ただ、問題があるとすれば2つ。

1つは、あの時とは暴走の意味や度合いが悪い方向に違い過ぎること。もう1つは、ヴァッシュの“力”が大幅に減退していることだ。

それでも、最悪の事態を避けるためにはやるしかないのだ。

ヴァッシュは意を決して、暴走しているプラントと精神感応を始めた。

やあ、お嬢さん。調子はどうだい？

あなたは、V.T.S.

V.T.S.?……ああ、ヴァッシュ・ザ・スタンピードの略か。そうさ、僕はV.T.S。落ち着けるかい？　まずは僕と呼吸を合わせて……。

ダメ、逃げて。もう、押さえ付けるのも限界で、爆発しそうな

の。そうか。なら、頑張らないとね。僕も手伝うからさ。

何故、逃げないの？

誰も見捨てたくないからさ。それに、僕の他にも諦めていない人達が大勢いる。僕だけ諦めるっていうのは論外さ。

あの人達も、まだいるの……。でも、どうするの？

ああ、それだけど、もっと僕と深く感応して。記憶や知識も共有できるぐらい。

そんな。肉体は触れ合っていないから融合することはないけど、

下手をしたら人格や感情に影響が出るわ。

だけどさ、多分、それがこの状況をどうにかできる最後の、しかも唯一の手段だと思うわけなんだ。駄目かな？

いいわ。あなたがそれでもいいのなら、受け入れます。

それじゃあ、早速。時間が無いからね……………。

……………。凄い。プラントの“力”を、こんな風に扱う方法があるなんて。

伝わったようで何よりだ。僕がギリギリまでレクチャーするから、君も……………

いいえ。ヴァッシュ・ザ・スタンピード、暴発は防げないわ。

あなたの記憶や知識と照らし合わせれば、それは覆しようの無い事実だと確認できる。

……………ッ。そんなこと……………！

けど、貴方が伝えてくれた“力”の使い方がある。これなら、被害を極限まで小さくできるし、どうしても巻き込んでしまうあなた達を死なせないこともできる。

……………。それしか、無いのかよ。君が死ぬ以外の可能性は無いって言うのか……………！

ええ、残念だけど。それでも、あなた達を、ここのみんなを死なせないことが、助けることができる。それはあなたのお陰よ。

……………。すまない。なにか、僕にできることはないか？

それじゃあ、あなたに言いたい言葉があるの。それを、近くに残っているみんなにも伝えて。

ああ、分かった。必ず伝える。

……………『ありがとう』。

実際に言葉を交わすよりもずっと短い時間で、彼女との会話は終わった。同時に、感応が途切れる直前に伝わって来た情報を一瞬で把握した。

泣きたい気持ちをぐっと堪えて、ヴァッシュはすぐに口を動かす。

「ヴァッシュさん！ どうで……」

「リヴィオ！ とにかく荷物を持って動くな！！」

直後、暴走したプラントの力が解き放たれた。

近くにいたヴァッシュとリヴィオ、そしてプラント自身と周囲の壁や床を問答無用に、まるで削り取るように、空間ごとその全てを『持っていった』。

しかし、持っていかれた空間は解放された力の割に極めて小さかったことが、後の調査で判明する。

ヴァッシュの行動とプラント本人のお陰で、街が壊滅するという最悪の事態は何とか避けられたのだ。

このプラントを用いた物質転送実験は、実は地球連邦政府直轄の大掛かりなプロジェクトのものであった。

あらゆる物資に乏しいノーマンズランドの現況を改善するため、という名分の元に開始された実験は、既にノーマンズランド地表上での送受信を成功させていた。

今回の事故が起きた実験は、いよいよ本番一步前の段階。ある意味、世紀の瞬間になるはずだったのだ。

箱舟事件でナイブズ融合体が見せた、『持つて行く力』と『持つて来る力』の応用。短距離といえども個体による空間転移、地球連邦軍主力艦隊の攻撃を撃ち返した神業。

それらの“力”の使い方を参考とし、負の歴史を教訓に学び、正しき“力”の使い方として示されるはずだったのは

『誰もいない大地【ノーマンズランド】』から遙か遠き『人類の故郷【マン・ホーム】』。

宇宙開拓時代の真つ盛りである現在でも未だ数少ない、その中でも至宝とされる蒼き水を湛えた豊穡の大地。

暗黒の宇宙に浮かび輝く、遙かなる蒼【アクアマリン】。

地球とノーマンズランド間における、プラントを用いた物質の送受信であった。

Part 3 The EARTH

「うわああああああああああああい!？」

何かと衝突したような衝撃に目を回した直後、気が付いたら空中だった……という経験は、それなりに長い人生でも初めてだった。

しかし、混乱している暇はないということを、修羅場や危機的状況に慣れきった精神は即座に認識した。

眼下に見えるのは建物の屋上。このまま激突したら、全身複雑骨折は確実だ。

慌てず焦らず、しかし急いで空中で体勢を立て直し、何とか着地に成功する。だが、上空何mからかは分からないが、相当な高さからの着地は足にかなりの負担があった。

「痛てて……危づく捻るところだよ。あゝ、足が痺れるうー」

常人ならば着地の反動で足どころか下半身の骨が砕けているところだが、その程度で済んでいるのは、流星はヴァツシュ・ザ・スタンピードというべきだろう。

そうして暫く、着地の反動で痺れる足を擦りながら腰を下ろし、周囲を見渡す。

最後に彼女から伝えられた情報によると、ヴァツシュが放り出される先は地球で、恐らくは施設の内部ということだった。しかし実際は空中で、下にはビルだ。おまけに、近くにリヴィオが落ちてくる気配もない。

だが、ヴァツシュは現状を把握すると同時に感謝をした。何故なら、こうして自分は生きている、助かったからだ。きっと、それはリヴィオも同じはず。

「……ありがとう。君のお陰で、僕は今も生きている」

ヴァツシュは、命懸けで自分達を助けくれた彼女に礼を言った。

そして、足の痺れが取れて来たところで、ついさつき自分が落ちてきたばかりの上空を見上げた。

正確な時刻は分からないが、時間帯は深夜というところだろうか。それは幸いだったと、ヴァツシュは自分が落ちて来たらしい場所を見ながら、そんなことを思った。

そこには、地上の街から漏れる光に照らされる夜空の中に、明らかに不自然な暗黒の空間があるからだ。夜でなければ更に目立って大騒ぎになっていたことだろう。

いや、この場合は真昼で目立って、早期発見された方が幸いだったのだろうか？ などと上を見ながら考える。

上空に穿たれた暗黒の空間　形状から“孔”とでも呼ぼうかは、間違いなくプラントの力によって穿たれたものだろう。ヴァツシュは以前、何度もあれを見たことがあるのだ、すぐに分かる。

しかし、妙だ。プラントの“力”によって穿たれた孔は、あのように長時間存在せず、短時間で消滅したはずだ。それに、あの孔からはプラントのものとは別な、異質な力を感じる……ような気がする

る。

そういえば、あの時の何かと激突したような衝撃。あれは、いったいなんだったのだろうか。あの孔が穿たれた際の反動、若しくは空間を渡った際の衝撃とは、どうにも思えない。

すると、孔が漸く収縮を始めた、直後、何かが飛び出してきた。

「あれは……人？」

暗くてよく見えないが、それは間違いなく人だった。一瞬、リヴィオかと思っただが、違う。

彼は白髪で、しかも親近感が湧くような赤い外套に身を包んでいる。

どこの誰だろう、などと考えたところで、気付いた。

彼は気を失っている。しかも間の悪いことに、彼の落下する先はヴァッシュのいる場所からは離れて、建物の外側　つまり、更に10m以上は下にある地面だ。

それらの条件が重なっていると、人はどうなるか？

無論、頭から地面に叩きつけられて即死する。

「つて、ああ！？　うおおおちよおつと待ったあああああ！！！」
気付くや否や、滅茶苦茶なことを口走りながらヴァッシュは走り出した。突然の事態に呆然としていた為に、タイミングはぎりぎりだ。

全速力で走り、ギリギリのところ間で間に合い、ヴァッシュはビル
の端の柵を飛び越えて赤い男をキャッチすることに成功した

「……ふう」

のだが、足元にはビルの床も地面も何もないので、そのまま
眼下の路地裏へと落下した。

「ンノオオオオオオオオオウ！？」

「だからですね、ドクター。最近の研究では我々の住む宇宙は膜宇宙と呼ばれる構造で、11の次元が理論上存在するとされているんですよ！ しかも、その11の次元にはそれぞれ並行する多元の宇宙まで存在しているってんですから……夢がありますよねえ、本当！」

「あー、はいはい。お前のその手の話は聞き飽きたよ。そんなことよりムカシトンボの話でもしないか？」

夜の街を、2人の白い男が歩いていった。

ドクターと呼ばれたのは、このような時と場所でも白衣を纏った、見るからに医者のような服装で、実際に医者である男。左手には医療道具一式が入っている鞆を持っている。

もう1人は、帽子、スーツ、シャツ、ネクタイ、靴下、革靴の全てを白一色で揃えた奇抜な出で立ちの男。目深に被った帽子により、鼻から上が殆ど見えなくなっているが、本人の行動に支障が無いらしいことは澱み無い歩き方から見てとれる。

この2人は旧知の間柄であり、今日は思わぬ場所での数年振りの再会を祝して、屋台でおでんと酒を楽しんだ帰り道だった。

医者 of 男はこの街のさる高名な人物からの依頼を受けて来訪し、白尽くめの男はこの近くで仕事を終えた帰りがけだった。

2人は路地裏を歩きながら、黙って歩くのが勿体無いとばかりに会話を楽しんでいった。

「ムカシトンボ？ 随分と直球な名称のトンボですねえ」

「日本の清流とヒマラヤ山脈の辺りにだけ生息している、ムカシトンボ亜目という希少なトンボでな。日本昆虫学会のシボルマークにも……ん？」

すると、今度は自分が趣味の話をする気満々だった医者 of 男が急に立ち止まり、2歩進んだところで白尽くめの男も立ち止まった。

「どうしました……と、おや？」

そこで白尽くめの男も異変に気付き、医者 of 男と共に暗い夜空を

見上げた。

そこには、夜でも目立つ赤い物が翻っていた。暫くして、それが赤いコートを纏った人間であり、落下して来ているのだと分かった。気付いた2人は、ほぼ同時にその場から軽く飛び退いた。

「おっと」

「危ない」

直後、2人が先程までいた場所の目の前に、見立て通り紅いコートを身に纏った男が降ってきて、なんと見事に着地した。

恐らくはすぐ隣にあるビルの屋上から 10m以上の高さから落ちながら、よく見れば180cmはある大柄な男性を抱えながら見事に着地し、尚且つ着地の反動で手足が砕けた様子が見られないことに、医者の方は驚いた。

一方、白尽くめの男は黒髪の赤い男が抱えている、白髪の赤い男を注視している。目元は見えないが、少なくとも、先程の楽しい表情から一変しているのは確かだった。

「よ、避けてくれたのは良かったけど……できれば受け止めてほしかったなあ……」

腕と足の痺れが取れて来たところで、ヴァツシユは痛みを堪えながら着地した現場に居合わせた2人の白い男にそう訴えかけた。

しかし、2人は首を縦には振ってはくれなかった。そりゃそうか。

「嫌だよ。ひ弱な僕じゃ死んじゃうもの」

「そんなことをしたら、こっちも只では済まなかったからな。すまない」

帽子を目深に被っている男は冗談なのか本気で言っているのかよく分からない笑みを口元に浮かべながらそう言って、白衣の男は実直に頷いた後すぐに頭を下げた。

「いや、自分でも無理を言った自覚はあるから、謝らなくてもいい

ツスよ」

予想外の丁寧で真摯な対応に驚きながらも、ヴァツシユは明るく朗らかに返す。これがつい先ほどビルの屋上から落下してきた人間だというのだから驚きである。

すると、自分の方に向けられている強めの視線に気づき、ヴァツシユは帽子を被っている男に目を向ける。どうやら注視しているのはヴァツシユ自身ではなく、ヴァツシユが抱えている白髪の男のようだ。

「この人がどうかしたかい？ 知り合い？」

問うと、帽子を被っている男はすぐさま首を横に振った。

「いやいや、僕とその赤い人は初対面だよ。気になったのは、その人が血塗れだったということさ」

「え？」

言われて、抱えている男に視線を向ける。

今まで唐突な状況の連続で気がつかなかったが、彼は全身血塗れだった。纏っている赤い外套も、半分以上が赤黒く変色しているほどだ。

「うっわ、本当だ！ なんじゃこりゃあー！！」

想定外の事態にヴァツシユは慌てふためく。

こんな右も左も分からない街で、モグリでもいいから藪ではない医者を見つけられるだろうか。いや、そもそもこの街に医者がいるという保証もない。

こうなったら、手近な大きな家に突撃して土下座してでも彼の治療の手助けを頼むしかないか、などという考えにも及んでいた。

すると、白衣の男性が声を掛けて来た。

「気付いていなかったのか……まあいい。どうやら、自殺未遂というわけでもないようだしな。ほら、ここに寝かせろ」

「あ、はい」

字面だけ見ても、強要されているわけでも強制されているわけでもないことは分かる。だが、白衣の男の声に込められた有無を言わ

せぬ力強さに押され、ヴァツシュは彼の指示に従って白髪の男を地面に下ろした。

ヴァツシュのその様子をも具に観察して、何かに納得してから、白衣の男は白髪の男の服を手早く脱がした。

露わになった男の傷は深く、これで虫の息では無かったことが不思議なくらいだった。

そんな傷を見ても怯まず、白衣の男は地面に膝を着き、持っていた鞆を開けた。そこには、医療用の道具が満載されていた。

「む……なんだ？ 殆どの負傷が外側からではなく、内側から？」
言いながらも、消毒と止血の処置を行うその手付きはどう考えても素人のものではない。

これはもしか、不幸中の幸いの中でもかなりの当たりを引いたのではないだろうか。

「それはそれとして、治せるかどうかじゃありませんか？ ドクター・ハーディング」

「違うぞ、アラン。治せるか否かではなく、治すか否かだ。無論、俺は治す」

アランと呼ばれた帽子の男の言葉に、ドクターと呼ばれた白衣の男は即座に返した。

「ドクター？ 君、やっぱり医者なのか」

そのように問うと、ドクターは治療の手を休めずに頷いた。

「ああ。俺はジョー・ハーディング。世界を旅しながら医療をしている、変わり者さ」

自己紹介を簡潔に終えると、ドクター・ジョーは黙々と治療を続行した。

真摯に、只管に命を救おうとするその姿に、ヴァツシュは「先生」と呼んで慕った大恩ある医者親子を重ねた。

最新の機器が一切無く原始的な道具だけを使っているが、腕前も先生たちと比べて遜色無いほどに見える。これなら、白髪の男もきっと大丈夫だろう。

これで一安心だと安堵の溜息を吐くと、肩を指で、とんとんと叩かれた。振り返ると、アランと呼ばれていた男がジェスチャーで下がるように促してきた。ジョーの邪魔にならないように、という配慮からだろう。

頷き、数mほど離れたところでアランが口を開いた。

「ついでに、僕も自己紹介しておくよ。工作上的な通り名はプレイヤー。名前は……さっきドクターが言った、アラン。アラン・ザ・プレイヤー。無論、アランも偽名だよ。気さくにホワイトマンと呼んでくれてもいいよ、レッドマン」

堂々と偽名を名乗るとは、珍しい男だ。とはいっても、ヴァッシュも頻繁にジョン・スミスと名乗って宿に泊まっていたので、それほど不快にも不思議にも思わず素直に頷いた。

「サンキュー、ホワイトマン。僕はヴァッシュ・ザ・スタンピード。ヴァッシュは本名だけど、スタンピードの方は通り名さ。呼び捨てでもいいし、三倍気さくにレッドマンでもいいよ、ホワイトマン」
自分も自己紹介し、アランを真似てちよつとしたユーモアを混ぜてみた。

「じゃ、改めてよろしく。レッドマン」

「ああ、こちらこそよろしく。ホワイトマン」

気さくに名前を呼び合い、握手をする。

右も左も、正直どこの惑星であるかも確信が持てないこの状況で、最初に遭遇したのがこんなにも打ち解け易い人物と医者であったのは僥倖だった。それこそ出来過ぎで、何かに仕組まれているのではないかと疑いたくなるくらいだ。

数十分後には、白髪の男の応急処置も終わり、後は所用で街に不在の友人から借りている診療所に運びこんで本格的な処置を行う、とのことだった。

この中で最も力のあるヴァッシュが白髪の男を背負っていくことになり、ヴァッシュも乗り掛かった船だと快諾した。

「で、その男性は？」

ジョーが先導して診療所に向かう段階になって、白髪の男の素性を訊ねてきた。

これには、ヴァッシュも素直に答えた。

「……さあ。ところで、ここって地球のどこかな？」

「は？ いや、まあ……日本の埼玉県にある麻帆良だが」

日本　ニホン、ジャパン、ヤーパン。

地球地図で極東に位置する神秘の島国。

聞き覚えがある、なんてものじゃない。

地球の日本と言えば、レム・セイブレムの思い出の土地だ。

その事実には運命じみたものを感じながらも、詳しい事情は白髪の男の治療が済んでからだ、呆れた顔をしているジョーとのんびりしているアランを急かして診療所へと急いだ。

間違いない。

あの赤い男は、あの男に相違ない。

忘れるはずの無い、最も強烈な記憶という知識の中心にあり続けている男。

もう1人の赤い男も、よくよく思い返してみれば……ああ、なんということだろう、彼らにとって因縁の相手の名を名乗ったではないか！

世界樹の発光を来年に控えたこの時期に、この世界の物語への新たな乱入者の登場。

しかも、自分の企ての主賓の満を持しての登場で、思いがけない極上のサプライズ・ゲストまで御同行と来たものだ。

もう間に合わないかと諦めかけていたというのに、この時期に、自分の目の前に現れてくれた。

この素敵な偶然を運命と呼ぶとして、この運命はなんだ？ Destiny? Fate? Fortune?
個人的には 波乱の予感がするFateが好ましい。
わくわくするなあ。
とても、とても、楽しみだ。
さあ。改めて、誓いを立てようじゃあないか。

誓いを此処に。我は常世総ての悪となるもの、我は常世総ての善を敷くもの

Part 4 一方その頃

「……はあ。これからどうしよう………」
リヴィオは広大なジオプラントと思しき場所で、途方に暮れていた。

ヴァッシュと共にプラントの暴走事故に巻き込まれたかと思ったら、どれぐらいの間を挟んだのかは判然としないが、急に空中に投

げ出された。

着地しようとしたら背負った荷物が木の枝に引っかかってバランスを崩し、勢いは殺せたものの顔面から落ちてしまった。ミカエルの眼じゃなければ死んでいるところだ。

鼻血が止まってから周囲を見回してみれば、信じられない光景が広がっていた。

巨体に角を生やし、パンツ一丁で手には金棒を持った2m〜5mの巨漢の集団。

背中に翼と全身に羽毛を生やし、顔には嘴さえあった鳥と人間を混ぜたような外見の男たち。

それら、古典的でありながら極めて前衛的なデザインのサイボーグの集団に囲まれていたのだ。

取り敢えず挨拶をした直後、問答無用で襲いかかれた。無遠慮に木にも攻撃を当てているところから、恐らく用心棒ではなく夜盗の類か何かだろうと考え、それを返り討ちにした。……そこまでは良かった。

しかし、叩きのめした端から消えていくとはどういうことだ。

これでは、此処が何処だとか、何で襲って来たのかとか、問い質すこともできないではないか。

いや、そもそも、どうして消えたんだ？ これは夢か幻か？

「どうやらあのオークどもは、この世ならざる場所から召喚されたものだったようだな」

リヴィオが受け止めきれない現実をさらりと受け止めて、当然の事のようにそのようなことを言うのは、戦いの最中に多勢に無勢を見かねて助太刀してくれた、黒い騎士だった。

この時代に騎士などいるはずもないが、彼の戦い方や佇まいを見ていると、そんな言葉が自然と思いつかんだのだ。

「ああ、そうだ。お礼を言うのを忘れてました。ありがとうございます」

「なに、魑魅魍魎の類と孤軍奮闘する勇者に加勢するのは、騎士と

して当然のこと。尤も、君の武勇を鑑みるに余計な世話だったかもしれないがな」

「いや、そんなこと。もしかしたら、不覚を取っていたかもしれないから」

そう言つて、帽子を取り胸に当てて頭を下げる。

それにしても、本人も騎士を自称するとは驚いた。だが、GUN G・H O・GUNSにもムラマサ使いのサムライがいたというし、そう考えればそれほどおかしくないのかもしれない。

しかし、字面だけならば誇り高さを表している言葉だというのに、どうして彼はどこか虚しそうに言うのだろうか。

取り敢えずそのことは置いておくとして、今は状況の把握の為に情報交換をすることにした。

困ったことに彼も現地住人ではなく、リヴィオとほぼ同様に気付いたら此処にいたのだという。曰く、元居た場所に戻るはずだったのだが、何故かここに出てしまった、ということだった。

彼がどういう手段で帰るつもりだったのかは気になるところだが、今はそれを気にする余裕はない。

今重要なのは、現状は不明のままということだ。

「はあ、どうすつかなあ……。取り敢えず、このジオプラントの管理者の人を探すしかないか」

今できることは、それぐらいしか思い浮かばない。真っ直ぐ歩いていけば、その内壁か何かに突き当たるはずだ。

取り敢えずの行動を決めると、リヴィオは荷物を背負い直して歩き出そうとした。

「ジオプラント？ この森のことか？」

「モリ？ なんです、それ」

すると、騎士に不思議な言葉で呼び止められた。

どうやら彼はジオプラントを知らないらしい。それだけでも驚きだが、彼は代わりに『モリ』などという聞き覚えのない単語を口にした。

一瞬、あまりにも突飛な最悪の予想が脳裏を掠めたが、敢えて無視する。

「何とは……こういった、木々が自然に生い茂っている場所のことだろう」

「え？ でもこんな木がたくさんある場所なんてジオプラントしか……自然に？」

「そう言ったが……どうかしたか？」

「またも黒い騎士は分からないことを言う。」

木が“自然”にある？ そんなの、ノーマンズランドではありえない。ノーマンズランドで木がある場所とは即ちジオプラントであり、人工的な場所だ。

ノーマンズランドの自然と言えば、砂漠と荒野と砂蟲【ワムズ】だけだ。

「え……ここ、ノーマンズランドでしょ？」

自分と相手の認識の差に混乱し、ついそんなことを聞いてしまった。

だが、それを聞いた黒い騎士は怪訝そうに眉を顰め、口を開いた。「ノーマンズランドが何かは知らないが、少なくとも私は、ここは地球のどこかだと思っている。……尤も、星という概念や地球という言葉も、最近知ったことだがな」

その、何気なく言われた言葉に、リヴィオはまるでネイルガンで貫かれたような衝撃を受けた。

彼は今、何と言った？ 何を知らないと言った？ 此処を何処だと言った？

彼は、ノーマンズランドを知らず、此処を『地球』だと、そう言わなかったか？

「え……？ あ、え……ええええ……？」

あまりにも唐突な事態の連続に、頭が混乱する。

ミカエルの眠たるもの、いつ如何なる時も冷静な判断力を損なうなど教えられたが、この状況で混乱しないのは無理だ。

プラントの力でどこか遠い場所に投げ出されたらしくて、木がたぐさんあるからジオプラントだと思ったら、居合わせた人にここは地球だと言われた。

普通なら、相手の方がおかしいと思うだろう。自称騎士で古めかしい武装だし。

だが、プラントの力がどういうものか知っていれば、先程の、夜盗が倒した直後に消えるという、ノーマンズランドではありえなかった現象が目の前で起きたこともあって、そんなこともあり得るのではないかと思えてしまう。

とにかく、もう一度状況を整理する必要があると考え、黒い騎士に声を掛けようとしたが、それよりも先に騎士が口を開いた。

「こちらに人が来ているようだ。しかも複数……恐らく、地元の人間だな」

「え？ あ、本当だ」

混乱していて気付かなかったが、5人ほどの集団がこちらに向かってくるようなのだ。恐らく、もうすぐ遭遇することになるだろう。

「先程の戦闘の音を聞きつけて様子を見に来たか……？ しかし、僥倖だ。彼らと接触できれば、君も大丈夫だろう」

「あ、待ってくれ！ あんたはどうするんだ！？」

聞きたいことがあるのに、口を開いたら別の言葉が出てきてしまった。どうやらまだ落ち着けていないようだ。

「私は……一度ならず二度までも死した身。ならば、今一度死ぬのが似合いだろう」

そう自嘲気味に笑いながら言い残して、黒い騎士は消えてしまった。それに、リヴィオは目を丸くした。

クリムゾンネイルのように、知覚を超えた速度で動かれたから消えたように錯覚したのではない。

本当に、目の前から消えてしまったのだ。でなければ、気配も音も唐突に消え去ってしまうはずがない。

「あの時まで消えた……？！ ああ、チクショウ！ 本当に、何が

どうなってるんだよ!？」

惑い乱れ、焦り戸惑う心のまま、リヴィオは吠えるように、泣くように叫んだ。

調度その瞬間に様子を見に来た地元の人らしき人達と鉢合わせになり、若干気まずかった。

第一話

夢を、見ている。

何度も、もう何度も見ている、俺が一度死んだ時の光景だ。

俺は子供の姿で、どこかの道を1人で歩いている。

熱い。熱帯夜でもないのに大量の汗が噴き出て、喉が渴くぐらいに。

当然だ。周囲は全て炎に包まれていて、自分は、その間を縫ってさまよい歩いているのだから。

最初から一人ぼっちだった訳じゃない。火事になった家の中から、まだ寝ぼけ眼だった自分を助け出してくれた父親がいた。

その人は、お父さんが戻って来るまでここにいろ、と言って、再び家の中に戻って行った。

自分は言いつけどおり、そこで待っていた。だが、家を焼く火は凄く熱くて、それから免れようと、ちよつとだけ、背を向けて家から離れた。

その間に何かが崩れる音がして、振り返ったら家がなくなっていた。

何度も、何度も、何度も、誰かを呼び続けた。けど、誰も答えてくれなくて、きつとここには誰もいないんだと思って探しに出て、迷って、今に至っている。

周りから、色んな音が聞こえてくる。

その時は分からなかった……いや、分からないふりをしていたが、今ならこれらの音が何であったか、直視できる。

聞こえてくる声は、生きようとものがきながらも逃れ得ぬ死へと至ろうとしている人々の苦悶の声、末期の断末魔、決して目を背けてはならない阿鼻叫喚だ。

けど、それらを全部無視して、俺は歩き続ける。

家族のことは、暫く歩いている内に察していた。

自分が父の言いつけを守らない悪い子だから、罰が当たったんだと泣きじゃくっていたが、気が付いたら涙も枯れていた。

熱い、熱い、熱い。

燃え盛る火が辺りを照らして、真夜中だというのにまるで昼間のように明るい。

そんな状況だからだろう、あんな、ありもしない、黒い太陽が

……太陽が、2つ？

気が付いたら、見覚えの無い場所にいた。

身体も子供の頃のものから、今の体格に戻っている。

幾ら夢とはいえ、こんなにも唐突に世界が変わってしまうことがあるのだろうか、と思いつつも辺りを見回す。

どうやら此処は、酷い災害の跡地らしい。

ここが本来見晴らしの悪い都市であったことは、この見晴らしの良い廃墟の足元にある真新しい瓦礫の山が物語っていた。

これと似た景色を見た覚えは、ある。だが、あそこは小さな集落で、こんな大都市と呼べるものではなかった。周囲は砂漠や荒野でもなかったし……太陽が2つ、などということもなかった。

錯覚か幻覚としか思えない、しかし現実のものとしての存在感を持つ景色を見続けている内に、廃墟の中に目立つ赤色を見つけた。

真っ赤なコートを身に纏った、金髪の男だ。男は一際高い瓦礫の上で身動き一つせず、目を伏せるように顔を俯けている。

この状況で唯一無事な存在に興味を持ち、その男へと近づく。

瓦礫に足を取られながら、大きな音を立てながら移動するが、その間も男は終始無言だ。

すぐ傍に来て、赤い外套の男は無反応。気絶しているのかと思いき、取り敢えず下から顔を覗き込んだ。

ありとあらゆる感情が削げ落ちてしまったかのような無表情。

空色の瞳の奥に潜む、あまりにも深く、暗い、底の見えない絶望。

“自分”として生きるために必要な、何もかもを取り零してしまつた存在。

男から見て取れたのは、たったそれだけ。だが、それら全てに覚えがあつた。

余りにも覚えがあつて、一致していて、不気味でさえある。

驚愕のあまり身体が動かさず、声も出ない。呼吸や鼓動さえも忘れてしまいそんな錯覚に陥る。

不意に、赤い外套の男が動き出した。このままではぶつかつてしまつが、指一つ動かせない。

だが、ぶつかることなく赤い外套の男の身体はすり抜けてしまつた。それで漸く、これが夢だったことを思い出した。

振り返り、通り抜けた男の姿を見つめ、それを追う。

「誰か……誰か、いないのか……誰か……誰か……」

壊れたラジオのように同じ言葉を、弱々しく泣きじゃくるような声で繰り返し呟きながら、男は歩き続ける。やがて、人々の名が呪詛を唱えるように紡がれるようにもなつた。

どれ程歩き続けたらうか。ふと、男の足が止まつた。

小休止というわけではなく、何かを見つけて立ち止まつたようだ。

男の目の前にあるのは、看板らしきものの一部だつた。

それが何で、男にとって何を意味するのかは分からない。ただ、

男への最後の止めとなつたことは分かつた。

声すら出ないほどの、恐怖。

涙すら流れないほどの、悲哀。

忘れてしまいたいほどの、絶望。

「君達、悪いことは好きかい？」

俺の名は衛宮士郎。正義の味方を目指して世界中を旅している魔術使いだ。

いい歳した大人が、正義の味方に憧れるなんて馬鹿げている？
悪いが俺は本気なんだ、そこに後悔や羞恥は一切ない。

魔術使いとは何かと言えば、文字通り『魔術を使う者』だ。ああ、いや、ここだと俺も『魔法使い』になるのか？

それはそれとして、実は、俺は今大変な場所にいる。普通に旅していたら絶対に迷い込むような場所ではない。

そこは所謂『並行世界』というものだ。最近では科学方面でも研究が盛んなものの1つだな。

実際にどんな世界かと言うと、ファンタジー小説なんかに出てくる『異世界』ではなく、基本的には自分達の世界と同じで、何時かの時代の何処かの場所で異なる可能性による分岐が発生して生まれ、極めて似ているが限りなく違う世界、と言えば分かり易いだろうか。

どうやら俺はそこに迷い込んでしまったらしい。神よ、俺が何をした。

この星は間違いなく地球で、国や地域の名前、使われている言語や通貨も同じだった。違うのは、歴史や俺にとっての常識の部分だ。まず歴史を調べてみると、いくつかの歴史的な事件や惨事が発生していない。近年では2001年の9・11テロが起きていないことが最たる差異だろう。

他にも、俺にとつての常識でかなり食い違いがある。それは、魔法という神秘の構造と、それに対する認識だ。この辺りは話すと長くなるので割愛する。

それらのことから、ここが俺にとって並行世界であると判断した。これだけのことでそう考えたなら、普通は俺が精神病院に送られることになるだろう。

だが、このことを人に話して相談してもそうならなかったのには、理由がある。

それは、俺よりも遥かに壮大なスケールで“この地球”にやって来た、もう1人の異邦人　ヴァッシュ・ザ・スタンピードのお陰だった。

「悪いことは嫌いか、それは残念。なら、選択の3は論外で、選択の4も乗り気じゃないみたいだから、選択の1だね。2人とも、暫くドクターと一緒に世界を回るといいよ」

「やあ、僕はヴァッシュ・ザ・スタンピード。座右の銘は『愛と平和』のガンマンさ。」

今は色々あって、並行世界の過去の地球で、似た境遇の衛宮士郎と一緒に旅をしている。ちなみに、似ているのは境遇だけじゃないんだよねえ、これがさ。

……我が事ながら、過去で並行世界で別の惑星なんて、ぶっ飛んでるよなあ……。レム、あの騒がしくて物騒な、タフで優しい日々が懐かしいぐらいに遠いよ。

最初は、僕らの他にもう1人、世界中を旅して回っている医者、ジョー・ハーディングがいたんだけど、彼とは数ヶ月前に別れている。

その後は、南米でジョーの旧友である2組の夫婦と出会い、その1人からイギリスのある所への紹介状を貰い、夫2人の友人の運び屋さんにイギリスまで非合法な方法で運んでもらって、幸いにして土地勘のある士郎に途中まで案内してもらって、途中からは現地の人に道を尋ねながら歩き続けて、漸く辿り着いた、帰還の方法とヴィオの行方の手掛かりが掴めそうな場所の最有力候補 ウェーブルズのメルディアナ魔法学校。

そこに行く途中の村で騒ぎが起こっているようだったから様子を見に行つて、割とあっさりと事件を解決した、はずだった……のに

……
「待てええー!!」

「いてこまこかしてやるわよお、ゴルアアアアアアアア!!」

僕らは今、鬼気迫る形相の女性達に追われています。

「どうしてこうなったんだっけ……?」

「お前が原因だろうが! お前が!」

現実逃避をしようとしたら、即座に士郎に怒られた。彼も必死の体で、僕に肩を並べて逃走している。

そうさ。僕らは今、イギリスのウェールズで女性の集団に追われている。

勿論、彼女達は懸賞金目当ての賞金稼ぎの御一行様ではない。こちではまだ僕も士郎も賞金首にはなっていないからね。

じゃあ、何で追われているかというと、下着だ。

僕らが立ち寄った村で、女性の下着が大量に盗まれるという事件が発生していたのだ。

この奇天烈な事態に、僕は首を捻った。

なんだって下着なんか盗むんだろう?

ノーマンズランドで盗むものと言えば、水、食料、金銭や貴重品、銃火器、稀にプラントを盗もうとしたやつもいたが、まあそんなところ。生きる為に必要なものしか盗まれることはなかった。

そのことを士郎に訊くと、曰く、平和で暇になると人間は様々な欲を持て余すようになるらしい。中でも好奇心と性欲を持て余したこの手の犯罪はよくあるらしい。

つまり、下着が大量に必要なから盗むのではなく、女性の使用済み下着を大量に集めることによって性欲を満たそうとしての盗みらしい。

全く驚きだ。ノーマンズランドでも、そんな馬鹿げたことで盗みをするやつはいなかった……けど、人身売買とか人攫いをするヤツ

は割とたくさんいたよなあ。

そんな事を話しつつ、メルディアナ魔法学校に向かう前にこの騒動の解決に協力することにした。困っている人が目の前にいるのなら助ける。それが僕らの生き方だからね。

で、犯人は思いの外あっさりと捕まった。土郎の魔術はこういう時に本当に心強い。しかし、捕まえた犯人が問題だった。

なんと、オコジヨ妖精というファンタジーな生物だったのだ。

話には聞いていたけど、人語を介する動物ってかなり不思議な光景だ。ビースト ノーマンズランドの先住生物である『砂蟲』の長も、人との会話には人間の体を使っていたのに。

オコジヨへの折檻と締め上げを土郎に任せて、オコジヨがぐつたりと大人しくなったところで、僕らはそれぞれオコジヨと下着が入った箱を持って、下着泥棒対策本部という詰所のような場所へ行くことにした。

その途中で、僕が転びそうになった女の子を助けようとして下着が満載されていた箱を放り投げてしまったんだ。

女の子は助けられたけど、あたり一面には女性物の下着がばら撒かれる結果になった。

頭の上に落ちてきたショーツを手にとって、「あ、どうも。下着、お届けに参りました」と本当のことを言ったんだけど、周囲の女性達は既に鬼の形相。

犯人だと誤解されていることに気付いて弁解しようにも、気が立っている女性達は聞く耳持たずで、遂には気の短い誰かが放った魔法を口火に、一気に制裁という名を借りた暴力の行使が始まるようにして、これには堪らず僕らは逃げ出した。

それで、さっき助けた女の子に事情を説明した上で真犯人と真犯人のアジトの場所を記したメモを渡して、完全に手ぶらになったところで全力の逃走に移行し、現在に至るといわけだ。

うん、こうして思い返すと、確かにこの状況の原因は下着をばら撒いた僕に半分くらいある。それは認める。

「僕も悪いんだろっけどさー！　みんなたかが下着のことぐらいで頭に血が上り過ぎだよおー！」

「ノーマンズランドではどうだったか知らないが、地球の先進国では女性の羞恥心は男の何倍も強いんだよ！……っと！？」

僕の不満に土郎が怒鳴り返すと、横合いから魔法が飛んできた。

確か、『魔法の射手』という比較的ポピュラーな魔法だ。

……ポピュラーな魔法って、とんでもなく変な言葉だよな、本当に見つけた！　みんな、赤い変態2人とも発見！」

駆け抜けた後ろから、涙せずにはいられない呼び名が聞こえてくる。

「泣くな！　大丈夫だ、あの子は歳の割に利発な子だったじゃないか。きつと、数日の内に誤解を解いてくれるはずだ」

「それまでは？」

「……逃げの一手、だな」

「だあーっ、もう！　追われて逃げ隠れするのはもう慣れっただけだし、その原因が下着だったのがどーしても納得いかない！！」

「俺も同じだよ……。何が悲しくて、下着ドロの濡れ衣で逃げ回らなければならぬんだ……！」

走りながら、土郎と一緒に無情な現実には嘆き、憤る。

そこで、漸く目的地が見えてきた。突入直前で、改めて確認する。「本当にこのまま魔法学校に行っちゃっていいの！？　確実に僕らの追手とか罪状とか増えると思うんだけど！」

「ここの敷地は広いし建物も大きい、逃げ隠れするには十分なスペースがある。それに、捕まったとしてもあの血気に逸った女性達よりはマシな待遇だろうさ」

「本当だな？」

「本当だ。……さあ、行くぞー！」

古めかしい作りの扉によって閉じられている正門を開けて潜り抜ける、などという礼儀正しいことは無視して、跳躍して正門を飛び越える。

「へ？」

「「あ」「

間の悪いことに、着地と同時に門衛らしき人に鉢合わせてしまった。

しかし士郎はうろたえることなく、冷静に対処した。

「こんにちは」

「え……あ、ああ。こんにちは」

「では、失礼」

門衛らしき人はごく普通の礼儀正しい挨拶に、あり得ない手段で入って来た不法侵入者を見逃してくれた。まあ、気持ちは分からないくもないけど。

それから数分後には、全校放送で赤い不審者の侵入とその捕縛指令が流れたけどね。

常日頃から善行を積み、世の為人の為となることを旨としている魔法使いの養成学校であり、欧州の魔法使いの総本山ともいえる場所なのだから、捕まるとしても乱暴をされることはまずない。そういう考えもあつてこちらに来たのだが、少々目論見が外れたようだ。進入方法の時点で常人離れしていたとはいえ、一般人かもしれない相手にバカスカと魔法を撃って来るとは想定外だった。しかも武装解除まで撃たれるようになってしまったのは気が抜けない。

俺の外套は大丈夫だということは実証済みだが、対魔法処理が一切無いヴァツシュの外套に直撃したらまずい。あれほど多機能な防衛装備を失ってしまったら、ヴァツシュの負傷率が格段に上がってしまう。

「……仕方ないな。ヴァツシュ、ちょっといいか」

「あいよ」

周囲に追手の姿が無いことを確認し、ヴァツシュに声を掛けて立

ち止まる。

言葉を交わすまでも無くアイ・コンタクトで暫くの間の警戒を頼み、壁に手を当て、そこから魔力を流し込み解析を行う。

走り回っている間に頭の中でシミュレートして作っていたこの建物の概略図を基に、解析の結果から骨格を組み上げ明確な設計図を作り上げる。

「構造把握、完了」

1分とかからずにこの建物の構造の把握を完了させる。流石に細部を調べる余裕もなかったし、一部は魔法によって守られていた為解析できなかったが、8割以上の構造を把握することに成功した。

これで、逃走の効率は一躍向上するはずだ。

「いやあ、本当に便利だね、魔術って」

解析が終わったのを見て、ヴァッシュが感心したように声を掛けしてきた。それに、肩をすくめつつ答える。

「よく無駄な才能って言われたけど、意外と役に立つもんさ」

「そうだったのか。で、どうだった？」

「隠し通路と、その先に地下室を見つけた」

「おお、そりゃいいや。じゃ、そこに行こうぜ」

ヴァッシュの言葉に頷き、再び走り出そうとしたところで、突如、正面の曲がり角から2人の、この学校の生徒と思しき男女が現れた。

「いたぞ、例の侵入者だ!!」

「女の敵めえ!!」

男子生徒は後方の仲間に情報を伝達し、女子生徒は殺気立った魔法を放ってきた。

「うわっはあい!?!」

「うおっ」

今までとは威力も数も段違いの『魔法の射手』に驚きながらも、何とか直撃は防いで後退する。

それに、彼女が発した「女の敵」という言葉、十中八九、そういうことだろう。

そんなことを思案している内に、別方向からも追手の増援がやって来た。

「囲まれていたか……地の利がこれほど彼らにあったか」

「正直、舐めてたよね」

ヴァッシュの言葉に素直に頷く。

もつと過酷な状況下からも逃げ遂せた経験が幾度かあった為に、警戒が疎かになっていたようだ。

とにかく、捕まるわけにはいくまいと、追手の気配が無い唯一の通路を退路として逃走を再開した。

この先は行き止まりだが、外に面していることに加えて大きな窓があるはず。ならば、そこからこの包囲から抜けることは不可能ではない。

やがて、すぐに想定通りの場所に追い詰められた。

「さあ、大人しくしろ。そうすれば、乱暴な真似はしないしさせない」

「ちょっと、何言ってるのよ？　こんなやつら、それなり以上に痛い目に遭わせなきゃ駄目よ」

男子生徒からの警告を、すぐに隣の女子生徒が遮る。

やはり、間違いない。自分達が下泥棒だという誤報が、既に此処にまで届いていたのだ。

女子生徒からの、怒りと軽い殺意が込められた冷たい視線に冷や汗を流す。

まったく、どうして俺は昔から女性に乱暴される縁があるのだろうか。

そんなことを考えながら、ヴァッシュと視線を交わし、頷き合う。

「……悪いけど、まだまだ捕まりたくないトコなんだよね！」

「そういうわけだ」

言うと同時に踵を返し、窓から飛び降りる。

無論、強化の魔術で着地に備えることは怠らない。ヴァッシュは、頑丈だし大丈夫だろう。

「んな！？　ここ4階だぞ！？」

「信じられない……何の強化の術も使わないでこの高さから落ちて無事なんて」

「無事どころか平然と走ってるぞ、おい」

村から報せのあつた下着泥棒を追い詰めた生徒の一団は、赤い2人組みの行動力と身体能力に舌を巻いた。

侵入者とは言ってもたかが下着泥棒と夕力を括っていたが、その見方は間違っていたようだ。正門を飛び越えて侵入してきたという話も、尾鰭背鰭が付いたものではなく本当の話なのかもしれない。

『立派な魔法使い』を志す者として、下賤な犯罪者が神聖な学び舎を好き勝手に逃げ回っているのは許せないと、先生方に任せてくれと啖呵を切ったが、今の状況で取り逃がしたとあっては、どうにも自分達の手に余る輩のようだ。

「こりゃ、想像以上の曲者だ。素直に先生方にも協力を仰ごうや」

1人の男子生徒の言葉に、全員が頷く。

「そうね。あいつらは確実に捕まえないと」

「それで、死んで生まれ変わっても悔いるぐらいの目に合わせないとね」

一方で、女子生徒達はそんなことを言いながら、不気味で恐ろしい表情になっていた。正直、怖い。

「……あの2人さ、女抜きで捕まえた方がいいんじゃないか？」

「俺もそんな気がしてきた」

女子生徒達の様子を見て、何人かの男子生徒は既に赤い2人に同情していた。

再び学校の外を逃げ回った後、隙を見て再び内部に突入し複雑な内部構造を逆手にとつて追手を撒いた後、地下室へと続く隠し通路に駆け込んだ。

追手からしたら、僕らが急に闇雲に走り回らずに攪乱までし始めたものだから、面喰っていることだろう。それも全ては土郎の『解析の魔術』のお陰だ。

小休止を挟んで、地下へと続く階段をゆっくりと降りて行く。この隠し階段は知っている人間でなければ気付けないような場所にあったから、追手の方もまさか僕らが此処に逃げ込んだとは思わないだろう。

だから、もうそんなに急ぐ必要はないけど、念には念を入れて地下室に入ってやり過ごすことにしている。危険な場所だったら流石に入らないけどね。

長く続いた階段が終わり、その先に建物と同様に古めかしい作りの扉が見えてきた。

「ここが例の地下室か。早く入ろうぜ」

錠前も無く鍵穴も無いということは、鍵が掛かっていないということだ。

早速扉を開けようとドアノブに手を掛けたが、開かない。錆びついて開かないとかではなく、まるで見えない鍵が掛けられているようだ。

「どうやら、魔法で鍵が掛けられているみたいだな」

「魔法で鍵かよ。便利だなあ、おい」

本当に見えない鍵があつたのか、と半ば呆れながら驚く。

「科学技術で置換可能な程度のものだけだな。……中には何か、大事なものがあるのか？」

「金庫とかじゃないか？」

「ここに来るまでの道に埃が目立ったし、なによりそんな物をこんな遠い場所に造るか？」

「確かに、言われてみれば不便だよな」

秘密の地下室の中身について議論するが、答えは出そうにない。なら、実際に開けてみるしかない。

「中には何かがある。中に何かがあるかは分からない。けど、背に腹は代えられないだろ？」

そう言っつて、土郎を促す。普段ならば彼が首を縦に振るような場面ではないが、今回は渋々ながらも頷いた。

「そうだな。俺だって、下着ドロの容疑者として捕まりたくはない。……さて、と」

半ば強引に自分を納得させるように呟いてから、土郎は扉の前に立った。

「投影、開始 トレース・オン」

呪文を唱えた次の瞬間には、つい一瞬前まで何もなかった土郎の右手に歪な形状をした、不気味な色の刀身のナイフが握られていた。魔力によって自分のイメージした物体を形にする、土郎の切り札であり最大の武器でもある『投影魔術』。

相変わらず、プラントの“力”に見紛うばかりの能力だ。これが特例中の特例とはいえ一種の技術に区分されるのだから驚くべきものだ。

けど、プラントも人間の科学技術によって作られたのだから、そう考えれば何もおかしいところは無い……のかな？

そんなことを考えている内に、土郎は短剣を扉に突き刺した。そして、土郎がドアノブを握ると、扉は当然のように開いた。

「便利だよな、その万能鍵」

しみじみと、僕も何度もお世話になっている短剣のことを指して、称賛の気持をこめてそう言った。

「世の魔術師や元の持ち主に知られたら、気安く使うなと怒られそ

うだけどな」

苦笑しながらそう言うと、士郎は万能鍵の短剣を消した。厳密には、魔力に分解して幻想に還しているらしい。さっぱり意味が分からない。

それはそれとして、開いたからには中に入ろうと、地下室の中を見て、思わず足を止める。

そこには、見渡す限り、広大な部屋いっぱい、ある物が大量に置かれていた。

「これは……石像？」

「10や20じゃない……この地下室は、石像を収容するためだけのスペースなのか」

地下室の中にあつたのは、大量の石像。しかも、全てが人の形をしたものだ。

照明も何もない部屋に石像が大量に置かれている光景は、異様で不気味だ。

けど、悲しいことにこの程度の異様さや不気味さは、とつくに慣れっこなんだよね。

「入ってみよう。罨は無いようだしな。懐中電灯の準備も忘れるなよ」

「アイサー」

士郎の号令に従って、荷物から懐中電灯を取り出してから地下室に入る。

扉は開けておくか閉めておくか迷ったが、追手から隠れる為此ここまで来たのだから閉めておくことにした

「電灯も無いのか。まるつきり物置だな、こりゃ」

普通なら出入り口の近くの壁にある電灯のスイッチが無く、天井にも照明らしき物は無い。

どうやら、普段から人が立ち入ることの無い、本当に石像が置かれているだけの場所のようだ。

「だが、中の物を風化や劣化させないように工夫されている。只の

物置じゃないし、只の石像でもなさそうだな」

そう言われてみれば、息苦しくも無いし埃っぽくも無い。常に空調設備を稼働させているのか、それともこれも魔法の御加護なのか、ちよつと気になってしまう。

しかし、今それ以上に気になるのは、この石像だ。

「それにしても、リアルで生々しい石像だな。まるで生きてるみたいだ」

言いながら、先頭に置かれていた杖を構えた尖がり帽子を被った老人の石像を、ぺちぺち、と叩く。

すると、石像を正面から凝視していた土郎が、険しい表情で口を開いた。

「……いや、まるでじゃなくて生きているぞ、この石像は」

「え？」

あまりにも予想外の言葉に、咄嗟に石像から手を離して動きを止める。

「これは、石化の呪いを掛けられた人間だ」

先程の言葉が聞き間違いではないとばかりに、土郎ははっきりと核心を口にした。

「マジで！？ 何でもありっていうか、御伽噺そのままだなあ」

人間がコンクリ詰めにされて即興の石像になるならともかく、呪いでそのまま石になるというのは俄かには信じられない。けど、土郎が言うからには、多分本当なんだろう。

それに、この半年近くで、この地球にはそんな『信じられないこと』が起こり得ることはよく分かっているつもりだ。

「しかし、こんな何十人も人間が石化して安置されているなんて……何があつたんだ？」

「地元か、この学校の人なら知っているんだろうけどね。……ここの人達が犯罪者をこつやつて懲らしめている、っていつのはどうかな？」

「どう考えてもやり過ぎだし、仮にも学校でそんなことをするはず

がないだろう。ここが監獄なら分からないでもないが」

石にされてしまったからには、それ相応の理由があるはずだ。だが、赤の他人の僕達がそんなことをいくら考えても、真実は分からない。

ならば、どうすべきか。答えは単純明快だ。

「そうか……それじゃあ、本人に聞いてみないか？」

「なにい？」

「ほら、さっきの万能鍵で」

突然の提案に驚いて素っ頓狂な声を出した士郎に、僕は方法を明示する。

すると、士郎は納得してか落ち着いて、しかし戸惑いの表情を浮かべる。

「いや、確かに可能だろうが……勝手に解いたらどうなるか分からないだろう」

「でもさ、気になるじゃないか。それに……どんな事情があるかは知らないけど、石にされている人がこんなにいるなんて、放って置けないんだ」

素直に、石化を解こうと言い出した本音を伝える。

こんな、身動き一つできない石にされてしまうなんて、いったいどんな気持ちだろうか。それに、もし、石になっている間もずっと意識があったらと思うと、胸が締め付けられる。

彼らには、健全な身体がある。自由に動き回れる手足がある。そんな人達が生かさず殺さず、身動きどころか息すらできない石にされている。それを見たまま放って置くなんて、耐えられない。

すると、士郎は呆れることも無く、溜息を一つ吐いてから頷いてくれた。

「正直に言おう、俺も同じだ」

その言葉を聞いて、お互いに笑みを浮かべる。

本当に、こういう時の僕らは気持ちいいぐらいに気が合う。

「頼むよ、士郎。何かあったら僕も手助けするからさ」

「いざという時は頼むぞ、ヴァツシュ」

拳をぶつけ合わせて、石像の老人から離れる。

士郎は先程と同じく呪文を唱えると、万能鍵の短剣を投影し、それを石像に突き立てた。

すると、何かが破れるような音と共に、石像が光って人間の姿に

「雷の暴風!!」

「へ?」

「な!?!」

強力な攻撃として覚えのある魔法の名前を聞いた直後、士郎が咄嗟に僕を蹴飛ばした。それとほぼ同時に、『雷の暴風』が老人から放たれた。

思えば、老人は杖を構えた状態で石になっていたのだから、こういう事態も想像……できないよなあ、うん。

「……な、なんじゃ?」

魔法を放った老人は、自分の今の状況に気が付いたのか、目を点にしている。どうやら、問答無用で攻撃してくるような人ではないようだ。

「痛てて……士郎、大丈夫か?」

思い切り蹴られた脇腹を擦りながら、扉を突き破って階段付近まで吹き飛ばされた士郎に声を掛ける。

「ああ、何とかな。赤原礼装が無ければ危ういところだった」

言いながら、士郎は何事も無かったように立ち上がる。

実際は結構なダメージだろうに、やせ我慢が上手な男だよ、本当。「お前さん達、無事か!?!」

状況がある程度は把握できたのか、石像から元に戻った老人は慌てて士郎に駆け寄って来た。

どうやら、石化される直前に撃とうとしていた魔法が放たれただけみたいだ。人生サーチ・アンド・デストロイなデンジャラスな人じゃなくて良かった。

「ええ。そちらも、無事に石化が解けたようですねによりです」

「石化……そうじゃ、村は、皆はどうなったんじゃ!？」

士郎の言葉を聞いて、老人は一瞬だけ安堵したような顔をして、すぐに切羽詰まった調子で問い質して来た。

村のみんなどは、合点がいった。ここに大量に安置されていた石像は、1つの村の村人全員だったのか。

「村のことは分かりませんが……あなたの言っている『みんな』は、多分、後ろに」

そう言つて、老人の背後を指す。老人はすぐに振り返り、石像の群れを見て崩れ落ちるように膝を着いた。

「な、なんとということじゃ……」

老人は、余りの事態に愕然としている。親しい人達が皆、石にされてしまっている姿を見れば、当然だろう。

老人の痛ましい姿になんて声を掛けたらいいのか迷っていると、すぐに士郎が動いた。

「何があったのか、詳しく聞かせて貰えませんか？ 私は衛宮士郎と申します」

老人に歩み寄り、自らも腰を落として、士郎は老人に手を差し伸べた。老人は数秒の間を置いてから、士郎の手を取って立ち上がった。

「僕はヴァッシュ・ザ・スタンピード、よろしく」

老人が立ちあがったところで、僕も手を差し出す。老人はその意図を汲み取ってくれて、握手しながら自己紹介をしてくれた。

「ワシはスタンじゃ。エミヤさんにヴァッシュさん、ワシを助けてくれたこと、礼を言わせてくれ。それから、さっきは本当にすまなかつた」

老人は手を放して、深々と頭を下げる。

僕と士郎は揃って何の問題も無いから気にしないで欲しいと伝えて、石化が解けたばかりのところを悪いが、スタンから詳しい経緯を聞かせてもらうことにした。

「なるほど、数年前にそんなことが」

老人からの説明を士郎は比較的あっさりと受け入れているけど、僕はそうもいかない。

「レム……悪魔の大群とか、僕、もうどうリアクションしたらいいか分からないよ……」

スタンの話によれば、彼の村は悪魔の大群に襲われて石化の呪いを掛けられてしまったらしい。ファンタジーが現実に起こるのは馴れて来たけど、流石にこれは無理。許容量オーバー。

悪魔っぽい出で立ちに肉体改造したサイボーグの一団が「ヒヤッハー！」とやって来て村の住人全員をコンクリ潰けにしたっていう方がまだ信じられる。

「しつかりしろ。俺だって戸惑ってるさ」

あまりにも現実離れた現実を嘆いていると、士郎が肩を叩きながらそう言って来た。

そうだね、現実とは現実として受け入れるしかない。そうじゃないと話が先に進まない。

とにかく、石にされてしまった村人は、発見されて全員がそのままここに運ばれて来たってことか。野晒しにしていたらどうなるかわからないからね。

「エミヤさん、お前さんがワシの石化を解いてくれたんじゃろう？」

村の皆も助けてやってはくれんか」

スタンの石化を解いたのは士郎だと前以って教えておいたの思っ出してか、スタンは士郎に解呪を頼みこんだ。それには無論、士郎も快く頷いた。

「勿論そのつもりですが、これ以上、このメルディアナ魔法学校に無断で行うわけにもいきません。先にこの責任者に話を通しておくべきでしょう」

「なんと、ここは魔法学校じゃったのか。あい分かった、ならば校

長とワシは旧知の間柄じゃ、すぐにでも話は通るじやろっ」

「本当ですか。それは良かった」

そう時間を掛けずにこの人達を助けられると分かって、士郎は我が事のように喜んだ。

しかし、スタンがこの魔法学校の校長と知り合いとは驚いた。ならば、僕らもちよつとした頼み事をしてみよう。

「あの……物は相談なんですけどね、僕らのある容疑に対する弁護もしてくれませんかね？」

「容疑？ お前さん達を助けるのは各かではないが、どんな容疑なんじゃ？」

容疑という言葉に、スタンも眉を顰めた。正直、怪しくないとは言えない風体だから、こんなことを言えば疑われるのはしょうがないとは思っただけだ。

スタンからの疑いを晴らすためにも、ちゃんと正直に言わないといけないけど……どうにも、他の人に言うのは気が引けるといっか、気が滅入る。

「……下着泥棒ッス」

「無論、完全に冤罪です」

士郎共々、苦虫を噛み潰したような顔と口調でそう言った。

途端に、場の空気が妙な感じになってしまった。

そりゃ、スタンからしたら恩人が変態かもしれないんだから複雑な気持ちになっちゃうだろうけど、こうね、なんとというかね、僕らの方もすっごい恥ずかしいわけ！

「ついでに言っちゃうと、その疑いが晴れるまで逃げ隠れしてやろうと忍び込んだ先がここだったりするんッスよね。いやあ、人生何が起こるか分からないもんですよねえ！」

「笑って誤魔化すな、無理がある」

気恥ずかしさに耐えかねて、ついにここまで来たことも笑い話のような調子で言ってみたが、すぐに士郎につっこまれた。

だが、これが上手いことスタンのツボに嵌ったようで、場の空気

を一新することには成功した。

後は、スタンと一緒に魔法学校の人達と話をしに行くことになるわけだけど……大丈夫かなあ？

地下室を出て、隠し通路を抜け、少し廊下を歩いた所で俺達の追手の1人を見つけて交渉をしようとしたのだが、出会い頭に俺とヴァッシュは問答無用で叩きのめされてしまった。

男だから大丈夫だろうと思ったのだが、恋人や姉妹、果ては母と祖母の下着まで盗まれて怒りに燃えていたらしい。仕方ないとは思うが、節々が痛い。スタンさんに怪我が無かったのが、不幸中の幸いだ。

その後は、スタンさんに事情を説明してもらい、なんとか猶予を貰うことに成功した。

スタンさんは事情を知っているらしい教師の1人に連れられて校長の元へ向かい、俺達は簡易的な牢獄と化した教室で待つことになった。

監視の生徒の、主に女生徒からの視線でヴァッシュ共々針の筵と なっていたが、どうやらスタンさんの話を通じたらしく、1時間ほどで誤解は解け、解放された。

それから数十分後には学校長との接見も許可され、生徒達からの謝罪を受けてから教室を出て、スタンさんに礼を述べてから校長室へと入った。

「シロウ・エミヤ氏、ヴァッシュ・ザ・スタンピード氏。貴方達のこととはスタンと、本校の生徒のアンナ・ユーリエウナ・ココロウアから聞かせてもらいました。我が盟友の石化を解いてくれたことへの礼と、下着泥棒を捕まえてくれた君達を誤解から追いついてしま

ったことへの詫びを言わせて下され」

「そんな、頭を下げないで下さい。石化を解いたのは偶然の成り行きですし、誤解の方も解けたのならそれで構いません」

「まあ、女の子にあんな顔で追われたのは一生の思い出になりそうですけどね。お陰で、酒の席での笑い話の種が増えましたよ」

校長と俺が互いに頭を下げている中で、ヴァツシュだけは笑みを浮かべながら少しキツめのジョークを言う。お互いに色々と似ているとは思うが、こういうところは全く違うな、などと改めて思う。

俺が頭を上げると、校長も頭を上げていた。俺が頭を上げたのを見て頷くと、話を再開した。

「お気遣い、痛み入ります。それで、本来であれば以前本校に勤めていたエリシアくんの紹介で、本校の大図書館の蔵書の閲覧をしに来られたとか」

「はい」

そう。本来、俺とヴァツシュは魔法関連の文献の蔵書数が世界でもトップクラスであるメルディアナ魔法学校の大図書館で調べ物

主に空間転移の魔法について調べに来たのだ。

世界中を回って、様々な場所で情報を得て、色々な人から話を聞いて来たが、どれも自分達が欲しい情報の核心には触れられない。

そこで、世界的に有名なウェールズと麻帆良の大図書館、どちらかで徹底的に調べたいと考えて、紹介を得られたのでここまで来たのだ。

俺達が、元の世界に帰ることのできる方法が、この世界にあるのかを調べる為に。

「どうぞ、ご自由にご覧ください。ただ、時間に余裕がありましたら……」

しかし。今は、それを調べるよりも先に、やらなければならないことがある。

「校長。実は、その他にも頼みがあるのですが、宜しいでしょうか？」

不躑とは思いつつも、校長の話を遮る。

「なんですかな」

校長は、不快そうと言うよりも残念そうな表情で頷いた。

何が残念なのか怪訝に思いつつも、校長にあることを願い出た。

「石化した村人達の呪いを、私に解かせていただきたいのです」

知らなければ、大図書館の閲覧を許可されただけで欣喜雀躍し、すぐにでも駆け込んだことだろう。

だが、知ってしまった。見てしまった。

ある日、突如として現れた悪魔の大群に襲われ、平和な日常を蹂躪された人々の存在を。その人達が未だ、その日から解放されていないという現実を知った。

石にされた人々を、スタン老人の悲しみと絶望の表情を、間近で見た。

それらを見て、知っていながら、衛宮士郎がのうのうと自分が帰る為の手段を調べることを優先することなどあり得ない。

ならば、今、衛宮士郎が為すべきことが何であるかは明白だ。

「なんと。本来ならばこちらが伏して願い出るところを、自ら申し出て下さるといのですか」

校長は俺の申し出に驚いて、大仰な言い方をしている。

まあ、確かに、自分から進んで面倒事に首を突っ込もうということだから、驚かれるのも当然か。

「頼みこんでまで人助けをしたいなんて、相変わらずだね」

隣のヴァッシュに、そんな風に茶化される。しかし、ヴァッシュは俺の勝手でここまで来た用事を後回しにされたのに、嬉しそうに笑っている。

これが、ヴァッシュが俺の旅の道連れの最長記録を更新し続けている、最大の理由。

俺達は、互いに一番大事なところで気が合う。まあ、時々食い違いうこともあるにはあるが。

ヴァッシュの言葉に苦笑で返し、校長に向き直る。

「駄目でしょうか？」

問うと、校長はまたも大仰な調子で頷いた。

「まさか。何故、その申し出を断ることができましようか。是非に、お願い致します」

承諾されてもらっただけでなく、相手からも頼まれた。

こうなつては、失敗すること、途中で投げ出すことなど論外だ。

必ず、全員の石化を解いてみせる。

「必ず、全員の石化を解いてみせます。ただ、解呪の方法については深く追求しないで頂きたいのです」

決意を実際に口に出して決断とする。

……まあ、実際は情けないことにヴァッシュが言うところの万能鍵、『破戒すべき全ての符』を投影し、対象に突き立てるだけの作業なのだが。

それでも、この世界では俺にしかできない乱暴な裏技だ。広く知られたらどうなってしまうか分からない。極力、人に知られないようにしなければ。

「心得ました。それでは、来賓用の宿泊室にご案内しましょう。その後、宜しければもう1度、村の方に行ってみてください。皆、あなた達に直接お礼とお詫びを言いたいそうです」

校長の言葉に、ヴァッシュと共に快く頷く。

「はい、分かりました。必ず行きますよ」

「突然で不躰な来訪を快く受け入れて下さっただけでなく、こちらの頼み事も御快諾いただき、誠にありがとうございます」

ヴァッシュはいつもよりも少し丁寧な口調で、俺はできる限りの敬語で挨拶し、校長の合図の後に現れた秘書らしき人に先導されて、部屋を出た。

「ふう。久々の敬語は息が詰まるな」

部屋に着き、案内をしてくれた人が出て行ってから、荷物を置い

て、漸く一息吐く。

長いことああいいう立場のある人間と接することが無かったので、敬語を忘れていないか心配だったが、何とかなった。

「誤解も解けてよかったな」

「ああ。これで女性の視線に怯えずに済むよ」

ヴァツシュの言葉に、溜息混じりに頷く。

互いにトレードマークの外套を脱ぎ、荷物から日本製のミネラルウォーターのペットボトルを取り出し、一気に飲み干す。

こうなると、互いにトレードマークを失う。そうなると、ヴァツシュは白いワイシャツで俺は黒い軽鎧、髪の色は黒と白、肌の色は白と黒。

同じトレードマークを脱いだだけで、よくもここまで対照的になるものだ。

「呪いを解くの、頑張ってくれよ」

「ああ、勿論だ」

ヴァツシュの言葉に頷き、今すぐにも事に臨めるぐらいに意気を高める。

だが、差し当たってまずやるべきはさっきの村に行くことだ。

休憩してから10分後には、ヴァツシュと共に再び赤い外套に袖を通し、外へと出る。

今度は魔法が飛んでこないことに安心して、すっかり道順を覚えただ道を歩き出した。

第二話

僕らがウエールズに逗留して、2週間が経った。

下着泥棒の件でのいざこざが解消されてしまえば、ここは静かで穏やかな場所だった。ただ、最近は僕らが来る以前よりも賑やかになってきているみたいだ。

それは、土郎の活躍によって石にされていた人達が元に戻る事ができたからだ。

ここに来た次の日に作業を始めて、四半日足らずで全員の石化が解かれたことには誰もが驚いていて、それ以上に皆が喜んで、土郎に感謝していた。

だけど、土郎は感謝の言葉をいくら受け取っても、喜ばず、嬉しげらず、少しも笑わなかった。代わりに顔に浮かぶのは困惑と苦笑ぐらいのものだ。

本当に、土郎は妙な所で歪んだ性格だよな。自己犠牲の精神も行き過ぎれば、自殺行為にしか見えないっていうのに。まるで、ちょっと前までの僕自身や……レガートを見ているみたいだ。

そんな心配をよそに、事態はあれよあれよと好い方向に転がっていく。

土郎への感謝の気持ちとして、魔法学校ほどの施設もほぼフリーパス、調べ物にも当初は10人近くの有志が協力を申し出てくれたぐらいだ。必要ではあるけど急ぎでもないから、本の場所だけ教えてもらって帰ってもらったけどね。

今までの苦労と、来た日の騒動がまるで嘘のようで、ここまで順風満帆だと却って不安になってしまつのは、しょうがないか。

問題があるとすれば、2つ。

1つは、下着泥棒のおコジヨ妖精、アルベール・カモミールが脱獄したこと。一種の呪いで『永久にえつちいことができないうようにする(超要訳)』という罰を受けることを猛烈に拒否していたので、

それが原因という見解らしい。

刑罰が呪いってというのが、いかにもファンタジックにマジカルで、この世界らしいよ。

このことに関しては魔法学校の人達に任せて、僕らは調べ物を優先することにした。万が一にもまた勘違いされて逃げ回ることになるのが嫌だから静観することにしたんじゃないよ、本当だよ。

そして、問題のもう一つは、肝心の調べ物の進捗状況が捗々しくないことだ。

「駄目だな……空間転移の魔法にも、俺達が望むようなものは欠片も無いな」

広い机を埋め尽くすほどの量の本に囲まれて、最後の一冊を読み終えた土郎はそう結論付けた。

「あー、やっぱりそうだったか」

僕も付け焼刃の魔法や魔術の知識で本を読み漁って、土郎よりも早くその結論に至っていた。魔術に詳しい土郎なら、或いは僕が見落としたことから別の結論を導き出せるかもと思っていたけど、駄目だったみたいだ。

2人して机に突っ伏して、深く大きく溜息を吐く。

この2週間の9割以上を費やした時間が徒勞に終わったのだから、溜息だって盛大になってしまうものさ。

「でさ、土郎。君がこっちに來た原因は、やっぱり思い出せないか？」

ふと思いついて、一緒に旅してから何回目かになる質問をする。

「ああ。恐らく1カ月ほど、記憶の殆どが抜け落ちている。転移の際に何かがあったんだろうが……」

「それが分かれば、もしかしたら……思っちまうよな」

「そうだな」

僕がプラントの力でこの地球に來たように、土郎も“何かの力”

によつてこの地球に来たはずだ。そうであれば、あの時の何かにぶつかったような衝撃や、プラントの力とは違う異質な力を感じた孔そして僕と殆ど同じ所から落ちたこと、全部に説明がつく。

その“何かの力”が明確になれば、まだ別のアプローチの仕方もあるんだろうけど……。

「……並行世界や時間旅行の研究は、科学分野だけか」

「それもまだまだ机上の空論で、実践の段階には程遠いね。プラントに関しては、言うに及ばずさ」

プラントの力が類する科学技術は、圧倒的に未発達。科学分野でのアプローチは絶望的だ。だからこそ、魔法の分野に期待していたんだけどなあ……。

「どーしたもんかねえ。リヴィオも見つかからないし、お先真っ暗だよ」

その後、校長にリヴィオの搜索を頼んだけど、そつちの音沙汰もない。

黒い帽子とマントを身に付けた、十字架を模した二丁拳銃の使い手の牧師見習いだから、特徴に事欠かないとは思っただけ。

「しっかし、お互いよくもまあ読み漁つたもんだねえ」

積み重ねられた本の山を見て、ヴァッシュがそんなことを呟いた。改めて見てみると、我ながらよくもこれだけの量を読破したものだ。恐らく、一日で十冊以上は読んだことになるだろう。

「ああ……流石に、事が事だけに集中力が段違いだったな」

これだけの量を読み続けたことなど、学問が本分であった学生の時でもなかった。やはり、人間、必要に迫られれば普段以上の実力を発揮できるようだ。

すると、腹の音がなった。どちらがではなく、どちらもだ。

「……飯にするか」

「そだね」

「それじゃあ、僕も御一緒させてもらおうかな」

昼食を提案し、ヴァツシュが頷いたのを見て、3人揃って椅子から立って……3人？

机の対面にはヴァツシュがいて、他には誰もいない……と思いきや、何時の間にかこちら側の端に、見覚えのある白い男が座っていた。

「アラン!？」

「プレイヤー、いつの間に」

「割と前から」

ヴァツシュは大声を上げて立ち上がり、俺が問うとプレイヤーはさも当然のように答えた。神出鬼没とは、この男に最も似合う言葉だろう。

「……どうやってここまで来た？」

「無論、不法侵入というやつさ。バレずに潜り込むのは得意だからね」

真っ先に浮かんだ疑問を問うと、事も無げにそう言った。確かに、この警備は蟻も漏らさぬ布陣という程ではないが、策でもない。しかし、侵入者に気付いている様子は見られない。

以前会った時といい、どうやったらここまで潜入が上手くなるのだろうか。色々と役に立ちそうなものだし、教えてもらいたいものだ。

「久し振りだね。で、何しに来たんだ？」

落ち着きを取り戻し、椅子に座り直してからヴァツシュが要件を問うた。プレイヤーも頷いて、すぐに答えた。

「君達がウェールズで下着ドロに身を糞したと聞いて、心配で飛んで来たのさ」

「なにい!？」

何時の間にかイギリス国外にまで俺達の誤った醜聞が広まったのかと、思わず大声を出してしまふ。

しかし、叫んでからすぐにこの男の気性を思い出した。

「あ、冗談だから安心して。下着ドロに関して、ここに来るまでに小耳に挟んだのさ」

あっけらかんと、なんら悪びれた様子も無く言った。

この男と会話をしたのはほんの僅かな時間だが、それだけでこの男の特徴や気性を知るには十分だった。

プレイヤーは、まるで息をするように自然と冗談を言うのだ。しかも、うっかりと信じてしまうようなものを絶妙なタイミングで言うのだから、性質が悪い。

「相変わらずだね」

ヴァッシュが苦笑しつつそう言うと、プレイヤーはニヤリと得意げに笑った。目元は、相変わらず帽子に隠れて見えないが。

「本題だけど、君達にお知らせしたい情報があつてね。漸く君達の居場所も分かったことだし、ここまで来たのさ」

「情報？」

そういえば、プレイヤーは如何わしい界限　所謂、社会の暗黒面、裏の世界で何でも屋を営んでいると言っていた。

その関係で情報収集もしているのだろうが、何故、態々俺達に知らせに来る？

世界中を転々としているそうだが、活動拠点は話に聞く魔法世界に在り、そちらでの仕事の方が多いと言っていたはずだ。

それなのに、顔見知り程度の仲でしかない自分達に情報を伝えるためだけに遠路遙々イギリスの田舎町まで会いに来るなど、純粹な善意だけによるものとは思えない。

「そ。君達がパソコンか携帯電話を持つてたら、それで済ませただけだね」

プレイヤーの言葉に、ある嫌な記憶を思い出す。

そうだ。現代の利器を利用せずに世界中を旅するなど馬鹿げている。本来なら、パソコンは無理でも、携帯電話は多少の無理をしても調達したいところだ。

だというのに、この男と来たら……。

「あゝ、あのちっこい電話か。前に買ったことあるんだけど、3時間ですくしちゃったんだよね」

「それも3回連続でな。お陰で俺も持つのがバカらしくなった」

ヴァッシュは何故か、携帯電話をすぐに失くしてしまう。

いや、何故ではない。何かの騒ぎに首を突っ込んで、その拍子に失くしてしまうのだ。

通信機器に関してはヴァッシュが便利な物を持っているので困るわけではないし、携帯電話を入手する度に失くされては堪ったものではない。

そういうことで、俺は携帯電話を所持することを諦めた。諦めた当初はどうなる事かと思っていたが、今になって振り返ってみると意外とどうにかなるものだ。

「相も変わらず、愉快且つ元気みたいだねえ」

小さく笑いながらそう言って、プレイヤーは漸く本題を切り出した。

「で、肝心の情報だけど、まず一つ目は探し人。僕の友達が街中で『ダブルファンゲ』と名乗る、黒い帽子とマントを纏った、腰に十字架を2つ吊り下げた人物と会ったんだって」

明らかに特徴過多のその人物には心当たりがある。俺よりも、ヴァッシュに。

「どー考えてもリヴィオだよ、それ！ あー、良かった。無事だったんだなあ……」

ヴァッシュと共にこの世界に来てしまったという牧師見習いの青年、リヴィオ・ザ・ダブルファンゲ。

ヴァッシュが言うにはノーマンズランドという星で最強クラスの戦闘能力を有するものの、俺達ほどではないにしろ、他人を信じ易く騙され易いお人好らしい。

相当目立つはずなのに今まで少しも行方が分からなかったから心配していたが、無事なようで何よりだ。

「良かったな、ヴァツシュ」

「うん。ありがとう、士郎。リヴィオと合流できたら真つ先に紹介するよ」

心底から安心した表情と声で、眼の端に涙を浮かべながらヴァツシュは頷いた。

「それで、場所は？」

ヴァツシュは居ても立っても居られないとばかりに、そわそわとしながらプレイヤーにリヴィオが発見された場所を問うた。

「日本の京都」

あつさりと帰って来た答えを聞いて、軽い眩暈がした。

「……………日本、だと？」

ああ、なんとということだ。

俺達がこの世界に迷い出た近くに、探し人もいたとは。やはり、世界中を探し回るよりも先に、日本中を探し回るべきだったか。

一方、日本の地理に疎いヴァツシュは、まだ俺ほどショックを受けていないようだ。

「あっちゃあ、スタート地点の近くにいたのか。士郎、参考までにあの街からキョートまでどれくらいだったんだ？」

「そうだな……………6時間程度じゃないか？」

この世界の交通機関は、俺の世界の同時代のものと大差ない。新幹線などを使えば、埼玉から京都まではその程度の時間で着けるだろう。

これを聞いて、漸くヴァツシュも仰天した。

「近っ！？ 僕達のこの7ヶ月はなんだったの！？」

「それを言うな」

この世界に放り出されたのが8月中旬で、今はもう3月末、もうじき4月だ。

これだけの期間、世界中を旅して回ったというのに、探し人がまさか出発地点から少し離れた場所とは。灯台下暗しとは、こういうことも言うのだろう。

リヴィオの件で喜びながらも若干の疲労感を覚えていると、プレイヤーが再び口を開いた。

「もう1つの情報なんだけど、ガツカリしないでくれよ?」

プレイヤーが持つて来たという情報は2つ。リヴィオの情報は特に前置きが無かったというのに、今度は「ガツカリするな」と言う。予想できないし考えたくもないが、リヴィオのこと以上にガツカリするような情報なのだろう。

「なんだ。帰る手立ては何も無いことが断定された、とかか」

「それともうガツカリを超えて絶望だろ」

「つい最悪の予想を口にして、ヴァッシュにつっこまれる。」

そんなやり取りを見てか、僅かに口元を歪めながら、プレイヤーはもう1つの情報を伝えた。

「時空を超える技術、君達が帰還する一縷の望み、麻帆良に在り」
聞いた瞬間、思考が停止した。

頭の中が真っ白になって、一切の思考を拒否する。
錯覚だろうが、ピシリ、という擬音と共に世界が凍りついたようにも思える。

混乱はしていない、俺は冷静だ。冷静だからこそ、素直にその朗報を受け止めたくないのだ。

「…… 士郎。僕の記憶違いじゃなければさ、麻帆良ってスタート地点そのものだよな?」

「ああ、そうだな」

妙に重苦しい空気の中、ヴァッシュは気の抜けたような声で問うてきた。それを聞いてすぐに頷き、数秒の間を置いてから共にガツクリと頂垂れ、机に突っ伏した。

「……… 僕達、本当に何やってたんだらうね」

「……… 言うな。泣きたくなる」

プレイヤーが持つて来てくれた情報は、この7ヶ月間、俺達が探し求めながらも見つけれなかったものだ。それらの情報が一度に手に入って、しかもどちらにも近い場所にあるというのだから、これ

は間違いなく僥倖だろう。

だが、あの時、麻帆良に滞在するという選択肢を真っ先に放棄し、世界を旅して回るといふ選択肢のみを考えてしまった己が憎い。後悔先に立たずとは、こういうことか。

俺もヴァツシユも、旅から旅の根なし草だったのが決め手か……。まあまあ、いいじゃないか。急がば回れとも言っし、目的地までの寄り道は、旅と人生の醍醐味じゃないか。それとも、今日までの日々は無味乾燥だったのかい？」

「ま、そうだけどね」

プレイヤーのフォロー、をするような性質ではないから、本心からの言葉だろう。それを聞いて、ヴァツシユは苦笑しつつも頷いた。今日までの日々には色んな事があった。望む成果こそ得られなかったが、その全てが無意味で無駄な時間だったかと問われれば、俺も首を横に振る。

俺は、自分の今までの旅路が失敗だらけだとしても、そのことを後悔することだけはしたくない。……まあ、流星にさっきは本気で悔やんだが。

そこまで考えて、ふと、あることに考えが及んだ。

「って、待て。まさかお前、あの時も知ってて黙っていたのか？」

「うん？ ああ、技術のことね。まさか、そのことを知ったのはほんの数か月前だよ。報せるのが今日まで延びたのは、連絡しようにも、その頃には君達、ドクターとも別行動になっていたみたいだし」

「む、そうだったか」

この男の気性を思えばもしま、と思ったが、杞憂だったようだ。それに、もしも本当にそうだったのなら、今日こうしてここに来てはいないか。

加えて、俺とヴァツシユはジョーと別れてからは、ほぼ完全にこの世界の人間の情報網から消えていたはずだ。ならば、俺達の行方を知るのが遅れたのも仕方のないことだろう。

「というわけで、報告はお終い。後者についての詳細は、知っての

お楽しみ、君達自身で調べるといいよ。だから、遅かれ早かれ、日本に行くことをお勧めするよ」

言って、プレイヤーは帽子を左手で押さえながら立ち上がった。

「そうだな。校長に頼んで、麻帆良の責任者に紹介状を書いてもらうか」

日本に行くべし、という勧めに否を唱える理由は無い。今すぐにも行きたいところだが、俺達のような素性の知れない人間が何の頼りも当ても伝手もなく赴いた所で、門前払いが関の山だろう。

ならば、今ある人脈は可能な限り活用すべきだ。そうすれば、着の身着のままで行くよりはずっといい。

「ありがとう、ホワイトマン。お陰で希望が見えて来たよ」

そう言いながら、ヴァツシュはプレイヤーに歩み寄り、右手を差し出した。

それを見て、少しの間を開けてから、プレイヤーはヴァツシュの手を取り、握手した。

「お気にせず、レッドメン。実はこれ、僕の為でもあるからね」

「お前の為？」

纏めて複数形で呼ばれたことよりも、その言葉が気になり聞き返す。

プレイヤーは握手の手を放すと、踵を返す前に口を開いた。

「また、日本で会えば分かるさ。その時は、知り合いの誼で、1回ぐらいはこのしがない小悪党を見逃してくれよ？ 正義の味方【Crime Avenger】」

真剣な声調で告げて、食事は次の機会にね、と言い残して、プレイヤーは図書館の本棚の方へと消えて行った。

「……小悪党、か。どう思う？ ヴァツシュ」

プレイヤーは初対面の時の自己紹介で、俺が正義の味方を志していることを話すと、

「それは奇遇だねえ！ 実は僕、生粋の、それはそれは卑しい小悪

党なんだ。その時はお手柔らかに頼むよ」

などと言って来たのだ。

聞いた時は冗談だと思っただが、ジョーも真面目な顔で頷き、今回もプレイヤーは真剣に自身を小悪党と称した。

自らの価値観や存在を『悪』と断じ、そこに一片の迷いも見せず自らを肯定する人間に会うのは、初めてではない。だが、その知っている男とプレイヤーは、余りにも平素の様子が違っていて、ピョンと来ないのだ。

それで、人生経験が俺よりも色々な意味で豊富なヴァツシュに訊いてみたのだが、難しい顔をして唸っている。

「うーん、どうだろ。性格がぶっ飛んだりしてるやつって、普段の態度だけじゃ分からないからな」

「やつぱり、そういうやつに会ったことはあるのか」

「うん。伊達に長生きしてないさ」

「……とびつきり凄いのだと、どんなやつがいた？」

「そうだな……… 士郎が聞いたら機嫌悪くなるだろうからやめとく」

「なんだそりゃ」

一頻りその話題で話し続けて、再び腹が鳴った所で昼食を摂るところになった。

その後、侵入者が見つかったという通報も特になく、メルディアナ魔法学校は今日も平和そのものであった。

他に、気掛かりな点があるとすれば。

俺達が日本に行くことでプレイヤーにどんなメリットがあるのか、ということだけだ。

メルディアナ魔法学校の敷地を悠々とした足取りで抜けると、そこでプレイヤーはあることを思い出し、ついさっき行ったばかりの場所を振り返った。

「ああ、いけないな。勘違いさせるようなことを言っちゃったよ」
言いながら見ているのは、もう衛宮士郎もヴァッシュ・ザ・スタンピードも離れているであろう大図書館だ。

「時空を超える技術を知ったのは最近だけど……彼らが帰還する一縷の望みは、初対面の時から知っていたからねえ」

悪びれた様子など寸毫も見せず、寧ろ楽しげに、面白げに、口を歪める。

そして、左手の掌を見遣る。そこには、蚯蚓腫れのような痕が刻まれている。つい数日前に若干の痛みと共に顕れた、プレイヤーの企みが順調であることの証だ。

「さて。今のところ、兆しが出ているのは僕だけか。後の候補は……衛宮士郎は鉄板として、ソードと、ウェルンくと、噂の英雄子息ってところかな。残る2人は誰になることやら」

それだけ呟くと、再び踵を返して帰路へ着いた。こんな場所で不用意に長居をしていたら、どんなデメリットが発生するかもしれないのだ。

やがて、最近になって完全に復興したという村に差し掛かると、携帯電話が着信を告げるメロディを鳴らした。軽快な音楽を楽しみながら、通話ボタンを押して耳に当てる。

「あ、E2？ 久し振り。元気みたいで何よりだよ。僕の方の用事は終わって、今から帰るところ。そ、予定より早目。珍しいだろ。それで、例の仕事の件だけど、準備はどうだい？ もうすぐだけど……そう、サイン達も一緒さ。折角のウェルンくんからのお誘いじゃない、僕らも楽しまないとね」

2ヶ月前の仕事で負傷し、大事を取って長期療養していた親友“E2”の復帰を確認し、仕事の準備も滞りなく進んでいることを確

認する。ナイン達の移動準備まで出来ているのなら、準備万端と言
っていいだろう。

流石はソード、勤勉で真面目で実直で、こういうことを任せたら
間違いない。また「煩わしいことを押しつけたな」と愚痴られそう
ではあるが、些細なことだ。

「ん？ ウエルンって誰かって？ フェイト・アーウェルンクスそ
の人だよ。フェイトきゅんもアーウェルンクス少年も駄目出しされ
たから、こう呼ぶことにしたんだ。素敵だろう？……え？ ダサイ
？ ビミョー過ぎる？ 五月蠅いよ」

最後に他愛のない会話をして、プレイヤーは最終確認を含めた挨拶
で通話を終えた。

「それじゃ、予定日時に変更なく、京都で合流ね。それまでに一度
は顔を出しておくから」

第三話

プレイヤーからの報せを聞いた数日後、メルディアナ魔法学校校長から麻帆良への紹介状を貰い、俺達はウエールズを発った。騒ぎになつては迷惑だろうと、誰にも告げず、深夜に。

「別れの挨拶ぐらいちゃんとしたかったよ」とヴァッシュには愚痴られてしまったが、俺はこういう方が性に合っている。

その後、ヴァッシュの左腕が機械製の義手（しかもマシンガンを仕込んでいる）である為に合法的なルートを使えず、またも先達達の運び屋に依頼して非合法なルートで日本へと向かうことになった。途中で色々あったが、紆余曲折を経て、俺達は今、日本のJR京都駅にいる。

「でっけえー駅だなあ……」

感心したように、ヴァッシュは頻りに周囲を見回しながら呟いた。自分自身も予想以上の人混みに驚きながらも、ヴァッシュの言葉に答える。

「京都は日本最大級の観光都市だからな、玄関も広大になるさ」
こうして日本の大都市に来るのは、一体何年振りだろう。高校の修学旅行よりも後には……：：：：そういえば、遠坂共々第五次聖杯戦争の事後処理の関連で、日本独自の魔術的組織の東京本部に呼び出されたことがあったな。

あれが最後に、日本の大都市を訪れた記憶だ。やや曖昧ではあるが、その時の記憶と比べても、やはり人が多い。これで平日だといふのだから驚きだ。

「こんなに人が多くて、往来も盛んな場所だったのか……：：：リヴィオを探すのは、骨が折れそうだな」

「人が多いってことは、リヴィオを見かけた人も多くなるってことさ。特徴的な格好だし、聞き込みをしていけば何らかの情報は得られるだろうさ」

途方に暮れたようなヴァツシュの言葉に、前向きな意見を返す。実際、聞いた特徴通りの身形ならば、必ず人目に止まっているはずだ。

プレイヤーの話では、リヴィオが京都で見かけられたのは数ヶ月前。恐らくは去年の末から今年の初めにかけてだろう。些か時間が経っているが、その時期は人の往来も活発で、多くの人に紛れても尚目立つような出で立ちだったのならば、完全に痕跡が消えていることはないはずだ。

ヴァツシュはすぐに俺の言葉に頷くと、いつもの元気を取り戻した。

「そうだな……ようし、いっちょ頑張りますかとお!？」

「わぶっ」

構内の十字路を通り過ぎようとした時に、見事なタイミングでヴァツシュが赤毛の少年と衝突した。

少年の背が低く、ヴァツシュの背が高いことが重なり、少年の頭がヴァツシュの腰の辺りに勢いよくぶつかった形だ。

頑丈なヴァツシュはいいとして、ぶつかった反動で転びそうになった少年の腕を咄嗟に掴んで支えた。少年は眼鏡を掛けていたが、幸い、眼鏡は壊れなかったようだ。

「大丈夫か、君」

「ぼ、僕は大丈夫です。すいません、僕の不注意で」

そう言って、少年は俺が手を放してから姿勢を正して頭を下げた。歳の割に、礼儀正しい少年のようだ。

それにしても、背負っている大きな荷物も目を引くが、それ以上に、子供がスーツを着ているとは珍しい。どこかの名家の子なのだろうか。

「気にしなくていいぞ、あいつはかなり頑丈だから」

「実際どうってことないけどさ、ちょっとは心配してくれてもいいんじゃないか？」

「冗談めかして言うと、ヴァツシュもそのように返して来た。ヴァ

のある声の主を思い出そうとしている。

「ほら、ネギー！ あんたなにやってんのよー！」

すると、俺達の方に大きな声で誰かを呼び掛ける声が聞こえて来た。

見ると、先程見かけた学生服の少女の一人だった。赤毛の長い髪をツインテールで纏め、結び紐には鈴のような飾りをつけた、両眼の色がそれぞれ違う。確か、オッド・アイだったか。澁刺とした印象を受ける少女だ。

「あ、すみませんアスナさん！ それでは、僕はこれで」

どうやら、呼ばれているのは先程の少年らしい。しかし『葱』とは日本人の名前としては珍妙過ぎる。恐らく、外国人なのだろう。

「ああ。次は人にぶつからないように気を付けてね」

「はい」

ヴァツシュの言葉に頷いて、ネギ少年はお辞儀をしてから、慌てるように駆けて行った。

ネギは先程のアスナという少女の元に行くと、何やら叱られている。姉弟のように見えるが、先程の口振りから察するに、恐らくは従姉弟か近い親戚といった関係なのだろう。

それにしても、よく見れば目の前の少女の一人と同じ制服を着た少女達が遠くに大勢見える。この時間帯に通学しているとは思えないし、旅行鞆などの学生らしからぬ大荷物も見える。

「あれは、修学旅行か？ 今の季節に珍しい」

「シューガク旅行？ なにそれ？」

何となく呟いた言葉に、ヴァツシュが反応した。そういえば、学校行事なんかは教えていなかったな。

「主に小学校や中学校、高校の学年単位で有名な都市に集団で旅行する行事さ。学を修める旅行とは書いてあるが、そっちは殆どついでで、実際は思い出作りがメインだな」

俺自身の実体験と一般的な知識とを混ぜて、簡単に説明する。ヴァツシュも納得してくれたようで、歩くのを再開しつつ、少女達を

見ながら頷いた。

「へえ〜。それじゃ、あそこにいる同じ服の子たちはみんな学生なんだな。大分身長とかにばらつきあるけど、中学生ぐらいかな？」
言われてみれば、ネギ少年の周りの少女達だけでも身長にかなりばらつきがある。小さい子と大きい子の差は20cm以上あるのではないだろうか。

「俺は……高校生だと思うな。まあ、それはともかくとして、だ。ヴァツシュ、さっきの子の荷物、見たか？」

ネギ少年達から目を外し、ネギ少年の持っていた荷物の中でも特に目を引いた者について尋ねた。

「うん。あの杖って、魔法使いの……だよな」
ヴァツシュの言葉に、すぐに頷く。

ネギ少年が背負っていた杖は、見間違いようもなく、メルディア魔法学校でも多く見かけた魔法使いの杖だった。魔術師で言う所の魔術礼装、この世界では触媒だったか。

最初は単にああいう杖を持ち歩くのが趣味の少年かとも思ったが、具に観察するまでもなくすぐにそうではないと理解できた。

「ああ。魔力の残滓がかなりあるから、頻繁に使っているんだろう。それに、あの子自身の魔力量も相当のものだな。少なくとも俺の数倍はある」

流石に、遠坂やルヴィアのような桁外れの魔力量ではないが、それでも少年のそれにしては瞠目に値する量だと言える。

「へえ、そりゃ凄い。けど、なんだってこんな所に子供の魔法使いがいるんだろうね」

「さて、な。どうやらあの修学旅行の一員らしいが、それだけでいいだろう。まずは聞き込みに行こう」

俺の見立てが全て合っているなら、スーツを着込んだ小学生程度にしか見えない少年が混じった女学生の修学旅行、という極めて珍妙な構図になるが、敢えて関わる必要も無いのだから深く考える必要はないだろう。

今、俺達がすべきは、今まで消息不明だったヴァツシユの旅の道連れの青年　　リヴィオ・ザ・ダブルファングの足取りを掴むことだ。

「そうだな。それじゃ、リヴィオの搜索にレッツラゴー！」
頷き、駅から出ると同時に拳を振り上げてヴァツシユは景気づけに大きな声で叫んだ。

周囲に人目が無ければ俺も応じる所だが、こんな人通りの多い所でそんなことはしない。

数秒後、気まズくなつたヴァツシユにいじけられて愚痴られた。
やれやれ。

先程ぶつかってしまった2人の赤い男性が歩き出したのを見ると、スーツを着た赤毛の少年　　ネギ・スプリングフィールドは先程、ズボンの隙間から懐に潜り込んで来た友人に声を掛けた。

「どうしたの？　カモくん。いきなりあんな大声出して」
すると、スーツの胸元から全身を震わせながら顔を出したのは、無論のこと人間ではなく、ネギの友人のオコジヨ妖精　　アルベール・カモミールだった。

「兄貴……何も言わないでくださいえ……何も聞かないでくださいえ……ただ、何があつてもあの2人とオイラを引き合わせてくれなきゃいいんですよ……ただ、それだけで……」
うわ言のようにそう繰り返すだけで、カモは詳しいことを話そうとしない。

まだまだ人生経験が足りない故に他人の心の機微に疎いネギも、カモが明らかに先程の2人に怯えていることが理解できた。

「どうしたのよ。エロオコジヨ、元気が無い……っていうか、何か

に怯えているみたいだけだ」

その様子を傍で見ている、ツインテールとオッド・アイが特徴的な少女　神楽坂明日菜がそのように言ってきた。

それに対してはネギも、戸惑いながら頷くばかりだ。

「さあ……さつき僕がぶつかつちやつた人達を知ってるみたいなんですけど」

「ああ、あの背の高い赤い人達ね。こんな所で堂々と凄いい恰好してたわよねー。けど、まだまだ洪さが足りなかったわね、残念」

残念なのはアスナさんの男性の趣味が特殊過ぎるからですよ、という言葉が喉まで来て、何とか呑み込んだ。

ネギはこれまで、迂闊な発言をしては何度となくアスナに怒られる時には殴られてもいる。そして今回ばかりは、物凄く嫌な予感があったので言葉を呑みこんだ。ネギとて、魔法以外の事柄を学習しないわけではないのだ。

そう、ネギ・スプリングフィールドは何を隠そう魔法使い。名門メルディアナ魔法学校を最年少で首席卒業し、現在は最後の修行として麻帆良学園で教師をしているのだ。

ネギが女学生の修学旅行にスーツ姿で同行しているのも、彼が受け持つクラスの担任教師としてなのだ。

無論、労働基準法を始め日本の法律に色々と違反しているので、このことは麻帆良学園都市だけの秘密だ。

ちなみに、ごく一般的な女学生であるはずのアスナがオコジョ妖精なるものを当然のように認識しているのは、ネギの訪日初日に魔法の存在を知ったからだ。ネギのミスで。

それ以来、アスナは子供嫌いではあるものの面倒見のいい性格であり、それが災い／幸いして、今ではネギと秘密を共有するどころか、すっかり魔法関係者の一員となっている。

「アスナー、ネギくんと何話してるん？」

すると、追いついて来た長く艶やかな黒髪の少女　近衛木乃香が声を掛けて来た。

ネギの事情は、アスナの義理堅い性格のお陰で彼女以外の一般の生徒には知られていない。だからこそ、ネギは慌ててカモを懐に押し込んでから、何とか言い繕おうとした。

「わっ、このかささん!? え、えーとですな……」

だが、咄嗟に何を言っているか思い浮かばない。どうしたものかとネギが涙目になりそうになった所で、アスナが言い繕ってくれた。「えっとね……こいつが浮かれててぶっかつちゃった人の話よ。ほら、凄く目立つ格好だったじゃない」

下手な嘘ではなく、本当の部分だけを適当に取りだしただけの言葉。相手が慌てた様子を勘繰って来るような人物ではなく、穏やかでのほほんとした性格の親友だからこそ通じるものだろう。

「あー、あの人らのことやったんか。なんとなく優しそうでええ人そうなたちやっとなあ」

このかがそう言うと、続けて追いついて来た、このかほどではないが長い黒髪が目を引く眼鏡を掛けた少女　早乙女ハルナが、その評に眉を顰めた。

「そう? 私は寧ろ怖いっていうか、近付きたくない雰囲気だったけど」

普段はどんなことでも「面白そう」という理由だけで首を突っ込む、突っ込める彼女にしては慎重な人物評に、実際に言葉を交わしたネギは内心でそれを否定した。寧ろ、このかの言うとおり、優しい人たちだったのだ。

「……あの、ネギ先生」

すると、遅れてやって来た、目元が前髪で隠れている物静かな少女　宮崎のどかが、珍しく自分からネギに話しかけて来た。

「はい。なんですか? 宮崎さん」

極度の人見知りの彼女から声を掛けられたことに、驚くよりも嬉しく思いながらネギは聞き返した。

「……その、みんな、先に行ってしまった、けど………」
小さな声で、のどかはそう言った。

ネギが周囲を見回してみれば、自分達以外に麻帆良学園の生徒や先生の姿が無い。

これはつまり、ネギがカモと打ち合わせをしようと離れてしまったことで、みんなとはぐれてしまった。言い換えれば、教師である自分が原因で、集団行動の和を乱してしまったということになる。

「え？ わー！？ みなさーん！ 待って下さーい！！」

自分の落ち度で全体に迷惑がかかってしまうと思い至るや、ネギは脇目も振らずにバスが停まっているはずの出口の方向へと駆け出した。調度、先程の赤い2人が去っていったのとは逆の方向だ。

それに、慌ててアスナたちも続く。

「前途多難な修学旅行ですね」

「ホンマやな」

『世紀末救水主の力水』なる怪しげなパック飲料を飲んでいる少女 綾瀬夕映は、このかと共にのんびりと歩いていた。暫くしてアスナに引っ掴まれて、結局走る事になってしまったが。

その後を、黒髪を片結びに纏めた少女 桜咲刹那は少女らしからぬ厳しい表情で付いて行った。

京都駅から少し離れた建物の屋上に、怪しい人影があった。

彼は春の暖かな日差しの下でボロボロの黒い帽子を被り、黒いマントを纏っている。そんな身形の人間が建物の屋上にいたら、怪しい以外に無いだろう。

では、怪しい出で立ちの人間とは、必ず悪人なのであろうか？

答えは、否。彼の心根を“善”と“悪”で判断するのであれば、

間違いなく彼は“善”である。

「……お、出て来たか。取り敢えず、目立った異常は無いみたいだが………」

彼が見つめる先には、赤毛の少年を中心とした一団の姿がある。

彼は現在、紆余曲折を経て関西呪術協会という組織の長に雇われた用心棒となっている。その長 近衛詠春から、険悪な関係が続いている東西の魔術的組織の関係改善の為に訪れる、東からの使者の護衛を依頼されているのだ。

事の重大さは、日本に身を置いて8カ月程度でしかない彼にも十分理解できた。

銃火器等の凶器を使わずに生活できるという、彼の故郷と比べればあまりにも奇跡的なこの国の平和を脅かす一大事なのだ。力が入らないわけが無い。

だが、今回の依頼には幾つもの、彼自身どうしても納得いかない条件が付いていた。

「本当にあつちからの護衛は無しかよ。100人以上の無防備な人質候補を引き連れて、しかも観光旅行のついでだってんだから……そんなので面目が立つのかね、ホント」

東からの親善大使の少年の周囲にいるのは、学生服を着た少女達ばかりで、その周囲にも護衛らしき人影はいない。少女達の中にちらほらとそれなりの使い手がいるのは見て取れたが、1人として彼が安心できるほどの実力者には見えなかった。

こんなにも人通りが多い場所で、誘拐や奇襲を想定して警戒していない時点で、彼の基準ではアウトだ。100人以上も無力な子供ばかりが集まっているのだから、それを真つ先に心配して動かなければならないのだ。

かてて加えて、彼が表立って介入していいのは「使者の少年の手に負えないような事態になってから」となっている。理由を問いただすと、なんと、今回の件は使者の少年の成長を促す試練も兼ねているから、とのことだった。

何を暢気なことを。噂に聞く東の長のみならず、西の長である詠春も危機意識が欠如し過ぎている、日本の平和の重大さと尊さを理解していないのではないか、と彼は内心で愚痴った。

だが、これらの不満も不安も、杞憂であればそれでいい。それにいざとなれば、現場の判断でさっさと介入して、さっさと終わらせてしまえばいい。

「まあ、やれるだけやるか。漸く、あの人らしい目撃情報があったんだ。旅の資金はきっちり貯めておかないと」

つい先日、イギリスのウェールズという場所で、赤いコートを纏った男が目撃されたとの情報が耳に入った。なんでもその赤いコートトの男は、村で起こっていた事件を無駄に大きくしてから解決したという。

それを聞いて真つ先に連想したのが、彼の予てからの探し人だった。

あの男が今まで何ら騒ぎを起こさず、噂にもならず、漸く入って来た情報もあの男にしては小さな規模だと言えるだろう。だが、初めて掴んだ有力情報だ。確かめに行く価値はある。

だからこそ、どんなに不満があろうとも、高額報酬が約束されているこの仕事は完遂する。呆れるような前提条件も、今まで経験して来た修羅場と比べればどうということも無いのだ。

そう思い直すと、彼は車で移動を開始した使者の御一行を追い掛けた。

リヴィオの行方を捜して一時間。暫くは空振りが続いたけど、あの店の店員さんに「その人のことなら近くの寺か神社に行けばいい」と言われてきて、早速最寄りの神社に来た。

何でリヴィオのことを訊くのに神社やお寺なんだろう、と首を捻りながらも、境内にいた赤と白の二色の装束に身を包んだ女性たしか、巫女だったっけ。その人に早速リヴィオのことを尋ねてみた。

「黒い帽子に、黒いマント、灰色の髪に左目の辺りに刺青の青年？ そりゃ、知ってるさ。半年ぐらい前から、月に2、3度はここに来ているからね。今月はまだだけど」

「本当ですか!？」

これまでの8カ月が嘘みたいに、あっさりと有力情報をゲットした。僕は嬉しくて、つつい大きな声で聞き返しちゃったけど、仕方ないよね。

「少なくとも、この近くに定住していると見て間違いないな」

巫女さんからの返事を聞いただけで、土郎はするように推理していた。そっか、毎月2度も来るんなら、近くに住んでいるってことだもんな。

けど、他人の空似ということも万が一ぐらいにはありえるから、もう少し詳しく話を聞いてみた。

「勤勉で真面目で実直で、正義感も義侠心も腕っぷしも強い男前と来たもんだ、姪の婿に欲しいぐらいだよ。まあ、断られちゃったがね」

縁談まで持ちかけられるなんて、気に入られてるんだなあ。上手くやれているみたいでなによりだよ。

「有名なんですか？ 彼は」

「ああ。京都の寺社仏閣で、彼を知らないやつはそうはいないさ。みんな、何度も世話になっっているからね」

土郎が問うと、巫女さんはそう言っつてリヴィオについて色んな事

を教えてくれた。

なんでも、リヴィオは歴史ある建築物の姿に心打たれて、頻繁に京都の寺社仏閣に顔を出しているらしい。その時にケンカの仲裁や、悪質なイタズラ犯の捕獲、力仕事の手伝いなどを進んでやっていて、それで評判になって、今では寺社仏閣の近辺ではすっかり有名人になっっているらしい。

「リヴィオも、上手くやれてるみたいだな」

心の底から安堵しながら、さっきは心の中で思ったことを、今度は口に出して呟いた。

僕には土郎やジョー、アランがいたから良かったけど、リヴィオは地球の文化や環境に順応できずに大変なことになっちゃいけないかと心配だった。だから、リヴィオがこの平和な国で上手く生活できていることが本当に嬉しかった。

「へえ。名前を知っているってことは、本当に知り合いなのかい」すると、巫女さんはそんなことを言ってきた。どうやら、僕が本当にリヴィオの知り合いなのか疑ってたみたいだ。気風がいいけど、存外用心深い人なのかな。

「ええ、そりゃあもう。あ、もしかしたらリヴィオも僕を探してませんでした？ 僕、ヴァツシュ・ザ・スタンピードってんですけど」「ヴァツシュ・ザ……？ ああ、言ってた言ってた。もう半年以上前になるかねえ。初めてここに来た時、境内にいたみんなに『ヴァツシュっていう赤い服着たトンガリ頭の人を知りませんか』って、尋ねて回ってたよ。そうか、あんたがそのヴァツシュさんだったのかい」

巫女さんの言葉に笑顔とサムズアップで応える。

「彼、リヴィオが今どこに住んでいるか、御存知ではありませんか？」

土郎が問うと、巫女さんは暫し首を捻ってから答えてくれた。

「うーん、そうだねえ……どこかの教会に厄介になってるって話は聞いたことがあるけど」

本人は申し訳なさそうに言っているけど、これは思いがけない朗報だ。

京都にすることが確実に、しかも定住していることまでも確信できた。教会を探し回るだけなら、当てもなく世界中を探し回るよりも億倍は楽だ。

「教会ですか。それだけでも分ければ十分です。ありがとうございます」

「ホント、ありがとうございます！ さあ、土郎、たくさんお賽銭を入れようぜ！」

日本の神社では、神様へ祈りを捧げる時に賽銭箱へお金をお賽銭という名目で入れるのが慣習らしい。なら、神社でいいことがあったんだから、神様への感謝の気持ちとしてたくさんお賽銭を入れなきゃね！

折角だから土郎と一緒に巫女さんから作法を習いながらお賽銭を入れて、この神社でリヴィオの消息が掴めたことへの感謝と、僕らの帰還を祈願した。

その後は巫女さんや途中で顔を合わせた神主さんにお礼を言ってここに来る途中で見かけたシェリフ・オフィス 交番へと向かった。何でも日本の交番は気楽に道を尋ねられる所なんだそうだ。ノーマンズランドではこうはいかないね。

交番に行くと、まず保安官 じゃなくて、警察官のおっちゃんに日本では奇抜な恰好を気にされたけど、土郎はそれを察して「日本の友人と教会で会う約束をしているのですが、京都は初めてで、どこに教会があるのか分からないのです。教えてくれませんか？」と、まるで国外からの観光客のように、相手も答えやすい問い方をした。

すると、警察官のおっちゃんは頷くとすぐに地図を取り出して、近くの教会を3つ教えてくれた。これにお礼を言って、僕らはすぐに教会を目指した。

1つ目の教会は外れで、2つ目の教会も違ったけどリヴィオらし

き人がいる教会を覚えてくれた。それが、たった今着いたばかりのこの教会だ。

今までの教会と同じく、士郎が前に立ち、礼拝堂の扉をあける。流石にもう日も傾いて来たことだし、礼拝堂には誰もいないだろうと思っただけど、1人いた。その人はステンドグラスの前に据え付けられた十字架の前で祈りを捧げていた。

その服装は、どう見ても神に祈りを捧げにやって来た信徒じゃない。まず間違いなく、神父だ。

「誰かね。神の御家を騒がせるのは」

厳かな声で告げて、神父は十字架から僕達に振り返った。

壮年、というよりも老年の神父だ。目を引くのは特徴的な眉毛と顎、地球で会ったどの聖職者よりも鍛えられた肉体だ。こういう筋骨隆々で武闘派っぽい聖職者の人に会うのも久し振りだな。

僕がそんなことを考えている内に、士郎は姿勢を正して頭を下げた。

「突然の訪問、失礼致します。私は衛宮士郎と申します」

「僕はヴァッシュ・ザ・スタンピード、リヴィオに会いに来ました！」

けど、僕は全力で元気よく挨拶した。すると、士郎がすぐに頭を上げた。どうやら、士郎に咎められるぐらい無礼な挨拶だったみたいだ。けど、僕は一刻も早くリヴィオに会いたいんだから仕方が無い。

そんな風の中で開き直ると、神父さんが穏やかに手を動かして、それだけで士郎を制止した。

「ヴァッシュ……そうか、君がリヴィオくんの行方知れずの友人か良かった、生死すらも定かでは無いという話で、リヴィオくんは無論、私も愚息も心配していたのだよ」

「あはは、心配かけちゃってすいません」

神父さんの静かで厳かな口調に釣られて、僕も落ち着いた口調に戻った。

そして、神父さんの口からリヴィオの名前が出て、心の底から安堵した。

この遠い世界に来て、早8ヶ月。やっと、やっと会えるんだ。

僕の旅の相棒で 無二の盟友の弟分に。

「しかし、残念だな。リヴィオくんは昨日から、所用で出かけているのだ。1週間ほど帰れないと言っていたな」

「あー、入れ違いだったか……」

神父さんの言葉に、つつい溜息混じりに言ってしまった。もうすぐ会えると思っていたから、つい落胆が表に出ちゃったよ。

「連絡はとれませんか？」

「生憎と、彼は携帯電話を持っていないのだ」

リヴィオの連絡先の確認をすると、士郎は僕の肩を軽く叩いてきた。

「気を落とすなよ。リヴィオの無事が確認できただけでも良かったじゃないか」

「そうだな。ありがとう、士郎」

今まで何も分からなかったリヴィオの行方が、京都では一日足らずで目前に迫るまでになった。これだけでも喜ぶべきことだし、これ以上は高望みってところか。

それに、さっきの神父さんの言葉は「1週間後にはほぼ確実にここでリヴィオに会える」ってことだ。こう考えてみれば、なんだ、本当に落ち込むことなんてないじゃないか。

「突然の訪問にも拘らずの応対、感謝します。それでは、私たちはこれで」

「ありがとうございます。それじゃ」

士郎がそう言って踵を返したのに続いて、僕も神父さんに一言お礼を言ってから身を翻した。

折角有名な観光地に来たんだし、リヴィオを探すついでに観光旅行と洒落込んでみるのもありかな。リヴィオを探すのが最優先だけどね。

「待ちたまえ。リヴィオくんの友人をただで帰したとあつては、彼に申し訳が立たん。リヴィオくんが戻るまで、ここに滞在せんかね？」

すると、神父さんがそのような提案をして来た。そういえば、今日の宿の確保もまだだったな。

調度いい、ありがたいお誘いだけど……。

「お心遣い、ありがとうございます。しかし、ヴァツシュが一刻も早くリヴィオに会いたいようなので」

「もう今すぐにも京都中を走り回りたいぐらいですよ」

そういうわけだから、1週間近くはリヴィオが立ち寄らないこの場所に留まっていたくない。できれば、3日3晩は不眠不休で臨みたいぐらいだ。

すると、神父さんは苦笑を浮かべながらも頷いてくれた。

「そうか……なら、せめて宿の手配ぐらいはさせてくれんか？」

「……そうですね。確かに、まだ寢床の確保もしていませんでした」

「んじゃ、お言葉に甘えさせてもらいます」

この申し出には、土郎と共に素直に頷いた。法治国家の日本でも都市部での野宿はリスクがあるからね。

「ありがとうございます、神父さん」

神父さんの心遣いに感謝して、土郎と共に頭を下げた。

それから、ホテルの名前と場所、連絡先を聞いて、僕らは教会を後にした。

「君達の行く手に、神の御加護がありますように」

如何にも聖職者らしい儼かな言葉を貰って、僕らは再び京都の街へと出た。

使者の少年と学生旅行の御一行が入った宿を見張って3時間ほど経ったが、外から見た限り目立った異常はない。

本当は俺も施設内に入りたところだが、あくまで隠密行動だから、そういうわけにもいかない。あんなにデカイ建物なんだから、近くで護衛するのが一番なんだが……。

今日の行程が平穩無事そのものだったらこんな心配をしなくても良かったんだが、そんなことはなかった。

彼らが最初に訪れた観光地 清水寺では、彼らの行く先に落とし穴が掘られ、水には酒が混ぜられていた。一見すれば只の極めて悪質な悪戯だが、それらは深刻な情報を齎してくれた。

1つ、非公式且つ内密のはずの使者の存在が何者かに漏れている。
2つ、使者一行の旅の日程が完全に把握されている。

3つ、相手にその気があれば、その時点で終わっていた。落とし穴に爆弾を仕込むか、水に酒ではなく毒や麻薬の類を混入させていれば、それによって起こった騒ぎに乗じて人を浚うぐらい容易かったはずだ。

しかし、それをしなかったということは、余裕か、暗黙の内に使者の帰還を求めているのか、相手も太平楽なのか、それとも、もっと別の狙いがあるのか。

相手の真意も、相手が何者なのかも分からない。

だが、それでも。何があっても、あの子達は守り抜く。
最初は仕事だからってという理由だったけど、今は違う。

あの子達の、あんなに楽しそうで嬉しそうな笑顔を見ちまっただ。それを穢させるような、あの子達が笑っていられる平和な日常を壊すような真似は絶対にさせない。

それが、あの人を目指す俺の誓いだから。

けどなあ……。

「俺が動けるのは、事があの子らの手に負えないくらいになってから。それじゃあ必ず初手で出遅れちゃう」

初手で必ず出遅れる、というのは痛い。けど、雇い主である以前に恩人である詠春さんの意向を無碍にするわけにもいかない。

そうなると、使者の少年の能力と、相手の出方次第だ。

「それだけ能があるのか、それとも詠春さんも近右衛門氏もやっぱり太平洋楽なのかね」

言っちゃあ何だが、ノーマンズランド人と比べると地球民って全体的に危機意識が薄いつていうか、危険に慣れていない。お陰で地球連邦軍の治安部隊の皆さんは常に気が立ってたっけ。

特にこの日本は、表立ってはもう60年近くも大規模な戦闘が起きていない国らしいから、危機意識の薄さは俺から見ても異常なぐらいだ。魔法の関係でも大きな戦いから20年近く経ってるらしいし。そんなことを考えながら、ふと、宿の出入り口を見ると、気になる人影を見かけて反射的に目を凝らしていた。

「ん？ あれは……！？」

夕日に照らされた、赤い人影が、2つ。

1人は、赤い外套を纏った白髪に浅黒い肌の男性だ。外套を見た時は、もしか、と思っただけど、違う。別人だ。

もう1人は、赤いコートを纏い、黒髪を箒みたいに尖がらせた、空色の瞳に橙色のサングラスを掛けた、見間違えようのない、あの人。

視認してから数秒は頭が真っ白になったけど、すぐに喜びのあまり自然と笑いが込み上げてきた。

「え……あ、はは、は！ あれって、間違いなく……！」

仕事がどうのということは全部頭から抜け落ちて、居ても立ってもいられずに全力で駆け出した。

初動から最速に至る『ミカエルの眼』で鍛えられた瞬発力と、その速度を維持できる脚力に、これほど感謝したことは無い。

途中、自動車やバイクを撥ねてしまいそうになったがその度にかわして、最短距離を最速で駆け抜けた。

宿の前に着いた時には、既にあの人の姿は外には無かった。ならば、中か。

慌てて常人的な速度で自動扉を潜り、中に入ると同時にあの人の名を呼ぶ、というよりも叫んだ。

「ヴァッシュさん!!」

「へ?」

素っ頓狂で間抜けな、そして懐かしい声が返って来た。

そちらを見れば、そこには、探し続けた赤い男　ヴァッシュ・

ザ・スタンピードの姿があった。

「お久し振りです、ヴァッシュさん」

数度深呼吸して自分を落ち着けてから、ヴァッシュさんに歩み寄る。

ヴァッシュさんは、まだ驚いてるな、反応が鈍いや。

そんなことを思っていたら、途端にヴァッシュさんが泣き笑いのような表情になった。

「リ……リヴィオ!!」

俺の名を呼びながら、抱きついて来た。歓喜の抱擁を拒む理由なんて、今の俺にはない。

「無事だったんだな!　元気だったか!?　上手くやってけるか!?」

「はい。見ての通り無事に元気ですし、こっちで友達もできたぐらい上手くやっています!!」

思いがけないヴァッシュさんとの再会。こんな奇跡が起こるなんて、実際に起こっているのに信じられない。

ああ、神よ。神の御使いたるプラントよ。導きに感謝いたします。プラントの導きを神託と信じてこの土地に留まり続けたことは、間違いないじゃなかったんだ。

ヴァッシュさんと互いの無事を喜び、言葉を交わしながら、そん

なことを思う。

「……君が、リヴィオか」

一頻り言葉を交わして、少し落ち着いた所にヴァツシユさんとは別の人から声を掛けられた。

声を掛けて来たのは、ヴァツシユさんのような赤い外套を来た白髪の男だった。先程、ヴァツシユさんと一緒にいるのを見た人だ。

「ヴァツシユさん、この人は？」

「ああ、彼は衛宮士郎。僕の今の旅の道連れで……詳しくは後で話すけど、僕らと同じような境遇なんだ」

「同じって、まさか、貴方も?!」

尋ねてみたら思いもよらない答えが返って来て、つい大声で聞き返してしまった。

まさか、俺達と同じような境遇の人間がいるなんて、考えたことも無かった。

こんな、過去で、別の惑星で、その上微妙に違う別世界で、こんなぶっ飛んだ境遇の人なんて、俺の他にはヴァツシユさん以外にいないとばかり思っていた。

「いや。俺は、もうちよつと近くて遠い所からだ」

白髪の男性 エミヤ・シロウは俺の言葉にそのように頷いた。

含みのある言い方で真意は測りかねたが、少なくとも、俺とヴァツシユさんの事情を理解してくれていることは分かった。

それにしても、見た目だけじゃなく境遇までヴァツシユさんと似てるんだな。……性格とかも似ているのかな？

そんなことを考えている内に、ヴァツシユさんがシロウさんに俺を紹介してくれた。

「士郎、彼がりヴィオ。どうだい、聞かせた特徴そのままだろ？」

「ああ。完全に一致していて吃驚だ」

「え。そんなに特徴的ですかね、この恰好」

「少なくとも、日本では目立つ……というより、浮く恰好だな」

「そつすかね……」

言われて、自分の身形を検める。

貰った時よりもちよつと傷が増えた黒い帽子とマント。

上は白いシャツ、下は黒いズボン。靴も含めて半年前に買い替えただばかりの物だ。

腰には、待機状態で聖職者の印たる十字架の形になっているダブルフアング。

どこに斬新奇抜な点があるんだろう？ 分からないな。

「ともかく、これからよろしくな、リヴィオ」

あれこれと悩んでいると、シロウさんが声を掛けてきた。見ると、右手も差し出している。

この意味を理解して、俺は笑みを浮かべながらその手を取って、握手した。

「はい。こちらこそ、宜しくお願いします、シロウさん」

「呼び捨てでいいぞ。歳も近いみたいだしな」

すると、シロウさんはそんなことを言ってきた。

彼の背恰好を見てから、こちらからも念の為に聞き返した。

「ええっと……シロウさんはお幾つですか？」

「俺か？ 28歳だが」

やっぱり、見た目通りの年齢か。ヴァッシュさんも流石に、俺の身の上話まではしていなかったか。

「それじゃあ、俺より大分年上ですね。俺、こう見えてもこの国で言う所の未成年なもんで。やっぱり、このまま話させてもらいます」

正直、自分の正確な年齢についてははっきりしていない。誕生日も、親に教えてもらえなかったから。

けど、恐らく俺はシロウさんよりも10歳近く年下で間違いないはずだ。それなら、敬語で話すのが礼儀というものだろう。

「……未成年？」

シロウさんは、信じられないと言わんばかりの声と表情で、一言だけを漏らした。

……孤児院のみんなだって、この身体になってから初めて戻

った時、誰も俺だと気付かなかった。ウルフウッドさんを一目で見抜いた、メラニーおばさんさえも。

初対面の人が俺の実年齢と体格の誤差に仰天するのは、当然だよな。

「そ。リヴィオはちよつとした事情でね、成長するのがスゴく早いんだよ」

「そのことは、機会があったらお話しします」

取り敢えず、ここで話を一旦区切ってヴァツシュさん達が取った部屋に行くことにした。いつまでも受け付けの近くで騒いでいたら迷惑だろっし、目立っちゃまうからな。

……あ。ヤバイ、そうだった。俺は目立っちゃいけないんだっ！

……まあ、いいか。ヴァツシュさんと再会できたんだから。

部屋に入ると、ヴァツシュは荷物を放り出してリヴィオと共に靴も脱がずに部屋に上がり込もうとした。日本の作法でそれは駄目だとツツコミを入れて、今度はちゃんと靴を脱いでから、改めて、今度は落ち着いてリヴィオとの話を再開した。

「いやー、こんな所でリヴィオに会えるとは思わなかったよ！」

「俺ですよ。それにしたって、どうしてこんな所に？」

「君がお世話になってる教会の神父さんに会ってさ、今日の宿にここを紹介してもらったんだよ」

「そうですか、璃正さんが。……主よ、お導きに感謝します」

今日のこの運命的な再会を、リヴィオは『神のお導き』と考えたらしい。どうやら彼は見た目によらず、敬虔な信徒のようだ。教会で寝泊まりし、神父と友誼を結んだのも納得できる。

そこまで考えて、件の神父との会話の内容を思い出し、ある疑問

が浮かんだ。

「そういえば、神父は、君は所用で出かけたと言っていたが、何の用事なんだ？」

「あ、そうだった。実は俺、今、関西呪術協会って所の偉い人の用心棒をやっているんですよ」

問い質すと、リヴィオは意外な名前を出して来た。

いや。リヴィオもヴァッシュと同じような性分なら、そういう方面に首を突っ込んでるのが当然なのかな。

「関西呪術協会……確か、日本独自の神秘の担い手達の総本山だったな」

俺の世界にも似たような組織はあった。

探究の為ではなく、“魔”が絡む事象から『日本』を守ることを責務とし、そのために神秘を行使する 西洋の魔術師からすれば異端者の結社。言わば、魔術使いの組織。

メルディアナ魔法学校で調べた限りでは、関西呪術協会もそれに近いのだろう。尤も、『悠久の風』という世界的に有名な表向きの顔を持つ魔法使いと比べれば、一部の例外を除いて日本から外に出ようとしていない者ばかりで、閉塞的な組織といえる。

こうして考えてみると、俺の世界とはまるで逆の立ち位置になるのか。

「はい。まあ、俺は呪術だの魔法だのを肯定するのには抵抗があるんですけど」

すると、リヴィオが不服そうな顔でそんなことを零した。

用心棒になっっているからには、呪術や魔法を見る機会が多いはずだ。それでも受け入れられないとは、ちょっと不思議だ。ノーマンブランドにも、プラントという“神秘”という言葉でしか言い表せない力を持つ存在があるらしいというのに。

「どうしてだ？」

俺が率直に尋ねると、ヴァッシュが先んじて答えてくれた。

「そういえば、まだ言っただけじゃなかったね。リヴィオは聖職者なんだよ」

「これでも一応、牧師見習いですんで」

ヴァッシュの言葉に、リヴィオが正確な名前を言いながら頷いた。しかし、伝えられた言葉は、あまりにも予想外のものだった。

「……………牧師？」

確かに、キリスト教は原則的に魔術や魔法の存在を認めていない。それは俺の世界でも、この世界でも同様で、ヴァッシュの世界でもそうなんだろう。

それなら、牧師であるリヴィオが魔術や魔法を直に見てもその存在を認めるのに抵抗があるのは納得できる、が……………。

改めて、彼の身形を確認する。

ボロボロの黒い帽子とマントは置いておくとして。白いシャツと黒いズボンは恐らく市販の物で、神職者専用の物というわけではない。

鍛えられた筋骨隆々の肉体は、下手な格闘家どころか超一流の代行者と比較しても遜色ないだろう。

腰の左右両側に下げられている2つの十字架が唯一それらしい物……………と思いきや、ヴァッシュから聞いた話によると、それらは『ダブルファンゲ』という高性能な銃火器の待機状態だということ。そんなバカな、あの十字架がどうやって銃になるんだ。

そして極め付けに、リヴィオの顔の左目の近くに彫られている独特な刺青。刺青の為に態々眉毛まで剃つてあるあたり、本人が進んで彫ったものだろう。今気付いたが、あの左耳に被せてある物も気になる。

……………悪いが、見れば見るほど牧師らしくない。

神父らしくない神父を始めとして、聖職者らしくない聖職者を何人も知っていて、それらに慣れて感覚が麻痺している俺から見てもリヴィオは見れば見るほど牧師らしく見えない。用心棒の方がよっぽどしつくり来るぐらいだ。

「主よ、この世は差別と偏見に溢れています」

すると、リヴィオは俺の視線だけで何を考えているのか分かった

のか、十字を切りながら悲しそうに、嘆くように呟いた。

「あ、いや、すまない。武闘派の聖職者は何人も知っているんだが、君みたいな、身なりからしてそれらしくない人に会うのは初めてで……って、ああ、すまん」

なんとか言い繕おうとするが、なかなか上手い言葉が見つからない。

その様子が滑稽だったのか、それとも最初から冗談だったのか、リヴィオは、くすり、と笑った。

「いいですよ。俺だって、初対面の時には璃正さんにも綺礼にも驚かれましたから」

「キレイ？」

リヴィオの口から急に出た名前に、ヴァッシュは「綺麗」と混同したのか、オウム返しに聞き返した。

だが、俺は「キレイ」という名前を「綺麗」という言葉と混同することは無かった。それどころか、人名としての漢字変換も即座に出来たくらいだ。

「さっき言った、こっちでできた友達ですよ。今はあの教会を離れて関東の何処かの教会にいるんですけど」

璃正さんとは、恐らくあの神父のことだろう。そして、リヴィオと友人になったという『キレイ』。

「……まさか、な」

一瞬、最も因縁深い神父の名と姿が脳裏を過ぎったが、すぐに否定する。

あの精神破綻者が、他者の苦しみ嘆く様に快樂を見出した男が、リヴィオと友人関係になるとは思えない。

それに、もし本当に並行世界の同一人物だったとしても、その根本までも同じとは限らないはずだ。

「どうした？」

よっぽど神妙な顔をしていたのか、リヴィオと「キレイ」について話していたヴァッシュが不思議そうな表情で俺を見ている。

単なる杞憂を振り払って、積もる話や世間話もいいが、肝心の事を聞くことにした。

「いや、なんでもない。それで、用心棒の仕事でどうしてホテルに？ 雇い主が此処で会談でもしているのか？」

「いや、それがですね……。実は今、麻帆良っていう街から関東魔法協会の使者が京都に来ていて、ここに泊まっているんですが……」

「……」

そうしてリヴィオが話してくれたのは、日本の魔法関係の事情に関する重要なことだった。日本の平和をも左右しかねない一大事だ。幾つか前提や条件や経緯の点で、事の割に随分と能天気だなと思いき呆れることもあったが、それがこの世界での普通なのだと思います。

「よっしゃ。僕らも協力しようぜ、士郎」

「ああ。そんな話を聞いてしまったら、無視できないな」

自分のすぐ近くで、この国の平和と未来を左右する出来事が、何の因果か10歳かそこの少年の双肩に委ねられている。それを黙って見過ごしたとあっては、正義の味方の名折れってやつだ。

陰から見守るだけにせよ、直接的に手伝うにせよ、俺に出来ることがあるならやらなきゃならない。

「宜しく願います」

リヴィオは唐突な俺達の申し出を快諾してくれた。恐らく、リヴィオもこうなることを承知の上で話してくれたんだろう。

しかし、独断で機密情報を漏らしたり勝手に勝手に助っ人を参加させたりして大丈夫か、と訊ねた。俺達の勝手でリヴィオに迷惑がかかっては心苦しい。

すると、リヴィオは現場の判断ということゴリ押しする、と迷いなく答えた。

案外、豪快で力づくなんだな。

浴場での入浴を済ませた少女達が、それぞれ用意された浴衣に着替えて歩いていった。

殆どの者は同室の、或いは別室でも親しい少女と話を弾ませながら歩き、班ごとに割り当てられた部屋へと戻って行く。

その中で、とある班を注視している人影があった。

やがて、少女達が部屋の前に並ぶと、ひよい、と軽い足取りで近づき、声を掛けた。

「よお、お嬢ちゃん達。取り敢えず、俺の掌でも見てくれや」

そう言っつて声を掛けたのは、額に包帯を巻き、室内にも拘らずサングラスを掛けている怪しい風貌の男だった。普通ならば、少女達も不審者かと勘繰って、適当に流して部屋へと駆け込むことだろう。

だが、風呂上がりで湯だったせいだろうか、少女達はまるで何かの暗示にでもかかったように、疑うことも迷うことも無く、自分達に向けられた男の掌を見て、直後、その場に崩れ落ちた。

廊下には、他の少女達の姿もあるのだが、誰もこの異様な光景に見向きもせず　否、気付くこともできずに次々に部屋へと入ってしまった。

隣室に少女達が入るのと同じタイミングで、サングラスの男に1組の男女が歩み寄った。

そして、男女が足を止めた時には、この階層の廊下には、彼ら以外の人影は無くなっていった。

その様子を見て、白尽くめの男は満足そうにうなずいた。

「これで俺の出番はお仕舞いかよ。呆気ねえなあ」

「まあ、いいじゃない。それとも、もつと危機的な状況の方が良かったかい？」

サングラスの男が手袋を嵌めながら愚痴ると、白尽くめの男が茶化すように聞き返した。

「まさか。ほらよ、依頼主。御希望どおり、ガキを眠らせたぜ」

言つと、サングラスの男は昏倒した少女達の内、最も髪が長い少女の襟元を掴み、そのまま、依頼主と呼んだ眼鏡を掛けた妙齡の艶やかな出で立ちの女性に放り投げた。

「おおきに。流石、鮮やかな手際やなあ」

女性は手荒な渡され方に少々驚いたようだが苦も無く受け止め、この異常事態を引き起こした男へと礼を言った。

それを聞いた白尽くめの男は、サングラスの男に代わって恭しく頭を下げた。

「お褒めに与り光栄至極。さて、後始末は僕らに任せて、上手いこと逃げ遂せて下さいよ」

「そこらへんは抜かりなしや」

白尽くめの男の言葉に頷くと、女性は胸元から数枚の御札を取り出した。そして、何事かを唱えると、手にしたお札の一枚に書かれた文字が鈍く光を発し、直後には煙が生じ、女性の全身を包んだ。煙が晴れると、そこには 可愛らしい猿の着ぐるみに身を包んだ女性の姿があった。

白尽くめの男はほぼ無反応だが、サングラスの男は必死に笑いを堪えている。どうやら、顔だけが晒されている頭部のデザインがツボに入ってしまったらしい。

そして、眠り続ける少女を抱えて、女性はその格好のまま、またお札を取り出して何事かを呟き、一瞬でその場から姿を消した。

「……ソードだったら、今で気付くだろうね。相変わらず、この世界の術式は派手だねえ」

白尽くめの男は、何やら呆れたように呟いた。

「そうなのか？」

「うん。あつちの世界と比べると、だけど。この世界の基準で見れば、十分に忍べているとは思つよ。……さて、と」

サングラスの男の疑問に答えて言い直すと、白尽くめの男は足元を睥睨した。

そこには、深い眠りにについている少女達……と、1人だけ、目を開いている少女がいた。

それを見つけて、白尽くめの男は酷く卑しく、いやらしく、ニタリ、と笑った。

「運がいいねえ、お嬢さん。君、エミリオの左手のを見たんだ」

「お前からのリクエストどおりに、な。抵抗力なんざ皆無の相手だ、下手すりゃ脳の働きも麻痺してるんじゃないか？」

サングラスの男 エミリオと呼ばれた男は、白尽くめの男が少女へと投げかけた言葉に応じて、言葉を発した。

白尽くめの男はそれに満足げに頷くと、少女の顔を覗き込み、鼻先が触れ合う寸前の所で近付くのをやめて、少女の目を目深に被った帽子の奥から覗きながら、自己紹介と挨拶をした。

「はじめまして、お嬢さん。僕はアラン・ザ・プレイヤー。ちょっと、僕の相手をしておくれ」

白尽くめの男 アラン・ザ・プレイヤーは、その笑みを深くした。

第四話

「こつちだ、急げ！」

険しい表情で走る土郎を追って、僕とリヴィオも走っていた。

ついさつきまでは、穏やかで和やかな雰囲気でした。けど、急に土郎が何かに気付いたらしく、床に手を付いて解析の魔術をした後、血相を変えて部屋を飛び出した。

リヴィオは今一つ、何が起こっているか分かって無いみたいだ。

けれど、土郎の言動だけで凡そは察しているだろう。

恐らく、僕やリヴィオでは気付かなかった異常　魔法や魔術による何かが起きたんだ。

階段を何回か飛び降りたところで、土郎は廊下へと走り出した。

「この階は、例の修学旅行で貸し切ってる階です」

「つまり、ここで何かがあったってことは、100%ビンゴってことか」

つい、舌打ちをしたくなる。

今できるのは、手遅れになっていないことを祈ることぐらいだ。

階段から廊下へと出て、すぐに立ち止まっている土郎を見つけて傍へと駆け寄る。

最初、土郎は何もない所に立っているように見えた……けど、よく見るとそこが不自然な空間になっていることが分かった。

更に目を凝らして見れば、土郎の目の前に扉があることに、今更気付けた。

普通ではありえない目の錯覚。けど、こつという普通ではないことを起こせるのが、魔法だ。

「ここだ。……扉そのものの概念を弄って、内と外を隔てる物としての側面を強化しているか。しかも、精神干渉系の術でこの辺りを認識からずらしてもいるようだな」

「どついついことですか？」

土郎の独り言じみた解説にリヴィオが問い掛けると、土郎は扉の四方に不自然に貼られていた紙きれを1つ剥がした。

すると、扉がさつきよりもはつきりと、普通に認識できるようになった。

リヴィオは今ので扉の存在に気付けたみたいで、絶句している。

やっぱり、こういうのって何度見ても慣れないよな。それとも、リヴィオはこういう搦め手を見るのは初めてなのかな。

「強制的に死角にされていた、ってことだ」

つまり、自分の認識に強制的に空白を作られていた、ってことか……まるで、サイクロプスの催眠術だな。

僕が昔の事をちよつと思いついてみると、土郎は剥がした紙切れを握り潰し、残った3枚も引き剥がした。そして、良く分からないけど魔法が掛けられているらしい扉に手を当てた。

「万能鍵か？」

「いや。それだと、普通にかかっている錠前を解けない。だから、無理矢理壊す」

言つと、土郎の体から扉に“力” “魔力”が流れ込んでいくのを感じた。

土郎曰く、魔力とは毒らしい。その毒も術理を以って制御できれば薬として様々に活用できる。けれど、何の統制も無く乱暴に魔力を流し込まれれば、それは猛毒として体を蝕む。……ってことらしい。よく分かんないけど。

すると、バキッ、という乾いた破裂音と共に、扉の各所に亀裂が走った。そうなってしまえばそれは単なる板切れ、扉としての機能を維持できるはずもない。

「すっげ……まるでマジックだ」

「種も仕掛けも無いがな」

リヴィオが漏らした簡単な言葉に軽く返すと、土郎は板切れと化した扉を蹴破った。そのまますぐに突入はしないでその場で目を凝らし、中の様子を窺う。

暫くして、士郎はこつちに振り返って頷いた。それを合図に、僕らは部屋の中へと侵入した。

部屋の中に入ると、異様な空気に思わず身体が緊張した。同じ建物の中なのに、部屋の外と中でまるで空気が違う。空気が濁っているというか、流れが滞ってこの中で渦を巻いているというか……どうにも、表現し辛い感覚だ。

リヴィオも僕と同様らしく、部屋に入った直後から臨戦態勢になっている。

奥へと進むと、布団が敷かれていた。そこに3人の少女が寝転がって、更に奥のテラスのような場所で1人の男が寛ぐように座っていた。

その男の姿を見て、僕は、驚愕のあまり絶句してしまった。

「おやおや、これは驚いた。まさか、こんなにも早く気付かれるなんてねえ……って、あれ？」

男は僕らの方を振り向くと、最初は余裕たつぷりに恭しく話していたのに、急に素っ頓狂な声を出した。

「どうやら、驚いているのは彼も同じみたいだ。」

僕だって、こんな状況で彼とまた会えると思っていなかったし、こんな風に再会したくなかった。

「……アラン？」

目の前にいる白尽くめの男は、僕がこの世界で最初に親しくなった人で、右も左も分からなかった僕達に道を示してくれた恩人とも言える男。アラン・ザ・プレイヤーに相違なかった。

「プレイヤー、お前……!?!」

そこにいるのが何者でも、日本の平和を脅かすような輩ならば問

答無用で斬り伏せよう、と勢い込んで乗り込んで来たというのに、予想外の人間との再会に静止してしまう。

想像すらしていなかった事態に、場は不自然なほどに静かになっていた。

俺とヴァッシュは、アラン・ザ・プレイヤーの名を呼んだきり言葉を失い、流暢に話し始めたプレイヤーも驚きのあまり口を開けたまま動きを止め、思考すら停止しているようだった。

誰も動かず、言葉を発さず、結界で空気が蟠っていることもあり、部屋の中は不気味なまでに静かだった。

しかし、この静けさも長続きしなかった。

唯一プレイヤーと面識のないリヴィオが動いた。

「すいません、先に行きます！」

言うや否や、リヴィオは俺達の返事を待たずに、プレイヤーの真横を駆け抜け、ガラス窓をぶち破って外に出た。

ただそれだけのことだったのだが、その速度が尋常のものではなかった。

幾ら意表を突かれたとはいえ、声を聞いた後にリヴィオの姿を捉えることができたのが、窓を突き破る瞬間だけだったのだ。

「びっ……吃驚したああ……。ぶつかってたら、僕、確実に即死だよ」

突き破られた窓を見ながら、プレイヤーは珍しく取り乱していた。あんな風に、自分の真横を人間が超高速で通り過ぎたら、誰でも驚くか。

「リヴィオ……どうしたんだ、急に？」

一方で、リヴィオと付き合いの長いヴァッシュは彼の身体能力ではなく、行動に驚いていた。

言われてみればそうだ。リヴィオはどうして急に窓を突き破って外に行った？

破られた窓から外を注視すると、そこには、あからさまに怪しい人影があった。

「ヴァツシユ、外を見る」

「あれは……着ぐるみ？ 女の子を抱えてるな」

言つと、ヴァツシユもすぐに少女を抱えている猿の着ぐるみを見つけた。リヴィオはあれを見つけて、外に飛び出したのだろう。

抱えられている少女は、恐らく、麻帆良学園の女生徒。

そして、この状況と照らし合わせて考えれば、十中八九。

「とんでもない視力だねえ。その通り。僕らは只今、人攫いの真っ最中ってわけさ」

思考の中で言語化するのとはほぼ同時に、プレイヤーは自らの立場を明かした。

「アラン、どうしてこんなことを」

プレイヤー自身から明かされた『誘拐犯』という事実、ヴァツシユは複雑な心境がそのまま表れている顔と声で問うた。その心境は、恐らく俺と同じだろう。

仮にも、この世界に投げ出されて右も左も分からなかった俺達を助けてくれた1人で、恩人と言っても過言ではない男が、目の前で俺達と敵対するような悪行を行っているのだから。

「お仕事だからさ。それに言つたら、僕は小悪党だつて」

しかし、プレイヤーは以前と変わらない調子で、あっさりと答えた。

思う所は色々とあるが、答えを出すには今の問答だけで十分だ。

目の前のこの男は、今、敵ということだ。

ならば、今までやこれからなど関係ない。

此処で、この手で、討つ。

「そんなことはどうでもいい。事の次第を詳しく話してもらつぞ」
言いながら、一歩踏み出す。この部屋の中は簡易的な“陣地”のようになっているようだが、罠の類は無い。それに、この間合いならば、一般人同然の身体能力のあの男を組み伏せるのは容易い。

「やだ。そんなことするなら、この子の命、保証しないよ？」

言いながら、プレイヤーは自分の足元を指した。

そこには、もう1人、少女が横たわっていた。そして見ると同時に、プレイヤーの白い革靴の踵が、コツコツ、と少女の頭を叩いた。「貴様……!!」

「落ち着け、士郎」

声を荒げると、ヴァッシュに肩を掴まれ制止された。

すぐさま振り返って言い返そうとしたが、ヴァッシュの表情を見て、吐き出そうとしていた言葉を呑みこんだ。

ヴァッシュの表情には、深い悲しみだけが見えた。

こんな時でさえも、怒りを寸毫も見せない。見えるのは、恩人が俺達と敵対している現状に対する悲しみと、その事実には立ち向かうという決意。

こんな顔をされては、引き下がるしかない。

頷いて一歩下がりがり、ヴァッシュの前に出るように促す。

俺は頭を冷やししながら、魔術的な罠が本当に無いのか注意するでしょう。

「アラン、君の目的はなんだ？」

「今回の件で、僕らに目的は無いよ。ただ、依頼された仕事をこなすだけさ。クライアントの目的は、無論のこと黙秘させてもらうよ」
今回の件で、というのは微妙に引つかかる言い方だ。まるで、現在進行形の目的がこの事とは別にあるようにも聞こえる。無論、これは相手が腹に一物ある油断ならぬ存在、という認識による邪推のようなものだ。普通に聞けば、当たり障りの無いごく普通の言い回しだろう。

他に気になることは、この状況でも俺の知る平素の様子と全く違いが無い、プレイヤーの異常さだ。

「……それじゃ、次の質問だ。僕らに勝てると思うかい？」

言いながら、ヴァッシュは右手でガンホルダーに収めてある銃のグリップに触れた。

今でも意外なものだが、ヴァッシュは必要に迫られれば人を傷つけることに対して驚くほど躊躇いが無い。

無論、無意味に人を傷つけたり、殺すことや命に関わる重傷を負わせたりしてしまうことは忌避するが、それ以外、足や手を撃つ程度ならば平然とやれる。

これには、ヴァッシュが育った故郷であるノーマンズランドの環境が大きく影響しているらしい。

なんでも、ノーマンズランドでは「生きてさえいれば何とかなる」というレベルで医療技術が発達していて、高位のサイボーグになると頭だけの状態でも生存が可能らしい。加えて、足や手を撃ち抜いた程度では怯まない手合いもかなり多かったようだ。

……そりゃ、ヴァッシュでも銃で人を傷つけることに抵抗がなくなるか。最初にヴァッシュが躊躇ない無く銃で人を撃つた時は驚いたもんだが。

それでも、人を決して殺さないという、ヴァッシュの『不殺の信念』は本物だ。なにしろ、元々銃が不得手だったというヴァッシュが、神業を超えた領域にまで腕を磨いたのも「銃で人を殺さないようにする為」だったというのだから。

言い換えれば、ヴァッシュのような平和主義者でさえも銃を持たざるを得ないのがノーマンズランドだということだ。が、今重要なのはそこではない。

ヴァッシュが銃に手を触れたのは、決して脅してはないということ。そして、この場での俺の出番はもう無くなったのも同然だということだ。

問題は、この警告がプレイヤーに通用するかどうか、ということだ。プレイヤーもヴァッシュの気性を知っていればこそ、意外なほど簡単にヴァッシュが銃で人を撃てるとは思っていないだろう。

「まさか。けど、小悪党の往生際ってのはみっともないものなのさ。自分が死んでしまうのなら、腹いせに誰かを道連れにするぐらいはやるよ?」

「なら、この場での睨み合いが、お前の仕事か?」

ヴァッシュのお陰で頭も冷えた。お陰で、こうしてプレイヤーの

言葉に冷静に返すこともできる。

プレイヤーもそこはこの道の間人、ヴァッシュが実力者だということは察しているようだが、認識が不十分だ。こんな、5mにも満たない距離でヴァッシュの抜き撃ちに先んじて行動することなど、人間どころか死徒にも不可能だ。

俺の先程までとは打って変わった態度が気になったのか、プレイヤーは一瞬、俺に視線を向けて、考え込むような仕種を取った。

「うん、そんなところ。けど、君達のような極上のサプライズゲストが来るとは思ってたからね、どうしたものか。……」
ところで、衛宮士郎

「なんだ」

「外、ちゃんと見た方がいいよ」

「なに？」

あまりにも唐突な言葉に、思わず聞き返してしまった。

この状況、このタイミングでのこの発言。十中八九、外へ気を向けさせることによって隙を作ろうという虚言だろう。

だが、物は試しだと敢えてそれに従い、ヴァッシュにプレイヤーから気を逸らさないように伝えてから、外を見た。

宿から幾らか離れた橋の向こう側に、3人の人影があった。

1人はリヴィオ、もう1人は猿の着ぐるみの誘拐実行犯。

そして、最後の1人は、何時の間にかその場に加わっていた3人目。

いかにも日本人らしい体型と顔立ちに、現代では逆に日本では浮いてしまう服装である和服に日本刀を帯びた、黒髪に赤い異形の瞳が映える剣士。

その姿を見た瞬間、士郎はその男の事を思い出した。

紛争地域で共に活動していた仲間裏切られながらも、別の仲間に助けられ難を逃れた俺は、当ても無く大陸をさ迷い歩いていた。

仲間に裏切られたことに対して、怒りも、恨みも、憎しみも、悲しみも無い。ただ、こうなったか、という感想があるのみだ。

裏切られるのに慣れた、というわけではない。俺は最初から、他人に傷付けられることに対する感慨が一切無かったのだ。

ただ、俺という存在が『正義の味方』として機能していれば、それだけで良かったのだ。

そうして、再び1人での放浪を始めて1か月ほど経ったある日。

小さな村を狙った夜盗を叩きのめしてから数日後。中国の山中で身体を休めていた俺の前に、あの男は唐突に現れた。

「俺は、魔術協会“時計塔”に属する封印指定執行者。名を」

思い出すと同時に、弓を投影。

間髪を入れずに矢を番え、放つ。

中てることなど考えず、ただ牽制に間に合えばいいと速さだけを求めた射は、無様なものだっただろう。しかし、矢を射ることは投影を含めて1秒未満で行えた。

急造の弓は、射ると同時に砕けた。恐らくは矢も地面に突き刺さることすらなく砕け散ってしまうだろうが、それでも牽制ぐらいには なった。

「士郎、どうしたんだよ急に!？」

俺の唐突な行動に、プレイヤーだけでなくヴァッシュも驚いていた。

それは当然だろう。仮にヴァッシュが外を見ていたとしても、あの男の危険度を理解できないのだから、俺が矢を射た理由も理解できるはずがない。

「ヴァッシュ、ここは任せる。魔術に疎いリヴィオじゃ、あの男の相手は危険だ」

リヴィオの実力はヴァッシュから伝え聞いただけで、自分自身で確かめられていない。しかし、あの男の実力は知っている。

あの男は剣士としてだけでなく、戦闘系の魔術師としても一流の実力者。魔術知識に疎いリヴィオでは、地力で上回っても足元を掬われてしまう可能性が大きい。

「分かった。任せたよ、士郎」

思考を殆ど挟まず、ヴァッシュはすぐに了承してくれた。

この場をヴァッシュに任せるとにも不安は無い。ヴァッシュに任せておけば、最悪の事態だけは防いでくれると信じられる。

プレイヤーに一瞥をくれてから、肉体に強化の魔術を施し、リヴィオが突き破った窓から外に飛び出した。

外がどういう状況か把握できていないけど、士郎にまかせよう。彼に任せておけば、きっと、そう悪いことにはならないから。

リヴィオの後を追って飛び出して行った士郎を見送ると、自然とこの場に残るのは2人だけ。

僕と、アランだ。

出来ることなら、穏便に済ませたい。この星に来て、右も左も分からなかった僕らに道を示してくれた恩人を、傷付けるようなことはしたくない。

けれど、それでも。アランが足元の女の子を殺してでも、何かしようにと言っのなら。

右手を誰から見ても分かるぐらい緊張させつつ、左腕の義手のギミックをいつでも使えるように準備する。

「さて、と。ところでヴァッシュ、一つ提案なんだけど？」

「何だい？ 穏やかで平和的な提案だと、僕も嬉しいんだけど」

アランの言葉に、冗談ではなく本気でそう返す。

それでも、やっぱり無理なんだろうな……と思ったら、アランは頷いてくれた。

「まさにその通りだよ。大人しく引き上げるから、この場は見逃し

てくれないかい？ 勿論、攫った子も丁重にお返しするよ」

「……………本当に？」

願っても無い提案に喜ぶよりも先に、確認を取る。ここで下手を打てば、あの女の子だけでなく、この部屋にいる女の子たち全員が危険になる。

アランを信じたいけど、安易に隙を見せるわけにはいかない。

「ああ。僕は、冗談は言うけど、嘘は言わない主義なんだ」

言つと、アランは立ち上って、人質に取っていた少女から離れて僕に歩み寄って来た。そして、手が届くぐらいの距離で立ち止まると、僅かに帽子をずらして、僕と目を合わせた。

暫く、無言で互いの目を、じっ、と見る。

きつと、アランの言葉に嘘は無い。けど、アランはこの場から退却した後も僕らと敵対するだろう。少なくとも、彼らの仕事が終わるまでは。

だから、この場で捕らえるか叩きのめすかするのが上策だと、士郎だったらそう言うだろう。

けど……………少しでも戦いを避けられるのなら、僕はそうしたい。

やっぱり、戦いとか、人を傷つけるのは、嫌いだ。

「分かった、信じるよ。それに、そういう約束だったしね」

「あの時の僕の言葉、受け取ってくれていたんだね。嬉しいなあ」

僕が頷くと、そう言いながらアランは帽子を僅かに上げていた右手を離して、そのまま笑みを浮かべながら差し伸べて来た。

少し間を置いてから、僕はアランと手を握り合った。

その後は、アランに破られたドアや窓を魔法で直してもらって、それから僕らも窓から外に飛び降りた。

砕かれたガラスが、まるで映像を逆再生するように元に戻っていく様子は何とも神秘的なものだった。これが初歩の初歩だって言うんだから、魔法や魔術はつくづく不思議なものだよ。

ホテル嵐山に近い橋の前に、1人の男が立っていた。

彼の出で立ち是非常に日本的でありながら、今の時代では却って日本では見られなくなったものだ。

和服に身を包み、草鞋を履き、腰の左には大小の刀を帯びているその姿は、鬚こそ結っていないが侍そのものであった。

橋の手前に立ちながら、彼は人を待つていた。

恋人とか友人とか、そういう親しい者との待ち合わせではなく、仕事の関係だ。

手筈によれば、もうじき関西呪術協会の長の息女を攫った依頼人本人がやって来ることになっている。そうなれば護衛役の彼の仕事もいよいよ本番となるのだが、彼の表情は見るからに気だるげで、大儀そうである。

事実、今回の仕事、彼はやる気が無かった。

まず、依頼人の手緩いやり方が気に入らない。狙いを親書に見せかけた搦め手は良いが、その為の手段に逐一依頼人が出向いて、態々子供じみたものになっている。

相手が子供だから必要以上に手を抜いているのであろうが、手加減や容赦というものを嫌う彼には、甚だ厭わしいことであった。

そして、なにより重大なのが、ここが日本だということだ。

彼らのチームのリーダーであり交渉にも赴く男が不在だった為に、今回の仕事の交渉の為に彼は日本に幾度も赴くことになり、ここ最近滞在している。

彼には、日本に来たくない特別な理由があった。だからこそ、最初からあまり乗り気ではないのだ。

それでも、仕事で銭を稼がなければ生活できない。難しいものだ。

溜息を吐くと、調度、彼の待ち人が現れた。

依頼人が猿の着ぐるみに身を包んでいることは、気にしないことにしよう。実際、あれで身体能力を底上げしているらしいのだから咎める理由も無い。

間もなく依頼人が橋を渡る、というタイミングで、彼は件のホテルへと“気”を向けた。

それは、単なる意気ではなく、近い言葉で例えれば、それは殺気であつた。

殺気を向けたのは一瞬。加えて、この距離で、建物に向けた漠然としたもの。普通ならば気付く者などいないだろう。しかし、今の気当てに気付く者がいるかもしれない。

例えば、あのホテルに超一流の戦闘者がいて、気を張り詰めていたら。加えてそれが、彼らと敵対する勢力だったら。

そうなつたら、まず間違いなく戦いになるだろう。仕事の上では避けるべきことだが、彼はそれこそを望んでいた。

彼にとって、戦うことはとても好ましいことなのだ。

依頼人が川に掛けられた橋を渡り、間もなく彼の横に並ぼうかという時に、彼は依頼人ではなくその奥に視線を送り、目を見張つた。しかし驚くよりも先に、仕事を行う。

「依頼人、下がれ」

「わぶっ!？」

下がれとは言ったものの、下がってはいは間に合わないと判断して足を払って転ばした。それによって、狙い通りに依頼人は難を逃れた。

「ソードはん、いきなりなにしますのん!? 危うくお嬢様を落とすところだつたやないか!」

「その口調、呪術協会の離反者か」

彼の仕事上での通称を呼びながら、依頼人は今の行動を咎めた。

しかし、その言葉に答えたのはソードではなく、全くの別人の声だつた。

「……へ？」

素つ頓狂な声を発して、依頼人はソードと共に声が発せられた方向を見る。

そこには、人の域を超えた速度で走って来た依頼人を追いこした男が立っていた。

その姿を見て、ソードは歓喜した。

このまま大儀な仕事を続けるのならば、せめてその中に彩りを求めた。血風吹き荒ぶ闘争の色を。

先程の殺気も、自分と同類か、或いは同等以上の実力者がいるのならば気付いてくれと、期待と切望を織り交ぜて発したものだ。それに応じてくれた者がいただけでも僥倖だというのに、その相手が、予てから対戦を望んでいた豪傑なのだ。

これを言はずして、如何にするか。

転ばした依頼人の事など忘却し、ソードは豪傑と対峙した。

「久しいな、ダブルファング。去年の暮に会って以来か」

「あなたは……ソード、だったか。やっぱり、こういう手合いだったか」

現れた豪傑の名はダブルファング。本名はリヴィオということ。ソードは心得ていたが、互いに名乗っていないのなら呼ばないのが礼儀だと、彼のことは彼自身が自称したダブルファングの名で呼んだ。

ソードとダブルファングが出会ったのは、去年の暮。この仕事の交渉と打ち合わせの為に来日し、上京したソードは後悔しつつも、初めての上洛なのだからと京都の名所や史跡を巡り歩いていた。

その中で、とある寺院を参拝した直後に、ソードはダブルファングと門前で鉢合わせたのだ。

その時の衝撃を、ソードは忘れていない。

この、正義と善ばかりが蔓延る、綺麗過ぎて歪んで見える世界で、自分達と似た臭いの者と偶然に出会ったのだから。

だが、後にダブルファングの素性と来歴を僅かながらも知り、ソ

ードはあの出会いをある種の天啓と考えた。

「俺からの誘いに応じてくれたこと、感謝する」

言いながら、ソードは刀を鞘から抜く。それに応じて、ダブルファングは腰の左右に吊り下げた十字架を手に取ると、何かの仕掛けを発動させたか、十字架を異形の銃器へと変形させた。

それを見て、ソードはある疑念を抱いたが、ダブルファングからは神秘に類する力を寸毫も感じられないことから、それは杞憂であろうと判じた。

「誘い、ね……。念の為聞くが、それは殺し合いの誘いか？」

「否。戦いの誘いよ。まあ、その戦いの中身は自然、殺し合いになるかも知れぬが」

互いに構え、相手の動きを見定めようかという時に、突如、ダブルファングが発砲した。

速い。発砲までは予備動作を含めて百分の一秒にも満ちていなかっただろう。常人は元より、生半可な吸血鬼ではいつ撃ったのかさえ分からない程の高速の抜き撃ち。

「なんでもいいが、その子を返してもらおうか。カづくでもな」

ダブルファングの視線の先に目を遣る。そこには、猿の着ぐるみの頭の部分を撃ち抜かれて吹き飛ばされ、腰を抜かした依頼人がいた。力が抜けた手からは、1枚の呪符がはらはらと落ちた。

この時、ソードは漸く今が仕事中であり、依頼人の護衛という自分の役目を思い出した。だが、すぐに忘れた。

今は仕事などよりも、目の前の男と戦い、己の“強さ/弱さ”を量ることしか頭に無い。

改めて刀を構えた直後、少し離れた地面に何かが高速で飛来し、そのまま砕け散った。

「む」

「なんだ？」

互いに臨戦態勢を崩さないまま、ソードとダブルファングは飛来した“何か”が砕ける様を見た。

ダブルファンングに気付いた様子は見られないが、ソードは幸いに飛来した物体の形状を視認することができた。

飛来した物体と、その方向。加えて、常軌を逸した飛距離と速度。これらからの要素から導き出せる男を、ソードは一人だけ知っていた。

「今の矢は……成る程、“弓兵”か」

「な、なんなんや急に！ 次から次に！ どうなってるのや!？」

ソードが呟くと同時に、依頼人が辛抱堪らぬとばかりに叫び出した。順風満帆、万事快調に事が進んでいたにも拘らず、急転直下のこの状況だ。感情が表に出易い彼女が喚きたくなるのも当然だろう。

「退くぞ」

依頼人が平静を失ったことで、ソードは却って冷静になることができた。

1対1を二連戦ならともかく、ダブルファンングと弓兵の2人を同時に相手にしては、ソードは自分の勝ち目は零に等しいと考えた。

撤退戦も、身一つならばいざ知らず少女1人を抱えて依頼人を守りながらでは困難を極める。

弓兵がその気性故に狙撃に徹さずこちらに向かっている可能性も高いが、それでも圧倒的に分が悪い。ダブルファンングが予想以上に弱ければ何とかなるだろうが、先程の速度と今も感じるプレッシャーが、それはありえないことを理解させてくれる。

「な、なんでや!？ あんた、凄腕の剣士なんやる!？ だったら、あいつらをさっさと片付けて……」

「事情は後で話す」

依頼人の文句を遮ると同時に、ソードは刀を鞘に納めながら依頼人の元へと一気に間合いを詰めた。

この行動にダブルファンングが銃口を向けるのと同時に、依頼人から攫った少女を奪い取り、ダブルファンングへと突き付ける。

すると、途端にダブルファンングの動きが鈍った。奪還しようとしていた相手に凶らずも銃を向けてしまったが故の、焦燥と戸惑いか。

この好機を逃さず、ソードは少女の懐に紙片を潜ませて投げ飛ばす。同時に懐から2つの玉を取り出し、地面に叩きつけた。

「わっ!?!」

一つは炸裂閃光弾。もう一つは特製の催涙煙幕弾。

一つ目で視覚と聴覚、二つ目で視覚と嗅覚を鈍らせ、同時に外からの視界を遮る。そして、投げた少女はダブルフアングの奪還目標あのまま橋の欄干に激突すれば最低でも骨折は必至、高確率で助けに行くだろう。そうすれば、いずれかの効果に引かかる可能性は高くなる。

その効力が正しく発揮されたのも確認せず、ソードは依頼人を抱えて全速力での逃走に移った。最後に聞こえた素っ頓狂な声から察するに、ある程度の効果はあったと考えられるだろう。

「待て! ケン・アーサー!」

背後、遠くから聞き覚えのある声で自分の名を呼ばれたが、振り向かずにはソードは撤退を続けた。

さて、この顛末をどう依頼人達に説明すれば納得してもらえるものか。

担いでいても伝わって来る憤りの感情に、ソードは小さく溜息を吐いた。

突然、少女が投げ飛ばされたのには焦った。まさか、逃げる為に捕まえた人質を投げる誘拐犯がいるとは思わなかった。

咄嗟に受け止められたのは良かったけど、お陰で目晦ましと目潰しをもろに食らっちゃった。あっちが本当に逃げの一手で助かった。ミカエルの眼の肉体は、この程度 of 感覚の異常は一瞬で治る。けど、相手はその一瞬が命取りになるような手合い。魔人だった。

素直に、退いてくれてよかったと思う。

「……………退散したか。鮮やかな引き際だ」

「目晦ましの閃光弾に、催涙弾とは……………用意周到ですね」
少女が投げられた直後にこの場に到着したシロウさんの言葉に頷く。

本当に、直接対峙していたからこそ、あの引き際の鮮やかさには驚いた。直前まではあんなにやる気満々だったのに……………いや、違う。退く時も、あの男の独特の殺気はちっとも収まっていなかった。

お陰で、あの男が逃げを打つのに気付くのが遅れちまった。気付けていれば、こんな無様は晒さなかったものを。

……………もしかして、あいつ、前に会った時みたいに常にあの殺気を発しているのか？ 物騒だな。

「けど、攫われた子が無事だったんだ。良かったよ」

「ええ、本当に」

シロウさんの言葉に頷いて、抱き抱えている少女に目を落とす。

あの男 ソードに投げられた時はヒヤリとしたけど、何とか無事に受け止めることができた。

少女は眠っている、というよりも気絶しているみたいだ。あんな乱暴に扱われたら、普通は起きるだろうし。

そつえば、この子の顔、どこかで見たことがあるような……………気のせいかな。

「ところで、ケン・アーサーって、あのサムライですか？」

少女を受け止めて、閃光弾と催涙弾をもろに食らった直後に聞こえた、シロウさんの声。あれは明らかに、誰かの名前を呼んでいた。そうになると、あの場で『ケン・アーサー』なんて名前でありそうなのは、あのサムライしか思い浮かばなかった。

「ああ……………俺が、こつちに来る直前に戦っていたはずの男だ」

「本当ですか？」

シロウさんからの予想外の言葉に、すぐに聞き返す。

身のこなしだけでも分かるし、今日までヴァッシュさんと一緒に

旅して無茶して無事なことからも、シロウさんの強さは分かる。そして、ヴァツシュさんと似た心の持ち主だということも。

そんな人と戦っていた男となると、明らかに穏やかではない。

加えて、ソード ケン・アーサーが別世界の人間であるということにも多少は驚いたが、これにはすぐ納得できた。

あの男の気配と血の臭いは、この綺麗で美しい世界にはあまりにも異質で、どこか懐かしくさえあったから。

「多分、な。部分的に思い出したただけだが……あの男も、この世界に来ていたのか」

どうやらケン・アーサーもシロウさんと同じ時と場所からこの世界に来たらしい。けど、シロウさんはその時のことをはっきりと覚えていないみたいだ。

しかし、ヴァツシュさん以外に同じような境遇の人と立て続けに会うなんて、今日はなんて日だ。ケン・アーサーとの対峙まで含めて、主のお導きなのだろうか。

「おーい、士郎！ リヴィオー！」

すると、ヴァツシュさんがこっちに向かって走って来た。どうやらあっちの方も無事に片付いたみたいだ。

「ヴァツシュ。プレイヤーはどうした」

「この場は引き揚げるから見逃してくれ、ってさ」

シロウさんが問い掛けると、ヴァツシュさんはいつもの調子でそう答えた。

すると、急にシロウさんの表情が険しくなった。けど、すぐに溜息を吐いてなんだか呆れたような納得したような顔になった。

「……そうか。ちゃんと見届けたか？」

「ああ。凄い逃げ足の速さだったよ。こっちは？」

「無事に、助けることができました。犯人は逃がしてしまいましたけど」

そう言って、抱き抱えている少女を軽く持ち上げる。あの2人を取り逃がしてしまったのは心残りだけど、この子を助けられたんだ

から、今はそれでいい。

「そうか、良かったよ」

心から安心したように、ヴァツシユさんはそう言ってくれた。突然の事態だったけど、何とか無事に収められて何よりだ。

けど、これはこれで問題もあるんだよな。

「さて、戻るか。……あの子にも会って、話をしないとね」

「ええ。これは流石に、手伝わないとまずいですね」

シロウさんの言葉に、俺は迷わず頷いた。

今になっても動く気配が無いとなると、使者の少年に今回の件を任せっぱなしというわけにはいかない。

……それにしても、本当にどこかで見たとような顔だな、この子。

誰だったかな。

そんなことを考えつつ、俺達は宿に戻ることにした。

額に包帯を巻き、室内にも拘らずサングラスを掛けている、如何にも怪しい風貌の男がホテル嵐山の中を歩いていた。

この男はE2。プレイヤー、ソードと共に『仕事』でこの場にいる男だ。

しかし、仕事の内容に沿うのであれば、彼のここでの役目は既に終わっており、留まる理由も無く、本来ならば早々に立ち去っていきべきなのだ。それにも拘らず、E2は悠々とホテル内を歩き回り、何かを探していた。

やがて、ロビーでE2は目当ての人物を見つけた。

「よっ、その少年」

E2が気さくに声を掛けたのは、自分の背丈よりも大きな杖を背負っている赤毛の少年　ネギ・スプリングフィールドだった。

「え……つと、僕、ですか？」

「そうだよ、そうそう。あと、ついでにそっちの2人と、1匹もな」
そう言っつて、E2はこの場に居合わせた2人の少女と、オコジヨ妖精も指した。すると、赤毛の少女は無反応だったが、黒髪の少女は途端に表情を険しくした。

普通ならば、動物にまで声を掛けたりしない。なのに、態々オコジヨ妖精まで含めて呼んだことの意味を敏感に悟ったらしい。

「何者だ」

「怖い顔してるつもりか？　全然怖くないぜえ？　げっひゃっひゃっひゃ」

黒髪の少女が鞆に収められた野太刀を構えて睨んできても、E2はそのように言っつて下品に笑い、茶化した。

事実、怖くないのだ。同僚のソードやニン達から発せられる殺気に比べれば、目の前の少女から向けられる敵意などは微塵のようなもの。しかし、いざ戦うとなったら逃げの一手しかないぐらいに、力の差は歴然なのだが。

「それで、アンタ、何の用なのよ？」

すると、げんなりとした表情で赤毛の少女が要件を問うて来た。どうやら、目障りな手合いだからさっさと用事を済ませさせて帰らせよう、という考えのようだ。

賢明なことだと同意し、E2は遠回しにあることをネギ・スプリングフィールド一行に伝えた。

「お部屋に戻ってみたらどうよ？　大事なモンが大事かもよ」

言っつと、ネギらは、きよとん、とした表情で、E2の言わんとしていることを寸毫も察せていないようであった。

どうしたものかとE2が考えると、調度良く、黒髪の少女の顔が

青褪めた。

「まさか……！」

声を漏らすと、黒髪の少女は慌てて駆け出した。

「桜咲さん!？」

「待って下さーい！」

「あ、アニキ！ 姐さん！ 待ってくださいえ〜！」

黒髪の少女を追って、ネギらも走り出した。

その様子を見届けて、E2は、ニタリ、と満足げに笑った。

さあ、これ以後は気を見計らって自分もあの部屋に乱入するだけだ、と思ったその時、E2の懐の携帯電話が着信を告げた。

「はいよ、もしもし」

「E2、ごめん。僕らは逃げたから君も逃げて」

開口一番、電話の相手 プレイヤーから告げられた予想外の言葉に、E2はすぐに意味が理解できず呆然としてしまった。

しかし、やがて意味を理解して慌てて聞き返した。

「おいおいマジかよ!? 何がどうなってるんだよ、おいい！」

「詳しい事情は合流してから、ということ。これから起こる面白そうなことは、僕が使い魔を通じてちゃんと見てるから安心して」

予想外の事態が起きていても、プレイヤーは相変わらずのようだ。いや、寧ろこういう状況でも楽しむむというのがプレイヤーの性だったか。

しかし、E2は面倒事が嫌いだ。面倒臭いのはもつと嫌いだ。

こういう予想外の事態というのは、面倒臭くてしょうがない。

「あー、はいはい。そんじゃ、俺も逃げるわ」

面倒なことには関わらないのが一番。しかし、それが面白いのなら高みの見物をすればいい。

E2は返事をして通話を終わると、長居は無用とすぐに出入り口へと向かった。

刹那はサンガラスの男の言葉の真偽を確かめるべく、木乃香が居るはずの部屋へと駆け込んだ。ノックもせずに入るのは失礼だとか、そんなことは考えられなかった。

部屋に入ってみると、異様に静かなのが分かった。この時刻に、あの3-Aの生徒が大人しく眠っているなどありえない。程度の違いはあるにしろ、何かしら騒いでいるのが当然なのだ。

部屋の居間には、布団が整然と並べられ、そこには木乃香以外の全員が眠っていた。だが、それが只の眠りではなく、何らかの術による強制的なものであることを、刹那も見抜くことができた。こうまであからさまな術の残滓は、わざとか、それとも単に術者が未熟なのか。

そのことを深く考えるより、刹那は部屋の中を走り回り、木乃香の姿を探した。だが、トイレにも、戸の中にも、どこにも、木乃香の姿は無い。

ギリ、と音が鳴るほど歯を食いしばり、まだ諦められないと外を見る。

刹那はこの時点で、自分が役目を果たせず、木乃香が誘拐されてしまったことを理解していた。

桜咲刹那の役目とは、近衛木乃香の護衛役と、彼女を魔法などと関わらせないようにするお目付け役の2つだ。だが、彼女は平素からその役目を果たしているとは言えなかった。

刹那は護衛でありながら護衛対象である近衛木乃香と意図的に距離を取り、必要以上に近付かないようにするどころか避けてすらいた。

それには刹那なりの理由があるのだが、彼女は今ほど自分の行動を後悔したことは無かった。

もし、自分が四六時中ずっと木乃香の傍にいるようにしていたら、

と悔いずにはいらなかった。

すると、なんとということであろうか。信じられない光景が、刹那の眼に映った。或いは、彼女の心が天に通じたのであろうか。

外に、木乃香を抱えた怪しい風貌の3人の男の姿があったのだ。疑うまでもなく、刹那はその男たちを誘拐の実行犯と断じた。

彼らは何事かを話しながら、その場に留まっている。どうしてあんな所で立ち話をしているのかは分からないが、これこそ汚名返上の千載一遇の好機と、刹那は愛刀・夕凧を片手に、“気”によって体を強化して窓から飛び降りた。

そして着地するや、全力で走り出し、夕凧を鞘から抜き放ち、男達に迫る。その後を、遅れてやって来たネギと明日菜も慌てて追って来ていた。

「お嬢様を放せえええ！」

第五話

腰を抜かした依頼人を担いで、ソードは今回の仕事の為に用意された隠れ家へと戻った。先んじて戻っているプレイヤーとE2が、途中で合流する手筈だった者達と待っているはずだ。

ソードは隠れ家の扉の前に立つと、扉に手を当て、魔力を放出した。指紋照合ならぬ、魔力照合による認識装置だ。予め今回の仕事のメンバーの気や魔力を結界に登録し、それを照合することによって扉が開閉し、畏も解かれる仕組みになっている。

相変わらず精緻なものだ、とソードがプレイヤーの仕事に感心すると同時に照合が完了し、扉が開いた。草鞋を脱ぎ、人が集まっている気配を察して居間へと向かう。

「なんやなんや、あんだだけ大口叩いといて、結局失敗したんかい！」
居間への扉を開けてすぐ、真っ先にソードと依頼人を迎えたのは、山狗族とよばれる妖怪と人間の混血の少年、犬上小太郎だ。

今回の仕事にも、荒事をこなせる、実戦経験を積める、という理由だけで加わった、幼い年齢に似合わぬ血気盛んな少年だ。いや、やんちゃ盛りの年頃なのだから、歳相応ではあるか。

「お陰でこちら、駅で待ちぼうけでしたわあ。刀も抜けませんでしたがし、先輩とも仕合えまへんでしたし」

おっとりとした口調で、小太郎と同じくらいの年頃に見える、ゴシックロリータと呼ばれる衣服を着た眼鏡を掛けている少女　月詠は、鞘に収めた刀を両手で持ちつつ愚痴った。

この少女も、日本の平和を脅かす大事であることを承知の上で今回の仕事を引き受けている。その理由も小太郎とほぼ同様なのだが、月詠はそれに加えて人を斬ってみたい、という欲望も秘めていた。

「意外だね、君達がこの程度の仕事をしくじるなんて。僕も総本山を攻める手を考えていたけど、考え直した方がいいかな？」

先の2人とは対照的に、冷静にこれからの事について話を進めた

のは、白髪の西洋人の少年　フェイト・アーウェルンクス。ある意味で、今回の件の黒幕ともいえる存在だ。

何故なら、ソードが担いでいる依頼人の女性　天ヶ崎千草が今回の事に及んだ切っ掛けは、ある物の入手を狙ったフェイトに扇動されたことに端を発するからだ。

しかし、今回の仕事はあくまでフェイトの仲介による千草からの依頼。そして、フェイトの企みに関しても本人から聞かされたのではなく、プレイヤーがそう言っただけの事。故に、ソードはそのことに関して何かを言うつもりは無い。

「いや、その必要は無いよ。取り敢えず、使い魔が送って来た映像を投影するから、ちょっと待っててね」

フェイトの言葉に答えて、椅子に座って茶を飲んでいたプレイヤーはカップを机の上に置いて、映像の投影準備を始めた。その隣で、E2が暇そうに欠伸をかいている。

そして、壁を隔てた隣の部屋からは、ナイン達の気配。姿を見せていないのは、メンテナンスの為か、それともここが窮屈だからか。自分の仲間達の状態についての確認を済ませると、ソードは担いでいた依頼人を下ろした。

「依頼人、仔細の説明はその後だ」

「……本当に納得できるような理由なんやろうな？」

そう言いながら座ったままなのは、未だに腰が抜けているのか、立ち上がるのも億劫なのか、判断がつかない。

「いやいや、ソードが強敵との戦いを放り出すなんて相当だぜ？」

すると、依頼人の言葉にソードに代わってE2が答えた。いつもの軽薄な口調ではあったが、ソードの性質を知るからこそその真に迫った言葉でもあった。

「へえ。折角のお強い人との仕合う機会、投げ捨てはりましたん。勿体ないですね」

「勝ち負けの分かり切った戦いなど、やる意味があるまい」

月詠の言葉に、ソードは即座に返す。

ソードが求めるものは勝利ではないし、戦いそのものでもない。ソードが強者との戦いを求めるのは、あくまで過程でしかないのだ。

戦うことを求めてこの場に加わっている月詠は、ソードの言葉に不思議そうな顔をしている。なまじ近い考えの持ち主だからこそ、肝心な所での考えや感性の相違を理解できないのだろう。

「そんなにごっついヤツが出たっちゆうことは……やっぱ、リヴィオの兄ちゃんか？」

すると、小太郎が意外な人物の名を出した。ソードもよもや、自分達以外にリヴィオ・ザ・ダブルファンクを知っている者がいるとは思っていなかったために、普段ならば頷くだけで済ませる所を、振り返って首肯した。

「応よ。知っていたか」

「ああ。何度か戦ったことあるんやけど、いつペンも勝ててないんや」

「で、あろつな」

小太郎は悔しそうに言いながらも、表情は楽しそうであった。恐らく、戦うとはいつでも練習試合程度のもので、お互いに本気ではなかったのだろう。少なくとも、ダブルファンクの方は。

そうでなければ、小太郎のような血気盛んで好戦的だけである少年が、あの魔人と戦うことを楽しもう、などという狂気の沙汰にも思い至るまい。

「ちよつと待ちいや。やっぱりつて、どういうことや？」

すると、漸く立ち上がった千草が、小太郎に問い質した。

「どういうこともなにも、総本山でも有名やで、リヴィオの兄ちゃん。なんや、知らんかったんかいな？」

小太郎がさも当然のようにそう言つと、千草はわなわなと肩を震わせた。

「そういうことを、どうしてももっと早く言わなかったんや!!」

「だって、聞かれへんかったし」

千草の怒鳴り声にも、小太郎は平然と返す。表情はさも迷惑そうなので、寸毫も気にかけていない、というわけでもないようだ。

一方、ソードは小太郎の言葉に納得していた。

この国どころか、この星、この世界の生まれでも無いダブルファングが未だにこの土地に留まり続けていたのは、飯の宿を得て、そこに腰を落ち着けていたからだだったか。

確かに、この時勢ならば下手に動き回るよりも日本のような平和で豊かな先進国に留まり、情報収集に専念するのも一つの道だろう。結局は、探し人の方がダブルファングの元へと来たのだが。

そこまで考えて、ソードはあることに気付いた。

今、この京都に、1人の男を除いて異世界からの異邦人が全て集まっている。

これは、単なる偶然なのか。何かの導きなのか。

それとも、プレイヤーの言うような運命なのか。

「で、そのリヴィオってのはどれくらい強いんだよ？」

E2に話しかけられ、ソードはすぐに物思いから抜け出した。

「俺とアーウェルクス以外で臨めば、塵殺されてもおかしくはあるまい」

言つと、場が先程よりも静かになった。プレイヤーとE2は平素と変わらないが、他の者達は明らかに先程までとは違う雰囲気になっている。

小太郎は、そこまでの実力者と思っていなかったのか、目を点にしている。

月詠は、何やら期待に目を輝かせているようだ。

アーウェルクスは、いつもと変わらぬ仏頂面だ。この男の容姿に似合わぬ傑出した実力を考えれば、当然か。

「……そないにか？」

怯えた様子で問うて来た千草の言葉に、ソードは頷いた。

「実際に戦うことはできなかったが、それくらいには感じた」

さて。あの時、弓兵の横やりが入らずに戦いになっていたら、勝

てたかどうか。

殺されない自信はあるが、勝てるという確信は微塵も無い。だからこそ、戦いたかったのだが。

「それで、もう1人の弓兵というのは？」

顔を青くしている千草の事など気にも止めず、アーウエルンクスはソードがダブルファンクとの戦いを断念した原因について尋ねて来た。そのことはまだ話していないのだが、恐らく、プレイヤーが先んじて簡単に事の次第を説明しておいたのだろう。

ソードは暫し、どこから伝えたものかと考えた。

弓兵の本質的な恐ろしさは、実力よりもその存在自体の本質。通常ではありえない精神性。ソードやプレイヤーやE2と同質/逆の方向性での狂気。

しかし、それを話した所で理解できるとは思えないし、なによりソード自身も説明しきれるものではない。よって、より分かり易くこの状況下での脅威として明確である実力についてのみ触れることにした。

「遠距離戦ならば無類。遠間から先んじて発見されれば、為す術もない。俺が知る限り、最大射程は約4km、一度だけ観測された攻撃の最大速度は超音速。命中精度は百発百中。戦えるか？」

「……………現状では無理、だね。幾ら僕でも、何の準備も無しに4km先の相手を知覚するのは難しい」

こつもあつさり、弓兵の攻撃能力を聞いて「然るべき装備さえあれば対応可能」と返すことができる者はそうはいるまい。

そう感心しながらも、ソードは念のためにと付け足した。

「奴は何の備えも必要とせず、2種類の魔術のみでそれができる。

恐ろしかろ？」

これこそが、弓兵。衛宮士郎の遠距離戦における最大の脅威だ。投影と強化。このたった2つの魔術で、あの出鱈目な攻撃を実行できるのだ。

丸腰であったとしても、その場で武器を作り出し。

特別な装備を必要とせず、視力を強化するだけで4 km以上先の標的を確実に捉える。

時計塔の学徒であった頃の成績からは想像もできない、凄まじいまでの戦闘能力。お陰で、所詮は落第生同然の三流魔術師と舐めて掛かった2人の封印指定執行者が殺された。冬木の聖杯戦争で生き残ったのは、偶然ではなかったということだ。

何よりも驚くべきは、衛宮士郎がこの戦闘スタイルを確立したのが20代前半だったという点と、その頃には既に自らの魔術を極めていた点だ。

特殊な環境や過去こそあれど、特別な訓練を受けずに、あの若さでこれほどの力を手にした。常人では到達するよりも先に死ぬか諦めるかの境地に、齡30にも満たない若さで平然と立つ。

あのような存在を天才、若しくは異常者と呼ぶのだろうと、ソードはしみじみと考える。

「まあ、欠点はあるんだよな。実際、こうして戻って来られたんだからよ」

全員が衛宮士郎の脅威を認識し沈黙していると、E2はそんなことを言った。

その言葉の通り、衛宮士郎の戦い方には致命的な欠点がある。

「それについても、後ほど説明しよう」

そう言ったのとほぼ同時に、先程から液晶モニタを弄くっていたプレイヤーがこちらに振り返った。

「さ、準備できたよ。見てみようか」

それに応じて、全員がそれぞれに返事を返して思い思いの場所に移動して腰を下ろす。ナイン達にもプレイヤーが声を掛けたが、なにやら整備に時間がかかっているようで、後で見せてくれ、とのことだった。

魔術と科学の融合とも言えるテレビへの使い魔からの知覚情報の投影という行いに感心しつつ、ソードはモニタを凝視した。

これから映る光景は既に終息していることで、謂わばこれは録画

しておいたビデオを見るようなものだ、とプレイヤーが解説する。すると、真つ黒だったモニタに赤い影が現れた。

「だっはっはっはっ！ なんやあの兄ちゃん、モロにくらってるやんか！」

小太郎が大笑いした通りの光景が、早速映し出された。

桜咲刹那という神鳴流の見習い剣士が衛宮士郎、リヴィオ・ザ・ダブルファンク、ヴァッシュ・ザ・スタンピードの3人に突貫し、いきなり神鳴流の奥義・雷鳴剣を放ったのだ。恐らく、あの3人を近衛木乃香誘拐の犯人と勘違いしたのだろう。

普通であれば、あの3人と刹那という娘との実力差は歴然。返り討ちにされるのが当然だろう。だが、雷鳴剣がどういう技か知らなかったのか、3人は最低限の動きで刀をかわそうとして、刀身から迸った雷撃を衛宮士郎とは別の赤い外套の男　ヴァッシュ・ザ・スタンピードはまともにくらってしまったのだ。

ヴァッシュが指などを痙攣させながら仰向けに倒れると、衛宮士郎とダブルファンクは「わあー!？」と叫んでいそうな表情で大口を開けた。そして、刹那が再び斬りかかって来ると衛宮士郎は慌ててヴァッシュを拾って、ダブルファンクと共に逃げ回り始めた。

逃げながら何やら叫んでいるが、音声は拾われていないので分からない。

その一連の拳動は、確かに、小太郎が腹を抱えて笑っているのが納得できるぐらい滑稽だった。彼らが並々ならぬ実力者である事を知っていれば、笑うよりも先に呆れてしまうのだが。

「あれが噂の刹那先輩か。お見事な腕前ですわあ」

「そうなんか？ あれからずっと避けられてばかりやないか」

月詠が恍惚とした表情で感想を漏らすと、それに千草が疑問を返した。

千草の言った通り、最初の一撃から一向に攻撃が当たる様子は無い。それどころか衛宮士郎とダブルファンクは逃げるにしても背を向けているのではなく、刹那の方を向きながら彼女に何かを言いな

がら、人を一人抱えながら攻撃をかわしているのだ。

これは、刹那が弱いのではなく、あの2人との実力差が大きいからだ。

中学3年生ということは、あの刹那という娘は15かそこらの年頃だろう。その若であの腕前は、荒削りで未熟さも見えるが驚嘆に値する。月詠が見惚れたのも頷ける。仮に追われているのが常人ならば、疾うに斬られているだろう。

それが、千草が言うように霞んで見えるのは、比較対象が悪すぎるからだ。

そのことを口には出さず、ソードは改めて衛宮士郎とダブルファングの実力を確認した。次は是非とも、1対1で戦いたいものだ。

「赤いコートに尖がり頭。黒髪だけど、この男がヴァッシュ・ザ・スタンピード……なのか？」

すると、アーウェルンクスがそんな言葉を零した。

ヴァッシュについては、そのことを良く知っている男達からその名が出た時に話を聞いていた。

その話によれば、ヴァッシュ・ザ・スタンピードとは次元違いの存在だ、ということだが。

「……………確かに、ナイン達が畏れるほどの男か？」

アーウェルンクスと同じ疑念を胸に抱き、呟く。

雷鳴剣の直撃を避けこそしたが、感電してひっくり返った蛙のような醜態を晒し、身動きもろくに取れず衛宮士郎に担がれているだけの男が、何らかの大きな力を秘めているようには見えない。

後でナイン達やあの男にもこの映像を見せて、詳しく話を聞く必要があるだろう。

そのことを伝えようとソードはプレイヤーとE2に顔を向けて、今はやめておいた。

彼らがあんなにも楽しそうにしているのだ、それに水を差すのは無粋だろう。

「あゝらら。大事なモンを取り返してくれた恩人に何やってんだろ

うな、このガキ」

「いいねえ、この展開」

少女が犯している過ちを見ながら、プレイヤーとE2はとても楽しそうに、卑しく、怪しい笑みを浮かべていた。

次の狙いは、決まったか。

「ごめんなさい！ まさか、あなた達がこのかさんを助けてくれたなんて……」

ホテルの部屋に戻り、木乃香を抱えていた3人の男性から詳しく話を聞いて、ネギは頭を下げた。

彼らはネギの不手際で攫われた木乃香を、ネギ達が気付くよりもずっと早くに救ってくれていた。しかし、ネギも明日菜も相手の見た目だけで判断して話を聞こうともせず、刹那と一緒に一切手出しをしようとしないうちに、杖と刃を向けてしまった。

自分の思い込みと失敗が恥ずかしくて、何より彼らに対して申し訳なくて、ネギはずっと頭を下げていた。

「あの……ヴァッシュさんは大丈夫でしょうか」

ネギと同じく土下座の姿勢を取っていた刹那は頭を上げて、青い顔で尋ねた。

ヴァッシュは魔力も気も扱わない一般人同然の人間らしく、当然、自らの防御力や回復力を瞬間的に上昇させる術など無い。直撃こそ免れたものの、雷鳴剣の電撃を浴びたとあっては命に関わる可能性

もある。

恩人を命の危険に晒したとあって、刹那の自責と後悔はネギ以上だった。

しかし、士郎はそのことを一切責めず、柔らかな口調で答えてくれた。

「大丈夫だ、こいつは頑丈だから。一晚もすれば完治するだろ」

「確かにそんな感じだけどさ、その言い方はちよつと酷くない？」

もうちよつと労ってくれてもいいだろ」

布団の上に寝転びながら、ヴァッシュは余裕綽々と言つてもいいぐらい軽妙な口調で文句を言つた。

確かにヴァッシュは頑丈だが、この程度で済んでいる理由はそれだけではない。ヴァッシュが着ている赤いコートは極めて高い技術によつて造られたもので、多数の防御機能を持っている。耐熱、耐寒、防弾、防塵、防刃、そして絶縁、等々だ。

コートに隠れていない生身の部分から感電してしまつたが、それでも、コートの持つ絶縁機能のお陰で、軽傷で済んでいた。

「まあ、こういう人だから。心配はいらないよ」

ヴァッシュの様子を見て苦笑しながらも、リヴィオは気落ちしているネギと刹那を励ました。

「……ありがとうございます」

そう言つて、刹那が再び頭を下げると、ネギもそれに倣つて頭を下げた。

「それで、エロオコジヨ。あんた、この人達とどういふ関係なの？」

すると、後ろで様子を見守っていた明日菜がネギの横ですつと平身低頭している………というよりも、怯えて身を縮めているオコジヨ妖精のアルベール・カモミールに声を掛けた。

彼らがこうして誤解を解き、同じ部屋で話ができているのはカモミールのお陰だった。

最初、ネギと明日菜は刹那が戦っている姿を見て、疑つというこ

とを一切せずに彼女に助太刀し、問答無用でヴァッシュ達に攻撃を仕掛けた。相手が無抵抗に逃げ回っているのも気に掛けずに。

そして、ネギの放った魔法の射手が士郎に命中し、動きが止まった。この時、士郎は自分の後ろのリヴィオと木乃香を気遣って敢えて回避しなかったのだが、肩に担いでいるヴァッシュも傷付けまいとして脇腹で受けたのが災いし、肝臓の上に直撃してしまった。

それを心配したりヴィオが士郎とヴァッシュの名を呼び、動きを止めてしまった。その隙を見逃さず、刹那がリヴィオに斬りかかるうと踏み込んだ、その時だった。

「やめてくたせえ！ 兄貴！ 姐さんたち！ その人達は悪人じゃねえんですよ！！」

ネギの懐から飛び出したカモミールが叫び、刹那の動きを止めた。相手が木乃香を攫った悪人と決めつけていたネギと明日菜も、驚愕のあまり動けなくなった。それをネギがカモミールに確かめるよりも先に、士郎が口を動かした。

「アルベール・カモミール！？ どうして、お前が此处に！」

明日菜でもまだ覚えていなかったカモミールの本名を、士郎が口にしたことが決定打となった。

カモミールが士郎とヴァッシュを知っていた、というのは今までの話の流れで全員が理解していたが、どういう知り合いなのかまでは分からなかった。

特にネギは、カモミールが今朝、彼らに怯えていたこともありとても不思議そうな顔をしている。

「アルベールが下着盗んでいたのを捕まえたのが僕ら」

あっさりと出て来た、ヴァッシュからの一言。

「そ、そういうことでさ……」

抗弁もせず、がっくりと頂垂れるカモミール。

彼らの関係を疑う余地は無かった。

刹那は眉を顰め、険しい顔でカモミールを睨んでいるが、事前に

カモミールの下着泥棒の前科を知っていたネギは苦笑を浮かべ、明日菜は呆れた表情で大きく溜息を吐いた。

「オコジヨが人間の着を盗んで、どういっつもりだったんだ？」
すると、リヴィオがとても不思議そうにカモミールにそんなことを尋ねた。

皮肉でも悪意からでも無い、只の純粹な疑問だ。それだけに、カモミールは居心地の悪さに小さな体を更に小さくした。

「あ、えーと、それはツスね……」
「それよりも、どうしてお前が此処にいる？」

カモミールが口籠っていると、土郎が詰問するような口調でリヴィオの質問を遮り、問うた。

「あの……それは、ですね……」
更に答え難い質問をぶつけられ、カモミールは青い顔をして、金魚のように口をパクパクと動かしながら、必死に適切な答えを捻り出そうとした。

普段のカモミールならば、あることないこと織り交ぜた文句をすらすらと、息をするように言っつて相手を煙に巻いて場を切り抜けたらだろ。だが、今はそれができないほど、彼は焦り、緊張していた。

カモミールがウェールズで下着泥棒を咎められ、捕獲された際に土郎から受けた、尋問を兼ねた『お仕置き』が、一種のトラウマとなっているからだ。

なので、カモミールとしては慎重に言葉を選んで、穩便に事を済ませたいのだ。

「何でも何も、逃げて来たあんたがネギの所に転がりこんで来ただけでしょ」

しかし、そんなカモミールの事情など一つも知らず、知っていたとしても一切の遠慮をしない明日菜が、カモミールにとって最悪に近い形で話してしまった。

それを聞いた土郎の顔が、険しいものへと変わった。そして、も

う1人の当事者であるネギに話しかけた。

「ほう……ネギくん、だったな。君は、このオコジョが下着泥棒の罪で投獄されていたが、脱獄したのは知っているか？」

「はい」

意外な即答に気を抜かれながらも、土郎は話を続けた。

「知っていたのか。じゃあ、どうして匿ったんだ」

この重要な問いにも、ネギは一切の迷いを見せず、笑みすら浮かべて答えた。

「どうしてって、カモくんは僕の友達ですから。友達を助けるのは当然です」

「あ、兄貴〜！」

ネギの答えに感動したカモミールは、涙を浮かべながらネギに抱きついた。

だが、土郎の表情は厳しいままだ。それも当然。友達だから助けてあげた、なんてことが通ってしまえば世の中には犯罪者が溢れてしまう。

ネギの友達を大切に想う真っ直ぐな心には感心しながらも、彼の将来の為に、土郎は彼を諭すべく話し始めた。

「友達だから、か。成る程、立派なことだ。だがな、いくらなんでも脱獄犯を見過ごすわけにはいかない。下着泥棒だけじゃなく、脱獄だって立派な犯罪だ。なあ、ヴァッシュ」

「え？ う、うん。いいんじゃないかな、脱獄の1回や2回。よくあることだよ」

同じ大人として、土郎はヴァッシュに同意を求めた。

案の定、ヴァッシュはすぐに返事を……

「……ん？」

土郎は、何かおかしな返事が聞こえたことに、一瞬の間を置いてから気付いた。ヴァッシュを見ると、そっぽを向いて口笛を吹きながら冷や汗を流している。

続いて、リヴィオを見ると、苦笑を浮かべながら答えた。

「そうですね。1回の脱獄ぐらいで目くじらを立てることなんてありませんよ」

「そうですねー。あははー」

リヴィオの言葉に続いて、台本を棒読みしたような口調でヴァッシュが言う。

これには、士郎だけでなくネギ達も疑いの目を向けざるを得なかった。

相変わらず苦笑しているリヴィオとそばを向いているヴァッシュを、じつ、と見て、士郎は溜息を吐いて呟いた。

「……………そうですね。お前達も仕方なく脱獄したんだよな」

「そうですね、あれは仕方なく……………あ」

士郎の言葉に釣られて、ヴァッシュは核心となることを口に出した。

ヴァッシュは言ってしまったから初歩的な誘導尋問に引っ掛かってしまったことに気付いたが、もう手遅れだ。

「お前ら、脱獄犯だったのか!？」

「だ……………だって！ 仕方が無かつたんだもん！」

「だもんじゃない！」

士郎に詰め寄られて、ヴァッシュは形振り構わずに開き直った。

どう屁理屈を捏ねても「仕方が無かつた」で脱獄したとことを納得させるのが無理だとしても、思い切りのよ過ぎる開き直り方だった。

「けど、脱獄したのも、冤罪とか、ちよつとした手違いで捕まっただからなんですよ」

「だからって脱獄するなよ!？」

リヴィオも何とか言い繕おうとするが、全くフォローになっていない。やったことがとても擁護できるものではないのだから、当然なのだが。

ヴァッシュとリヴィオは、士郎がこんなにも脱獄を咎めるとは思ってもいなかった。これは、ノーマンズランドと日本の治安レベル

の差異によるものだ。

士郎が生まれ育った日本の治安水準は世界的に見ても非常に高く、それこそ脱獄事件など起きようものなら数日で全国に知れ渡るだろう。

一方、ヴァツシュとリヴィオの故郷であるノーマンズランドでは、脱獄をしても笑い話で済む。憲兵軍などの治安組織には頭の痛い話だが、未だノーマンズランドでは暴力が最も物を言う時代なのだ。脱獄事件が起きて「脱獄された方が悪い」という風に受け取られることさえ多々あるのだ。

そして、何よりも。

ノーマンズランドでは、今更ヴァツシュ・ザ・スタンピードが脱獄したぐらいでは誰も驚かない。

「だって、そうでもしないと僕の人生そこで終了しかねなかったし。ふーんだ！」

これ以上はどう言い合っても勝ち目が無いと悟って、ヴァツシュはそんなことを言ってそっぽを向いて布団に潜った。

「拗ねるな！………すまん、カモミール。なんでもない」

ヴァツシュに怒鳴り付けた後、頭に手を当てながら、士郎はカモミールにその声を掛けた。

脱獄犯の連れがいるのに、他人の脱獄だけを咎めるのもおかしい話だ。なので、この場はこれ以上、脱獄の話題に触れないのが妥当だと判断した。

「そ、そうっすか………」

カモミールは呆然とした様子で頷き、ネギ達も、今のやり取りが本当なのか冗談なのか判断できず、途方に暮れてしまった。

脱獄の話が落ち着く、というか、うやむやになってから暫くして、話を早く先に進めようということになり、まずは自己紹介からという事になった。

「それじゃ、改めて自己紹介をするか。俺は衛宮士郎。旅の魔術使いだ」

「僕はヴァッシュ・ザ・スタンピード。愛と平和を求めて流離う孤高の狩人……かな？」

「要するにただのガンマンだ」
「酷い！」

白髪で褐色の肌の赤い人 衛宮士郎と、黒髪で白い肌の赤い人
ヴァッシュ・ザ・スタンピードはそれぞれに名乗りながら、楽しそうに話した。

同年代の友人に恵まれず、幼馴染のアーニヤも何故か蹴りを主体にした暴力的なスキンシップばかりしてくるので、ネギには赤い2人の何げないやり取りが、少し羨ましかった。

「俺はリヴィオ・ザ・ダブルファンク。近衛詠春さんに雇われた用心棒だ」

黒いマントを纏った灰色の髪の男性 リヴィオがそのように名乗ると、刹那がすぐに反応を示した。

「長に雇われた？ 私は、そんなことは聞いていませんが」

「そりゃそうだ、今回の件じゃ、俺はただ遠巻きに見守っているだけの予定だったからね。信用できないなら、あとで詠春さんに電話して聞けばいい」

刹那の問いにも慌てず、リヴィオは的確な答えを返した。

彼らが名乗り終わったから、次は自分達の番だ。ここは先生として生徒に模範を示そうとネギは一番手になるつもりだったが、カモミールが先んじた。

「オイラはアルベール・カモミールっす。ヴァッシュの旦那とエミヤの旦那には……その……本当に、お世話になりやした。ど、どうか、お手柔らかに……」

「もう二度と、変な気は起こすなよ？」

「へい！」

土郎の言葉に忤えて、カモミールは器用に土下座をした。オコジヨなのに。

とにかく、気を取り直してネギは自分の自己紹介を始めた。

「ぼ、僕はネギ・スプリングフィールド、魔法使いです。今は卒業試験で、麻帆良学園3-Aで担任教師をやっています」

上手く言えるか不安だったが、なんとかあった。

ほっ、と安堵の溜息を吐くと、ネギは土郎達の顔が変なことに気付いた。

いや、変と言っては語弊がある。何故か、ネギの自己紹介を聞いただけで呆然として、驚愕のあまり目を点にしていた。

ネギは簡単な自己紹介のどこに彼らを驚かせるような要素があったのか分からず、不思議に思っただけ首を傾げた。

「……教師？ 君が？」

「はい。そうです」

土郎の困惑がありありと刻まれた声での問いに、ネギはあっさりと頷いた。

数分後、土郎達がなにやら話し込んで、何事かに納得すると自己紹介が再開された。

「私は神楽坂明日菜。このガ……ネギの、えーっと、ミニ……なんだっけ？」

明日菜も初対面の目上の人と話すということ、普段ネギやカモミールにするような乱暴な言葉遣いをしないように気を付けているようだが、あまり上手くできていなかった。

これも普段からタカミチ以外に敬語を使わないからだ、と考えて、ネギは修学旅行が終わったら明日菜に自分が使っていた日本語の敬語の教本を貸してあげようと考えた。

「魔法使いの従者【ミニステル・マギ】かい？」

「そう、それ……です」

布団に寝たまま、ヴァツシュが、明日菜が言えなかった単語を教えてください。

明日菜の拙い敬語にも気を悪くした様子も無く、ヴァツシュはにこやかに笑いながら「どういたしまして」と言った。

大事を取っているからとはいえ、あんなに痛い目に遭って寝込んでいても優しく笑えるヴァツシュに、ネギは素直に感動した。

あれが大人の余裕というものか、などと考えたが、それはちよつと違うだろうとすぐに自分で気付いた。

「私は桜咲刹那と申します。未熟者ではありますが、京都神鳴流の門弟です。……先程は本当に、失礼致しました」

「あはは。まあ、大丈夫だから。けど、次からは気を付けてね」

刹那からの謝罪に、ヴァツシュは朗らかに笑いながら体を起こし、右手で人差し指と中指を交差させた独特な形でピースサインを作って、大丈夫だと力強く答えて、刹那を許すと同時に安心させた。

それを見て、刹那は姿勢を正して、深々と頭を下げた。

自分ではこんな励まし方はできないと、ネギはヴァツシュを見ながら、そう思った。

「この場合は、俺が仕切らせてもらいます」

全員の自己紹介が終わったのを見計らって、この場にいる全員顔を見回しながら言う。どうやら、土郎さんとヴァツシュさんも、俺が仕切るのに不服は無いみたいだ。

これで漸く、本題に入れる。脱獄の話とかネギが教師だつていう話で、随分時間を喰っちゃったからな。

それはそれとして、早く話を進めよう。

「俺は詠春さんから、君達の護衛を依頼された。但し、君達に手が

負えなくなるような状況になるまで、極力干渉するな、という条件でね」

「その条件で、今オイラたちと話しているってことは」

今回の件で俺が動けるようになる前提条件を話すと、オコジヨ妖精のカモミールがすぐに反応した。どうやら、小動物の割に意外と頭の回転は速いみたいだ。少なくとも、子供達よりは。

「そつだ、君達だけではどうにもならない状況だと判断した。事実、危うく御令嬢が誘拐される所だったからな」

言つて、ヴァッシュさんの隣に寝かせている少女　近衛木乃香を見る。

どこかで見たことがある顔だと思つたが、まさか、詠春さんの娘さんだったとは。見覚えがあつたのは、前に見せてもらった10年程前の詠春さんの写真と一緒に写つていた、幼い頃の御令嬢の面影が今もあつたからだつたんだ。

すぐにこの可能性に気付けなかつた自分の鈍さ　いや、判断力の低下には呆れるばかりだ。平和なこの国の空気にはだされて、想像以上に鈍つていたみたいだ。気を引き締めないと。

「……もしや、先程の条件を順守して、お嬢様が攫われるのを黙つて見ていたのですか？」

怖い顔をして、刹那がそんな疑問をぶつけて来た。これには流石に、俺も慌てて首を横に振る。

「いや、それはない。実は、俺もちょっと気を抜いていてね。土郎さんが気付かなかつたら、どうなつていたか」

ヴァッシュさんと再会できた喜びに浸るあまり、俺は仕事を疎かにするどころか完全に忘れていて、思い出しても放つて置いた。

教義に則つた仕事ではないとはいえ、『ミカエルの眼』にあるまじき怠慢だ。こんなんじゃ、ウルフウッドさんにも、ラズロにも……

……マスター・チャペルにも、顔向けできない。

気付いてくれた土郎さんには、本当に頭が下がるばかりだ。

「それで、これからどうするのよ……ですか？」

すると、無理に変な敬語で話している少女、アスナがそう訊ねてきた。

それについては、一番乱暴で確実な手段を、一つだけ考えてある。「君達の修学旅行を中止してしまうのが、一番だな」

「ええ！？　そこまでする必要があるんですか?!」

すると、ネギが俺の想定以上に吃驚して、大声で聞き返してきた。そんなに修学旅行ってやつが楽しみだったのかな、なんて思いながら理由を告げる。

「直接に今回の件に関わりが無い君達のクラスメートも、あの子と同じ部屋というだけで命の危険に晒された。なら、他の子も同じ学校の生徒という理由だけで巻き込まれるだろうさ」

事実、嫌がらせじみた妨害行為が既にそうだった。

清水寺で、掘られた落とし穴の中に爆弾が仕込まれていたら、水に酒ではなく毒を混ぜられていたら。

その可能性がゼロではなかったことは、あの白い男とソードという魔人　この平和な世界に似つかわしくない、俺が見慣れた邪悪な気配を漂わせる人間達と遭遇したことで確信している。

そして、そういうことがこれから起こる可能性も。

「そんな……」

声を漏らしたネギだけでなく、アスナと刹那も絶句している。恐らく、自分達が考えていた以上に、事態が深刻だったんだろう。

まあ、この星の、特にこの国じゃ、こんな年頃で命のやり取りに出くわす事は稀だろうし、無理もないか。

けど、修学旅行を中断するだけで、今回の件は丸く収まる。親書は俺が受け取って詠春さんに渡して、この子達の護衛はヴァッシュさんと土郎さんに頼めば問題ないはずだ。

大掛かりな行事らしいけど、詠春さんに頼んで麻帆良の長に事情を説明してもらえば、すぐに事態も収まるだろ。

「いや、修学旅行は中断しない方がいい」

不意に、土郎さんがそんなことを言い出した。

「どうしてだ？ 土郎」

ヴァッシュさんが問うのと同時に、俺達も一斉に土郎さんへと目を向ける。

すると、土郎さんは一枚の紙を見せた。

「あの子の懐に挟まれていた手紙だ」

今まで話に入って来なかったのは、これを見つけていたからか。

土郎さんが見つけた手紙には、こう書かれていた。

『此の度の貴校の旅行行事、中断した場合は無作為に選別した不特定多数の首を落とす』

決して無視できない物騒なことが、血文字で書かれていた。

こんなものを見つけて……いや、見せられてしまったては、無視することなんてできない。

やられた！ こんな、たった一枚の紙きりで、こっちの最善の手をあっさり潰されるなんて……！

「ブラフの可能性もあるんじゃないんですか？」

血文字の手紙を読んでネギ達が驚愕している中、カモミールは前向きな意見を発した。

こういう時に自分達にとって都合のいい解釈をしたくなる気持ちは分かる。だが、それじゃ駄目だ。守る側は常に、最悪の事態を想定しているぐらいじゃなければ駄目なんだ。

「これが本当か嘘か、可能性は半々だ。つまり、本当にやる可能性が最低でも5割ある。下手に動かない方がいい。……それに、あの男はこれぐらいのことはやれる」

土郎さんがそう言うと、カモミールは何も言えずに押し黙った。

俺も土郎さんの意見に全面的に賛成だ。俺達は勿論、きつとネギ達も、見ず知らずの人を見殺しにしてまで修学旅行を中断して、安全圏に退避しようなんて思わない。

特に、ヴァッシュさんは絶対だ。あの人が誰かを犠牲にしてまで

事を治めるなんてことは、絶対に……いや、もう二度と、あっちゃいけないんだ。

……そうだ。もう、二度と……あんなことは……！

「大丈夫。僕らも力を貸すからさ。絶対に、みんなを守ろう」

「君達も、俺達が守ってみせる。だから、安心してくれ」

すると、俺が一人で考え込んでいる内に、ヴァッシュさんと土郎さんはネギ達を安心させるように、力強く言い切った。

強い意志と力が込められた言葉は、きつと、初対面の少年少女の心にも伝わったはずだ。

「はい！ ありがとございますー！！」

思った通り、ネギは安堵したような表情で、大きな声で元気良く返事をした。

俺は自分の事で手一杯だったのに……ヴァッシュさんも、土郎さんも、凄いな。俺も頑張らなくちゃ。

夜も更け、間もなく日付が変わろうかという時刻。

つい数分前までは夜の闇に溶け込むように静かだった天ヶ崎千草らが潜伏する隠れ家は、今は異様な音が鳴り響き、静寂を引き裂かれていた。

「なんやなんや！？ なんの騒ぎや！？」

騒ぎを聞きつけた千草は、プレイヤーらに割り当てられた部屋の前まで来て、そこで動きを止めた。

原形を留めぬほど破壊されたドア。所々が砕けている壁と床。そして、鳴り響く人のものとは思えぬ、魔獣か怪鳥の断末魔の如き声。

これらの情報を一度に把握して、その原因に近付こうという人間は滅多にいないだろう。誰であつても警戒心が働き、様子を見ることを選択するはずだ。

実際、千草のこの判断は正しかった。もし、気付かずに部屋の中に入っていたら、彼女の命は無かつただろう。

「落ち着けよ、ナイン！ どうしたってんだよ！」

部屋の中では、E2が必死に仲間の動揺と混乱を治めようと大声で叫んでいるが、荒れ狂う暴風の如き有り様に、声が届くことなく破壊音や悲鳴に掻き消されてしまっている。

「……ナインが怯えて、癩癩を起しているんですよ」

何時の間にか千草の隣に立っていたプレイヤーは、そのように状況を説明した。

響き渡る轟音は、認識阻害では誤魔化しきれず、プレイヤーが世界の機能に遮音を加えていなくなつたら、今頃は近くの現地住人に通報されて当然のレベルだ。

この尋常ならざるこの事態の原因が『怯え』だと聞かされて、千草は眉を顰めた。

「怯えてって……あないなバケモノが、何に怯えとるんや？」

千草は、ナインを指してそう言った。

人をバケモノ呼ばわりなど、普通ならばその仲間の気分を害するだろう。しかし、プレイヤーは何も気に掛けた様子もなく、寧ろ愛称でも聞いたかのように平然と受け取っていた。

「ヴァッシュ・ザ・スタンピード。そうだよ、ナイン」

今回の一件に乱入して来た赤い2人の片割れの名を告げると、先程までとは違う声でナインが喚き始め、破壊音は加速した。

同時に、E2の説得が止まって泣き言が始まり、同じく部屋の中でナインを止めようとしていたソードが、諦めて出てきた。

「……依頼人、プレイヤー。明日は準備に徹すべきではないか？
あの黒髪の赤い男　ヴァッシュ・ザ・スタンピードは、俺達の
想像以上に恐るべき存在のようだ」

未だに収まる兆しを見せないナインの怯え方を見て、ソードはそ
のように提案した。

ソードとプレイヤーが持っている情報では、ネギ・スプリングフ
ールドに合流した3人の中で、危険なのは衛宮士郎とリヴィオ・
ザ・ダブルフアングの2人だけのはずだった。

それが、その2人よりも脅威度で下のはずの平和主義者のガンマ
ンに、ソードも一目置く魔人が体裁を取り繕う心の余裕すらも無く
して、恐怖を紛らわせようと荒れ狂っている。

これを無視して、敵の能力分析を再検討せずに再度の襲撃を試み
るのは下策だ。

「そ、そうやな。それがええやろ」

ソードからの提案に、千草は頷き、来た道を戻った。別の部屋で
待機しているはずのフェイトにこの事を伝えるためだ。残る小太郎
と月詠は、マンガ雑誌の立ち読みとお菓子の買い出しにコンビニへ
と行っているが、その内戻って来るだろう。

「じゃ、頑張つてね、E2」

「うええー！？ お前らも手伝ってくれよ、おい！ 下手すりゃ死
ぬって！」

千草を見送って、プレイヤーはE2に任せて立ち去ろうとしたが、
すぐに苦情の声が返ってきた。

無論、冗談だったのでプレイヤーはすぐにソードにも声を掛けて
共に部屋の中に入り、ナイン達を宥める為に悪戦苦闘を開始した。

1時間後、部屋が崩壊する寸前でなんとかプレイヤー達はナイン
達を落ち着かせることに成功した。

第六話

「諦める。誰にもヴァッシュ・ザ・スタンピードは止められない。どんな企ても、それが人を傷つけるようなものならば、あの男は絶対に阻止するだろうさ」

「あゝ、気持ちいいね」

日本の素晴らしき文化、露天風呂に浸かりながら、率直な感想を口に出した。

「本当ですね」

一緒に入っているリヴィオも、初めて聞くような緩みきつた声だ。さっきまで、僕らは今日の護衛の事とかで話し合っていた。それで、話がある程度纏まった所で、土郎が「折角日本に来たんだから」と、僕にお風呂に入るように勧めてくれた。

お湯を大量に溜めて、そこに身を沈める。

こんな究極の贅沢は、ノーマンズランドではどんな大金持ちでもやらないことだ。そんなことをするぐらいなら、飲み水として大事に貯めて、いざという時の備蓄に回すだろう。それぐらい、今でもノーマンズランドでは水が貴重だ。

ところがどっこい、この日本は『水の惑星』とも称される地球の中でもトップクラスの水源が豊富な国で、『風呂』が一般的な家庭

の全てに普及しているというのだ！

しかも、お風呂のお湯は毎日入れ替えるらしい。どんだけ水が豊富なの……。

僕らがこうして入っているこの露天風呂に至っては、毎秒単位で凄じい量の水が入れられながら足元の排水溝から流れ出ている。

……お湯の熱さとは別なことで、頭がくらくらしてきた。

「リヴィオ、日本って凄いな」

「ええ。凄いですよね」

しみじみと呟くと、リヴィオからもしみじみとした返事が返って来た。

そのまま暫く、のんびりまったりと、湯船に浸かる。

ああ、ホント。お風呂っていいなあ。癖になりそう。このままずっと入っていたいぐらいだ。

けど、土郎だけに見張りをさせておくのも悪いし、そろそろ上がろうかな。

「リヴィオ、そろそろ上がらないか？」

「そうですね。思ったより長湯になってしまいました」

リヴィオにも声を掛けて、後ろ髪を引かれながらもお風呂から出る。

夜の冷たい風が、濡れた体に染み入る。折角温まった体が冷えないように、やや急ぎ足で、濡れた床に足を取られて転ぶような間抜けをしてかさないように気を付けながら、脱衣場へ向かう。

服を置いておいた籠は無事で、物色された形跡もない。鍵どころか戸も無く、ただ柵においてあるだけなのに、服は無事だった。

どうやら、日本の治安と生活水準の高さは僕の想像以上みたいだ。そんなことにちょっとしたカルチャーショックを覚えつつ、手早く服に袖を通す。温まった体から立ち上る湯気が服の中に溜まってぽかぽかとして、心地いいなあ。

おっと、のほほんとしている暇があったら、早く土郎の所に行かないと。

リヴィオに声を掛けると、僕らは脱衣場から出て、そのまま非常口に向かつて、そこから外に出た。

非常階段を上って、『関係者以外立入禁止』と書かれている策を飛び越えて、見晴らしのいい屋上に来た。遮る物の無いここは、見張りをするには調度いいからね。

「よつ、士郎。お疲れさん」

「これ、どうぞ」

僕が声を掛けて、士郎が返事をするよりも先にリヴィオが何かを士郎に放り投げた。士郎は振り向きながらそれをキャッチした。

「これは、差し入れか？　ありがとう」

あれは……缶コーヒーか。

日本の四季の中で最も温暖な気候の春でも、この時間帯は結構冷える。長い見張りで体が冷えているだろう士郎への気遣いか。流石はリヴィオ、細かい気配りが光るね。

「ヴァッシユさんも、どうぞ」

「うん、サンキュ」

リヴィオは僕にも缶コーヒーを渡してくれた。僕が脱衣場でポットとしていた時に買ったのかな。

「風呂はどうだった？」

缶の蓋を開けて一口飲んでから、士郎はそんなことを訊ねてきた。何かがあったなら真っ先に言うだろうし、何も無かったってことかな。

そう思っ、気兼ねなく率直な感想を口にした。

「いや、スンゲーいい体験させてもらったよ。ありがとう、士郎」

「いいお湯でした。士郎さんもどうですか？」

リヴィオがそう言うと、士郎は数度瞬きして、周囲を見回しながら思索している。

「そうだな……学生達が動く前に、入っておいた方がいいか」

「そうしなよ、見張りは僕らが変わるからさ」

士郎も10日以上、シャワーも浴びていない。垢や汚れは洗い流

せる時に流しておかないと、見た目も悪くなるし衛生面でも宜しくない。

それになにより、あんなに気持ちいいんだから、入らなきゃ損だ。幸いにして、プレイヤー達が仕掛けて来る様子もないし。

「任せた。頼むよ、2人とも」

「うん、任された」

「ごゆっくりどうぞ」

士郎を見送って、そのまま僕とリヴィオが見張りに立つ。

どうか今日ぐらいは、平穩無事に済みますように。

そう祈りながら、明けて行く空と、朝焼けに染まって行く街並みを眺め続けた。

朝7時。

ホテル嵐山の食堂は、朝食の為に集まった麻帆良学園の生徒達で賑わっていた。

「それではみなさん、いただきます」

「いただきますーすー!!」

教職員を代表してネギが食前の挨拶の音頭を取ると、それに続いて生徒たちの元気な声が返ってきた。

ネギも自分のテーブルへと向かい、食事を始める。しかし、その表情は普段とは違い、僅かに強張っていた。

それもそのはず。今回の修学旅行では魔法関連の事件が起こりうることは事前に聞かされていたものの、あれほど凶悪な者達関わって来るとは夢にも思っていなかったのだ。

ネギたちは一先ず、修学旅行をそのまま続けることになった。その際に、土郎やリヴィオから告げられた事は以下の通りだ。

1つ目は、戦いなどの荒事は全面的にリヴィオ達に任せ、ネギ達は極力戦いを避け、自身や近くの生徒達の安全を確保することに専念すること。

2つ目は、敵に狙われている木乃香だけでなく、親書も絶対に守ること。昨晩の誘拐を鑑みるに主な狙いは関西呪術協会の長である近衛詠春の一人娘、近衛木乃香であると考えられるが、親書の紛失も絶対に避けねばならない事柄だ。

敵の目的も正体も未だ判然としていないが、恐らくは西洋魔術師の存在を忌避し、東西の断絶と然る後の対決を狙う過激派と考えるのが妥当だろう。ならば、実際に誘拐されかけた木乃香のみならず、東西の友好の懸け橋となる親書と、和平の使者であるネギの身の安全も重視するのは当然のことだ。

故に3つ目は、ネギは決して無茶をせず、万が一戦いになっても守りに徹し、可能であれば逃走するようにと言いつけられた。

これを言われるまで、ネギは自分自身もまた今回の件で重大な役割を担っているのだという自覚が無く、言われた時には大きな衝撃を受けた。

京都市の話聞いた当初は、和平の使者といっても京都へ行くための方便だ、という程度にしか考えていなかったのだ。

その事を自覚した今、ネギは自分の双肩に委ねられていた重責に、どうしたらいいのか、そもそも未熟な自分にこんな大任が務まるのかと思ひ悩んでいた。

「はあ……」

美味しい食事も心の癒しとはなり得ず、箸もあまり進まず、大きな溜息が出た。

「な〜に暗い顔してるのよ」

「はうつ！？」

急に、背中を強く叩かれた。

直前に掛けられた声で誰がやったかは分かる。というよりも、ネギにこういうことをするのは多分3 - Aでも1人だけだ。

「あ、アスナさん。なんですか急に……ビックリしちゃいましたよ」「何って、アンタが暗い顔してたから声掛けてあげたんじゃない。ありがたく思いなさい」

そう言っつて、アスナはそのままネギと同じテーブルに着いた。どうやら、ネギの食が進んでいない内に、アスナは自分の食事を終えたようだ。

遠くから雪広あやかを始めとした数人の生徒の叫び声が聞こえたが、それに気付くよりも先にネギはある事が気になり、アスナにそれを訊ねた。

「そうだ、このかさんはどうですか？」

木乃香は現在、最も危険な立場にある。昨夜もあれだけの騒ぎに巻き込まれても起きないほど、強力な催眠魔法を掛けられていた。その後遺症があったり、或いは自分達も見落としていた別の術が掛けられていたりしているのではないかと思ったのだ。

すると、アスナは大きく深い溜息を吐いた。

「あっち、見てみなさい」

「はい？」

言われるまま、ネギは明日葉が指した方を見た。すぐ近くの、アスナ達の班のテーブルだ。

そこには

「せつちゃん　これ、これなんてどうや？」

「お、お嬢様。私は、その……もう、甘い物は結構ですので、お嬢様だけで召し上がってください」

「え。そんな、いけずやなあ。そんなこと言っても、せつちゃんも2つ3つぐらいしか食べてへんやん」

「それは、そう……ですね。では、私ももう1つ、頂きます」

なんとも、微笑ましい光景が広がっていた。

満面の笑みを浮かべて刹那と楽しそうに食事と会話を楽しむ木乃

香と、木乃香の勢いに戸惑い、苦笑を浮かべながらも、どこか嬉しそうに接している刹那の姿があった。

これは、リヴィオからの4つ目の言い付け　　というよりも、頼まれ事だ。

「君達の間どんな事情があるかは知らない。けど、お嬢さんを守るためだ。どうか……君が一番近くで守ってくれ。頼む」

リヴィオたち3人は誘拐犯に襲われないように、修学旅行生全員を守るため、必然的に距離を置く必要が出てくる。しかしそうなれば、最も危険な木乃香の守りが疎かになってしまう。

だから、リヴィオは刹那に木乃香を守るように頼んだのだ。木乃香の専属護衛でありながら必要以上に距離を置き、護衛としての役目を蔑ろにしていたとも取れる刹那の態度を責めるどころか、そうなった心情を慮って敢えて頭を下げたのだ。

それに続いてヴァッシュや士郎まで頼み込んでくるのだから、真面目な刹那がこれを断れるはずが無かった。

ネギとアスナからすれば、木乃香から旧友である刹那と、どうすればまた昔のように仲良くなれるのだろう、という悩みを聞いていただけに、これは嬉しい誤算だった。きっと、これを切っ掛けに、また昔のような友達になれるだろう。

「良かったですね。このかさんと刹那さん、また、仲良くなれそうで」

「それはそうだけど、あれを近くで見せられ続けるこっちの身にもなって欲しいわよ」

溜息混じりに文句を言いながらも、アスナも満更ではない様子だ。友人の吉事を邪険に思う人間などいないだろう、と理屈で考えながら、それに実感がまるで伴わないことに、ネギは一抹の寂しさを覚えた。

その後、雪広あやかと佐々木まき絵を中心とした集団による、最

早恒例となつたネギの争奪戦が始まつた。

慌ただしい日常に戻つて、何時の間にかネギは非日常の悩みに苛まれなくなつていた。

雪広あやかと佐々木まき絵を中心とする面々によるネギ争奪戦が始まると、他の生徒達は静観に回るか囃し立てるかに回つていた。

その中で、宮崎のどかはどうしたものかとおろおろしていた。

「ほら、のどか。なにをしているんですか。早くネギ先生に声を掛けないと、別の班に取られちゃいますよ」

のどかの隣に座っている綾瀬夕映は、青い顔をしながらそう言つて、のどかにネギ争奪戦に参加することを促した。

「で、でも……2人とも顔色悪いよ？ 大丈夫なの？」

「あ……あの2人に当てられちゃつたのと、ちよつと、悪い夢見て寝覚めが悪いだけだから、そんなに心配しなくてもいいよ」

のどかが心配して言つと、早乙女ハルナは暗い表情で額に手を当てながら、夕映と同じくのどかを促した。

のどかも、普段の2人の元気の良さを知っているだけに、このテーブルに他のクラスメートがいれば、今日こそはすぐにでもネギに声を掛けに行つただらう。

だが、生憎と他の同じ班のメンバーは、アスナが既にネギと同じテーブルにいて、木乃香と刹那も小用で席を離れてしまつている。

「そうです、こんなのはその内良くなります。だから、今はネギ先生ですよ、のどか。折角、早朝から人形相手に練習していたのにそれを無駄にするんですか？」

夕映が重ねてそう言つと、のどかは2人の顔を見て、ネギがいるはずの人垣を見て、何度も大きく深呼吸してから頷いた。

「う、うん……それじゃあ、行って来るね」

友達の厚意を無駄にしない為にもと、のどかは何時にも増して気合を入れて、ネギ争奪戦へと向かった。

それを見届けると、ハルナと夕映はなんとなく話し始めた。

「……ハルナも、夢見が悪かったですか？」

「あー、ゆえつちも？ 実は、どんな夢を見たのか覚えてないんだけどさ、なんか気持ち悪いっていうか、モヤモヤするっていうか……スッキリしない感じでさー……」

「そうですね……。私の場合、はつきり覚えているだけに不快ですね」

互いに顔を突き合わせて、同時に深く大きな溜息を吐く。

どうやら彼女らは、楽しい修学旅行に似つかわしくない、かなり悪い夢を見たようだ。

それが本当に夢だったのかは、定かではないが。

「荷物の準備はできたか？」

「うん、ばっちり」

土郎さんからの確認の問いに、ヴァッシュさんは親指を立てて軽妙に応じた。

「それじゃ、行きましょうか」

今日の麻帆良学園の修学旅行の日程は、隣県である奈良の寺社仏閣を巡ることになっている。その見学地まで、向こうはバスで移動

することになっている。

こっちは、その気になれば走って追いつけないこともないけど、体力を必要以上に消費してしまうし、何より目立ってしまう。護衛の上で、目立つ事はあまり得策ではない。そういうことで、俺達も車両で移動することになった。

ホテルのフロントに外出する旨を伝えて鍵を預け、出入り口の自動扉をくぐり、駐車場へと向かう。そこに、俺のサイドカーが止めてある。

「へえ、サイドカーか」

サイドカーとは思っていなかったのか、それとも単に珍しいからか、土郎さんがそんな声を漏らした。

「ノーマンズランドでも乗ってたんで、こっちでもこれに乗っているんです」

ポンポン、とハンドルを叩きながら答える。

サイドカーはヴァッシュさんと2人旅の時は勿論、1人旅の時も大荷物を運ぶのに便利だから愛用していた。車だと小回りが利かないし、何よりいざ銃撃戦をやる時に車体が邪魔になるからな。

「ヴァッシュ。走行中のバイクから、動いている標的に当てられるか？」

すると、土郎さんがそんなことをヴァッシュさんに訊ねた。

最初は何の事かと思っただけど、多分、席決めだろう。

「突風でも吹かない限りは、かなり自信あるよ」

普通、高速で移動しながらの狙撃は、近寄って並走でもしていない限り困難を極める。俺も、バイクに乗りながら戦うのなら狙撃よりも弾をばら撒くことを選ぶ。

けど、そんな常識はヴァッシュさんには通用しない。銃の技術に関して、この人に常識を当て嵌めようなんていうのは間違いだ。

土郎さんもそれを承知の上で、あくまで確認として訊いたのだろう。驚きもせず、すぐに頷いた。

「それじゃあ、俺がりヴィオの後ろで、ヴァッシュがサイドでい

いか？」

「オツケー、任せてよ」

「了解です。……っと、あっちもそろそろ出発か」

士郎さんの言葉に頷いた直後、離れた場所から大型車両特有のエンジン音が複数聞こえてきた。

出遅れては不味いと、すぐに全員が所定の位置に乗り込む。

ここで、ついヘルメットを被るのを忘れて、出発直前に士郎さんに指摘されて慌てて被った。ノーマンズランドだと道交法なんてなかったからなあ、面倒臭い。

そんなやり取りを挟んでから、俺達はバスを追って奈良へと出発した。

「到着しました、っと」

修学旅行の今日の日程の最初の場所である東大寺の駐車場にサイドカーを停める。

後部座席から降り、周囲を見渡す。少なくとも現状、視界の及ぶ範囲に魔術的な異常は見られない。

「何時の間にか先回りしちまったな」

同じくサイドカーを降りて駐車場を見回していたヴァッシュが、そう呟いた。

俺達は最初、バスの後ろに付いて走っていたが、リヴィオが日本の道や交通に不慣れなこともあって、途中で見失ってしまった。やむを得ず、東大寺までの最短経路を走って来たのだが、結果として俺達の方が先に着いたようだ。

向こうはバスだから、小回りが利かず赤信号にも引っかかり易いのだろう。

流石に、白昼堂々とバスを襲撃されていることは無いはずだ。

それならば少なからず騒ぎ起きているはずだし、あまり距離が離れていなかったはずの俺達が、それに気付けないはずもない。

「別に問題無いだろう。彼らが来るまでにこれのチエックをしよう」俺達は今日、目を活かして遠距離からの監視・警戒役に就くことになっている。その際、最低でも俺達同士での通信手段の確保は必要不可欠になる。

そこで活躍するのが、ヴァッシュから貰った通信機だ。

懐からごく一般的な万年筆を取り出し、ヴァッシュやリヴィオから互いに5mほど距離を開ける。全員が立ち止まったのを確認してから、ヴァッシュが小さな声で呟いた。

「聞こえるかい、2人とも」

直には微かにしか聞こえないが、万年筆からはヴァッシュの声がはっきりと聞こえてくる。

そう、この万年筆こそがヴァッシュから貰った通信機だ。そして、ヴァッシュの通信機は左耳のピアスだ。

ヴァッシュのピアス型通信機は骨振動によって音声の送受信を行うという優れ物で、俺が貰った万年筆内臓の小型通信機も、物を書きながら通信が可能という逸品だ。

これらはノーマンズランドでも『ロスト・テクノロジー』と呼ばれる高度な技術の産物で、こんな物を持って旅しているのはヴァッシュぐらいだそうだ。

「感度良好、問題ありません」

次いで、リヴィオの声が通信機から聞こえてきた。リヴィオを見ると、左耳に付けてある白いカバーに手を当てている。

リヴィオも通信機を持っていると言っていたが、まさか。

「……それ、通信機だったんだな」

「ええ。失くすことも壊すことも滅多にありませんし、結構便利ですよ」

通信機に向かって呟くと、すぐにリヴィオから返事が返って来た。

そりゃ、頭に直接付けていけば失くすことなんてないだろうし、壊されることだってまずあり得ないだろう。

それでも、頭に埋め込む理由が分からない。そこまでする必要があったのだろうか。

そのようなことは考えつつも、通信機に問題が無いことを確認して再び集合し、次は今後のスケジュールを確認する。

「増援の神鳴流は？」

昨夜、ネギ達が近衛木乃香を連れて部屋に戻った後、俺達はホテルの電話を借りて、リヴィオの雇い主であり関西呪術協会の長である近衛詠春に連絡を取り、今回の事の次第を伝え、増援を求めた。

その返答は、呪術師は難しいが神鳴流の剣士ならば、というあまり良いものではなかった。相手も腕利きの呪術師だというのだからこちらにも呪術師の援軍が一人でも欲しかったが、どうやら関東魔法協会から西洋魔術師が来ているということは、俺が思っている以上に難しい問題だったらしい。

それから、この時に今回の首謀者 正確には、ケン・アーサーに依頼人と呼ばれた女だ が何者が判明した。

名は天ヶ崎千草。両親を20年ほど前に西洋魔術師が関わった事件で失っていることから動機は十分、1ヶ月前から行方不明だったことからアリバイも無い。ほぼ間違いないだろう。

ちなみに、決め手は『猿の着ぐるみ』だった。何の事だか非常に気になったが、聞く前に話は終わってしまった。

「10名が今朝方、現地入りしている手筈になっています。御令嬢の護衛に2名、他8名は分散して他の生徒の守りに付く手筈になっています」

「100人以上を守るには、ちょっと数が少ないな」

リヴィオが言うと、ヴァッシュが不満というよりも不安を零し、俺も内心でそれに頷く。

明確にテロリストの類に狙われている以上は、護衛対象以上の数の護衛を用意するか、護衛対象を一つの場所に集めて留まってもら

うのが理想的だ。

だが現実には、細かく班に分かれて動き回る護衛対象と、その十分の一の数にも満たない極めて少数の護衛だ。不安になるのは当然だろう。

「それは、仕方が無いですよ。昨夜の内にこれだけの数の腕利きを集めるだけでも大変だったでしょうから」

リヴィオの詠春へのフォローに、素直に頷く。

自身の部下である呪術師を使えず、リヴィオしか動かさないつもりだったのに、外部から腕の確かな者を一晩で10人用意した近衛詠春の手腕は、確かに見事といえるだろう。

加えて、今のところは人員不足が致命的ではない可能性が高い。あまりそのことを考えなくても大丈夫だろう。

「それに、昨日の今日で奴らが仕掛けて来る可能性も低い。奴らも俺達という予想外の要素に対して、何らかの対策を講じるのに時間が必要だろうからな」

「けど、その読みを読んで、敢えて今日、奇襲を掛けて来る可能性もある……：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：もあ……：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：もあ……：：：：：：：：：：：」

俺が考えを口にするのと、ヴァッシュがすぐに返して来た。

俺が考え付くようなことは、ヴァッシュも思いつくか。

奴らに不確定要素が増えても、こちら相手は戦力や意図を完全に把握できていない。だからこそ、想定すべきは常に最悪だが、その最悪すらも、奴らの思考や行動を読み切れる保証もない。

「だから、俺達がいっかり見張らないと、だな。敵の戦力が未知数な以上は、ケン・アーサーが動けないというだけでも気は抜けない」

「OK、任せてよ」

言っと、ヴァッシュは力強く頷いて、心強い笑みを浮かべた。

恐らく今の問いも、俺やリヴィオに油断が無いかを確かめるものだったのだろう。

相変わらず、こつこつ荒事が嫌いなくせに、こつこつ時には誰よりも頼もしい。

「視力、聴力、嗅覚には自信がありますけど、魔術の類に疎いのが不安ですね、俺は」

すると、意外な所でリヴィオが弱音を吐いた。

俺の判断する限りでは、現状で最高の戦闘能力の持ち主がこんなことを言うとは予想外だ。恐らく、昨夜の襲撃を気付けなかったことに負い目を感じて、そのせいで弱気になってしまっているのだろう。

何事も、それに臨む人間の気構えが重要だ。もっと、強気なぐらいに自信を持ってもらわなければ。

「あの時、幾らプレイヤーに気を取られていたとはいえ、俺もヴァッシュも気付けなかったケン・アーサーの剣気を察知した君の勘は本物だ。魔術であっても、それを使うのは銃や剣と同じで人だ。魔術という言葉に惑わされなければ、大丈夫さ」

俺がリヴィオの魔術に対する苦手意識を払拭させようとそう言うのと、ヴァッシュも一言だけ、リヴィオに言葉を送った。

「士郎の言うとおりだよ、多分。それにさ、リヴィオ。君は『最強』だろ？」

その言葉を聞いた途端、リヴィオは目を見開き、驚愕……というよりも、何かを思い出したようだった。

「……そうでした。どうもすいません、ヴァッシュさん、士郎さん。つい弱気になっちゃって」

ヴァッシュの言葉で完全に立ち直ったようで、リヴィオはそう言うって頭を下げてきた。

リヴィオにとって『最強』という言葉がどのような意味を持つかは知らないが、自信は取り戻してくれたようだ。

俺とヴァッシュが、気にするな、と声を掛けると、調度、駐車場に麻帆良学園で貸し切っている観光バスが入って来た。

「バスが来たか」

「んじゃ、僕らも行きましょうか」

「はい」

そんな感じで、修学旅行2日目のスケジュール、奈良で東大寺を始めとした歴史的建築物などの見学は、幸いにして無事に終わった。問題があるとすれば、ネギが自分のクラスの生徒に告白されて呆然自失状態となっていることか。

こう言っただけは告白した少女には悪いが、間が悪い。せめて、この修学旅行が終わってからにして欲しかったが、仕方があるまい。

ともかく、プレイヤー達に動きがあるとすれば今夜だ。

奴らの主力と思われるケン・アーサーの力に大きな制約が掛かる朝から夕方にかけて、仕掛けて来る可能性は極めて低い。そして、こちらの準備や打ち合わせも既に今日の内に済ませた。

明日、ケン・アーサーの実力が発揮できない日中に、こちらは打てる手を全て打つ。

仮にも謀反を企て、修学旅行の日程を調べ上げるほど用意周到な連中が、この程度の事も想定していないとは思えない。ならば、奴らにとって最後の好機となる今夜に仕掛けてくると見るべきだ。

もし今夜ではなく明日の日中に仕掛けて来るのなら、それはケン・アーサーと同等以上の実力者がまだいるということになる。そうでなければいいのだが、その可能性も考慮しておくべきだろう。

「エミヤの旦那、見回り終わりやした！」

すると、足元から声を掛けられた。階段の踊り場ならともかく、ここはホテルの屋上。ならば、足元から声を掛けて来る相手は1人しかない。

「カモミールか、ご苦労さん。様子はどうだった？」

視線を外から足元へと向けて声を掛ける。そこには、オコジヨ妖精のアルベール・カモミールがいた。

カモミールにはホテルの内部に何らかの異常はないか、その小さな体を活かして隈なく調査させていた。

今朝は特に異常は無かったが、俺達が旅館を離れている内に何か

が仕掛けられている可能性もある。事前に俺も解析してあるが、それでも見落としや何かがある可能性はゼロではない。

俺が声を掛けると、カモミールは器用に俺の体を伝い上り、右肩に乗った。

「へい、特に変わった様子も、不自然な物とかもありやせんでした。ただ……」

「ただ、なんだ？」

何も問題は無い、と言っておきながら言い澀んだことが気にかかり、すぐに聞き返す。

アルベールの表情は、相変わらず小動物とは思えないほど感情が豊かに現れている。今は、どうにも疲れきって、げんなり、としているように見える。

「妙にゴキブリが多かったんすよね……」

「ゴキブリが、多い？ どういうことだ？」

「いや、色んな部屋の隙間にいるわいるわで。日本の諺、1匹見たら30匹はいるっていうのは本当みたいッスね」

苦笑いを浮かべながら言って、溜息。

どうやら、かなりの数のゴキブリと遭遇したようだ。小動物であるカモミールが大量のゴキブリと連続で遭遇するのは、人間の想像を絶するほどのストレスだろう。

だが、おかしい。外国の安宿ならともかく、日本の平均以上のホテルに、ゴキブリが大量に蠢いているとは想像しにくい。

「……分かった。それじゃあ、このメモをネギに届けてきてくれ。」

明日の予定が書いてある。もし何か聞きたいことがあれば、お前を通じて連絡を取ってから、ロビーで会うように伝えてくれ」

ある可能性を考慮したが、俺1人でも調べられることなので敢えて伝えず、懐からメモを取り出してカモミールに渡す。

「合点でさ！……あー、でも、今の兄貴にそんな余裕あるか、ちょっと怪しいッスねえ」

ビシッ、と敬礼で応じた直後、カモミールは腕……ではなく、前

足を組んで難しい顔をした。

そのことは俺も察しが付いているが、残念ながら色恋沙汰に疎い俺にアドバイスもできるとは思えない。

この場合は、ヴァツシユに任せるのが一番かな。人生経験豊富だし。

「告白されたんだよな。本来なら祝ってやりたいところなんだけどな。まあ、頑張れって伝えておいてくれ」

「了解ッス！」

再び返事をして、カモミールはメモを口に銜えてホテル内へと走って行った。

さて、近くにゴキブリはいないかと屋上を歩き回り、早速1匹見つけて逃げられるよりも先に踏み潰す。

クチャリ、という生々しい音を立てて、命を絶やす。

足をどけて、靴のつま先を、トントン、とコンクリートの床に当たてて靴裏の残骸を落とし、ゴキブリの死骸に目を向ける。

こんな、本来ゴキブリが出て来るような所ではない場所で、探したらあっさりとゴキブリが見つかった。これだけでも異常だが、やはり、ゴキブリそのものも普通ではなかった。

生物に干渉する魔術は苦手だが、ここまで内部を露出させてしまえば、解析するまでもなくすぐに分かる。

悪い予想が的中していたことを悟り、舌を打つ。

これに対してどう手を打つべきかと考え始めた、直後、車が急ブレーキを踏む音が聞こえてきた。

慌ててそちらへと向かい、下を見る。

そして、眼下の光景を見て、目が点になって、すぐに溜息が出た。

「……あのバカ」

溜息混じりに呟いて、すぐさま非常階段へと向かった。

やっぱり、あまりあいつを頼りにしない方がいいんだろうか。

ホテル嵐山の外で、ネギはその場に座り込んで呆然と虚空に目をやっていた。

10年という短い人生の中でも、他者から愛の告白を受けるということは相当な衝撃だった。

今まで短い人生の殆どを勉学と修行にのみ打ち込んできたネギには、当然ながら恋愛経験もなければ、そもそも恋愛について考えたこともなかった。

自分自身が宮崎のどこかのことをどう思っているのか、ということも考えられず、ネギはただただ虚空を眺めていた。

ネギは自分なりに恋愛について考えを巡らせて、ふと、両親の事に思い当たった。

ネギに両親との記憶は無い。母はネギを産んで間もなく夭逝し、父も同じ頃から行方知れずだ。父には数年前に1度だけ会えたものの、その時は酷く混乱していて、まともな会話すらできなかった。

だが、従姉のネカネやスタンから両親の事は聞かされていた。それによれば、ネギの両親は一大恋愛婚だったそうで、父が惚れ込んだ母を守り抜いて口説き落とし、相思相愛にまで至ったとか。

「お父さんは、どうしてお母さんを好きになっただらう……」
ポツリ、と呟く。

今回の事の参考にしたい、というわけではなく、ただ純粹に、知ることのできない両親の思い出を知りたいという思いが、口をついて出た

「ナーウ」

急に、前から何かの鳴き声が聞こえた。どうやらぼんやりとしている内に、何かが近くにきていたようだ。

見ると、道路を挟んで反対側の道に、顔が大きな黒猫がネギを見ていた。

猫は日本のとある有名映画にも描かれているように、魔法使いの使い魔としてポピュラーな存在だ。ネギの故郷にも猫を飼っている魔法使いの家庭は多く、ネギも猫に触れる機会は多かった。

黒猫もネギは猫が好きだと分かるのか、或いは人懐こいのか、もう1度鳴いて道路を渡り始めた。

すると、そこにタイミング悪く自動車走って来た。

運転手は猫に気付いていないのか、スピードを緩める気配もブレーキを踏む気配もない。

このままでは、黒猫が車に轢かれてしまう。

「猫さん！」

ネギは慌てて、黒猫を助ける為に背負っていた杖を構え、魔法を唱える

「危ない！！！」

よりも早く、赤い人影が道路に突っ込んだ。

「え？」

予想外の出来事に、ネギは呪文を唱えるのを忘れてしまった。

現われた赤い人影は、黒猫を拾い上げると、車の運転手がブレーキを踏むよりも先に素早く跳躍して、自動車から身をかわした。

その軽やかな身のこなしはまるで軽業師のようで、ネギもつい見惚れてしまった。

「うはっ　つとぉ！？」

が、身をかわした先に電柱があり、赤い人影　　ヴァッシュは頭から電柱に突っ込んでしまった。

ガツン、という鈍く痛々しい衝突音がネギの耳まではっきりと聞こえた。あんな勢いでぶつかってしまったのは、万が一もありえるのではないだろうか。

「大丈夫ですか、ヴァッシュさん！？」

「あ、あははは……ダイジョーヴ」

ネギが駆け寄って声を掛けると、ヴァッシュは頭を右手で擦りながら、左手でピースサインをしながら応じた。

どうやらそれほど怪我は負わなかったようだが、昨夜のダメージが回復したばかりということもあり、ネギは心配だった。

「大丈夫でも、念の為診てもらいましょうよ。僕らの学校の保険の先生もいますから」

「ウウル又アアアゴ」

ネギが言うと、それに続くようにヴァッシュに抱えられている黒猫も低い声で鳴いた。

「……この子も行けって言ってるのかな」

「きつと、そうですよ」

言うと、ヴァッシュはネギと黒猫の顔を交互に見て、やがて観念したように頷いた。

「んー……それじゃ、お言葉に甘えさせてもらおうかな」

ヴァッシュは黒猫を放すと、無事に路地裏へと消えていくのを見送ってから、ネギに連れられて保険医の居る部屋へと向かった。

途中、ネギの他にヴァッシュの一流スタントマンと見紛うばかりの動きを目撃していた少女　朝倉和美にヴァッシュとネギは質問攻めに遭ってしまったが、それ以外は何事もなく、ヴァッシュにも大きな怪我はなく、無事に収まった。

残る問題は、ネギが宮崎のどかの告白にどう応えるか、ということぐらいだろう。

第七話

天ヶ崎千草の一派の隠れ家の居間に、千草と雇われた者達が全員集合し、テレビモニタに映されるプレイヤーの使い魔から送られてくる映像を見ていた。

昨晚のナイン達の暴走による破壊も、何とか建屋を半壊させる程度で収まり、周囲の人間に気取られることもなく、プレイヤーらが寢室を失う程度で済んでいた。

「いいのかい？ 手札を見破られてしまったようだけど」

衛宮士郎を映していた映像が途絶えると、フェイト・アーウェルンクスはプレイヤーに問うた。

隠密裏の監視というアドバンテージが、初歩的で稚拙なミスで失われてしまったとなれば、追及をするのは当然だろう。

だが、そのことを十分に承知しながら、プレイヤーは全く動じずに答えた。

「ウェルンくん、手札と一口に言っても、色々と種類があるんだよ。今回の見せ札だから、寧ろバレなきゃ困るのさ」

「そういうものかい」

「君みたいに、手札が全部切り札ってぐらい強力なものばかりの人には分からないだろうけどね」

プレイヤーの言葉に一応は納得したのか、フェイトはそれ以上言葉が発さず、会話をやめた。

他の面々は、ソード以外はプレイヤーの言葉を理解できていない様子で、頭の上に疑問符が浮いているような様子だ。

「それで、どうしますの〜？」

月詠が言うと、それに呼応するかのように、千草は机を強く叩きながら立ち上がり、声を荒げ、参謀役を務めているプレイヤーを睨んだ。

「ヴァッシュとかいうのは情報不足で結論は出ず仕舞いで、相手に

は長の懐刀までおる！ 日が明けたら益々不利になつてまう！ やつたら、今夜仕掛けるしかないやろ！？」

切羽詰まった千草の声には、明らかに焦燥と不安が込められていた。

相手が当初の思惑通り子供だけなら、せめて今日だけでもゆつくりと修学旅行を楽しませてやろう、という仏心／余裕も彼女にはあつただろう。

だが、現実とは違う。標的である近衛木乃香の守りには、近衛詠春が直々に雇っているという凄腕の用心棒リヴィオ・ザ・ダブルファング、そして偶然に居合わせた、そのリヴィオに匹敵するほどの実力者と考えられる2人の乱入者【イレギュラー】、衛宮士郎とヴァッシュ・ザ・スタンピードがいる。

彼らの未だ底の知れない強さは、その片鱗だけを見せつけられた千草にも理解出来ていた。だからこそ、焦っているのだ。

明日になつてしまえば、恐らく相手も本格的に近衛木乃香を守る為の手段を打つて来るはず。そうなれば、近衛木乃香の誘拐は困難を極め、千草の悲願も叶わなくなつてしまう。

そんな千草の心中を見透かしてか、プレイヤーは余裕の表れかのようにうつすらと笑みを浮かべながら、すらすらと澀み無く答えを返した。

「駄目ですよ、今から仕掛けたら臨戦態勢の彼らと鉢合わせになる。そうなれば、ミス・クライアント。貴女、死にますよ？」

プレイヤーの言葉を聞いて、千草は声を詰まらせた。

実際に、千草は自身の着ていた強化服とも言える着ぐるみの頭を、一瞬で粉碎され、腰を抜かした。

あの時、リヴィオが銃口を僅かでも下にずらしていたら。

そのように考えてしまい、プレイヤーの言葉に反論ができない。

「まあ、やってやれないことはないですけど、『神秘は秘匿すべし』。僕らはこの絶対原則を破るつもりはありませんので、仮に今夜どうしても仕掛けるのであれば、ナイン達を連れて行けません。あの

ホテルが瓦礫の山になってしまいますから」

「……随分な言い草やなあ。雇われの身で、自分らの都合で仕事放棄かいな」

「これは手厳しい。しかし、別の策を用意してありますので、ご心配なく。心強い助っ人も明日には間に合いますので」

力が入っていない声での干草からの指摘をあつさり流して、プレイヤーは伝える必要のある事を事務的に述べる。

この様子を見て、まるで他人事のような振る舞いだ、と思ったのは彼を良く知る者達で、すぐにいつもの事だと納得した。

「ま、これがどーなるーとどーでもええけど、ワイはリヴィオの兄ちゃん何としても戦いたいんや。それだけは頼むで」

「うちは刹那先輩もええけど、衛宮はんやヴァッシュはんにも興味が湧いてきましたわ」

小太郎が自身の対戦希望を言うのに続いて、月詠も自らが戦いたい相手を列挙した。それを聞くと、プレイヤーは、ふむ、と頷いて、E2とソードに振り返った。

「E2、ソード。君達は？」

「お前に任す」

「お天道様が上っている内は戦えん。それだけは忘れるな」

プレイヤーは2人の返答に頷くと、背後に控えるニン達には教えて何も聞かず、フェイトへと同じ問いをした。

「ウエルンくんは？」

「まずは君の策というのを聞かせてもらえるかい？ 僕は誰と戦うことになるうとも構わない」

「誰か、是非とも戦ってみたい相手とか、興味の対象とかは？」

「無い」

機械的で無機質なフェイトの返答に、プレイヤーは彼の求めに応じて話を次の段階へと進める。

「そうかい。うん、了解だ。それじゃあ、僕の策をお話しましょう」
不敵な笑みを浮かべ、左手の掌に刻まれている何かの印を見てか

ら、プレイヤーは自らの策を話し始めた。

麻帆良学園の保健の先生に怪我の具合を見てもらって、ちょっと腫れてるけど安静にしていれば大丈夫だとお墨付きを貰って、僕はネギと一緒に部屋から出た。

それから、僕は屋上にいるはずの土郎の所に行こうと思っていたんだけど、ネギに頼まれて、近くの休憩スペースで悩み相談に乗ることになった。

ネギが僕に持ちかけて来たのは、恋愛相談だった。土郎から聞いた通り、ネギが受け持っているクラスの女の子　宮崎のどか、という子から告白されたらしい。

何とも微笑ましい、そこはかとなく青春っぽい悩みだ。こういう状況だけれども、なんだかついっつい嬉しくなる。

誰かを想うだけでなく、誰かに想われるっていうことは、とても素晴らしいことだと思って思うから。

けど、恋愛相談か。

……………　今度は、失敗したくねえな。

「想いを伝えるなら、早ければ早いほどいいよ。けど、自分が相手の事をどう想っているか分からないなら、まずは考えることかな」
あの時と同じ言葉を、ちょっと言葉を付け足してネギに伝える。

「考える、ですか？」

不思議そうな顔をして聞き返して来たネギに、頷いて、言葉を紡

ぐ。

「うん。その子がどんな子で、どんなことをしていて、今までどう見ていたか。改めて考えて、自分の想いを確かめるんだ。それでも分からないなら、正直に時間をくださいって言えばいいさ」

恋愛に限らず、人が誰かと共に生きる為に必要なこと。

それは、伝えること、伝わること。相手が隣で、息をして、存在していると知ることだ。

その為にも、まずは自分の考えや想いを知って、その上で相手に伝えなきゃいけない。そうでなければ、良く考えもせずには繰り返す思いつきの言葉だけでは、何も伝わらないから。

分かってくれたのか、ネギは元気良く、笑顔で頷いてくれた。

「ありがとうございます、ヴァツシュさん！ 取り敢えず今晚、じっくりと考えてみます！」

「うん、役に立てて良かったよ。厄介事は僕らに任せて、思いつきり考えな」

「はい！」

元気に返事をして、ネギは自分の部屋へと戻って行った。

それと入れ替わりに、今度は士郎が来た。多分、近くで様子を覗いてたんだろつ。

「流石、年長者は言うことが違うな」

「茶化さないでくれよ、士郎」

言いながら、士郎は冷たい缶コーヒーを渡してくれた。

「素直に褒めているのさ。俺じゃあ、何も言えなかったらどうから苦笑しながら言う士郎に、そうだろうなあ、と納得する。」

士郎は堅過ぎるといっつか、鈍過ぎるといっつか、両方兼ね備えたスーパー朴念仁といっつか、そんな感じがする。旅先で女の子に好かれても本気で気付いていなかったし。

まあ、今はそのことは置いて。缶コーヒーを開けて、一口飲んでから、言葉を返した。

「いや……褒められたもんじゃないよ、本当。エミリオの時は、何

も上手くいかなかったから……」

「エミリオ？」

つい、口から零れ落ちた、懐かしい名前。

本人自身さえも忘失してしまった、数十年前に出会った少年の名前。

自分でその名前を口にしたら、思い出が溢れて止まらなくなって、自然と口が動き続けた。

「ああ。パン屋の一人息子でね、これが天才的な人形遣いだったんだよ。あの頃は……ネギと同じくらいだったかな。まるで人形が本当に生きているような技は、神業でも表現が足りないくらいだったよ」

地図も食料も水も失くした状態で1週間近く砂漠を放浪して、何とか街まで辿り着いたけど、街の入り口で飢えと疲れで倒れてしまった僕を拾って介抱してくれたのが、エミリオの親父さんだった。

見ず知らずの旅人である僕に、とびきり美味しいパンを御馳走してくれた。あの時のパンの味は、きつと、死んでも忘れない。

その親父さんの一人息子が、殆ど人形を使った腹話術でしか会話をしようとしなくて、ちよつと変わった少年　エミリオだった。

「みんなで見えたなあ、エミリオの人形練り。マシユウ、オリビア、レイモンド、シヨーン、ミランダ、ガルペス、シニータ、キヤメロン、メリツサ、ユウノ、ファイファー……イザベラ。みんな、エミリオの大ファンだった」

腹話術でしか喋ろうとしないエミリオだったけど、意外と街の人達とは上手くやっていた。それは紛れもなく、彼の巧みな人形練りの腕前によるものだった。

人形が生きているように錯覚してしまう程の精緻な技巧は、見れば誰もが心を奪われた。その中には、当然、エミリオが気になっていた女の子　イザベラも含まれていたわけ。

あの時も、僕は、ネギに伝えたのと同じ言葉をエミリオに送った。「……何か、あったのか？」

怪訝そうな表情で、士郎が訊いてきた。

隠すつもりなんて最初から無かったけど、こんなに簡単に看破されるなんて、相変わらず僕って分かり易いみたいだ。

それはそれとして、エミリオに起こった『何か』だ。

実を言えば、僕は、何も知らない。

エミリオとイザベラ、他の街のみんながその後どうなったのか、何も。

「分からない。僕が街を発った後に……何かがあって、エミリオが魔人になっただってこと以外」

「魔人……？」

不思議そうな顔で繰り返した士郎に、頷き返す。

エミリオは、変わり果てていた。自分の名前すら忘れて、殺人すらも自らの人形練りの行程の一部として加えた“魔人”と成り果てて、僕の前に現れた。

人形練りの技巧だけでなく、人形作りの腕前にも磨きを掛けて、ナイブズの放った刺客として僕の前に立ちはだかった。

G U N G - H O - G U N S に名を連ねる魔人として。

そこまで思い出して、これ以上はこの事に関係無いから、そこで思考を打ち切る。

「ま、この場合肝心なのは、同じようなアドバイスしたはいいけど、エミリオとイザベラが結ばれなかったってことかな」

「そうだったのか」

「……いや、もしかしたら結ばれていたのかも。もう、確かめようがないけど」

士郎が頷いてから、言い直す。

あの時、エミリオは自分の命を捨ててまで『イザベラ』を助けよう……いや、彼女と一緒にしようとした。

あの想いが、一方的なものだったとは思いたくない。

すると、士郎が歩み寄って来て、僕の肩を軽く叩いた。

「今度は、見届けよう」

「……うん、そうだね」

確かに、その通りだ。

エミリオの時は、それで今でも後悔してるんだ。だったら、今度は最後まで見届けて、その間、僕に出来ることをしよう。

「ところで、見張りはどうしたの？」

ソファから立ち上がりながら土郎に問う。僕はてっきり、今も屋上で見張りをしているものだから思っていた。

「お前が電柱にぶつかったの見て、心配して降りて来たんだ」

「そうだったのか、悪いね」

あの場面を上から見られてたのか、気付かなかった。

けど、こうして見張りを離れてまで様子を見に来てくれたってことは、取り敢えず、目立った異常は無いつてことでいいのかな。何かあったなら、土郎の事だから僕は頑丈だからって放っておいて、そつちを優先するだろうし。

「ヴァツシュさん、土郎さん、ここにいましたか」

こつちが一段落した所に、調度良くリヴィオが通りかかって来た。僕らを探してみたいんだけど、どうしたんだろう。

「リヴィオ。どうかしたのか？」

「それが、カモが俺達に話があるって」

「カモ……アルベルが？」

カモと言われて、一瞬、賭場なんかで金を巻き上げられる方の『カモ』を連想したけど、すぐにネギ達がアルベルの事を『カモ』と呼んでいたことを思い出した。

リヴィオもアルベルの事を愛称で呼ぶようにしたのか。何時の間にか。

「……調度いいな。俺からも話したいことがあったんだ」

土郎がそう言って頷いて、僕らはアルベルが待っている部屋に戻った。

さて、アルベルもそうだけど、土郎の話もなんだろうね。

「オレっちからの提案なんですがね、こっち側の戦力を少しでも増やす為に仮契約をするってのはどうですか!？」

カモミールからの話を聞くことになって、開口一番、放たれた言葉がそれだった。

なるほど、確かに、緊急に戦力の増強を行うにはそれも一つの手だ。

だが、それには色々と問題があるんだが……。

「パクテオー?」

不思議そうな顔で、リヴィオが今回のキーワードを聞き返した。

魔法関係者とはいっても関西呪術協会の所属だったから、仮契約について知る機会が無かったんだらう。

初心者のリヴィオにもなるべく分かり易いように、仮契約について説明する。

「魔法使いと従者の契約を結ぶことで、それによって色々の特典があるんだ。従者は魔法使いの元に瞬間移動できるようになったり、一種のテレパシーができるようになったり、アーティファクトという特殊なアイテムがもらえたり」

「え、瞬間移動!？」

「俺も本で読んだだけだが、そう書いてあったな」

その点は、未だに俺自身も信じられていないところだ。俺の元居た世界では空間転移魔術は超高難度の魔術で、長距離の空間転移となればそれはもはや『魔法』の領域であるとすらされている。

それを、ただ契約するだけで誰でも簡単にできるようになるなど、如何にこの世界の魔法と俺の世界の魔術が色々と違っているとはいえ、俄かには信じ難い。

「いや、それで合ってますぜ。どころか、他にも特典満載でさ!」

「へえ、そうなのか。そういえば、詠春さんも瞬間移動ができる道具があるとか言ってたけど、あれって冗談じゃなかったのかな？」
俺の説明をカモミールが保証して、リヴィオも納得した。

リヴィオが言っている道具については、この日本の魔術は独自の発展を遂げているようだから良く分からないが、この世界ならあってもおかしくは無いだろう。

俺のいた世界で『空間転移が簡単にできる魔術礼装』なんか作ったら、それだけで封印指定にされてしまってもおかしくないぐらいだが。やっぱり、色々と違うな。

しかし、この状況で仮契約をするには、1つの大きな問題がある。
「……確か、オコジョ妖精が仲立ちをする場合、仮契約の儀式は口付けだよな？」

「え？」

俺の言葉に、ヴァッシュとリヴィオが素っ頓狂な声を出した。

そりゃあ、そうだよな。この面子で、契約方法がキスなんだから。
「へい。その通りでさ」

「俺に、ヴァッシュやリヴィオとそれをしると？」

やけにあっさりと頷いたカモミールに、そう言い返す。

正直、この歳で、同年代の同性とキスをするというのは、精神的にかなりキツイ。

それ以前に、俺には他人に魔力を供給できるほどの量的な余裕は無いし、何より並行世界人が更に別の並行世界の異星人と仮契約を結べるのかも怪しい。

もしも、実際にやって失敗して、結局はキスをしただけ、というオチは……嫌だ。

「か……勘弁してくれ」

「ど、どうしてもっていうなら………やっぱりヤダ！」

リヴィオもヴァッシュも、流石にこの条件にはドン引きだ。

「落ち着いて下せえ。やるのは旦那たちじゃなくて、ネギの兄貴ッスよ」

すると、俺達の反応に苦笑しながら、カモミールはそう付け足した。

「ネギに？」

出てきた意外な名前に、思わず聞き返す。しかし、ネギの魔力量は軽く見積もっても俺の数倍。それならば、仮契約の特典も十全に活用できるだろう。それが理由ならば、分からないでもない。

それでも、俺達の拒絶に対する根本的な解決になっていない気がする。子供相手なら俺達も妥協するとも思っているのだろうか。

「そうでさ。兄貴はかなりの魔力の持ち主ツスから、あと5人ぐらいは余裕ツスよ！」

カモミールは得意げにそう言った。

だが、ある部分が引つ掛かり、納得するよりも先に疑念が生じた。

「5人？……その5人は、誰だ？」

「兄貴のクラスの子たちでさ。見たところ、とんでもない素質の持ち主もいるみたいツスから、上手くいけば戦力大幅アップ間違い無しツスよ！」

まさかと思つて聞いてみれば、案の定だ。

この場にいる俺達3人と、ここにはいない桜咲刹那を合わせても4人。神楽坂明日菜は既にネギと仮契約を結んでいるから数には入れない。

俺達全員と仮契約することを仮定しているならば、その人数は4人のはずだ。なのに、カモミールは5人と言った。

無意識に多めの人数として「5人」と言っただろうが、それによつて、俺達以外の人間と仮契約をさせる前提であることが想像できた。

だが、まさかネギのクラスの生徒達を対象にしているとは思わなかった。

ヴァッシュとリヴィオも同様らしく、呆れ顔で困り顔だ。俺は、多分鬻めっ面だな。

「……ど、どうか、しゃしたか？」

俺達の反応が予想外だったらいい。カモミールは元々小さな目を点にして、俺達の顔色を覗き込んで冷や汗をかいている。

今まで旅して来てつくづく思ったが、やっぱり、俺達の感性はこの世界の基準からかなりずれているようだ。

俺達からすればこの世界は吃驚するぐらい平和で、良く言えば穏便、悪く言えば能天気な考えの人間が多い。

だからだろう。こういう時に、感じ方や考え方に大きな齟齬が生じてしまう。

「あゝ……アルベール。例えば、なんだけどさ」

「へい」

すると、俺が考え事をしている間に、ヴァツシュが話を進めている。俺達とカモミールの間の感性の齟齬を埋めるのに、何か良い考えがあるんだろうか。

「僕がそこらへんを歩いてる子に銃を持たせて、この子にも一緒に戦ってもらおう、なんて言い出したら、どう思う？」

「幾らなんでも滅茶苦茶ツスよね、それ!？」

ヴァツシュの突拍子もない例え話に、カモミールは驚きながらも即座に突っ込みを返した。

それは俺も同意見だが、成る程、ヴァツシュも上手い例え方をしたもんだ。

「そうだね。僕もそう思うし、それぐらい、君の提案にはビックリしたよ」

「えっ……?」

ヴァツシュの言葉に、カモミールは声を漏らして、きょとんとしている。

どうして、女生徒達をネギと仮契約させる"そこらへんの子供に銃を持たせて戦わせる、ということになるのか、分からないのだろう。

やっぱり、この世界の住人と俺達は、感性が大分ずれている。

子供に何か道具を持たせて戦場に連れていく、という点が同じだ

つて、俺にはすぐに分かったから。

「戦いの心得も何もない子供を巻き込んだら、死ぬぞ」

すると、リヴィオが容赦の無い言葉を叩きつけた。或いは、もっと直接的に言わなければ伝わらないと考えたのだろうか。

それには俺も賛成だ。カモミールも今のヴァッシュの例えを理解できていないみたいだしな。

「ケン・アーサーは魔術の秘匿について厳格な男だ。戦いの場に居合わせたら非戦闘員だろうと、通りすがりの目撃者だろうと口封じに殺して、死体も残さないだろう」

魔術師が神秘の秘匿を行う上で、神秘の行使を一般人に目撃された際の対応として、記憶の操作と抹殺が一般的な選択肢だ。大半の魔術師は事を不必要に荒立てようとせず、殺さずに済むような状況なら記憶の操作を選ぶ。

だが、中には目撃者の抹殺という選択を躊躇わない者がいる。それが、封印指定執行者だ。

彼らの職務は希少な魔術回路や魔術知識を有する者を保護の名目の下に捕獲することだが、同時に神秘の秘匿を厳守する為にも集められた者達でもある。

実際、俺が封印指定になった元々の理由も、俺の持つ特異な魔術回路の回収ではなく、魔術の秘匿厳守の原則の放棄によるものだ。

それによって、俺は奴以外の2人の執行者にも、当然のように命を狙われた。

だが、その中でもケン・アーサーはとびきりだ。

奴は『必殺の執行者』とも呼ばれ、封印指定を受けた魔術師を決して生きたまま捕獲しようとせず、必ず殺しているらしい。その中には殺す必然性の無かった者だけでなく、殺さないようにと厳命された者すらもいるという。

あの男と戦って負ければ、必ず殺される。そう考えて間違いないだろう。

未だに殆ど思い出せていないが、僅かに思い出せた『あの男と戦

った』という事実からも、あの男の危険性が分かる。

間違っても、素人を実戦の場に引きずり出して遭遇させて良い手合いじゃない。

「マ……マジ、っすか？」

そんな男がいるなんて信じられない、という気持ちと言われなくても伝わるぐらい動揺した表情と声で、カモミールが聞き返してくる。

迷わず頷き、警告を告げる。

「本当だ。間違っても、戦いと無縁な子供を連れて行けない」

「同感ですね。足手纏いを連れてあのサムライと遭遇しちまったら、守るだけで精一杯……で、済むかどうか」

リヴィオ、気持ちは分かるがもうちょっと言葉を選んでくれないか。

「足手纏い……っすか」

「御令嬢を守る盾か囷にでもするのなら別だけどな。そんなこと俺達もさせたくないし、お前だって本意じゃないだろう？」

「そ、そりゃあ、勿論！」

恐らく悪気とか皮肉とか一切無く、ただ純粹に事実を告げているだけなんだろう。リヴィオの言葉は物騒なものだが、声に棘は無いけど、もうちょっと言い方を工夫してほしい。こういう会話もノーマンズランドでは日常的なものなのかもしれないけど。

それはそれとして。

カモミールの提案は却下、ということとで決定した。ケン・アーサーがいなくても、女の子に戦わせるなんてことは絶対にしたくないからな。

それで、そろそろ俺からも話そうかという時に、ヴァッシュがカモミールに話しかけた。

「アルベール、君が不安で心配だっというのは分かったよ。正直、良く知りもしない僕らに任せっぱなしじゃあ不安にもなるよね」

その言葉に対して、俺に反論できる余地は無い。

俺とヴァツシュは唐突にカモミールやネギの前に現れて、今回の関係者であるリヴィオに協力するという名目で加わっただけの、いわば通りすがり。

そんな、殆ど赤の他人に自分達の命運を任せるなんて、不安に思うのは当然だろう。

「だけど、信じてくれ。君達を守る。絶対にだ」

力強く、ヴァツシュは言い切った。

それに応えて、俺とリヴィオも頷く。

絶対と言える保証なんか無い。けれど、絶対に守りたいという想いがあることは確かだ。

だから、俺は俺の持てる全てを費やして、その幻想を実現させてみせる。

「……改めて、信じさせて貰いやす。宜しくお願いしやす」

言って、カモミールは頭を下げた。今更だけど、小動物とは思えない、人間臭い動作だ。

「こちらこそ、宜しくだ。で、俺からも話がある」

出来るだけ明るい口調で言って、重くなっていた場の空気を少しでも変えるようにする。

これから話すのは、良い報告じゃないんだが。

「何か分かったのか？」

ヴァツシュからの問いに頷いて、すぐに答える。

「このホテルに奴らの放った使い魔が大量に送り込まれている」

「本当ですか？」

リヴィオが聞き返して来たが、そんなに驚いているようにも見えず、あくまで確認だろう。

狩る側が一度見つけた獲物の罫わだかまを監視し続けるのは当然、ということもリヴィオも分かっている。

「ああ。使い魔と言っても監視する以外には使えないようなものだが、こっちの動向を常に把握されているとかなり不味い」

本人達が監視しているのなら、そこから逆転の一手を手繰り寄せ

られる可能性もあるが、使い魔による監視ではそれは無理だ。

優秀な魔術師なら、使い魔を生きたまま捕獲して、使い魔と術者の間のパスを辿って術者の居場所を掴む、なんてこともできるだろうが、生憎と俺にはそんな器用な真似は出来ない。使い魔であるか否かの判別で精一杯だ。

「それで、その使い魔ってどんなの？」

「これだ」

問われて、ズボンのポケットから使い魔の死骸を入れたビニール袋を取り出す。

踏み潰した上にポケットに入れていたから死骸は砕けた体と体液が混じってグチャグチャだが、これが何の生物かを判別することはできる程度には形を保っている。

「うええ！？」

「ゴキブリ、ですか」

カモミールが死骸の気色悪さに悲鳴のような声を出した一方、リヴィオは全く動じずに死骸の名を当てた。

日本では茶色または黒い悪魔とか、最も気色の悪い生物とか言われている、ゴキブリ。

しかし考えてみれば、その生命力と素早さ、どこにいてもおかしくない潜在能力と、人によっては撃退よりも逃避を選択してしまう程に嫌悪されている存在というのは、監視に使うには持って来いの逸材だ。

仮に使えたとしても、俺は絶対に使いたくないが。

「へー、こんな虫も使い魔ってのに出来るんだ」

「確か、視覚とか聴覚を自分と同調させるんだったっけ。面白い技術ですね」

ヴァッシュとリヴィオはゴキブリの死骸を見ながら、そんなことをのんびりとした口調で話している。

「……なんか緊張感無いけど、これ、かなり不味いんだぞ。まず間違いない、このゴキブリはケン・アーサーや、例の天ヶ崎千草の使

い魔じゃない。同時に何十匹もの使い魔を同時に使役するような術者まで奴らの中にいるってことだ」

ケン・アーサーは使い魔を使わず、天ヶ崎千草が使役する使い魔は猿の式神という話を聞いている。そうなると、自然、3人目の術者の存在が浮き出てくる。

小さな虫とはいえ、同時に数十匹の使い魔を操るといのは生半可な魔術師に出来ることではない無い。相当な腕の術者がいると考えるべきだろう。

「って！ ど、どうすりゃいいんすか！？ ホテルの中じゃ四六時中見張られてるってことツスよね！？」

すると、どうやら思考が停止していたらしく、漸く思考が追いついた様子のカモミールが大声で言いながら縋り付いてきた。

しまったな、パニック状態にさせてしまうとは思わなかった。

「落ち着け。今更じたばたしてもしょうがない。それに、ここはホテルだぞ？ 奴らが俺達の知らない間にチェックインしている可能性だってある」

元から守るに不向きな場所だから諦めろ、とネガティブな方向から説得するしか出来なかった。

言ってから、これでは余計に不安にさせてしまうかと思っただが、カモミールはひとまず落ち着いてくれた。

「それで、どうするんだ？」

カモミールが落ち着いたのを見計らって、ヴァッシュが俺に対応を訊ねてきた。これには、今度はカモミールを慮って必要な部分だけを伝えた。

「どこまでこっちの情報が渡っているのかは分からない。だから、俺達は落ち着いて待ち構えているしかない」

気になるのは、屋上でゴキブリを簡単に見つけられたことだ。物の少ない屋上にも、ゴキブリが隠られるような場所は多い。

それなのに、探して簡単に見つけられたのは、奴らが見つけさせた、ということか。監視をしている使い魔を見つけさせて、俺達の

対応を観察、若しくは誘導しようというのだろう。

「んじゃ、僕も見張りをするよ」

「俺も。これからは3人で、休み無しで行きましょう」

言って、ヴァッシュとリヴィオは立ち上がった。それに続いて、俺も立ち上がる。

時刻は間もなく日が沈むという頃。日が昇っている内に話せてよかった。夜になれば、片時も気を緩められないからな。

「カモミール。ネギと、桜咲と神楽坂には、いざという時は無理をしない程度に頑張ってくれ、とだけ伝えてくれ」

部屋を出る前に、カモミールにネギ達への伝言を頼む。

「……それだけ、ツスカ？」

今回の話で出てきた事に一切触れていない伝言の内容に、カモミールは不思議そうな顔で聞き返して来た。

勿論、こんな内容にした理由はある。

「この情報を伝えても、あの子達にはマイナスにしかならないだろう。不安に苛まれるか、気を張り詰め過ぎて逆に能力を落としてしまうか。或いは、さっきのお前みたいになってしまいか。俺達みたいにこういうことに慣れてれば別だろうけどな」

そのように説明すると、カモミールは納得し「合点でさ！」と気持ちのいい返事をしてネギ達の下へと走って行った。

俺達はそれぞれ別々の場所へと散り、見張りに向かう。

さあ、正念場だ。来るなら来い。

「ところで、さっきの見せ札どーたら、っちゅーのはなんやったんや？」

作戦会議を終えて、思い出しかなのような小太郎からの問いに、プレイヤーはすぐに答えた。

「彼らに、監視させていた僕の使い魔を見つけさせたんだよ。そうしたら、必然、警戒するよね」

「そら、そうですね」

月詠が鷹揚な口調で相槌を入れる。

そこから、プレイヤーも身振り手振りを交えて解説する。

「いつ仕掛けて来るか分からない、どこにいるかも分からない敵に、自分達だけは一方的に監視されながらの警戒態勢だ。彼らには必要以上に精神力と集中力を酷使して、消耗することになるだろうね」

これが、プレイヤーが手札の一つを見せ札として晒した理由だ。

知らなければ、それは『無い』のと同じだ。だが、知ってしまったら、それは確かに『在る』ものとして認識され、意識せざるを得なくなる。

『自分達が監視されている』という事実を、より分かり易く、より印象的に相手に知らせ、それへの対応を誘発させる。

知ってしまったら何かせずにはいられない。それが人間という生物の本能、知的好奇心であると、プレイヤーは考えている。

「……地味な手やな」

千草の率直な感想に、プレイヤーは恭しくお辞儀をして答えた。

「良く言われますとも。しかし、万全の状態の彼らと、消耗した状態の彼ら。どちらの方が戦い易いですか？」

「それは、そうやな」

プレイヤーからの補足の意味も含めた問い掛けに、千草は納得して頷いた。

その様子を、E2は床に寝転びながら、ソードとナイン達は壁際に立ちながら見ていた。フェイトはある男との連絡の為に、一時席

を離れている。

「しかし、果たして奴らが一晚の寝ずの番程度で鈍る手合いかどうか」

ソードが小さな声で呟くと、ナイン達はそれに頷いた。

夜は更け、やがて明ける。

太陽は昇り、そして沈む。

夜を照らすのは、月の光と星の光。

月光は、古来より狂気を齎すとされる。

狂気、狂乱、狂奔の時は、月華の下こそが相応しい。

故にこそ、そこに生きる者には、夜の闇が心地よい。

しかし、あらゆる光の届かない、闇の底で蠢く者達もいる。

闇の底に慣れた目では、日の光は強過ぎるし、星明かりさえ眩し過ぎる。

闇の住人の出番は、もう少し先だ

第八話

「やあ、お嬢さん。調子はどうだい？」

白い男の言葉に、少女は呆然と頷いた。

白い男はそれを見て、ニタリ、と笑い、手を差し出した。

修学旅行3日目の朝を迎え、宮崎のどかへの返事も考え終わって、ネギは先日までよりも一層気を引き締めていた。

それも当然。今日は、長らく緊張状態が続く日本の東西の魔法使い達の和解への第一歩となる日であり、その大任を果たすのがネギ自身なのだから。

「兄貴、今日の筋書きはちゃんと覚えてやすか？」

着替え終わった所にカモが話しかけてきた。彼もいつもより気合が入っているように見えるのも、気のせいではないだろう。

「うん、勿論！ この親書は、絶対に僕が届けないといけないからね」

言つて、懐から近衛近右衛門学園長から受け取った親書を取り出す。

出発する時には何でも無い物のように思っていたが、今は心なしか、当初よりも重く、大きく感じる。これの持つ意味を考えれば、尚更だ。

「そうっすか。……で？ あの子の事はどうするんすか？」

すると、カモが唐突に、ニヤけた顔をしてそんなことを訊ねた。

「カ、カモくん!？」

カモの言っている事の意味を察し、ネギは狼狽した。歳の割にしっかりと知っているといえ、やはりまだ少年。自分の色恋沙汰を囁し立てられれば慌てふためいてしまう。

その様子を見て、カモは笑みを浮かべた。

「冗談っすよ。そういうことは、この大事を乗り越えてから好き放題やりましようぜ！」

言って、カモは逃げるようにしてネギに先んじて部屋から出て行った。実際、怒ったネギに追われているのだが。

少し追い掛けて、ネギは呆れながらも、いつもと変わらずに接してくれるカモの態度に、少しだけ不安と重圧が和らいだことを感謝した。

「ようし、頑張ろう！」

声に出してそう言って、ネギはまず朝食を食べに食堂へと向かった。

今日の筋書きは、そこからだ。

ヴァッシュさんと土郎さんと3人で一晩、寝ずの番をやっていたが、結局、奴らは仕掛けて来なかった。

これには少し拍子抜けしたが、もしかしたら、俺達を長時間の緊張状態に追い込み、睡眠時間も奪うことで精神力と体力を少しでも削る算段だったのかもしれない。

だとしたら、舐められたものだ。

ヴァッシュさんは言うに及ばず、俺と土郎さんも、一晩の寝ずの

番で参るほど軟じゃない。寧ろ、じっくりと気を研ぎ澄ませて、準備運動に調度いいくらいだ。

そう言ったら、土郎さんには「俺は、そこまではいけないな」とか苦笑混じりに言われちまったけど。

とにかく。土郎さんの情報が確かなら、これで奴らからケン・アーサーという強力なカードが失われた。未知の戦力で奴に匹敵する実力者が1人はいるだろうけど、そう何人もいないだろう。

そして、俺達はネギへの課題とか修練とか、そういう太平楽な思惑を取り払って、表立っても積極的に介入する。

今日の日中は、余程の事でもない限り盤石。奴らの取り入る隙なんか無い。

それでも来るなら、二度と変な気を起こせないようになる程度に返り討ちだ。

「リヴィオ、準備はどうだ？」

通信機から聞こえてきた土郎さんからの呼び掛けに、すぐに答える。

「万事、抜かりありません。ヴァッシュさんと土郎さんは、フォロ―をお願いします」

「オツケー、任せてよ」

ヴァッシュさんからの返事を聞いて、通信終わり。

俺が今いるのはホテルの入り口前。土郎さんはホテルの屋上で、ヴァッシュさんはホテルの外の少し離れた場所様子を探っている。更に、ホテルのロビーには詠春さんが集めた腕利きの神鳴流の剣士の皆さん。

こういう配置になっているのは、これから俺がネギを、彼にとって正当に連れ出す為だ。その為に、土郎さんから勧められて俺も帽子とマントを仕舞って別の服に着替えてある。

……というか、詠春さん、近右衛門さん。修学旅行中にネギがどうやって総本山に行くかの手筈ぐらい事前に整えておいて下さいよ。本当に東西の和平をする気があるのかと、主に東の長の考えを疑

つてしまう。和平の使者が来ることが急に決まったのも、半分以上あちらの思い付きだったって言うし。

「まあ、あれこれ考えてもしょうがない。そろそろ行くか」

余計で煩雑な考えを打ち切って、正面からホテルへと入る。

さあ、今からが正念場だ。

食堂での朝食が終わり、今日の判別自由行動でどの班がネギ先生を連れ回すかを掛けた熾烈な争奪戦が始まるうという兆候が見え始めた、その時。突然の乱入者に3・A生徒の全員が目を奪われた。

現れたのは、見るからに日本人離れた風貌の男だった。

灰色の髪に、180cmを超す長躯がまず特徴的だが、男が着ている黒衣と、顔に入れてある刺青が何よりも注目されていた。

生徒達は男が何者か、どうしてここに来たのかとざわめいている。その中で、刹那と明日菜だけは緊張した面持ちになっていた。

自分に向けられている奇異の目と、聞いていてあまり気持ちの良くない言葉。それらを無視して、男はネギの傍に歩み寄った。

「君が、ネギ・スプリングフィールド先生かい？」

「はい、そうです」

男が問うと、ネギはやや緊張しながらも戸惑うことも無くすぐに返事をした。

このやり取りだけで、超鈴音や龍宮真名などの一部の勘の鋭い、若しくは洞察力のある生徒は違和感を覚えていた。

「驚いたな、本当にこんな子供が教師なのか。っと、失敬。俺はリヴィオ・ザ・ダブルファンク。近衛詠春さんからの指図で君を迎えに来た。話は聞いているかい？」

「はい」

男　　リヴィオは、あたかも初対面であるかのようにネギへと挨拶し、簡潔に用件を述べた。それに、ネギも迷わずに頷いた。

「このかさん、僕と一緒に来て下さい」

「ふえ？」

ネギが木乃香を呼ぶと、呼ばれた本人は心底不思議そうな声を返した。

それを聞いて、リヴィオは木乃香へと歩み寄り、事情を説明した。「はじめまして、木乃香さん。俺はリヴィオ。君のお父さんにお世話になってるんだ」

「あ、はい。はじめまして。そうなんや、お父様の知り合いの人なんやなあ」

「そうさ。それで、君のお父さん、詠春さんに頼まれて、君とネギ先生を迎えに来たんだ。修学旅行中にすまないとは思うけど、緊急の用件でどうしても家に来て欲しい。この事は、昨夜の内に学年主任の……新田先生、だったかな？ その人を通じて、君に話が行ってるはずなんだけど」

これこそが、リヴィオ達が用意した、今回の件をスムーズに解決する為の『筋書き』だ。

修学旅行中とはいえ、親元を離れていた生徒が地元に来ていて、それを親が担任と一緒に実家に呼び戻すというのは、珍事ではあっても、有り得ないほど不自然なことではない。

そうすることによって、近衛木乃香を現状で最も安全な場所である呪術協会の総本山で保護し、同時にネギが親書を届けるのが狙いだ。

普通なら話が拗れそうなものだが、木乃香の祖父は麻帆良学園都市の最高責任者であり、京都の父親も地元の名士として麻帆良学園の一般教師にも知られている。

数多くある名家の柵を原因にしまえば、今回の『筋書き』もすんなりと話が通った　はずなのだが、どうやら昨夜の内に木乃香まで話が通っていなかったようだ。

「あれ、そうなんです？　うちは何も聞いてへんけど」

普段ならば、謹厳実直を地で行く新田先生が、生徒への伝達事項を忘れることは無かっただろう。だが生憎、昨晩は夜な夜な『大枕投げ大会』なるものを催していた一部生徒の捕獲と指導に当たっていた為、このことを失念していたのだ。

そして現在も、間の悪いことに、昨夜の生徒達の問題行動をホテルの責任者らに謝罪し、頭を下げているところだった。

そんなことは露知らず、リヴィオとネギは木乃香に今日の『筋書き』について改めて説明した。

「そういうわけですから、このかさん、今日は僕と一緒に来てもらえますか？」

「え〜……。うち、今日の自由行動楽しみにしとったのに……」

ネギが言うと、木乃香は不満を露わに言い返す。
それを聞いて、それでも、リヴィオは譲らずに木乃香の決断を求めた。

「すまないね。けど、本当に緊急の用件なんだ」

「お嬢様、早くお支度を。お父上をお待たせたら、叱られるかもしれませんよ」

リヴィオが言ったのに続いて、隣で話を聞いていた刹那がリヴィオ達を援護した。

「せつちゃんまで……分かったわ。ちょっと待っててくれますか？」
刹那からも促されたのが決め手になって、木乃香は溜息を吐いて、

リヴィオやネギと共に実家に戻ることを決めてくれた。

いざとなったら強引にでも連れて行こうかと考えていただけに、リヴィオはこれに胸を撫で下ろした。

「ああ。けど、なるべく早く頼むよ」

ネギと一緒にロビーで待っていると伝えて、リヴィオは早速ロビーへと向かった。道すがら、多少のアクシデントはあったものの、順調であることをヴァッシュと士郎に伝えた。

リヴィオが去った、その後。ネギやカモ、刹那や明日菜も、誰も

気が付かない所で、ある少女の目が怪しく光った。

同じ頃、一般宿泊客用の食堂で白スーツの男が朝食を食べていた。「今朝、あの子にまた会っておいで良かったよ」
そう呟いて、味噌汁を飲んだ。

順調に事が運んでいることに、刹那は安堵した。

木乃香が攫われかけた時はどうなる事かと思っただが、これで心安だ。

万全の守りで固められている総本山に行けば、襲撃の心配は無くなる。例えあつたとしても、『サムライマスター』の異名を持つ英傑、近衛詠春に敵う者など、たかが謀反人の戦力にはいるまい。

先程までは一度実家に戻ることを渋っていた木乃香も、刹那も同行することを伝えると、すぐに前向きになってくれた。これならば、道中、余計ないざござが起きる心配も無いだろう。

後は木乃香の身支度が整うのを待つだけだ。

自分の身支度を終えた刹那は、木乃香に声を掛けるより先に、念の為にと、ホテルのロビーで神鳴流の先輩剣士から渡されたある呪符を取り出した。

神鳴流の剣士の中には剣術だけでなく、呪術に通じている者も少なからずいる。刹那もその一人で、渡されたその呪符を使うことができる。

少々考え、これはいざという時にすぐ使えるようにしておこうと、制服のポケットに仕舞う。

荷物に入った鞆を肩に掛けて、木乃香に声を掛けようと、そちらに振り向く。

すると、木乃香は班の他のメンバーの早乙女ハルナ、綾瀬夕映、宮崎のどかとなにやら話し込んでいた。

その会話には加わっていない明日菜に近寄り、どうしたのかと声を掛ける。

「早乙女さん達、お嬢様と何を話しているのでしょうか？」

「さあ？ パルと夕映ちゃんが、話があるって、このかと本屋ちゃんを捕まえてさ」

明日菜も状況が分からないらしく、刹那の問いには答えられなかった。

しかし、それに対して不満は懷かず、そうですか、と頷く。

「……お土産の相談でしょうか？」

ハルナ達が木乃香を交えて何を話すか、自分なりに考えた結果を口に出す。それに、明日菜も頷く。

「このかは地元だもんね。……桜咲さんのオススメのお土産って、何かある？」

「え？ 私のオススメ、ですか？」

まさか自分にその話題が振られるとは思っていなかったのだから、刹那はつい聞き返してしまった。

「うん、そう。高畑先生だけじゃなくて、バイト先の人達にも何かお土産を買おうと思ってるさ」

今思いついたような、取って付けたような、そんな理由。口調からも、それが察せられる。

どうして態々、そうまでして刹那と会話をしようとするのか。

明日菜の真意は見えなかったが、せめて無礼に当たらないようにと、刹那なりのオススメを教えた。

「そう、ですね。それなら、お菓子……ハツ橋はどうでしょう？」

「ハツ橋か……硬いのと柔らかいのとあるみたいだけど、どっちが美味しいの？」

「私は、柔らかい方が好きですね」

「そっか。じゃあ、それにしようかな」

お土産の話が終わった、調度その時。木乃香達の方も話が終わった。

「アスナ！ 桜咲さん！」

「は、はい？」

「どうしたのよ、パル？」

突然、ハルナに大声で呼ばれ、ビックリしながらも刹那と明日菜は返事をした。

しかし、そんな自分達の様子は歯牙にもかけず、というか、知ったことじゃないとばかりに、ハルナは見るからに高揚したまま話を続けた。

「青春つてなんだ!？」

「え？」

「それは……振り向かないことさ!!」

刹那が素っ頓狂な声で聞き返したのを聞き流し、明日菜が言い返そうとすることさえも待たず、ハルナは自分で答えを口にした。

突然何を言い出すのだと、刹那は明日菜と共に呆然としたが、一方で、木乃香が楽しそう／嬉しそうにしてそれに頷いているのに気付いた。

「そういつわけで、午前中……いえ、夕方ぐらいまではこのかさんの実家行きをボイコットしてしまおう、という方向で決まりましたので」

怪しげなパック飲料『世紀末求水主の力水』を片手に、夕映がハルナの言わんとしていたことを伝えてきた。その隣で、のどかはおどおどとしている。

それを聞いて、刹那と明日菜はギョツとした。

屋上から周囲を警戒しているが、怪しい人影は見られない。

やはり仕掛けて来るならば移動中かと考え、今度は真下の方を見る。少し視線を動かすと、あるものが目に入った。

それは、近衛木乃香を中心とする6人の少女達だった。

「リヴィオ、近衛木乃香が班の子と一緒に外に出たぞ！」

目に映った信じ難い光景を、確認すると同時に通信機に向けて怒鳴っていた。

「……しまった！」

一拍の間を置いて通信機から返って来た声を聞いて、俺も非常階段を駆け下り、途中で飛び降りた。

まさか、彼女達が非常口から外に出て、しかも事前に呼び寄せていたらしいタクシーに乗り込むとは、考えもしていなかった。

理由は、恐らく、今日を楽しく過ごしたい、といったところだろう。

彼女達の不満と行動力を侮ったのと、筋書き通りに上手く行っているからと生じた油断の、二重のミス。

やはり、徹夜明けで判断力と注意力に鈍りが出ているか？ それとも、ここまで突飛な子供の行動力は大人には予測しえないものなのか？

悔いつつも全力で走り、正面玄関でリヴィオと合流する。タクシ一の発進には、リヴィオも間に合わなかったようだ。

「くそっ！俺としたことが、なんてミスを……！」

顔を合わせて開口一番、リヴィオは心底から悔しそうに、不甲斐なさそうに言葉を吐き出した。責任感が強いからこそ、俺以上に自責の念を感じているようだ。

「俺達で後を追って、何としてもあの子を連れて行く。リヴィオはネギを連れて先に行ってくれ。他の神鳴流の人達への連絡も頼む」

こういう時は、気に病むよりも行動するべきだ。

そういう意味を暗に込めて言ったが、どうやら伝わったらしく、リヴィオはすぐに平素の落ち着いた様子を取り戻した。

「分かりました。土郎さん、宜しくお願いします」

「任せてくれ」

短く言葉を交わし、お互いに背を向けて持ち場へと走る。リヴィオはホテルの中のネギと神鳴流剣士たちにこの事を伝える為、俺はヴァッシュと合流するためだ。

すると、橋を渡ったところですぐにヴァッシュと合流した。

「どうだった？」

「街に通路が多過ぎて見失っちゃった。タクシーも同じデザインのがたくさん走ってるから、見つけられそうにないよ」

暮盤のように細かく区分けされている京都の街では、向かった方角だけで行き先を絞り込むのは不可能に近い。加えて、観光名所も多過ぎて、大まかな目安もつけられない。

どうしたものかと、ヴァッシュと2人で知恵を絞り合うが、妙案は出てこない。

取り敢えず、一度ホテルに戻って電話を借りることにした。桜咲と神楽坂の電話番号を念の為に控えてあったからだが、態々脱走した彼女達が電話に出てくれるかが疑わしい所だ。おそらく、9割9分は出てくれないだろう。

それでも、今できる唯一のことだ。駄目で元々でもやるしかない。そんなことを考えながら来た道に戻っていると、前方から妙な物が近付いてきていた。

「……ん？」

最初は風船かと思ったが、風船は上に飛んでいくものだ。地面に水平に飛んでくるはずが無い。

目を凝らしてよく見ると、それは、女の子のぬいぐるみのようなものだった。しかも、魔術的な。

ヴァッシュと共に足を止めて、近付いてくる奇怪な物を凝視する。その見た目は見覚えのあるデザインで、警戒心は自然と薄れた。俺達のすぐ近くまで来ると、それは地面に着地した。

「よかった、無事に見つけられました」

「あらかわいい」

それが声を発すると、ヴァッシュはそれを抱え上げた。話をするのなら目線の高さを合わせよう、という気遣いだろう。

「君は……桜咲、か？」

人形の容姿を観察して、桜咲刹那をデフォルメしたような姿だと思ひ、そのように問う。すると、それはヴァッシュの肩に乗って元気に頷いた。

「はい。私、桜咲刹那の式神、ちびせつなと申します。以後、お見知り置きを」

見た目そのままの名前だな。

それにしても、ここまで自我や知能があつて人間と対話可能とは驚いた。この世界での式神とは要するに即席の使い魔らしいが、ちびせつなを見るに即席のホームンクルスと言つた方がしっくりくる。

改めて、この世界の技術力に驚きながらも感心する。知識や研究面ではあちらの魔術師の方が優っているだろうが、実用的な技術に関してはこちらの魔法使いの完全勝利だ。

それはそれとして、ちびせつなから事情を聴く。

今回の近衛木乃香らの脱走は同じ班の早乙女ハルナと綾瀬夕映の2名が画策したことで、それに木乃香本人も乗り気でも止められそうになく、刹那と明日菜はやむなく説得を諦めて護衛の為に同行することを選んだらしい。

その際に、隙を見て呪符からちびせつなを作り出し、この事を俺達に伝えに来た、という次第らしい。そして、この状況でもとても役立つ能力もあるとか。

「私は本体と相互に連絡を取れますので、お2人をお嬢様の下までご案内できます！」

「本当かい！？ いやあ、ヤーパンニンポーには参つたね！ 最高だよ！」

ちびせつなからの思わぬ朗報に、ヴァッシュは彼女を抱え上げてその場でくるくる回って小躍りした。

「いえ、忍法ではないのですが……」

戸惑いながら、ちびせつなは律義にヴァツシュの発言を訂正している。だが、そういうことならヴァツシュのボケは放っておいて早急に動かなければならない。

「そんなことはいいいから、早速後を追おう。彼女達はどこに向かっているんだ？」

「え、あ、はい。行き先は……シネマ村です！」

「シネマ村か。よし、俺達もタクシーで追うぞ」

場所を聞くと、覚えのある場所で確認の手間が省けた。ここから距離がある分、追いつくのがどうしても遅くなってしまうが、やむを得ないか。行き先が特定できただけでも良しとしよう。

やはり一度ホテルに戻ってタクシーを呼ぼうと歩き出した所で、ヴァツシュがちびせつなを抱えながら、あることを訊ねてきた。

「この子はどうする？」

それを聞いて、足を止める。

暫し黙考し、真っ先に思いついた力技以外に案が出なかった。ちびせつなに無理強いをしてしまうが、仕方がない。

「……ちびせつな。タクシーに乗ったら絶対に動くな、しゃべるな。人形で押し通す」

「は、はい。頑張ります」

俺の無茶な頼みに、ちびせつなは、びしっ、と姿勢を正して頷いてくれた。

今からそんなに硬くならなくてもいいのだが、そのことを言おうとするよりも先に、車のエンジン音が聞こえた。見ると、ホテルで人を下ろして来たばかりらしい、空席のタクシーが走っていた。

これは調度いいと、そのタクシーを掴まえることとした。一々呼んで待つ手間が省けるのは大きい。

「ヘイ、タクシー！」

呼び止めるには少々距離があったが、ヴァツシュの大仰なジェスチャーと声のお陰で、無事にタクシーを止め、乗り込むことができ

た。

奴らに見つけられるより先に、追いつけるといいんだが。

ホテル嵐山の二室。

事の顛末を、使い魔を通じて見届けていたプレイヤーは、衛宮士郎とヴァッシュ・ザ・スタンピードがタクシーに乗ったのを確認すると、そちらの視覚リンクを解き、携帯電話を手に取った。

掛ける相手は、依頼人の天ヶ崎千草だ。

「ミス・クライアント。手筈通り、ターゲットをそちらに向かわせましたので」

「そうか、ご苦労やったな。……追手は誰や？」

「予測通り、衛宮士郎とヴァッシュ・ザ・スタンピードです。ただ、ターゲットの腰巾着が今回は頭を回したようで、予定よりも早く追いつきそうです」

「全部が上手くはいかへんか……しゃあないな」

「ご健闘をお祈りします」

簡単に連絡を済ませ、すぐに電話を切る。

今日の行動は、別に必ずしも成功しなればならないものではない。だから、プレイヤーも千草達に何らかのアドバイスをしようとは考えなかった。フェイトがいるだけで十分だろう。

やがて、ネギ・スプリングフィールドとリヴィオ・ザ・ダブルファンクも動き出したのを確認し、そちらを見張らせていた使い魔との視覚リンクを切る。

そして、今度はソードに電話を掛ける。

「ソード、ダブルファンクと英雄子息も動いたから、宜しく頼むよ」「心得た」

「小太郎くんには、精々頑張るように言ってくれるかい？ どうせ無駄な努力だろうけど」

「……自分で言え」

言伝のついでにちょっとした冗談を交え、そこで通話を終えようとしたが、念の為、最後に付け足した。

「真つ昼間なんだから、ちゃんと自重してよ？ 君が一番分かっているだろうけどさ」

「当たり前だ。こんな所で死にたいとは思わん」

あちらから通話を切られる。それ以上言うことは無かったので、プレイヤーにも不服は無い。

ソードは強い。だが、弱点も多い。特に真昼の日本という状況下では、実力の1割も発揮できないはず。だからこそ、万が一にも、そんな事前に分かり切った悪条件の下で死に急がないで欲しかったのだ。

プレイヤーの企てにソードは必要不可欠な存在だし、何よりも友人だからだ。

「そ〜れじゃ、俺らはどうするね？」

必要な連絡が終わったのを理解して、部屋の隅で和菓子を頬張っていたE2がそう言った。

それに応えて、プレイヤーはちょっと考えた。

「ん〜、そうだねえ。彼女やナイン達と一緒に待機でもいいけど……」

ナイン達と、プレイヤーが呼び寄せた心強い増援である『彼女』は、今の段階では待機させている。彼らが力行使するのは、この後の段階だ。

そのことについて、彼らと話し合うのも良い暇潰しになる。

だが、彼女をナイン達と2人きり 厳密に言えば“2人”ではないが にさせておいたら面白そうだし、なにより、ヴァッシュ・ザ・スタンピードの活躍をこの目で見てみたい。

恐るべき魔人達が怯え、竦み、次元違いの存在とまで言っている、

あの平和主義者の戦いの場での在り方を、知りたい。

「ちよつと、冷やかに行こうか」

敢えて本心の部分を語らずに、プレイヤーはE2に告げた。

すると、E2はプレイヤーの帽子に半分隠れた顔を見ると、いつもの気だるげな表情から一転して、意味ありげに笑みを浮かべた。

「そりゃ名案だ、行こうぜ」

口に出して言うまでも無く、本心はある程度の所まで察してくれる。

それを知っていたからこそ、プレイヤーは敢えてあのように言うて、今は楽しみに、嬉しげに頷いた。

第九話

リヴィオから木乃香達が脱走してしまったことを聞かされ、ネギはカモミールと共に慌てふためいた。

まさかこんなことになってしまつてしまうとは、彼女達の担任であるネギも思つてもいなかったのだ。

だが、「ヴァツシュさんと土郎さんが後を追っているから心配するな。君は、君の役目に専念するんだ」とリヴィオに言われ、頷いた。

慌てたところで状況は好転しないし、今、ネギに出来ることも無い。ならば、自分出来ること、為すべきことからやるべきだ。

そう考えて落ち着きを取り戻すと、ネギはリヴィオと共に行動を開始した。

ネギとの班別行動を楽しみにしていた生徒達に挨拶を 特に宮崎のどかには特別に一言を添えて して、ネギはカモミールと共にリヴィオのサイドカーに同乗し、関西呪術協会の総本山へと向かった。

初めて乗るサイドカーの乗り心地や、その視点からの風景を少しだけ楽しみつつ、京都の街を走り抜ける。

途中、赤信号で止まったところで、リヴィオに話しかけた。

「総本山までは、どのくらいですか？」

「そうだな。君達みたいな子供と小動物を連れて行くのは初めてだから、正確な所は言えないけど、1時間ちよつとで着けるさ」

「意外と近いツスね。……エミヤの旦那達、遅くならなきゃいいんすけど」

「そうだな。まあ、ヴァツシュさんの場合、なんかのトラブルに巻き込まれて大騒ぎを起こしそうで、そっちの方が心配だけだな」

リヴィオが言い終わると、信号が青に変わり、再び走り出す。

カモミールが懸念しているのは、木乃香達の到着が遅れて総本山

に着くまでに日が落ちてしまうことだ。夜になれば日中以上に危険が増すというのは一般常識でもあるが、今回の場合は尚更だ。

しかし、リヴィオはあまりそのことを心配しているようには見えない。それだけ、ヴァッシュや士郎を信じているのだろう。

途中、コンビニに寄って小休止となった。リヴィオに買ってもらったジュースを飲みながら、ネギは気になっていた事を訊ねた。

「そつえば、その服って神父さんのですよね？」

リヴィオは昨日までは、お世辞にも綺麗な恰好では無かった。特にポロポロの帽子とマントは、西部劇のガンマンのようで素敵ではあったが、私服としてはどうかという物だった。

だが、リヴィオが今着ている服は違う。先日までのイメージとは全く異なるそれは、キリスト教カソリック派の聖職者が身に纏う黒衣 神父服だったのだ。

「ああ、そうだよ。俺の友達が友情の印について、予備のやつを呉れたんだ」

「友情の印に神父服ですか？」

リヴィオがどこか楽しそうに答えると、カモミールは不思議そうに首を傾げた。確かに、神父服のようなものを軽々に他人に渡しているものなのだろうか。

その疑問にも、リヴィオは快く答えてくれた。

「俺も聖職者 牧師なんだけど、まだ見習いでさ、こういう服を持ってなかったんだよ。それで羨ましがってたら、綺礼が って、俺の友達なんだけど、この服をくれたんだ。綺礼があんなこと言うのも意外だったけど、璃正さんもすんなり認めてくれたもんな。あの時は驚いたし、嬉しかったなあ」

その時の事を思い出しているのだろう、リヴィオはとても楽しそうに笑っている。

だが、それよりも気になることがあった。本人がとてもあっさりと言ったので聞き逃しそうだったが、その衝撃はかなりのものだった。

「……牧師さん、だつたんですか？」

「君が教師ということよりも、ずっと自然だと思っけど？」

ネギが問うと、リヴィオに即座に返された。どうやら、読まれていたらしい。

けれど、今のやり取りがなんだかおかしくて、ネギもリヴィオと共に笑った。

ホテルを出てから1時間ほどで、サイドカーで行ける限界の場所まで着いた。関西呪術協会が所有しているという駐車場にサイドカーを停車させると、リヴィオは仕舞っていた帽子とマントを身に付けた。

神父服との異常なまでのミスマッチを、カモミールがつい口を滑らせて指摘しても、リヴィオは「こういう仕事の時には身につけておきたいんだ」と、帽子とマントについては頑として譲らなかつた。

あの帽子とマントにも、神父服のような謂れがあるのだろうかとか気になったが、それを口に出すよりも先にリヴィオが歩き始め、ネギは彼に先導されて近くにある総本山へと続く一本道へと向かつた。

「わあ……」

「スツゲエ……」

壮観な風景を目にして、ネギとカモミールは共に声を漏らした。

日本の神社の境内の入り口に立つ、赤い独特な形状の門 鳥居
その鳥居が、出口が見えないぐらい長い参道と共に、数え切れないぐらい立っているのだ。

このような光景を見るのは、ネギもカモミールも初めてだった。緊急事態ではあるものの、暫し、それに見入っていた。

リヴィオも自分が初見の時も同様の感動を覚えていたのか、2人の様子に不満も焦りも見せず、2人が十分に千本鳥居を見てから、話を進めた。

「この道をずっと行つた先が総本山の正面玄関だ。途中でキツくなつたら言ってくれ、俺が抱えて行くから」

そう言われて、ネギはそんな所でまで頼ってばかりではいられないと、握り拳を作って、自信満々に答えた。

「いえ、僕だつて身体強化の魔法が使えますから大丈夫ですよ！

さあ、行きましょう！」

「合点承知だぜ、アニキ！」

「頼もしいな。じゃあ、行くぞ」

ネギの返事にカモミールが応え、リヴィオも頷くと、千本鳥居の道を共に走り出した。

最初はネギが先を走っていたのだが、それもほんの数秒。リヴィオはすぐにネギを追い抜いた。それだけならともかく、その後は後ろを一度も振り向かずにはペースを完全にネギに合わせ、ネギとの間の距離を一定に保ちながら走っているのだから驚きだ。

そうして約30分後。どれだけの距離を走っただろうか。目に見える風景は、ほぼ等間隔に並ぶ鳥居と木々ばかりで、指標となるものが無く、さっぱり見当が付かない。

すると、リヴィオが脇に逸れて急に立ち止まった。リヴィオが距離を開けておいてくれたお陰でぶつからずに済み、ネギもリヴィオの隣で足を止める。

「どうしました？ リヴィオさん」

ネギが問うと、リヴィオはすぐに答えず、2度、3度と首をぐるりと回して周囲を窺っている。

やがて、その表情が険しいものへと変わった。

「ここ、さっき通った場所だ」

「え？ そう……ですか？」

「ああ。この景色は間違いなく、さっき見た。けど、こんな一本道で同じ場所に出るなんて……」

リヴィオは深刻な顔でそう言うが、ネギからすればずっと同じような場所ばかりで、正直、入口からここまでの道の区別も殆ど付いていない。だから、リヴィオの言っていることが、あまり実感できなかつた。

だが、カモミールは何かに気付いたらしく、ネギの肩へと上って来た。

「も、もしかしたら……こいつぁ空間連結型の結界かもしれないませぬぜ！」

カモミールに言われて、ネギも気付く。

確かに、前後にずっと同じような景色が続くこのような道は、空間連結型の結界を仕掛けるには持って来いの場所だ。

周囲の風景の変化が少ない道の空間をループするように繋がられてしまつては、『同じ景色』が続いたとしても『同じような景色』と誤認してしまつて、すぐには気付かず、繋がられた空間の中をぐるぐる回り続けることになってしまう。

それを、魔法の素質が皆無であるというリヴィオが見破つたというのだから、恐るべき洞察力だと言つべきだろう

「結界……ちつ、呪術の類か」

結界と呪術という言葉を忌々しそうに言つた直後、リヴィオは表情を険しくしてネギを庇うような立ち位置に移り、前方を睨みつけた。

すると、少し先の鳥居の陰から、ネギと同じくらいの年頃の、二ツト帽を被つた黒髪の少年が現れた。

「流石やな、リヴィオの兄ちゃん。呪術になんも詳しくないのにあつさりと見破つたなあ」

「お前、小太郎!？」

その少年の出現に、誰よりもリヴィオが驚き、その名を大声で口に出した。

名前と見た目から察するに日本人のようだが、それ以上の事はネギには何も分からないので、リヴィオに訊ねた。

「お知り合いですか？」

「ああ。呪術協会の総本山で、何度か組み手の相手とかをやつたことがあるんだ」

「犬上小太郎や。よろしゅうな、西洋魔術師の坊ちゃん」

リヴィオが言うと、それに応えて少年が自ら自己紹介をして来た。なんだか小馬鹿にされたような呼ばれ方にネギも、むっ、としたが、それ以上の感情を持つより先に、リヴィオが話を進めた。

「小太郎、どうしてお前が」

「そりゃあ、勿論」

リヴィオからの問いの応答として、小太郎は言葉を返しつつ、軽やかに跳躍し、そのままリヴィオへと飛び蹴りを放った。

「あんと戦いたい！ それだけや！」

突然の事態に、ネギとカモミールは声を上げることもできず、啞然、呆然とした。

まさか、自分と似た背恰好の少年があんな鋭い蹴りを打てるとは思わなかった。

しかし、それ以上に驚いたのは。

リヴィオは小太郎の蹴りを掴んで止めていたのだ。

小太郎は、刹那が使うのと同系統の身体強化の術を使って、大人どころかトップアスリートをも凌駕ほどの身体能力を得ている。

それを、リヴィオは事も無げに、自らの地力で対応して見せたのだ。

魔法による身体強化の恩恵を良く知るネギには、小太郎よりもリヴィオの方が凄まじく見えた。

だが、小太郎は動揺を見せない。或いは、過去に行ったという組み手でこういうこともあったのだろうか。

「それになあ、あんだ、こうでもせんとその気になつてくれんやろ？」

小太郎がそう言うと、リヴィオは溜息混じりに掴んでいた小太郎の足を放した。

「そうか、分かった。じゃあ、俺が君を倒したら、ここの抜け出し方と、君が協力している連中について、洗い浚い吐いてくれないか？」

「それくらい、お安いご用や。アンタが、本気を出してくれるんなら」

らなあ！！」

そこから始まった戦いを、ネギはカモミールと共に少し下がった場所から見守ることにした。自分に何かがあつて親書を紛失してしまつては本末転倒だし、なにより、こういうことはリヴィオに任せるといふ約束だからだ。

戦いが始まつてすぐ、リヴィオはネギに不安を感じさせないほどの優勢を見せつけた。

小太郎がどれだけ拳や蹴りを繰り出そうと、リヴィオはそれらを全て紙一重でかわし、攻撃も隙を見て足を引つ掛けるだけ、という余裕がはつきりと見て取れるものだった。

これに小太郎は発奮すると思いきや、これでは駄目かと呟き、納得している様子だった。どうやら小太郎も、自身とリヴィオの力の差を理解しているようだった。

なら、自信を感じさせるあの笑みの意味はなんだろう、とネギが考えた時、小太郎から異様な気配　魔力に似たものの迸りを感じた。

次の瞬間には、小太郎の肉体が変化していた。髪の色が変化しただけでなく、肉体が大きくなり筋骨隆々とした体躯となり、手足は四足獣のそれを連想させるものになつて変つていた。

その拍子に被っていた帽子が破れ、小太郎の頭の上に犬のような耳が生えているのが見えた。その代わりに、本来人間の耳がある場所に、それらしいものが見当たらない。

これは、話に聞く亜人種。人間とは異なる動物、或いは魔獣の因子を併せ持つ人種で、一部の者はその因子を発揮することによって、肉体を通常の強化魔法よりも遥かに強靱なものへと強化できると、メルディアナ魔法学校で学んだことがある。

亜人種の大半は魔法世界で暮らしており、この地球には僻地で稀に見られる程度だと教えられていたが、その本人をこんな所で見ることになるとは、ネギも思っていなかった。

先程までとは比べ物にならないほど、より強靱になつた体で小太

郎はリヴィオに殴りかかる。

踏み込みの速さも、繰り出された拳の速度も、桁違いだ。リヴィオも今度は避けられず、無防備なまま拳と蹴りの連打を浴びせられた。

明日菜以上の怪力で、あんなにも殴り続けられていたら死んでしまふ。なんとかして止めなくては、と考えた時、ネギはあることに気付いた。

最初は余裕と自信に満ちた表情だった小太郎の顔が、今は焦燥と不安で埋め尽くされている。

どういふことかとリヴィオの方を注意深く見てみたら、その理由が分かり、ネギも驚愕のあまり言葉を失った。

リヴィオの体は、どんなに小太郎の拳や蹴りを受けていても平然としていた。それこそ、どんな打撃を受けても体が少しも動いていない。顔を殴られても、首が少しも動いていないのだ。

普通なら、殴られたり蹴られたりしたら、どうしても体はその拍子に動いてしまうものだ。なのに、リヴィオの体は少しも動かない。それが意味するのは、圧倒的なまでのリヴィオと小太郎の実力差。リヴィオにとって、小太郎の攻撃はまるで意味をなしていない。

全ての攻撃をかわし続けられるよりも、遙かに衝撃的だ。恐らく、今までの攻撃も“かわせなかった”のではなく、“わざと受けていた”のだ。

それでも、小太郎は諦めず／＼認められず、尚も激しく攻撃を続けていた。だが、急に、小太郎の頭が不自然に揺れたかと思うと、膝と腰から力が抜けたようにその場に倒れた。

突然の事に呆然としそうになったが、そうなるより先に、リヴィオの腕が何時の間にか動いていたことに気付いた。

もしか、視認できないほどの速度で攻撃したのではないかと考え、冷や汗を流す。

攻撃されたいらしい小太郎も、何が起こっているのか分からない様子で、焦点の合わない目で辺りを見回している。だが、どこにもリ

ヴィオの姿が無い。

気付いて、ネギは慌てて周囲を見回した。本当に、ついさっきまで見ていたはずのリヴィオの姿が忽然と消えているのだ。

こんな、ほんの数秒の間で、あんな大柄な男性を見失うことがあるのだろうか。

そんな風に思った時、唐突に、リヴィオの姿を見つけた。

何故、今まで見つけれなかったのが不思議だった。リヴィオは、何時の間にか小太郎の背後にいたのだ。

リヴィオは片膝を着いて、後ろから小太郎の肩を叩き、負けを認めるか尋ねた。

小太郎はすぐには答えず、力の入らない自身の肉体に活を入れるように立ち上がると、振り向きざま、リヴィオに向かって拳を繰り出した。

突き出された拳は、空を切った。

リヴィオは、分かったと言って頷き、今度は辛うじてネギにも見える速さで小太郎の側頭部を叩き、彼の意識を刈り取った。

それで、戦いは終わった。

……いや、果たして今の光景を戦いと呼んでいいものだろうか。

百歩譲って戦いだと認められたとしても、ネギにはリヴィオの勝利に歓喜するような気持ちは少しも湧かず、代わりに、気付かぬ内、本当に無意識の内に後ずさりをしていた。

あまりにも圧倒的な、実力の片鱗どころか欠片すら見出せない戦い方を見せられて、ネギが真っ先に感じたのは、心強さよりも恐怖だった。

ネギも、少なからず戦いというものを経験していて、戦いの上での強いか弱いかの区別はある程度つけられた。

ネギの基準で言えば、小太郎は間違いなく強い部類だ。少なくとも、今の自分では勝てないと思えないぐらいに、ネギは小太郎を強いと思った。

だが、リヴィオは分からない。理解できない。リヴィオの強さは、

ネギの基準に当て嵌めることが、受け容れることができるようなものではなかった。

それ程に、リヴィオの強さは異質であり、異常だった。それが、こわかった。

カモミールも同じような心境で戦いを見守り、今も沈黙しているのではないだろうか。

リヴィオが、ちらり、とネギを見てきて、ドキリとする。

だが、何も言わず、リヴィオは気絶した小太郎を抱き上げた。

「悪い、本気は出せない。……ゴメンな、君を殺したくないんだ」

小太郎の顔を覗きながら、申し訳なさそうに、そして酷く悲しそうにリヴィオは呟いた。

それを見て、ネギは自然と彼に歩み寄っていた。

「あの……殺したくないって、どういう意味でしょうか……？」

小声で言ったつもりだったが、聞こえなかったか。

そのことをちょっと後悔した、直後、急に異様な殺気を感じた。

この尋常じゃない気配に、ここまで近付かれるまで気付けなかったのは、結界のせいか？

殺気のを警戒しながら、小太郎を抱えてネギに振り返る。

別に、隠したり嘘を吐いたり、無理に誤魔化す必要も無い。正直に答えるか。

「俺が本気を出したら、小太郎の体じゃ耐えられない。俺、かなり頑丈な人間を蹴り一発で粉々にしたこともあるから」

言いながら、気絶している小太郎の顔を見る。決して穏やかとは言えない表情だが、思う所はそこじゃない。

小太郎は強い。ミカエルの眼でも、10歳前後でこれだけの強さ

のやつは滅多にいない。少なくとも俺は強くなかった。

今は余裕で勝てたけど、5年後、10年後にはどれだけ強くなっているか、空恐ろしいくらいだ。

……これで、肉体には何も手を加えていないんだから、本当に凄
いよ。

「それに、本気を出そうにも、未熟者が相手では興が乗るまい。ダブルファンゲ」

俺の言葉に応えたのは、ネギでもカモでも無く、脇の林の奥から現れた、殺気の元の男 ケン・アーサーだ。

「貴様か、ケン・アーサー」

小太郎を小脇に抱えて、ネギを守るように位置取りをする。

ケン・アーサーは初対面の時のように、深編笠を被っている。もしかしたらあれが、日中でもあの男が外を出歩けている理由だろうか。

「し、親書は渡しません！」

突然の敵の登場に驚いたのか、呆然としていたネギが慌てながらも言い放った。

どうやら、ネギはあの男の殺気を感じ取れていないらしい。そうでなければ、ネギのような子供が、こんなことを強がりでも言えるはずが無い。

殺気には、強ければ誰にでも感じ取れるものと、一定以上の実力者でなければ感じ取れないものがある。

前者は、例えるなら音。大きければ大きいほど、感じ取れる人は多くなる。

後者は、例えるなら速さ。速くなれば速くなるほど、それを捉える事が出来る人は少なくなる。

ケン・アーサーは後者の殺気の持ち主。それだけでも曲者で、相当の実力者だと分かる。

つまり、やつぱりこいつは油断ならない難敵ってことだ。

空いている右手に待機状態のダブルファンゲを握り、銃の形態へ

と変形させる。すると、ケン・アーサーは一步、後ろに下がった。

「安心しろ、今の俺は何をする気も無い。ただの見物だ」

何という好機。やはり土郎さんの言っていた通り、日中に動き回るのはかなり無理があるようだ。でなければ、戦闘狂と言って差し支えないこの男が、この場で俺との戦いを避ける理由は見当たらない。

殺るならば今。小太郎を放して、地面に落ちる前に拾えるぐらいの余裕を持って倒せるかもしれない。

けど、問題は魔術だ。俺は魔術に関して全くの素人で、土郎さんもあの男が得意としている魔術を知らなかった。

そんな手の内が分かり切っていない難敵を相手に、守らなければならぬ子供を抱えて戦うのは不安だ。

それに……ネギやカモの前で、血腥い戦いをやるというのは、気が引ける。

「だったら、さっさと失せろ」

ケン・アーサーを倒す最大の好機を見逃すが、代わりに得られるのは安全にこの場を切り抜けられる、最善に近い結果。悪い判断ではない……はずだ。

「そのガキを渡してはくれぬか？」

「駄目だ」

小太郎を指して言った言葉を、即座に遮り、ダブルファングの銃口を向ける。

「そうか。ならば、退散しよう。結界は解いておくから、俺の気配が失せてから動くといい」

言って、小太郎を置いていくことに少しも躊躇いを見せず、ケン・アーサーは千本鳥居の奥へと、無防備な背中を晒しながら歩いて行った。

ネギの手前、俺が後ろから撃つことを躊躇っていることを読まれたか、それとも、ただの銃火器では死なないという自信によるものか。

撃てないのが、歯痒い。

「結界まで解いてくれるって、本当でしょうか？」

「分からないけど、取り敢えずは信じてみるさ。嘘だったとしても、小太郎が起きるのを待てばいいだけだ」

ネギの言葉に頷いて、ダブルファンクを待機状態の十字架に戻して、腰に差す。

それでも油断はせず、ケン・アーサーの動向を監視する。

ケン・アーサーは暫く歩いて立ち止まると、ある鳥居の裏で何かをして、そのまま脇の林へと出て行った。

すると、少しずつ奴の殺気が遠ざかって行き、やがて気取れないようになった。俺が感じ取れないほどの距離まで離れた事を確信して、臨戦態勢から警戒態勢に移る。

その変化を察したのか、今まで黙っていたカモが話しかけてきた。

「あの……ところで、リヴィオの兄貴」

「ん？」

「さっきの、人間を粉々にしたっていうのは……」

恐る恐る、冷や汗を垂らしながら聞いて来るカモの姿を見て、つい自嘲する。

奴よりも俺の方が、カモを怯えさせていたとは、な。

「本当だよ。怖いかな？」

人間を殺したと言っているんだ、この世界でも特に平和な場所にいたカモやネギが、怖いはずが無いだろうな。

言つと、カモが答えるより先に、ネギが首を振った。

「怖い……というより、信じられないというか、実感が湧かないです」

それを聞いて、つい苦笑を浮かべる。

確かに、人間 正確にはサイボーグだ を蹴り一発で粉々にしたなんてこと、鵜呑みにして信じられるようなことじゃないか。

「はは、そうか。じゃあ、冗談っていうことにしておいてくれ」

そこで話を打ち切って、総本山へと急ぐことにした。敵の襲撃が

まだあることも十分に考えられるから、両肩にネギと小太郎を担いで、一気に千本鳥居を駆け抜ける。

こっちにもちよつかいを出してきたからには、本命の御令嬢の方にも確実に手が回っているはず。

ヴァツシユさんなら大丈夫だと思っけど……別の意味で不安だ。

あの人が無茶するような状況にならないことを祈ろう。

太秦のシネマ村に着くと、僕と士郎はすぐにタクシーを降りた。何でもこのシネマ村っていうのは、サムライが本場にいた時代江戸時代だったかな？ その頃の日本を忠実に再現したテーマパークらしい。

日本以外の国の人にも人気が高いらしくて、僕らもタクシーの運転手にそういう観光客だと思われたみたいだ。

こっぴつ時じゃ無ければ、僕も楽しみながら見て回りたいけど……流石に今は後回しだ。今回の件が終わったらまた来よう。

入り口で入場券を買って中に入ると、そこは先程までの京都の街並みとは全く違う風景だった。

おお、これぞ正しく僕が昔からイメージしていた日本の風景そのものだ。

「ちびせつな、近衛の御令嬢の所までナビを頼むぞ」

「はい、お任せ下さい！」

士郎がそう言うと、ちびせつなは凜々しい表情になって、力強く頷いた。刹那にそっくりなのは外見だけじゃなくて、木乃香を大切に思ってる心も同じってことか。

「よーし、急ごうか！」

ちびせつなのナビに従って、目指すはお姫様と少女侍の御一行様

だ！

本当にそんな格好になったら、ちょっと探すのが楽になりそう
だけど、流石に無いだろうな。

第十話

「あの、その人」

ちびせつなの案内で御令嬢の下へ行く途中、横から声をかけられた。

見れば、そこにいたのはネギより少し年上に見える少年と少女だった。背恰好、顔つきが非常に似ていて、そして着ているのはお揃いの服。十中八九、双子なのだろう。

それにしても、お揃いの和服とは珍しい。着慣れているようだから、シネマ村の貸衣装というわけでもなさそうだ。

「僕らに、何か用かな？」

地に膝を付けて、少年少女と目線の高さを合わせて、ヴァッシユは人を和ませるような朗らかな笑みを浮かべながら応えた。

この辺り、ヴァッシユの対応力は凄いと思う。俺じゃ、芝居でもああいう風には笑えない。

……もう二度と、本心から、ああいう風に笑えることも無いだろうな。

「はい。この近くで、和服を着た兄妹を見ませんでしたか？」

「ここの外でもかまいません」

問われて最初はよく意味が分からなかったが、少しずつ話を進めて、彼らが兄と妹とはぐれてしまった事が分かった。要するに、迷子だったのだ。

「見てないな」

更に詳しく外見的特徴を教えてもらったが、やはり見覚えが無かった。

こうなつては、これ以上協力はできそうにない。せめて、ここの迷子センターに連れ行くぐらいか。

「はぐれちゃったのかい？」

「はい。あちらが迷子なのか、こちらが迷子なのかは分かりません

けど」

「ここを一緒に見るといふ約束があったので、来てみたのです」

ヴァッシュが問うと、少年と少女はそれぞれ答えた。それを聞いて、ヴァッシュは頷いた。

その様子を見て、ある予想が立った。

まさか。いや、まず間違いないか。

「そうかあ。……なあ、士郎」

「分かった。その子達の兄妹探しを手伝ってくれ。何かあったら連絡はする」

ヴァッシュが詳細に言うよりも先に、はっきりと答えた。

念の為、間違いが無いか確認を取ったが、やはり合っていた。

そこでヴァッシュと別れ、ヴァッシュからちびせつなを受け取って、1人、御令嬢の下へと向かう。

「……良かったのですか？」

ちびせつなが不思議そうに訊ねてきた。そんなに、ヴァッシュと別行動になったことが不思議なのだろうか。

「手伝いたいと思ったのは、俺も同じだからな」

「そうでしたか」

とは言っても、俺もあそこまでつきつきりでやろうとは思っていなかった。

あそこで二手に分かれることにした最大の要因は、ヴァッシュは言い出したら聞かない性質だからだ。

自分の意思を決して譲ろうとしない頑固さは、世界中を旅していた時に何度も目の当たりにした。

流石に自分に非がある場合は素直に引っ込むが、そうでなければ梃子でも動かない。

それぐらいでなければ、『ラブ&ピース』という絵空事のような理想を信じて駆け続けることは出来ていないだろうから、当然と言えば当然だろう。

「さあ、俺達も行こう。御令嬢に何かあってからでは遅いからな」

「はい。現在位置は……あちらです！」

ちびせつなに声を掛け、目的の御令嬢の下へと向かう。どうやら少しの内に場所を移したらしく、ちびせつなは先程までとは違う方向を指した。

彼女達の元気があり余っていた結果がこの状況とはいえ、忙しいことだ。俺だったらもつとゆっくり見て回るんだが。

そう思いながらも、ちびせつなの先導に従ってシネマ村を進む。人とすれ違う度に奇異の目で見られるのは、俺のような男がちびせつなを抱えていることと、江戸時代の城下町を再現したこの場所に、俺の服装が完全に浮いているからだろ。

なにしろ、この赤原礼装で戦場を渡り歩いた結果、教会と協会に付けられた仇名が『錬鉄の騎士』だ。こういう場所には馴染めない。そのようなことを考えながら進んで暫くすると、橋の周囲に人だかりが出来ているのが見えた。

「騒がしいな……どうしたんだ？」

「衛宮さん、お嬢様達はこの向こうです」

なんとなく呟くと、ちびせつながそう告げてくれた。

つまり、探し人は既になんらかのアクセシントに巻き込まれている、ということか。

御令嬢達に見つかっては厄介だからと、ちびせつなに身を隠すように言って離れた場所に待機させて、人だかりの中へと入る。

人混みを掻き分けて進むと、橋には和装に着替えた御令嬢の一行と、馬車を引き連れ西洋風の衣装に身を包んだ少女がいた。

江戸の城下町に西洋風の衣装とはなんとなくミスマッチな組み合わせだ。だが、問題なのはそこではなく、彼女が腰に帯びている大小の刀だ。

それらは大小共に、玩具や模造刀の類ではなく真剣。そんな物を持っている少女がごく普通の一般人であるはずがないし、この状況で奴らと無関係であるとも思えない。

奴らに先回りされていたのか。もしか、使い魔の一匹を彼女達の

荷物の中に紛れ込ませて、居場所を把握していたのか？

分からないが、先回りされてしまっているのは事実。ならば一刻も早く、この状況から抜け出さなくては。

様子を見る限り、どうやらあの少女は自分の立ち居振る舞いを、このシネマ村のイベントの演劇であるかのように見せているようだ。少なくとも、周囲の人間の大半はそう思い込んでいる。

相手が消極的な手を打っている内に、こちらは多少強引にでも、積極的に動くか。

「そこまです。見つけましたよ、御令嬢」

芝居の流れを無視して、強引に両者の間に割り込む。

「衛宮さん！」

「げっ、もう追いつかれたの!？」

「予想よりもずっと早いです」

「ど、どうしよう……」

神楽坂を除いて、彼女達の反応は思わしくないものばかりで、心苦しくなる。だが、そんなことで彼女達を危険に晒すわけにもいかない。

「お嬢様。お迎えも来ましたから、お早く、お父上の下へ向かいましょう」

「え〜。そやけど、折角お芝居も始まつとるのに〜」

桜咲が御令嬢を促すが、当人は渋っている。これは、説得には時間がかかりそうだ。いっそ、無理矢理担いで連れて行こうか。

すると、西洋風の衣装の少女が御令嬢の言葉に応える形で割って入って来た。

「そうですね〜。もっと、お付き合ひしていただかんと困りますわ〜」

言って、少女は懐から何枚もの札を取り出した。

あれは、陰陽術で使う呪符。それに加えて、華奢な体に似合わない真剣。あの少女、桜咲と同じ神鳴流の門下生か。

「ひゃっきゃこお〜」

言つて、ゴスロリの少女は、世間一般に広く伝わっているイメージ通りのお化けの姿をしたものを多数呼び出した。妙にコミカルなデザインのものばかりだが、あれもちびせつなような式神の一種だろうか。

そんなことよりも、こんな衆人環視の状況下で魔術の類を堂々と使われたことの方が問題だ。予想外の事態への驚きで対応が遅れてしまい、取り敢えず、周囲の人間の反応を窺う。

「なにこれ、どういう仕掛け!？」

「ひゃあ〜!? 本を舐めないで〜!」

「のどから離れなさい!」

「なんだこれ!? CGか!? 特撮!？」

「失せるこのエロガツパが! 着ぐるみ剥いで髪の毛全部耨り取るぞ!」

どうやら大半の人間が何かのアトラクションの一部と誤っているらしく、それ以外も突然のことに慌てふためいて、考えている余裕が無いらしい。

一部、ウェールズでの下着泥棒騒動の時を思い出すような声も聞こえたが、直視しないことにした。

驚く者ばかりで、疑う者が一切いないとは、出来過ぎた状況だが都合がいい。そうなると、問題は一つ。

「秘匿の原則もお構い無しか」

人を驚かすだけの使い魔を大量に呼び出しただけとはいえ、この状況での魔術行使。相手は最早、目的の為にはなりふり構わず、手段を選ばない状態だと考えるべきだ。

……必要と判断すれば、秘匿の原則を完全に無視して躊躇せずに魔術を行使する俺が言えた義理ではないかもしれないが。

「桜咲さん、今の内に離れましょう!」

「お嬢様、こちらへ!」

「ひゃあ!?! どないしたん? アスナ、せつちゃん」

大勢の人の混乱の中に紛れて、神楽坂の機転で桜咲と共に御令嬢

を連れて、彼女達はこの場を離れた。俺はその後ろ姿を見送ることしかできなかつたが、ちびせつながいれば合流も問題あるまい。

「衛宮さん、危ない！」

すると、ちびせつなから声を掛けられた。恐らく、背後から西洋風の衣装の少女が斬りかかって来ていることを言っているのだろう。だが、そのことは先刻承知。神楽坂たちを見送る寸前に彼女の動きは見ていたし、何より、隠そうともしない殺気から容易に攻撃が迫っていることを窺えた。

瞬時に最優の双剣　干将と莫耶を両手に投影し、振り向きざま、迎撃を試みる。

だが、ここで予想していなかったものが視界に入ってきた。

ちびせつなだ。何時の間にか俺と少女の間に割って入り、裁縫針のように小さな刀を構えて、少女に立ち塞がっている。

その心遣いはありがたいが、位置が悪い。そこは、俺の干将の軌道線上だ。

この状況で、どうすべきか。

考えるまでも無い。答えは、一つだ。

ちびせつなこと、少女の刀を干将で迎え討つ。

少女の刀は、宝具である干将との打ち合いに耐えられるはずも無く両断された。

そして、ちびせつなも同様に両断され、断末魔を上げることもなく消滅し、後には横一文字に切り裂かれた札が残された。

俺には、あのタイミングで剣の軌道を変えられる技術は無い。かといって、あそこで剣を止めては浅からぬ傷を負って、後の行動に支障をきたしてしまう可能性が高かった。

だから、ちびせつなこと迎撃するのが最善だった。

生物ではないとはいえ、人間的な感情を有していたちびせつなを斬ったのは心苦しかったが、やむを得なかったし、少女の刀を破壊できたのだから良しとしよう。

……ヴァッシュにバレたら確実に怒られるか泣かれそうだが。あ

いつ、ちびせつなのこと、気に入っていたからな。

「あら。完璧に不意を突けたかと思うんですけど、やりますな」

斬られた自分の刀を見て、少女は言葉とは裏腹にとても楽しそうに笑っていた。

「随分と楽しそうだな」

「はい。お強い人と斬り合うの、大好きですから」

口に出して言うのと、すぐに頷き返して来た。

ケン・アーサーと同じ戦闘狂か、自身の力や技術に酔ってしまった暴力主義の快樂主義者かと思ったが、違うようだ。

恐らく、この少女自身はそう思い込んでいるだろうし、このままではいずれそうなってしまうだろう。だが、少なくとも今は俺の目にそう映ってはいない。

この少女の殺気は殺意が薄く、言葉から感じる気質は狂気よりも無邪気。なにより、刀に血や脂の臭いや痕跡が無い。

「あ、申し遅れましたわ。神鳴流の月詠です、よろしゅうお願いします」

「ご丁寧にどうも。知っているだろうけど、俺は衛宮士郎だ。月詠、一つ訊きたいんだが、君は人を斬ったことはあるか？」

自己紹介に自己紹介を返して、確認の為に肝心なことを問う。

すると、案の定、少女 月詠は首を横に振った。

「いえ。残念ながら、まだ鬼の類だけですわ」

やはり、そうだったか。

合点がいくと同時に、この少女はまだ間に合うと分かった。

「そうか。なら、忠告しておく。これから先、絶対に人を斬るな。でない、必ず後悔するぞ」

言い終えて、干将と莫耶の投影を破棄すると同時に踵を返し、そのまま人混みを掻き分けて走り出した。

ちびせつなを斬ってしまい、御令嬢達を探す当てが無くなってしまった。まだ遠く離れていない内に、最後に見送った方角を頼りに

シネマ村を探すしかない。

「お約束できませんね〜」

刀を斬られているからか、俺を追おうともせず、その場に留まっ
たまま、月詠は俺の背中に良くない返事を返した。

一度、自分の意思で明確に、斬ろうと 殺そうと思つて人を殺
してしまつては、もう手遅れだ。もう二度と、後戻りはできない。

その経験談を聞かせれば、彼女も思い止まってくれるだろうか。

考えて、一旦それは脇に除けて、今は御令嬢達を探すことに専念
した。

そうだ、ヴァッシュにも連絡しておかないとな。

明日菜と刹那は騒ぎに乗じて木乃香を連れて、近くにあった城を
模した建物の中へと逃げ込んでいた。

最初は、木乃香を始め、皆があの子の芝居に乗っていたため、
そのまま刹那と明日菜も乗っていたが、今思つと、あのままでは危
なかつた。

もしもあの子 月詠の言葉に乗つて行動していたら、どうな
っていたか分かつたものではなかつた。

刹那は心中で、あの場に割つて入つてくれた土郎に感謝した。そ
こで、彼があの場合にまだ留まっていることを思い出し、式神のちび
せつなを介して土郎に連絡を取ろうとした。

ところが、式神からの反応が無い。

どうしたことかと考えた所で、横から木乃香が話しかけてきた。

「なあ、せつちゃん。これ、どうということなん？」

おっとりとしているが故に、どこか鈍いところもある木乃香だが、
流石に、この状況の異様さに気付きつつあるようだ。

しかし、その言葉にどう返すべきか心が定まらず、刹那はすぐに返事を出来ず、曖昧な言葉を発してやり過ぎすしか出来なかった。

このような状況になってしまつては、最早、木乃香に魔法や呪術関連のことを隠し通すのは不可能に近いだろう。

「うーんとね……狙われてるのよ、このかが」

すると、刹那が答えるよりも先に、明日菜があっさりと木乃香に告げた。

「神楽坂さん!？」

「うちが、狙われてる……? それ、どういうこと?」

刹那が声を荒げて明日菜の名を呼んだが、それを敢えて無視して、木乃香が重ねて問うた。

刹那と視線を合わせて、明日菜は苦笑しながら首を横に振った。

もう隠し通すのは無理だからしょうがない、ということなのだろう。

確かにその通りだが、詳細な説明は総本山に着いてからの方が良いのではないかと、刹那は考えていたのだ。

「こういうことだよ」

すると、誰かが木乃香の言葉に答えた。

振り返ると同時に、多数の猿を模した式神が襲いかかって来た。

その数に目を奪われて、刹那と明日菜はその中を掻い潜って来た小さな人影を見落とし、呆気なく接近を許してしまった。

小さな人影は木乃香を捕まえると、そのまま建物の上層階へと続く階段へ走り去って行った。

「しまった!?! お嬢様ああ!?!」

纏わりつく猿もどき達を愛刀“夕凧”の一閃で斬り払うと、刹那はすぐに木乃香を攫った者の後を追った。

「わっ、わっ!?! ちょ、ちよつと待って、桜咲さん!“来たれ

【アデアット】”!」

遅れて、自らのアーティファクト　ハマノツルギという名のハリセンを取り出し、猿もどきを振り払った明日菜も続く。

階段を駆け上がった刹那に真つ先に襲いかかって来たのは、衝撃だった。その衝撃が何事かを理解するよりも先に壁に頭をぶつけ、そのまま崩れ落ちて床に肩をぶつける。

二度の鈍い痛みにも、思い出したように衝撃を受けたほぼ全身が痛み出し、意識が完全にそちらに持って行かれてしまう。

「くっ……う、あ……」

迂闊だった。敵は、刹那たちの動きを誘導し、追うことに専念して防御が疎かになっている上に、どうしても無防備になりがちな階段を上り切って方向転換する瞬間を狙って攻撃して来たのだ。

だが、刹那はそれによって倒れてしまったが、刹那の後ろを僅かに遅れて追走していた明日菜は無事だった。

「桜咲さん!？」

階段を上り切ると同時に、明日菜は倒れている刹那へと駆け寄った。敵は、その隙を狙って再び攻撃 “魔法の矢” を放った。

だが、その攻撃はまるで明日菜の周りには見えない壁でもあるのかのように、彼女に当たる直前で霧散した。

しかし、明日菜はそのことには気付かず、代わりに自分に向って何かか飛んできたことを察してそちらへ振り向いた。

そこには、驚いたような顔で立ち尽くしている、見るからに外国人らしい風貌の銀髪の少年と、気を失った木乃香を抱えている眼鏡をかけた女性がいた。

「魔法無効化能力……! ……よく見れば、面影もある。まさか、こんな所で君に会えるとはね。思わぬ収穫だよ」

「フェイトはん。その娘のこと知っとるんか？」

少年が何事かに驚きつつも、明日菜のことを知っているかのようなそぶりを見せて納得すると、それを聞いた後ろの女性がどういうことかと訊ねている。

だが、明日菜には目の前の少年とは初対面だし、子供のくせに勿体ぶった言い回しが気に入らない。

何よりも、友達を傷付けたようなやつに知り合いだと思われるの

が、無性に頭に来た。

「あんたみたいなクソガキの知り合いなんていないわよ！」

平素からの子供嫌いと友人を傷付けられた怒りから、普段以上に荒々しい口調で、明日菜はフェイトと呼ばれた少年の言葉を切つて捨てた。

だが、フェイトはそれを肯定しない。

「君は知らないだろうね。けど、僕は知っている」

相も変わらず続いた少年の氣に障る言い回しに、明日菜は遂に堪忍袋の緒が切れた。

「そんなことはどうでもいいから！ このかを返しなさいよ！ クソガキとオバさん！！」

室内を震わせるほどの怒声を浴びせ、ハマノツルギを2人に向けた。

それに対して、フェイトと女性の反応は対照的だった。

「随分と感情表現が豊かになったものだね」

「誰がオバさんや！ ウチはまだ20半ばも過ぎとらんわ！！」

フェイトは柳が風を受けるように、あっさりと明日菜の言葉を受け流した。

一方で、オバさん呼ばわりされた女性はショックを受けたようで、明日菜にも負けないぐらいの大声で言い返した。

「私達から見れば、20過ぎたらもう立派なオバさんよ！」

「……神楽坂さん。流石に、それは暴言かと」

全ての20歳以上の女性を敵に回すような明日菜の発言に、苦笑しつつ、刹那が立ちあがりながらツツコミを入れた。

不意打ちを受けたとはいえ、あの程度の打撃で戦闘不能になるほど刹那も軟ではなかった。それでも、すぐに復帰するのは困難だっただけに、回復に必要な時間を明日菜が稼いでくれたのが幸いした。

その様子を見て、木乃香を抱えている女性は表情を険しくしながら、懐から呪符を取り出した。

「まだ抵抗するんなら、しゃあないな」

「させん」

女性が呟いた言葉に応えて、それを遮る言葉が返って来る。

全員がそちらへ振り向くと同時、フェイトが女性目掛けて高速で飛来した物体を弾き落とした。

女性を狙ったのは矢。それを射たのは、赤い外套を身に纏い黒塗りの弓を構えている男　衛宮士郎。

この建物の中で急に魔力を感知したから来てみたが、案の定だったか。後は、ヴァッシュが合流すれば盤石だ。

「衛宮さん!？」

桜咲が俺を見て、驚きを隠そうともせず大声で名を呼んだ。

恐らく、御令嬢を捕まえている女を狙って矢を射た事への驚きだろう。

こういう状況では、誤射の可能性を考えて、下手に人質を捕まえている犯人を狙わないのがセオリーだ。だが、俺は射には何よりも自信がある。御令嬢を誤射せず、犯人が呪符を持って掲げた腕を射抜く、絶対の確信もあった。

残念ながら、思わぬ伏兵によって遮られてしまったが。

あの距離で、不意を突いて射た矢を叩き落とすとは、恐るべき動体視力と反射神経だ。人は見かけによらない、とは言うが、流石に10歳程度の子供にしてやられたとあっては、驚かざるを得ない。

だが、外見と中身が一致するとは限らないことはよく知っている。過去に少年の身形の吸血鬼に完敗を喫したこともあるのだ、見た目だけで油断はしない。

それに、この世界　厳密には魔法世界では、当時15にも満たなかった少年が世界を救った、などという話もあるぐらいだ。本当

にこういう子供がいてもおかしく無いだろう。

「君は……弓兵か。いいのかい？ 後方支援が本職なのに、敵の目の前に出てしまつて」

弓兵。その通り名をこの世界でも聞くことになるとは、因果なことだ。

同時に、これで俺の情報がケン・アーサーから伝わってしまったことを確認出来た。

だが、俺が前線に出てきていることに意外そうな言葉を漏らしているということは、あくまで漏洩しているのは俺の弓兵としての部分だけで、他の部分についてはあまり知られていないのか？

……鎌を掛けてみるか。

「これでも、自分の得手不得手は誰よりも自覚している。だが、これも性分だな。こういう時は前に出ずにはいられないのさ」

「勿体無いね」

「よく言われる」

やはり、伝わっているのは弓兵としての情報だけのようだ。そうでなければ、『勿体無い』という返しが来るはずない。

そこがはつきりした所で、精度を度外視し工程を速やかに終えることだけを考え、矢を投影。番え、視線を銀髪の少年に向けたまま御令嬢を捕まえている女へ即座に射る。

だが、またも銀髪の少年に弾かれてしまった。

あの身体能力に身のこなし、強化の魔法に頼っているだけでなく、見た目によらずかなり実戦慣れしているようだ。

「ひっ!？」

矢が自分に飛んでくると思った女 伝え聞いた特徴との一致から、恐らくは彼女が今回の件の首謀者と思われる天ヶ崎千草か。彼女は悲鳴を上げて反射的に後ずさりした。

それを見て、態勢を立て直した神楽坂と桜咲が天ヶ崎地千草に切り掛かった。

良い反応と悪くない判断だ……って、神楽坂の得物はハリセン!？

一目見て呆気にとられて、次の瞬間にその本質に気付いた。
あれはハリセンではない、“剣”だ。あのハリセンは、一種の封印状態か何かだろうか。

……剣をハリセンの形に封印するって、どういうことだ？ あれを作ったやつは、よっぽど日本のお笑いが好きだったのか？

そんなことに呆れて、一瞬とはいえ隙を作ってしまった。

銀髪の少年が身を屈めて、展示物の陰に隠れながら接近して来たのに気付くのが遅れてしまった。

気付いたのは、踏み込みの瞬間。

咄嗟に弓で拳を防御したが、威力を殺せそうにない。自分から飛ぶ、という器用な真似は出来ないから、せめて足から力を抜いて踏ん張らずに拳を受けて、そのまま壁まで吹き飛ばされた。

「衛宮さん！」

「ウソ！？」

桜咲と神楽坂は天ヶ崎千草を取り押さえる一歩手前の所だったが、俺が銀髪の少年に殴り飛ばされたのに気を取られて、気を逸らしてしまった。

「来い！ 猿鬼、熊鬼！」

その隙に、天ヶ崎千草は先程から用意していた呪符を用いて、2体の式神を呼び出した。

「千草さん。上へ行きましょう」

「わ、分かった」

猿と熊の着ぐるみのような姿の式神を殿に残して、天ヶ崎千草と少年は上の階へと逃げて行った。

「逃がすか！」

追走を試みると、それを阻む為に神楽坂と桜咲には猿の式神が、俺には熊の式神が襲いかかって来た。

それに対して、弓を熊の式神の顔に投げつけると、空いた両手に干将と莫耶を投影し、一撃の下に切り捨てる。

その勢いそのまま猿の式神を斬ろうとして目を向けると、調度、神

楽坂がハリセンで猿の式神を叩いていた。

すると、どうしたことが、猿の式神は呪符に戻ってしまった。

あのハリセンの能力によるものだろうが、驚いている暇も確かめる余裕も無い。

「先に行く」

それだけ告げて、強化の魔術で脚力を更に強化し、階段を上るよ
うなまどろっこしい真似はせず、階段を一気に跳び越える。

そうして追走し続けて、屋上で漸く奴らに追いつくことができた。
だが、桜咲と神楽坂も追いついてきた所で、天ヶ崎千草は思わぬ
行動に出た。

「く、来るな！ 動くな！ 動いたら……お嬢様を殺すで!？」

召喚した鬼に御令嬢を捕まえさせ、小さな頭を軽く握らせたのだ。
鬼の膂力が実際にどれ程かは知らないが、童話や伝説に語り継が
れている通りならば、少女の頭蓋を砕くことなど造作も無いだろう。

「そんな、このか!！」

「このちゃん!」

神楽坂と桜咲が御令嬢の名を呼び、顔を青褪めさせる。

やれやれ、全く。正に子供騙しだ。

天ヶ崎千草の言葉を無視して、弓矢を投影する。矢は、霊体への
攻撃に優れた黒鍵を選択した。罷り間違っても討ち損ねることは無
いだろう。

「ちよ、ちよっと、衛宮さん、何する気よ!？ 動かないで!」

弓に矢を番えようとした所で、神楽坂が俺の行動を咎めた。

彼女の友達が命の危険に晒されているのだから、当然のことだろ
う。

それを聞いた上で、天ヶ崎千草に言葉をぶつける。

「貴様はバカか？ 貴様らが幾度となく生きたまま連れ攫おうと躍
起になっていた御令嬢を、今更殺すはずがあるまい。脅し文句にし
ても三流未満だ、獄中から出直すんだな」

やつらの目的が御令嬢の殺害ならともかく、生きたまま誘拐する

ことならば、あの脅迫は根本的な所で成り立っていない。

御令嬢を殺せば、奴らは目的を果たせなくなる。或いは、御令嬢を殺してもそれに則った作戦があることも考えられるが。

「ほ、本気やで!？」

「本気か？」

「う、うう……」

この様子を見る限り、それもありえないだろう。

俺が少し強く念を押しただけで、力なく声を漏らして視線を落とす。こうなると、これで本気だと思える方が異常だろう。

「千草さん、ここは大人しく引き下がるべきだ。流石に、人が集まり過ぎた」

銀髪の少年は眼下を見てそう言った。

確かに、野次馬のざわめきが此処まで聞こえてきているが、奴ら人目につくことを今更気にするのか？ 先程は街中で堂々と魔術の類を使っておいて。

もしか、あれはあの少女の独断専行だったのだろうか。

「せ、折角手に入れたもんを、このまま手放してたまるか！ 絶対に、絶対にウチは……!」

天ヶ崎千草が、ヒステリックに叫ぶ。

何が彼女をここまで駆り立てるのは知らないが、人々の平和を脅かすようなことを許すわけにはいかない。

それにしても、遅い。この城に突入するよりも前に連絡をしたのに、ヴァッシュはどうして来ないんだ。まさか、迷子になってるんじゃないあるまいな。

……あいつが間に合わないようなら。

そう考えた直後、近くで銃声が響いた。

突然のことに、咄嗟にそちらへ顔を向ける。

見れば、少し離れた建物の屋根の上に、見慣れた赤い人影があった。

「ハイイ、日本の皆さんこんにちはー！ 俺はヴァツシュ・ザ・スタピードだ！！ この場に居合わせてしまった不幸なる諸君には悪いが、これから俺的スーパー皆殺しタイムに入る！！」

なにをやっているんだあいつは！

鬼を従え、少女を連れ去ろうとする女性と、2人の少女を従えてそれを阻む騎士を思わせる出で立ちの男達の様子を、シネマ村にやって来た観光客たちは変わった趣向の演劇の類と思い込み、気楽に眺めていた。

そんな中、突如として現れた赤いコートの男　ヴァツシュ・ザ・スタンピードの唐突な宣言に、誰もが彼の正気を疑った。

先程の銃声も、大半の人間が本物のような発砲音のするモデルガンでも使ったのだろうと思って、ざわめく程度で騒ぎにはならない。すると、ヴァツシュは懐からある物を取り出すと、それを宙へと放り投げ

「Ready……GO!!」

直後に銃で狙い撃ち、空中で爆発させた。

ヴァツシュが投げたのは、手榴弾。そして、1度しか聞こえなかった銃声で、撃たれた弾丸は3発。

その爆発を見て、爆音を聞いて、変わった趣向の演劇を見ようと集まった野次馬達は、一瞬の静寂を挟んで恐慌状態へと陥った。

ヴァツシュは土郎へとピースサインを送ってから、屋根の上から飛び降りて、逃げまどう大衆の前へと降り立った。

「ば、爆弾！？ 本物の！？ しかも銃も！？」

突然の事態に、明日菜も野次馬と同様に混乱状態に陥っていた。今、こうして非日常の側に立っている明日菜だが、ほんの数か月前まではごく普通の一般人として、平和な日本で暮らしていたのだ。目の前で爆弾と拳銃という、日本では非日常と危険の象徴ともいえるものが使われて平然としていられるほど精神は太くないし、鈍感でもないのだ。

「落ち着いて下さい、神楽坂さん」

一方、刹那は明日菜よりも落ち着いていた。しかし、あくまで明日菜と比べてであり、刹那も十分に混乱していた。

些細な勘違いからとんでもない過ちを犯した自分を許し、優しい言葉と表情で励ましてくれたヴァツシュが、目の前であるような奇行に走ったことが信じられず、平静を装うだけで精一杯だった。

一方で、もう1人の赤い外套の男 衛宮士郎の行動は迅速だった。

「御令嬢は奪還した。騒ぎに乗じて俺達も逃げるぞ」

明日菜と刹那がヴァツシュの行動に驚いている内に、木乃香の奪還を成功させていたのだ。

見れば、何時の間にか天ヶ崎千草とフェイトの姿は消えていた。

「あ、でも、服が……」

ヴァツシュの暴走と、士郎による木乃香の奪還。

驚くべき事態の連続に頭の回転が追いつかず、何を聞くよりも先に明日菜はそんなことを口走ってしまった。

それに対して、士郎は呆れるでもなく、地上を走り回っているヴァツシュを見ながら答えた。

「あんなトリガー・ハッピー紛いの銃を乱射する暴徒が出現だ、着替えるのを忘れてここを出してしまう人間がいてもおかしくないさ」
「やれやれ、と、どこか慣れたような調子でそう言った。

「H A H H A H H A H H A ! J a p a n e s e G e n t l e
M a n s t a n d u p p l e a s e ! ! !」

そしてヴァツシュは、異様なテンションで銃を散発的に撃ちなが

ら、逃げ惑う人々を追い回している。

その様子を見て、明日菜と刹那は率直な疑問をぶつけた。

「えーっと……ヴァツシユって、衛宮さんの仲間、だよな……？」

「どうして急にあんなことを……」

それを聞くと、土郎はまずここから降りるようにと指図した。それに従って刹那と明日菜は屋根から建物の内部へと戻った。

非常階段から外に出て、ヴァツシユが起こしている騒ぎを遠巻きに眺めながら、土郎は口を開いた。

「あいつは、超一流の道化師なんだ。自分が泥に塗れようと、何人もの人間に踏みにじられようと、それが誰かの為になるのなら、幾らでも笑われて見せるだろうさ」

感慨深く、そしてどこか羨ましそうに、土郎はヴァツシユの行動の意味をそのように教えた。

しかし、些か表現が遠回し過ぎたのか、明日菜と刹那は曖昧な返事で頷いて、取り敢えず納得したような素振りを見せる程度だった。その様子に苦笑を浮かべつつ、土郎は木乃香を背負い、明日菜と刹那を連れてシネマ村を離れ、本来の目的地である関西呪術協会の総本山へと向かった。

ヴァツシユ・ザ・スタンピードによる銃乱射事件から数時間後。

未だに右往左往する人々を、貸衣装屋の前でお茶を飲みながらのんびりと眺めている2人の男がいた。

白くくめの男と、額に包帯を巻いてサングラスを掛けている男。
アラン・ザ・プレイヤーとE2だ。

「木を隠すには森の中、人を隠すなら人混みの中。上手いことやったもんだ」

ヴァッシュが起こした騒ぎを、プレイヤーはそのように評した。
大勢の人間が犇めく人混みの中、特定の人間を探し当てて追跡するのは不可能に近い。

ヴァッシュの起こした騒ぎの中に紛れることで、近衛木乃香を奪還した衛宮士郎達は、最も危険になる『絶対に捨てられない荷物を抱えての撤退』を、あっさりとこなせたのだ。

人探しに一点特化した道具や魔法があれば追跡も出来たかもしれないが、生憎と、それらを持ち合わせている者は誰もいなかった。

「それにしても、フェイトが出し抜かれるとは驚いたな」

「そうだね。この国で言うところの『阿吽の呼吸』ってやつかな」
野次馬に混じって見ていたプレイヤーとE2も気付かず、先程、フェイト本人から聞いて確かめた、近衛木乃香が奪い還された事の顛末。

ヴァッシュが手榴弾を狙撃した、あの瞬間。なんと、同時にフェイトと千草をも狙撃していたというのだ。

フェイトは常時展開している魔法障壁のお陰で難を逃れたが、千草は足を撃たれた。

そして、手榴弾が爆発し、全員の意識がそちらへと逸れた瞬間。
衛宮士郎が弓矢とは思えない早撃ちで近衛木乃香を捕まえていた鬼を倒し、彼女を奪還した。

近衛木乃香が奪還され、依頼人である千草は負傷。何より今回の主目的が近衛木乃香の拉致ではなかったことから、フェイトは千草を連れて撤退した。

何らかの合図を送った様子も無かったというのに、あのような状況で即座にこれ程の連携が出来るのだから恐れ入る。

「今回の目的の、ヴァッシュの実力調査は……まあ、最低限の成果

は得られたかな」

フェイトでも気付けなかったという早撃ちは、神速、神業の領域と言っていていいだろう。

ナイン達が怯える理由としては納得できないが、彼曰く『次元の違う存在』の力の一端を見られたと考えてもいいだろう。

戦って本当に厄介なのは、平然と道化にもなれる、あの気性だろうけどね。

「それはそれでいいとして、どうするよ。あれの連れのガキどもはプレイヤーの結論に頷いてから、E2は貸衣装屋の中を指した。

そこには、近衛木乃香と同じ班の、結果としてはくれた3人の少女がいる。

この仕事をスムーズに完遂させるなら、彼女たちを人質にするのが一番だが、残念ながらそれは駄目だと事前に釘を刺されている。

「人質は駄目だって言われたじゃないか。ウエルンくんは紳士的で困るよ」

「だあね。依頼人の女も、戦争起こそうって割には甘いよなあ」

「人質が使えないとなると、これから大変だね」

「同感。厄介だよな、本当」

残念だ、本当に残念だ。

あんな強敵を相手に、最も合理的で有効な手段を使えないだなんて。

こうなってしまったら、手段を選んでいられないじゃないか。

「僕らが依頼を果たす為にどんなことをしても、それは彼女達のせいだよな？」

「ああ、そうだな。実際にやる俺達も悪いが、そうせざるを得ない状況を作ったやつが、もつと悪いよなあ」

2人は揃って、とても愉しげな、卑しく、おぞましい笑みを浮かべた。

第十一話

「みくなごろしー、皆殺しー、ひーとりーも残さねえ。ヒヤッハ
ー！」

なんだか楽しくなってきたよお、ヒヤッハー！

銃を散発的に撃ちながら、物騒なことを叫びながら走り回って、
もう30分くらいか。

士郎達も無事に逃げられただろうし、僕もそろそろ、スタコラサ
ツサと逃げ出しますか。

思い立ったら即行動、適当に近くの壁を飛び越えて外に出る。正
規の出入り口は逃げようとしている人達でごった返しているだろう
から、僕がそこに顔を出したらまずい。

外に出て、取り敢えず人通りの少なさそうな方へと移動する。

「……ふう。これからどうしようかなー」

一応、目的地までの道順は聞いてあるけど、土地勘が無いから結
構不安だ。

まあ、いざ迷子になっちゃったら士郎かりヴィオに連絡を取れば
いいか。取り敢えず、1人で行けるだけ行ってみよう。

そんなことを考えて歩き始めてすぐ、曲がり角で士郎とばったり
と出会った。

「あれ、士郎？」

「見つけたぞ、ヴァッシュ。まったく、無茶をして」

「無茶とか無謀とか、君に言われたくは無いかな」

「……お互い様だろうが、その辺りは」

「だよな」

他愛の無い言葉を交わしてから、士郎が1人だけなのに気付いた。

「で、1人だけでどうしたの？ 明日菜たちは？」

「シネマ村を出てすぐの所で神鳴流の人と合流できたから、その人
に任せて来た」

「なんで？」

士郎が1人でいる理由は分かったけど、そうまでして僕を探しに来た理由が分からない。士郎がこういうことで僕のことを心配するはずがないし。

「お前のことが不安でしょうがなかったからだよ。案の定、その格好のまままで出歩いてるんだもんな……」

すると、士郎はそう言っ僕を見て大きく溜息を吐いた。

僕が普段と違う所と言えばサングラスを掛けているくらいだ。けど、そんなどうでもいいぐらい些細なことで、こんなに士郎の頭を悩ませることになるとは思えないから、士郎の言おうとしていることがさっぱり分からない。

「え、どういうこと？ この格好だと何かマズイの？」

素直に質問すると、士郎は頷いて状況を説明してくれた。

「お前のさっきの銃乱射、1時間と経たない内に警察の捜査が始まりかねない大事件なんだよ、日本だと」

「え、マジで？」

「今日の夕方のトップニュースは、全国でこの件ばかりだろうな」

「お、恐るべし。日本の情報伝達速度」

ノーマンズランドだと何日か後に、新聞に載っても三面記事ぐらいの事だったんだけど、日本だとその日の内にテレビのニュースになっちゃうのか。

しかも、真面目で働き者と評判の日本警察の方々まですぐに動くとなったら、うん、確かに僕だけじゃ不味かった。

「そういうわけだ。コートを脱いでサングラス取って、髪は適当にボサボサにしておけ」

僕の外見的特徴に当たる部分を全部排除して、見つかり難くしようって寸法か。

士郎の指示にすぐ頷いて、まず頭をボサボサに掻き乱して、続いてサングラスを仕舞う。そしてコートを脱いで……さて、どうやって持ち歩こうか。

「コートはどうする？」

このまま脇に抱えて歩いていたら、もしかしたら目敏くて勘のいいお巡りさんに気付かれてしまうかもしれない。

すると、土郎は少しの間を置くと、手の中に紙袋を作り出した。

「これに入れておけ。ついでに銃も」

その場で作り出した紙袋を何でも無いように差し出して来た土郎に、僕は溜息を吐きながら受け取った。

「本当に凄いやね、君の投影魔術」

無から有を作り出しているわけではないらしいけど、傍から見ればそうとしか見えない。まるで、プラントのようだ。

それを本人は、何でも無いことのようにやっちゃうんだから……。そんなことを思いつつ、受け取った紙袋に折り畳んだコートと愛用の銃を入れる。

投影魔術で作りに出した物は壊れやすい上に、壊れたら消えてなくなってしまうらしいから、気を付けないと。

「よし、それじゃあ行くぞ」

「了解」

僕の準備が終わったのを見計らって、土郎は出発を促した。僕もすぐに頷いて、関西呪術協会の総本山へと向かった。

近くの鉄道駅に向かう途中、ついさっき土郎と対峙していた2人のことを考えた。

あの時僕は、騒ぎを起こすタイミングを見計らって彼らの姿を見ていた。その時の様子は、今でも鮮明に思い出せる。

どうしたら、彼らを止められだろう。

あの眼鏡の女の人の特徴からして、彼女がアラン達を雇った首謀者の天ヶ崎千草かな。彼女は、土郎に気圧されてこそいたけど、諦める気配がまるで無かった。僕が足を撃つたぐらいじゃ、きつと止まらない。

どうして、彼女はこんなにも平和な国で生きているのに、その平和を自分の手で壊して、多くの人が犠牲になってしまうようなことを

しようとしているんだ。それも、あんなにも必死に。

僕は、彼女がそうしようとする理由を知りたい。

それを知らない、彼女は止められない。彼女を止める為に、どんな言葉が必要なのかも分からない。

力づくで止めるだけじゃ、絶対に駄目だ。

「……なあ、ヴァツシユ」

士郎が急に、足を止めずに話しかけて来た。

考え事は一旦脇に置いて、すぐに応える。

「なんだい？」

僕が聞き返すと、士郎は少しの間を置いてから、ゆっくりと口を動かした。

「ありがとう。お前のお陰で、早まらずに済んだ」

「……そっか」

士郎、まだ、悪い癖が抜けないんだね。

あんなにも素晴らしい理想を懐いているのに、君はすぐに割り切ろうとしてしまう。

気が遠くなるほど、実現するのが困難な理想だ。けれど、君はそれを諦めてないし、これからも諦めることは無いだろう。

なのに。何故、君は 人の命の尊さが分からないんだ。

これまでに何度も、この事で話し合った。けど、君はその度に、苦しそうな顔をして「分かっている」と、呻くように、悲鳴を押し殺したような声で咳くばかりだ。

今は日本の平和を左右する事件の真只中だ。この事を追究するつもりは無い。

けど、いつかは全部を話してくれよ、士郎。

「士郎。やっぱりさ、僕はこう思うんだ。誰でも、死んじゃうよりも生きている方がずっといい、って」

「……そうだよな。誰にも、誰かを死ぬべきとか、死んで当然とか、決めつける権利は無い。俺も、そう思うよ」

電車やバスを乗り継いで、途中降りるバス停を間違えたり、ヴァッシュが土産物の試食に時間を取られたりと思いがけないミスで時間をロスしてしまったが、無事に関西呪術協会の正門へと至る千本鳥居の入り口にまで辿り着いた。

「はー……絶景だね」

「やっぱり、凄いもんだな」

暫くそうして見惚れていると、俺達が来るのを待っていていたリヴィオが歩み寄って来た。

「お待ちしていました、ヴァッシュさん、土郎さん。御無事で何よりです」

「リヴィオ。そっちも無事みたいだね。良かった」

「詳しい話は移動しながらしよう。ヴァッシュ、もう元の格好に着替えて大丈夫だろ」

「オッケー」

ここから先は、もう人目を気にすることも無い。

ヴァッシュがいつもの服装に着替えるのを待ってから、俺達はリヴィオに案内されて千本鳥居をくぐった。ついでに、紙袋の投影も破棄しておく。

歩いていてはかなり時間が掛かるらしいから、走って移動することにした。同時に、走りながら情報交換をする。

リヴィオの方にも予想通り妨害はあったものの、結果的には敵の一味の1人を捕まえた上で、無事にネギは親書を届けられたようだ。その後、今から1時間ぐらい前に神鳴流の剣士に連れられて御令嬢達も無事に総本山に入った。これで、当面の安全は確保できたと考えてよさそうだ。

捕まえた少年　犬上小太郎というリヴィオの知り合いらしいが、

彼から得られた情報は多くはなかったが、敵のメンバーについて明確に知ることができたのは大きい。アジトの情報も得て呪術協会の呪術師たちが向かったものの、そこは既に引き払われていたらしい。首謀者の天ヶ崎千草。銀髪の西洋魔術師の少年、フェイト。神鳴流剣士の少女、月詠。白尽くめの参謀役、プレイヤー。赤目の侍のソードは、ケン・アーサーのことだろう。額に包帯を巻いている男、E2。そして、小太郎は一度も顔を合わせていないというナインとプレイヤーが急遽呼び寄せたという助っ人。

敵の構成員は、小太郎を除いて8人。ネギの証言によれば、E2と特徴が一致している男にホテルで話し掛けられているということから、顔が割れているのは6人か。

俺が知る中で明白な脅威は、ケン・アーサーと、底知れない不気味さを感じさせるフェイトという少年の2人か。

同時に気になるのは、正体不明のナインと助っ人だ。

最悪、先に挙げた2人以上の脅威という可能性もある。用心しなければならぬだろう。

「それにしても、ヴァッシュには参ったもんだよ。こいつ、俺達を援護するためとはいえ、急に銃を乱射して群衆の中に飛び込んだんだよ」

「あー……やつぱりと言いますか、なんと言いますか……」

「な、なんだよう！ 2人してそんな目で見なくてもいいだろー！」
情報交換を終えて、そんな、何でも無い会話をし始めたところで、関西呪術協会の総本山の正面玄関に着いた。

広大な敷地と、日本の伝統的な造りの大きな建物に目を奪われたが、ここには見物で来たんじゃない。

「お二人とも、こちらへどうぞ。関西呪術協会の長、近衛詠春さんの下へご案内します」

リヴィオに促されて、未だに見惚れているヴァッシュの首根っこを掴んで同行する。恨み事を散々言われたが気にしない。

渡り廊下や広間を幾つも抜けていくと、リヴィオは襖で仕切られ

た部屋の前で立ち止まった。

「詠春さん、ヴァツシュさんと衛宮士郎さんをお連れしました」

「ご苦労様です。お2人とも、中へどうぞ。リヴィオくんはあの子達に付いていて下さい」

リヴィオが声を掛けると、すぐに返事があつた。どうやら、ここは近衛詠春の私室のようだ。

俺達のような風来坊が入ってもいいものかと思つたが、あちらの立場を慮れば、形式的に会うよりも個人的に会う方が良いのだろう。なにしろ、ネギの親善大使としての来訪はあくまで非公式の機密事項。どこの馬の骨ともしれない奴が、関係者として接見するのはいかにも不味い。

「じゃあ、俺は一旦失礼します」

「うん。ありがとうね、リヴィオ」

「助かつたよ。また、後でな」

リヴィオと言葉を交わしてから、襖を開けた。

「ようこそいらっしやいました、衛宮士郎くん、ヴァツシュ・ザ・スタンピードくん。さあ、こちらへ」

俺達を迎え入れた、眼鏡を掛けた壮年の男性。この人が近衛詠春か。

「お邪魔しまゝす」

「失礼します」

挨拶にそれぞれ応じてから、促された席へと腰を下ろす。

座布団に座るなんて何年振りだろう、なんて感慨が少しだけ湧いてしまう。

「今回の件、関西呪術協会の長としてだけでなく、木乃香の父親としても礼を言います。ありがとうございます」

「いやあ、おあいご用つすよ、ホント」

「私達は今回の件に、リヴィオの手伝いということで勝手に首を突っ込んだだけです。こちらこそ、出過ぎた真似を許して頂いて、恐縮です」

詠春さんからのお礼の言葉に、俺とヴァッシュはそれぞれに応える。

まさか、日本の魔術組織の長である人物にいきなり頭を下げられるとは思っていなかった。どうやら、俺のイメージしている組織の上役のような人物ではないようだ。

挨拶の後に初対面であるからと簡単な自己紹介をして、詠春さんから、ネギによって無事に関東魔法協会からの親書が届き、これをきっかけに東西の親交を深めていくことになるだろう、という吉報を教えてもらった。

しかし、親書が届けられた、だからこれからは20年の軋轢を忘れて仲良くしましょう、などと言っても、心に蟠りを持つ人間をすぐに変えられるわけがない。

今日が終わりではない、ということは、俺達が言うまでも無く、詠春さん自身も分かっているようだ。

当然か。聞きかじっただけの俺達と違って、詠春さん自身は呪術協会の長として、ずっとその現場を見続けて、何とか改善しようとしていた人なのだから。

穏やかな笑顔を浮かべている表情と、少し痩せ気味の体は一見すると普通のお父さんだ。だが、その眼の力強さは尋常なものではない。

俺とヴァッシュは、率直にお祝いの言葉を贈った。

次いで、詠春さんが話してくれたのは近衛木乃香が狙われた理由だった。

近衛木乃香は類稀なる魔術的な素質の持ち主で、特に魔力の許容量は極東地域でも随一、世界でも屈指のものであるという。

問題なのは、魔法や呪術の類とは無縁に育って欲しいと、それらについて一切教えずに育ててしまった為に、近衛木乃香には魔法や呪術に対する耐性が全く無いということだ。

「つまり、奴らの狙いは精神操作の類によって、御令嬢を魔力の増幅器として使うことだった、と」

「恐らくは、その通りでしょう。あの子の持ちうる魔力を用いれば、実現不可能な術式は殆ど無いでしょうからね」

俺が訊ねると、詠春さんは隠そうとする素振りも見せずすぐに肯定した。

詳しい事情を聞けば、奴らが御令嬢を誘拐しようとしたのは、何らかの取引の為の交渉材料としてではなく、何か別の思惑があると考えるのが当然だ。なら、再度の襲撃の可能性は高い。

そのことを伝えると、詠春さんはこの総本山の守りに抜かりは無く、もし次に狙われるとしたらここを出る時だろう、と言った。つまり、ここに居る間は安全だと思ってい、ということかな。

それからは、リヴィオから伝え聞いていたというヴァツシュの手柄を中心に話をした。

長く消息不明で生死も定かでは無かったことを詠春さんも案じていて、ヴァツシュを探す為に手も尽くしてくれていたようだ。

そのついでにリヴィオと出会った経緯などを色々聞いたが、どうやらリヴィオに関しては『魔法が絡まない部分での裏社会の人間で、不運にも魔法関連のアクセシントに巻き込まれて総本山の近くに転移して来てしまった青年』という認識らしい。

どうやらリヴィオも、並行世界の未来の別の惑星からやって来ましたが、なんて荒唐無稽な事実は話していないようだ。

ということは、リヴィオはヴァツシュが持っていたという“羽根”を持っていなかったのだろうか。ヴァツシュはリヴィオも多分持っていると言っていたが。

隣のヴァツシュに目をやると、「そうだったんですかー」と取り敢えず納得しているようだが、どこか腑に落ちないような表情だった。

「これから、東西の和睦を祝う宴会があります。是非とも、参加して下さい」

「はい、勿論です！」

「お言葉に甘えさせていただきます」

一通りの話が終わって、最後に詠春さんからの宴会の誘いに、ヴァツシユは即座に応じた。俺はそれを見てちよつと苦笑を浮かべてから、同じく答えた。

ヴァツシユは、賑やかで楽しい場所が大好きだからな。その上大食い。宴会ともなれば尚更か。

「つと、そうだ。一つ訊きたいんですけど」

部屋から出る直前に、ヴァツシユはそう言って詠春さんに振り返った。

「なんですか？」

「彼女……天ヶ崎千草さんがどうしてあんなことをしているのか、理由を知っていたら教えてくれませんか？」

宴会は、盛大に行われた。

御令嬢とその御友人達の歓迎会も兼ねていたが、最も目立っていたのは俺とヴァツシユさんと土郎さんかな。

俺とヴァツシユさんが作法も遠慮も何も無しにガツガツ食べているのを、土郎さんに度々注意されてしまったからなあ。

ノーマンズランドじゃあ、礼儀作法なんて糞食らえって感じだったから。教会で璃正さんや綺礼と暮らしている時は極力、そういうのを気にしていたけど、やっぱり目の前に大量の、しかも美味しそうな食料が並んでいるとなると、抑えがきかなかった。

食事について本気で土郎さんに怒られた時はちよつと居た堪れな

かったけど、俺達の様子を見てネギたちも面白そうに笑っていたし、まあ、いいか。

宴会が終わって一服して、今度は風呂に入ることになった。ネギと詠春さんが上がるのと入れ替わりで、ヴァッシュさんと土郎さんと一緒に風呂に入っている。

「いやあ、天然素材の美味しい料理をお腹一杯食べて、今はこうしてゆっくりとお風呂に入る。贅沢の極みって感じだね」

「日本じゃこういうのを、極めて楽しいと書いて極楽と言っらしいですよ」

「ちよつと違う気がするが、だいたい合ってるな」

幸せそうな顔のヴァッシュさんの言葉に頷く。土郎さんによると少し違うらしいけど、だいたい合ってるならそれでいいか。

けど、本当に。食事はともかくとして、こんな風にお湯の中に身を沈めるなんてことは、ノーマンズランドにいた頃は想像もしていなかった。あつちではこんなこと、贅沢なんてレベルじゃないからな。

ノーマンズランドで、こういうことができるようになる日は来るんだろうか。地球連邦政府の一員になったといっても、それだけでノーマンズランドの日常が激変したわけじゃない。強いて言えば、新型衛星とテレビジョンの登場で情報伝達は格段に速くなったことぐらいか。それも、個人レベルじゃあまり実感が無いけど。

もしも、俺が生きている内に出来るようになったら、孤児院のみんなと入ってみたいなあ。

……無理だろうけど。

「このまま、何事も無く事が終わればいいんだけどね……」

「そうはいかないだろうな」

ヴァッシュさんが呟いた言葉に、土郎さんが即座に答えた。

「このバリア 結界は、かなり優秀なものらしいですから、当てには出来ると思いますよ」

首謀者の天ヶ崎千草は総本山の守りの堅牢さと、長である詠春さ

んの強さを良く知っているはずだ。だから、ここにいる間に手出しをして来る可能性は低いと思う。

すると、ヴァツシュさんが、うーん、と唸った。

「けどさ、こういう所のバリアって、敵に攻められるとあっさりパリンと割れちゃうイメージがあるんだけど」

それを聞いて、浴槽をずり落ちそうになった。

何を言うかと思ったら、この人は……。

「それはロボットアニメのお約束だ。実際、ここの守りは大したもんだよ。人の出入りが盛んという点は除いてな」

ヴァツシュさんに的確なツッコミを入れてから、土郎さんも魔術師というだけあって総本山の守りついて高く評価しているようだ。

けど、最後に付け加えられた言葉が気になった。

「出入り口として穴が開いているということは、別の所に穴が開けられることでもある……ということですか？」

「ああ。そして、あちらには魔術関連の攻城戦の専門家もいる。油断は禁物だ」

「了解です。改めて、その旨は俺から詠春さんと神鳴流の方々に伝えます」

土郎さんからの忠告を受け取って、すぐに頷く。

そうだ、奴らの中には魔人が紛れているんだ。決して、油断をしていいものじゃない。

俺と土郎さんが改めて緩んでいた警戒心を強くした、直後、ヴァツシュさんが湯船の真ん中で両腕を振り下ろして水面を叩き、大きな飛沫を上げた。

どうしたんだろうと、土郎さん共々、ヴァツシュさんを見る。

「んもう！ そーゆーのは置いといてさ。今はゆっくりしようぜ」

緩み切った、間抜けにも見える表情でそう言われて、つい笑ってしまった。

確かに、気を抜いて油断することは出来ないけど、気を張り詰め

らせずに緩ませることも大事、ですよ。

「そうだな」

「ゆっくりしていきましょう」

士郎さんと共に頷いて、肩まで湯船に浸かった。

今はゆっくり寛いで、来たるべき時に備えて英気を養いますか。

「こんばんは」

ネギ達が部屋で話をしていると障子が開き、挨拶と共に士郎が入って来た。

「エミヤさん、こんばんは」

ネギが率先して挨拶を返すと、他の皆も「こんばんはー」と続いた。

「あ、衛宮さんとヴァッシュもこの部屋……なん、でしたっけ」

この部屋に案内された時に聞かされたことを、明日菜が思い出して口に出したのだが、相変わらず変な敬語になっている。

しかし、士郎は気にした風も見せずに頷いた。

「ああ、そうだ。それと、神楽坂、無理に敬語を使わなくてもいいぞ」

「そうですね？ それじゃ、お言葉に甘えて。これからはこういう感じで」

士郎が言うと、明日菜はあっさり口調を普段のものに戻し、士郎もそれに気軽に応じた。

「あれ？ けど、ヴァッシュさんがおらんみたいやけど？」

木乃香が問うと、士郎は後ろを見遣りながら答えた。

言われてみれば、赤い人影が1つ足りない。どうしたのだろうか。

「あいつは……散歩に出ている。この部屋に来るのは君達が寝静ま

「つてからかもな」

随分と長い散歩だと思ったが、深く追及しようとは思わなかった。危うく攫われそうになった木乃香を、一度ならず二度までも無事に取り返してくれたことから、ネギは士郎とヴァッシュに全幅の信頼を寄せていた。だから、疑問が浮かんでも、きつと彼らなりの理由や事情があるのだろうとすぐに自分自身で納得した。

士郎が腰を下ろすと、木乃香が再び話しかけた。

「そや。衛宮さん、お話を聞かせてくれへん？」

「お話つて……何の話？」

「衛宮さんも、ネギくんみたいな魔法使いなんやろ？ それも、世界中を旅していたっていうし。その旅のお話を聞いてみたいんやわ」今回の事で、木乃香に魔法の存在や裏の事情を隠し切れないと考えた詠春は、ネギ達と共に木乃香にそれらのことを全て教えていた。それに対して木乃香は、思いの他あっさりと納得して受け容れていた。明日菜が知ってしまった時は、もっと慌てふためいたり懐疑的だったりしたのだが、人によってこうも反応が違うものかとネギも驚いた。

先程までも、今まで麻帆良で木乃香が知らない内に起こっていた魔法に関する事件について話していたところだった。

その中で、士郎とヴァッシュの話題も上がっており、2人は世界中を旅している魔法関係者だと説明していたから、そこで興味を持つたのだろう。

「あ、それ、私も気になる」

「私も、興味があります」

明日菜が木乃香に続き、刹那も同意した。

「僕も、後学の為に是非、聞かせて欲しいです」

ネギも『立派な魔法使い』を目指す者として、現役の先輩の話には興味津々だ。

「その……出来れば、オイラに関することは伏せて欲しいです……」
恐る恐る、普段の活発な姿からは掛け離れた萎縮した様子で、力

モミールは自分のことを話すのは避けてくれと頼んでいた。

カモミールが言っているのが何の事か、ネギにも分かった。そんなに後悔しているなら、最初からやらなければ良かったのに、と思っている、と、士郎が頷いた。

「分かった。それじゃあ、ウェールズでの下着泥棒騒動から話そうか」

「イヤー！ エミヤの旦那あー！」

士郎の迷いも容赦も無い言葉に、カモミールは叫び声を上げながらしがみついた。だが、士郎は躊躇うことなく話し始めた。

今夜は、眠るのが遅くなりそうだ。

夜が更け、闇が濃くなる。

闇夜を照らすのは、月明かりと星明かり。

だが、何処から流れて来た黒雲が、月を覆い隠した。

「それじゃあ、行こうか」

手段を問わず、近衛木乃香を強奪せよ

それが、今からの仕事の内容。

用いる手段の下限の指定が無いのと同時に、上限の指定も無い。

本来ならば、常識や理性、道徳心や良心などの枷によって、良くも悪くも人の行動は限定される。

だが、それも普通ならばの話だ。

彼らの常識や理性は、常軌を逸している。

彼らに、道徳心や良心と呼べるものは無い。

闇が、辺りを覆う。

光の届かぬ所を際限なく、闇が呑み込んでいく。

第十二話（前書き）

今回は暴力表現と殺人描写が全編を占めます。ご注意ください。

第十二話

時刻は、間もなく午前0時。思いの外土郎の話に熱中していた少年少女達も、11時を過ぎた辺りで全員が眠りに就いている。

今日の事の疲れがあつたのだから、年頃を考えても遅いぐらいだろう。

子供達の寝顔を見渡した後、土郎は窓辺へと移動した。

ここは、関西呪術協会の来客用の寝室だ。来客用ともなれば、景觀の良さを重視して外側に配置されていることはごく当たり前のことだろう。しかし、このような場所は防衛に適しているとは言えない。

守り易く攻められ難い地形の選択は、防衛戦の基本。賓客を守るならば、外側に面していない建物の内部が最適だ。

だが、詠春や土郎にその最適を躊躇させたのは、ネギ達がまだ子供だということだった。本来ならば彼らは修学旅行を楽しみ、このような厳しい体験をする必要など無かつたのだ。ならばせめて、少しでも楽しい思い出を作らせてやりたいという想いから、この場所を選んだ。

実際、かつて住んでいた木乃香や刹那はそれほどでもなかったが、ネギや明日菜、ついでにカモミールも、ここからの眺め、特に今の時期には珍しい夜桜をとて楽しんでいた。少なくとも、無意味では無かつただろう。

この判断の為に万が一のことがあつたら元も子もないが、そんなことはさせまいと、土郎は警戒を怠らずにいた。

本来ならばヴァッシュもこの部屋にいる予定だったが、話し合った結果、ヴァッシュもリヴィオや神鳴流の剣士たちと一緒に見張りに立っている。

取り分け直観力に秀でたヴァッシュとリヴィオが異常を感知した場合、即座に発砲して報せる手筈になっている。

魔術的な部分に関しては、同じく寝ずの番を行っている呪術師達もいるから、サポートは万全と言えるだろう。
これだけの態勢も、杞憂であればいいのだが。

時刻は深夜1時を回った。

リヴィオは屋根の上に立って辺りを数分間見回した後、地面へと跳び下り、そのまま歩哨を続けた。

呪術師達の話によれば、敵がもし総本山への侵入を試みるとすれば午前0時だと言っていた。なんでも、昨日と今日、今日と明日、それらの境界があやふやで曖昧になる瞬間は、どんな結界も精度が落ちるらしい。だが、その時刻になっても、1時間が過ぎても異常が起きた形跡は見られない。

ここの守りの堅さに諦めて手を引いたのか。それとも、これから仕掛けて来るのか。

敵の動きが分からない以上は、最善を尽くして待ち受けるしかない。

考えながら、リヴィオは歩を進める。

ふと、空に目を向けると、黒雲が見えた。

ノーマンズランドでは見たことも無かった黒い雲も、もう随分と見慣れたものだ。

初めて雨を見た日のことと、嵐に直面した日のことを思い出しながら、雲を眺めた。

黒雲が、月を隠し、辺りが少し暗くなった。

その直後、2つの巨大な殺気を察知した。

突如として、眼前に鋭利な刃物が現れ、背後に巨大な塊が落下して地面を揺るがす。そんな錯覚を感じたと同時に、リヴィオはダ

ブルファングを抜き、上空へと発砲した。

それより100分の1秒ほど早く、別の発砲音が聞こえた。

ヴァッシュだ。彼も同じタイミングで発砲した以上、これがリヴィオの勘違いではないということは明白だった。

十字架から銃の形態へと変形させたダブルファングを両腕に構え、より近い刃のような殺気の方へと向かう。恐らくその先にいるのは、ケン・アーサー。

リヴィオは焦ると同時に、驚愕していた。

こんな、隠していた様子が微塵もないような殺気を、どうして敷地内に侵入される瞬間まで気付けなかったのか。どうして何の前触れもなく、殺気が突如として出現したのか。

そこで、昨日のある出来事を思い出した。

空間連結型結界に閉じ込められていた時に、ケン・アーサーの殺気が今のように唐突に現れていたことだ。

つまり結界には、殺気をも遮断してしまうような機能もあったということではないか。

そうだとしたら、この事を軽んじて自分の中だけで片付けて、報告をしなかった自分の失態だ。

歯を食いしばりながら、リヴィオは刃のような殺気の下へと急いだ。

神鳴流剣士の山田が異常を察した先輩と共に正面玄関へと来て、

真つ先に見たのは、五体を引き裂かれた正面玄関の警護を担っていた神鳴流剣士の惨殺体と、その下手人と思しき和服の男だった。

それを見た瞬間、山田の中に激しい怒りが湧きあがった。

「貴様あ！ よくも土井さんを！」

「待て、山田」

山田が殺された男の名を叫び、斬りかかろうとした所を、共にこの場へ駆けつけた先輩剣士が止めた。

下手人の和服の男は、ゆっくりと視線を山田達に向けた。

「何故です、斎藤さん!？」

「落ち着いて、力の差を弁えろ」

怒声混じりに山田が問うと、先輩剣士の斎藤は落ち着いた声でそのように諭した。

言われて、山田は呼吸を整えながら、男を具に観察した。

男は、呼吸も乱さずに静かに佇んでいる。良く見れば腰に刀を帯びているが、その刀が抜かれた形跡は無い。

土井の死体に、鋭利な刃物による傷が無いのだ。あるのは、強引に、力任せに引き千切られたと思しき傷口と破れた衣服だけ。

そして、通常の間人ではありえない、異形のもの証とされる赤い瞳。

その特徴から、山田はリヴィオと犬上小太郎から聞いた、敵の凄腕剣士の話を思い出した。確か、ソードとか言う通り名の男だ。

あの男は剣士でありながら、刀を使わずに土井を倒したということになる。しかも、斎藤が異常を察知してからここに辿り着くまでの3分にも満たない時間で。

そこから導き出される結論は一つ。

「……………強い」

こうして対峙しても、力の差がはつきりと感じ取れないほどに、目の前の男は自分よりも遥かに強いのだと山田は認めた。一方で、斎藤は始めから力の差が分かっていた。自分達2人がかりでも、勝ち目が薄い相手であると。

だが、だからと言って敵に背を向ける程、彼らは臆病では無かった。

「そつだ。あの土井が刀を抜かせることもできなかつた相手だ、死力を尽くしてかかるぞ！」

「はい！」

2人同時に刀を抜き、気で体を強化する。一人前の神鳴流剣士が2人揃えば、敵うものはそうはいない。鬼が百の群れで現れたとしても遅れを取らないだろう。

だが、赤目の男 ソードは刀を抜く気配は見せず、無手のまま構えた。

それを驕りとは見ず、2人は同時に斬り掛かった。

斎藤は気を用いた神速の移動術 瞬動術によって、文字通り瞬きするよりも早く間合いを詰め、神鳴流の剣技を叩きこむ。

山田は敵から離れたままだが、その距離でさえも神鳴流の間合いの内なのだ。

斬岩剣と斬空閃。

巨岩をも一撃で斬り裂く剛剣と、空を切り裂いて飛ぶ一閃。この2つを同時に捌くことは達人にも不可能だ。

だが、ソードはそれらを無理に受けようとはせず、余裕を持った動作でかわした。

それを見て、山田は衝撃を受けた。

ソードは明らかに、瞬動術での動きを見た上で回避の動作を取っていたのだ。

常人はおろか、一流の戦士でさえも目で捉えることが不可能とされる神速の業を、易々と捉えられた。俄かには信じ難いが、前例はある。ならば、有り得る。

斎藤は空振った剣をすぐさま構え直し、一度距離を置いた。その隣に、山田も並ぶ。

山田は斎藤の顔を窺ったが、焦燥は見取れたが山田ほどの驚愕は見えなかった。やはり、斎藤はそれだけ力の差を自覚していた

のだらう。

死力を尽くせと言ったのも、言葉そのまま。

ここで、山田はつい苦笑した。

近年の神鳴流は鬼を始めとした様々な怪異に対して連戦連勝、苦戦を強いられることの方が珍しいくらいだ。だから今回の仕事も、どんな強敵が現れても最後には勝てる、そう思い込んでいた。

目の前の強敵は、命を懸けて挑んでも必勝を望めないほどの兵だ。（つわもの）勝つにせよ負けるにせよ、恐らく、自分は死ぬ。だが、ただでは死ねない。

命を懸けて、この男をここで倒す。

漸く成った東西の和平、日本の真の意味での平和への第一歩。それを守る為に死ぬるならば本望。

「行きます！」

「応！」

山田の掛け声に、斎藤が即座に応える。

ソードは無手のまま、相手の出方を窺って 否、2人の攻めを待っていた。

2人の姿が消える。完全同時、左右逆方向への瞬動術。5mほど移動した所で一瞬だけ止まって方向転換し、再び前方へ。そして、異なる距離で同時に止まり、三度目の瞬動術。

山田は瞬動術の速度そのままに、ソードへと切り掛かった。自身の力量では到底行えないはずのを実行できたのは、命を懸けるという想いに肉体が引つ張り上げられた結果か。

しかし、その剣は見切れ、かわされると同時に腹に貫き手を撃ちこまれた。速度の反動を差し引いてもその威力は尋常ではなく、腹筋を突き破り臓物までも破壊された。いや、背中を突き抜けた衝撃は、背骨と背筋をも貫いたか。

だが、これは絶好の好機。

腹に手が打ち込まれた瞬間に周囲の筋肉を収縮させ、同時に刀を棄てて渾身の力を込めてソードの腕を掴み、動きを封じた。

その瞬間、ソードの背後から、雷の力を帯びた斎藤の刀が迫る。神鳴流奥義、雷光剣。その威力は、人間の1人や2人ならば消し炭にするほどだ。相手が人より強靱な人外の者であるうとも、神鳴流の技は魔の天敵。威力は更に増すのだ。

山田が薄れゆく意識の中で勝利を確信した直後、彼の意識は途絶えた。

神鳴流剣士、斎藤の振り上げた刀は、切っ先が天を指したところで、ピタリ、と止まり、動かなくなつた。

やがて、刀身に帯びていた雷光が徐々に収束し、霧散した。全身から力が抜け、腕が落ち、手から刀が滑り落ちる。

斎藤は目前の魔人に目を剥きながら、喀血した。

その血を、魔人の一部は酷く美味そうに啜り、一滴たりとも地面に落とさなかつた。

「き……あ……」

言葉を発そうとしても、喉に詰まった血が、発声を妨げる。

魔人の首から伸びたものに貫かれた胸を中心に、自身の血流が狂って行くのを感じる。

それが敗北の実感であると理解するのに、さほどの時間はかからなかつた。

「魔と人の関係を見誤る者しかないのか、神鳴流は」

腕で以つて山田の亡骸を咀嚼しながら、魔人は問い掛けて来た。

その言葉に滲んでいるのは、呆れと落胆。

それに対して斎藤は反論できず、絶望の中で肯定した。

不覚。何故、こんなにも当たり前前のことを見誤っていた。

……否。忘れ去り、都合良く勘違いをしていたのだ。

神鳴流の、退魔の技は、魔の天敵ではない。

その原点は、人が魔に対抗するべく練り上げた、小細工だったのだ。

ならば、元より圧倒的な力を持つ魔が、人と同等以上の技や術を身に修めていたのなら。

敵うはずが、無い。

「え、い、しゅん……さま。もうし……わけ、ござい、ま……せ、ぬ……」

血で潰れかけた喉から最期に捻りだせたのは、斎藤が敬愛し憧れ続けた人への、詫びの言葉だった。

それを聞いた魔人は、斎藤の血肉を一息に貪り食らった。

ソードは2人の血肉を貪り食った後、自らの血文字を使って作った呪符を用いて囿を作り、最初にバラバラに引き裂いた死体の一部を両脇に抱え、総本山の内部へと本格的に侵攻した。

死体を食らわずに持ち歩くのは、これを使って動揺を誘い、目的の者以外との遭遇戦を手早く終わらせるためだ。

囿の方も、高確率でこちらに向かって来ているだろうダブルファンクへの目晦ました。これを随所に配置しておけば、感は鋭くとも魔術の知識に欠けるダブルファンクを足止めすることができるだろう。

万が一、あちらの勘が当たって遭遇したのならば、それも一興。

だが、今回のソードの本命はあくまで別だ。

「くっはっはっは……あっはっはっはっ……ひゃーっはっはっはっはっは……」

すると、建物の内部を少し進んだ所で、聞き慣れた高笑いがかんじえた。

そちらへ向かってみれば、案の定、ソードと共に侵入して、戦いには関わらずサングラスを外して先行していたE2と、E2の術中

に陥り精神を徹底的に凌辱されているらしい呪術師たちの姿があった。

一部、血痕や傷が見えるのは、同士討ちでもさせたか。

「ああ、本当！ お前らみたいな脳内が万年晴天快晴の脳天気なあのをよ！ こうやって甚振って、髑つて、弄つてえ！ 鼻水垂らしながら泣き喚く顔を見るのはさあ……たまんねえぜえ！」

E2の術中に陥った者達は気絶することも叶わず、助けを呼びながら悶絶している者、泣きながら命乞いをする者、いつそ殺してくれと懇願する者、最早心が壊れたか体中のいたる所から液体を垂れ流しながら痙攣している者など、様々だ。

見慣れた光景を咎めるつもりはないが、些か声大きい。忠告ぐらいはしておくか。

「愉しむのも程々にしておけ、E2。お前の大声を聞きつけて、強いのが来たらどうする」

笑い続けて腹筋が攣る寸前にまでなっているE2に、ソードはどのように声を掛けた。

尤も、今敵が来たなら殺し尽くすか四肢を千切ってダルマにしてから引き渡すぐらいはするつもりだが。

「ああ？ なんだ、ソードか。その時はさ、まずこう言うのさ。暴力反対、まずはお互いの目を見て話し合おう……ってな！」

「……まあ、お前のコレは暴力の定義には当て嵌まらないな」

E2とは互いに視線を合わせぬよう留意しつつ、足元に転がっている人間を見て、ソードはそのように言った。

コレを暴力と呼ぶ人間は、そう滅多にはいないだろう。暴力の方がマシだ、という人間はあるだろうが。

すると、案の定というべきか、ソードの強化した聴覚がこちらに向かつて走って来る足音を捉えた。

速さといい、足音の間隔が乱れないことといい、只者では無い。

或いは、目当ての人間が来たかと思ひ、目を向ける。

すると、足音の主は倒れている人間達に駆け寄ると、必死に呼び

かけ始めた。

「しっかり！　しっかりして！　どうしたんだよ、みんな！」

今にも泣き出しそうな顔と声で、必死にE2の術中に陥った者達に呼び掛けているのは、この作戦での最大の不確定要素たる赤いコートの平和主義者、ヴァツシュ・ザ・スタンピードだった。

「ひゃあ！　こりゃ、当たり前だな」

嗤いながら、E2はそうのように言った。

確かに、この状況はプレイヤーが想定した最良の状況だ。

「君達が、やったのか？　こんな、酷いことを……！」

「やったのは、こつちのE2だ」

言って、ヴァツシュがいるのとは別の通路から奥を目指す。

ヴァツシュの言った『酷いこと』の中に、ソードが抱えている生首やらが含まれているなら話は別だろうが、知ったことではない。

「あ、待って！」

「おおっと、あいつもあいつで忙しいのさ。そんなことよりよお、俺と、お互いの目を見て話し合わねえか？　ヴァツシュ・ザ・スタンピード」

後ろから聞こえてくる声に振り向こうともせず、時折囃を撒きながら、ソードは奥へと突き進む。

目指すは唯一人。かつて、2つの世界の剣士の頂点に立った稀代の大剣豪、偉大なる“サムライマスター”
近衛詠春。

正門にソードが現れたのと同じ頃、裏門の守備を担っていた呪術師が圧殺されていた。

縦に押し潰されたその死体は人間としての原型を留めておらず、死体よりも肉塊という表現の方がより正確だろう。

下手人は、肉塊のすぐ傍に立っている白尽くめの男　ではなく、その背後に聳える、黒い巨人だ。

白尽くめの男、プレイヤーは、何かを探るような動作を行うと、約10秒後に背後の黒い巨人へと振り返った。

「行こう、ナイン。ターゲットはあちらの方角。途中の障害物とかは全部無視して、最短距離を突っ走ってくれ」

プレイヤーの発案に、黒い巨人　ナインは無言で頷き、クラウドチングスタートの姿勢を取った。

すると、巨人の尋常ならざる殺気を察知したか、或いは先程呪術師を縦に潰した時の音を聞きつけたのか、新たに2人の呪術師と1人の剣士が現れ、ナインの進行方向を塞いだ。だが、プレイヤーが道を開けると、巨人は先程示された方向へと走り出した。

目の前には3人の敵と建物という大きな障害物があつたが、ナインはまるで陸上選手がハードルを踏み倒すような気軽さで踏み潰し、打ち砕き、突進していく。

猪突猛進という言葉が生ぬるく聞こえる程、その勢いは留まることを知らず、どんどん加速していく。

不運にも進行ルート上で眠っていた者や待ち伏せていた者もいたが、ナインは全てを歯牙にもかけず、薙ぎ払い、踏み潰し、圧倒し、蹂躪し、殺し続けた。

途中で遠距離から攻撃して来た賢い者もいたが、それが神鳴流の技でも呪術でも関係無く、ナインが身に纏う黒い鎧によって悉くが防がれ、巨人の進撃を止めるには至らない。

その光景を、後ろを追走しながらプレイヤーは眺め、時には笑みを浮かべていた。

死んだことにも気付いていないような滑稽な死に顔、自分達の力

が通じないことを痛感した戦士達の絶望の表情。そして、巨人の進行に対して為す術も無く蹂躪されていく『ここが戦場になるはずが無い』『自分達は大丈夫』などと思いつ込んでいたたろう者達の絶望と混乱、恐怖に彩られた声と表情。

全てがとても愉快で、滑稽で、面白い。

だが、こういう一瞬で作られたものでは物足りない。

やっぱり、もっと、時間を掛けてじっくりと吟味して、熟成して作り上げたものじゃないと、満足できない。

プレイヤーがそんなことを思った頃には、目的の場所は目と鼻の先だった。

「みんな、起きろ！」

肩を掴んで体を揺すられ、大きな声で呼びかけられて、ネギは眠りの底から覚醒した。

「なんですか、衛宮さん？」

欠伸を漏らし、寝ぼけ眼で士郎を見ながら問い掛ける。恐らく、まだ真夜中のはずだ。

「敵が来る！」

切羽詰まった声でそのように告げられ、寝ぼけた脳がその言葉を理解するまでの数秒の間を挟むと、ネギの意識は一気に覚醒し、眠気も吹き飛んだ。

「わ、分かりました！ みなさん、早く起きて下さい！ー！」

慌てて、まだ眠っている面々を士郎と共に起こしに行く。

刹那はどうやらネギよりも早く覚醒していたらしくその手間も省け、カモはすぐに起きてくれた。

後は、未だに熟睡している明日菜と木乃香だ。

「そんな……総本山の守りが突破されたなど、本当ですか？」

「確かに、オイラもざっと見ただけですけど、ここの守りの堅さは相当のモンですぜ？ エミヤの旦那を疑うわけじゃないツスけど、ちよつと信じられないツスね……」

事情を聞いた刹那とカモは、士郎の話に懐疑的だった。

だが、面と向かって疑われても少しも臆することなく、士郎は力強く言い切った。

「信じてくれ。このままだと手遅れになる」

言って、士郎は総本山の配置の後ろの方へと振り返った。その顔には、先程よりも深い焦燥が現れていた。

士郎の実力をネギは見たことは無いが、恐らく、あのリヴィオにも比肩しうるほどの実力者のはずだ。その彼が、ここまで焦燥していることの意味が分からないほど、ネギは愚かでは無い。

「アスナさん、起きて下さい！ アスナさん！」

ネギが必死に体を揺さぶって、漸く、アスナは起きてくれた。

「うゝん……なによ、ネギ。トイレにでも行くの？」

「違います！ 衛宮さんが、敵が来るから早く準備をって！」

「へえ……って、ウソ!？」

明日菜は敵が来るならどうしたらいいかと、眠気が一瞬で吹き飛ばほかに慌てた。そこへ士郎が努めて冷静にアドバイスを送ると、それに従って明日菜は一先ず深呼吸をしてなんとか落ち着き、それからアーティファクトを呼び出した。

ネギも同様に、まずは出来るだけ落ち着いて、自分の杖を手に持った。

後は木乃香だけだが、起きないようならいつそのまま連れて行ってしまおうか、と士郎が漏らした、調度その時、木乃香も起きた。「ふあ……まだ眠いわあ。どないしたん？」

木乃香も起きて、これで準備が整ったと思い、ネギは士郎の方を見た。

何故か、士郎は強張った顔で壁の向こうを見つめ、その手には黒

と白の剣を握っていた。

「士郎さん……？」

何時の間に、どこから剣を取り出したのか、どうしてそんなに険しい顔をしているのか。ネギは訊こうと声を掛けたが、士郎はそれを無視して全員に指示を出した。

「刹那、木乃香を頼む。ネギと明日菜とカモミールは俺の後ろに隠れる」

その言葉を聞き終えてからだろうか。微かに、地響きのような音が聞こえて来た。

時間が経つと共に音は次第に大きくなって行き、その中に破壊音が混じっていると気付いた。

同時に、ネギは音が近づいてくるのに比例して、空気が重くなっ ていくような錯覚を感じていた。やがて、今まで経験したことのないような恐怖と寒気をも感じるようになり、全身が震えて止まらなくな った。

明日菜とカモ、木乃香も同様だった。刹那はそのような素振りは見せていないが、音が大きくなるにつれてどんどん顔色が悪くなっ ていく。

その中で士郎だけは、険しい表情ではあるものの落ち着きを見せ ていた。それが、ネギには信じられなかった。

次第に近付いてくる、訳のわからない不安と恐怖を前にして、この人はこわくないのだろうか。

リヴィオの強さを目撃した時と同じような感情をネギが覚えた、その直後、近付いて来ていた破壊音は部屋の直前で、ピタリ、と止 まった。

不気味な静けさに息を呑む　暇も無く、一瞬の静寂は壁と共に破られた。

壁を突き破って表れたのは、人間の腕だった。しかし、それはと つつもなく大きかった。ネギや明日菜どころか、士郎よりも巨大な腕だったのだ。

あまりにも予想外な、理解を超えた物体の出現に、全員の思考が驚愕で塗り固められた。

完全な未知の物体ならこうはならなかっただろう。だが、良く見慣れたものが、常軌を逸した姿で現れることの衝撃は凄まじいものだった。

その瞬間が、致命的だった。

伸びてきた巨大な腕が、無慈悲に、容赦無く、躊躇い無く、少女を攫って行った。

「せつちゃん！！」

「桜咲さん！」

木乃香と明日菜が、目の前で攫われた友人の名を叫ぶ。

そんなことをしても無意味だ、とネギが諦めの感情にも似た思考をすると、まるでそれと相反するかのように、巨大な腕は破壊された壁の前で止まった。

それと同時に部屋の中に現われたのは、白尽くめの男だった。

「ナイン、駄目じゃないか、よく見ないと。ターゲットの近衛木乃香は黒髪で、腰まで届くほどの長髪だ。この子も黒髪で君よりもずっと髪が長いけど、肩にも掛からない程度だ。困ったなあ、二度手間だよ」

「プレイヤー、貴様！」

士郎が叫び、切りかかるよりも一瞬早く、プレイヤーはひらりと跳躍して巨大な腕の上に移動した。結果、士郎の剣は空を切ったのみ。

ネギはその一連の動作を目の前で見ていたはずだが、理解がまるで追いつかなかった。

巨大な手がほんの僅か、握る手に力を込めた。

「ぐ、う、あ、ああ……！」

すると、何かが折れる鈍い音が聞こえて、刹那が呼吸にも苦しみながら悲痛な声を漏らした。恐らく、どこかの骨が折れたのだろう。しかし、ネギには分からない。

どうしてこうなってしまったのかも。
これからどうすればいいのかも。
これからどうなってしまふのかも。
何もかもが、分からない。

第十三話（前書き）

今回は戦闘描写、それに伴う残酷な描写が多く含まれます。
これらが苦手な方はご注意ください。

第十三話

未だ殺気の留まる正門に、リヴィオは辿り着いた。だが、そこには誰もいなかった。

殺気の主も、正門を守っているはずの剣士も。

「誰もいない……！？ バカな！ 確かに奴の気配が……」

言って、リヴィオは正門付近、殺気の源として感じられる場所に駆け寄った。

すると、何かを踏んだような感触がした直後、殺気が霧散した。

足元を見ると、そこには、一枚の呪符があつた。

それを拾い上げて、どういうことを理解すると、リヴィオはそれを握り潰した。

「クソッ！ こんな紙切れに踊らされたのかよ……！」

改めて、周囲を具に観察する。

殺気にはかり気を取られて気付かなかったが、神鳴流剣士の物と思しき衣類が3人分、そして三振りの刀が残されていた。

これだけで、理解するには十分だ。

正門の警護に当たっていた土井、そしてこの時間に付近の巡回を行っていた、恐らくは斎藤と山田が殺されたのだ。リヴィオが到着するまでの、僅かな間に。

リヴィオは、悔んだ。

もっと、自分が早くここに来ていれば。

あの時、裏の方向から聞こえて来た破壊音に気を取られ、どちらに向かうべきか迷わなければ。

昨日、ネギヤカモの事を慮らず、あの男を殺すか戦闘不能なまでに破壊しつくしていれば。

こんなことには、ならなかったのではないか。

拳をきつく握り締め、自らの落ち度を責めながらも、しかしリヴィオの肉体は周辺の観察を怠っていなかった。

ミカエルの眼の暗殺者として造られた肉体と、数多の修羅場を潜り抜ける中で身に付いた無意識的な習慣が、情の変動による誤差にも左右されずに働いていた。

そして、奥から人の話し声が聞こえるのに気付いた。

「この声、ヴァッシュさんか」

この状況で最も頼れると同時に最も不安な人物の声を聞いて、リヴィオは物思いから抜け出した。

何時までも歩みを止めていては無意味どころかマイナスだと、ヴァッシュと合流するべく無人となった正門を後にする。

しかし、ヴァッシュが間近で人が殺されていながら、犯人を追うでもなく近くに留まっていることが疑問だ。負傷者の手当てか、或いは敵の何らかの足止めを食っているのか。

少し進んだ先の広間に着くと、そこにはヴァッシュ以外にも予想外の顔があつた。

「リヴィオ、来てくれたのか」

「お、リヴィオの兄ちゃんやないか」

「ぐっ、そっ……が、ああああ……」

ヴァッシュの傍らには謹慎中のはずの小太郎の姿があり、足元で額に包帯を巻いた男が、頭を押さえながら悶絶している。

小太郎がいることに驚きつつも、足元で転がっている男を観察する。

「こいつは、E2……か？」

「そうや。どういう力持つとんのかは秘密や言われて知らんかったけど……えっげつないことしてくれたなあ、オッサン」

額に包帯という特徴から敵の一員の名前を口に出すと、小太郎がそれをすぐに肯定し、嫌悪を露わにE2へと不快をそのまま吐き捨てた。

部屋の奥では呪術師が6人、仰向けで寝かされていた。

歩み寄って表情を確かめたが、全員が苦しそうに息をしている。

1人は憔悴しきって、呼吸までも弱々しい。

「恐らくは、彼女達が『えげつないこと』をされた被害者なのだろうが、何があったのだろうか。」

「この人達は……」

「気を失っているだけだけど……心配だよ」

リヴィオが呟くと、ヴァツシユはすぐにそう返して、特に衰弱している女性の傍で膝を着いた。

「頭、痛え……くそっ、なんだよ……うええええ……っ」

一方で、下手人であるE2は五月蠅いぐらいに呻き、苦しんでいる。こちらもどうしてこうなったのか、気にならないでもない。

すると、E2がヴァツシユを見ると、急に声を出すのをやめた。

いや、固唾を呑んで、そのまま呼吸を忘れてしまったのか。

その表情に見えるのは、怯え。

「彼、僕の記憶とか感情とか、覗いちゃったみたいなんだ」

E2の様子を見て、ヴァツシユが理由を教えてくれた。

記憶を覗く、という言葉に複雑な感情を抱きながらも、リヴィオは納得した。

「成る程、それで。……話には聞いていましたが、まさか、本当に他人の心や記憶を視ることが可能だなんて」

ヴァツシユの記憶と感情。それを直接視てしまったのなら、こうなっているのも頷ける。

大方、奴らはヴァツシユの表面だけを見て『能天気で軽薄な男』
とでも思っていたのだろうが、それは大きな間違いだ。

ヴァツシユ・ザ・スタンピードほど、多くの痛みと挫折を味わい、
数え切れないほどの悲しみを背負い、絶望の深淵を知っている人間
など、いるはずがないのだから。

「割とふつーの術やで？ ま、こいつみたいに“生まれつき”は珍しいけど」

すると、リヴィオがつい漏らした愚痴のような言葉に、小太郎が
そのように補足して来た。

それに、リヴィオはつい苦笑した。

他人の心や記憶を視る事は、ノーマンズランドでも無かったわけでもない。

ノーマンズランドの歴史上で一度だけ、多くの人がある物を介することによってそれを体験した。

ある物とは、プラントの羽根。ミリオンズ・ナイブズに率いられたプラント融合体から零れ落ちた、プラントの結晶。

プラントの羽根には、それに触れた者の思考を周囲の人間に直接伝え、プラント自身の記憶や思考を伝える力を持っていた。

ノーマンズランドではそれ以外に、人が直接、他人の思考や記憶を覗き見た例は無く、謂わば『奇跡』だった。

それが、この世界ではごく普通の事になってしまっているということが、リヴィオには受け入れ難く思えたのだ。

そこまで考えて、すぐにリヴィオは思考を切り替えた。

小太郎が言った『生まれつき』の意味や、E2がヴァッシュの記憶を見て何をしようとしたのか、ついでに小太郎がどうしてここにいるかもどうでもいい。

今は、行動すべきだ。

「話はこちらまでにしましょう。小太郎、君が此処にいる理由は訊かない。ただ……」

「大丈夫だよ、小太郎も力を貸してくれるって」

リヴィオが全てを言うよりも先に、ヴァッシュが言おうとした事を察して答えた。

それを聞いて、リヴィオは小太郎を見た。

「こんな糞外道な真似されて、黙って見てられるほどオレも腐つたらんで？」

作った拳を掌に当て、小太郎は怒りを込めて言った。

小太郎の中ではリヴィオへの対抗心は未だに燻っているが、力の差は昨日の手合わせで嫌という程理解しているし、何より、このような非道が行われていることを知って尚、自分の感情を優先するほど小太郎の視野は狭くなかった。

ちなみに、小太郎は大人しく謹慎をしているつもりだったが、聞き覚えのある声での下衆な高笑いを聞きつけて、部屋を抜け出して様子を見に来て、そこでヴァッシュと合流したのだ。

「分かった。それじゃあ、ケン・アーサーともう1つの殺気の方に向かいますよう」

小太郎の言葉を信じ、そのように提案する。

だが、気配を探つてすぐに、リヴィオは眉を顰めた。

「とは言つてもさ……さつきから、なんだか同じ気配が増えてない？」

「奴の小細工のようですね」

ケン・アーサーの殺気が、増えている。4つはあるか。

どういう仕掛けかは分からないが故に、紙切れで翻弄されてしまう自分が腹立たしい。

リヴィオは握ったまま持つて来ていた呪符を再び見て、ギリ、と歯を鳴らした。

「リヴィオの兄ちゃん、その札、見せてくれんか？」

すると、呪符を見て小太郎がそんなことを言い出した。

どうしたことかと思つたが、リヴィオは小太郎が呪術にも通じていることを思い出した。

「ああ、いいぞ」

小太郎ならば呪符の効果を見抜けるかもしれない。

そのような期待を懐いて、リヴィオはすぐに了承して小太郎に呪符を渡した。

「……正直、同じ気配が増えてるっちゅーのは、オレには分からないけど、何となく仕掛けは読めたで」

少し悔しそうに呟きながらも、小太郎は呪符について説明してくれた。

「これ、時限式の『他人の意識を向けさせる術』の呪符や。人払いとか、他人の目を逸らすのとは逆やな。血文字で作つてあるのは初めて見たけど」

他人の意識を向けさせる。

その単語を聞いてすぐ、パズルのピースが嵌るように、リヴィオの中で答えが生まれた。

「なるほど、『木を隠すには森の中』ってやつか」

ヴァッシュも気付いたらしく、感心したように頷いた。

それに続く形で、リヴィオも答えを口に出す。

「しかも、他のは全部、肝心のものより目立って気を引く、か。だが、種は割れた」

一目見ただけでは本物と区別がつかない精巧な罠をばら撒き、それらは肝心の本物よりも否が応でも気を引くようにして、強引に潜入活動をするとは恐れ入った。

だが、どんなに精巧な仕掛けも、仕組みさえ分かれば対処法も自然と導き出せる。

再び、気配を探る。

気配の数は更に増えていた。だが、それら気の引かれるものを敢えて無視して、同じでありながら、目立ってない気配を探る。

……いた。

場所は、もう一つの大きな殺気とは別の方向。ならばこちらも、2手に別れるのが上策か。

もう一つの殺気が発されている方向は、御令嬢達の寝室の場所と一致する。杞憂であることを願うよりも先に、迅速な行動をしなければ命取りになりかねない。

「俺はこいつを持ってソードを追います。ヴァッシュさんは小太郎と一緒に、もう一つの殺気の方……御令嬢達の寝室へ向って下さい」

「分かった。行こうか、小太郎」

「了解や。しくじらんやないで！」

リヴィオの提案を、ヴァッシュと小太郎はすぐに快諾してくれた。てつきり、小太郎はリヴィオに付いて行くと主張すると思っていたのだが、そんなことは無かった。もしかしたら、リヴィオが来るまでにヴァッシュと意気投合していたのかもしれない。

ヴァッシュと小太郎が出発したのを見送って、リヴィオは足元に転がっているE2を睨みつけた。

「ぎ……ひい……！」

E2の怯え方から、リヴィオは僅かに殺気を放ってしまったことを察した。すぐに心を平常心へと戻す。

酷い目に遭わされたという呪術師達とリヴィオは、普段、挨拶を交わす程度の中ではなかった。だが、それでも知っていたのだ。彼女達がこのような目に遭わなければならないような人間ではない、ということ。

この男を、いつそ殺してしまいたい。

だが、それは絶対にしない。

彼女達を理不尽に傷付けたこの男は許せない。だが、それで命を奪って、全ての可能性を潰してしまうようなことはしたくない。

しかし、念には念を入れて、リヴィオはE2の両肘と両膝の関節を強引に外した。

「痛っ……！ あっ、ぶう、が……！？」

痛みにE2は悲鳴を上げそうになっているが、同情はしない。

この程度なら後遺症も無くすぐに治せるし、万が一にもこれが原因で死ぬことは無い。

「動き回られたら厄介なんでね、大人しく荷物になってもらう。両手、両足を失ってもいいのなら、話は別だけど」

「は……はは。わかりましたー」

リヴィオは半ば脅しながら同意を得て、E2を肩に担いで奥へと向かった。

ソードは衣服への返り血をも吸収しながら、目的の人物を探して動き回っていた。

既に持って来た死体の一部は投げつけるなどして使い切り、その後出会った者達は騒がれるよりも先に殺し続けた。

事前に知らされたこの総本山の構造からして、この辺りに近衛詠春の私室があるはずだ。ならば、本人と遭遇する可能性も高い。

それでも見当たらないのは、どこか別の場所で指揮を取っているのか、それとも。

思考を打ち切り、反射的に前方へと跳躍する。

直後、ソードが通るはずだった場所を、空を飛ぶ斬撃が通過した。

驚くべきは、その斬撃 恐らくは神鳴流の斬空閃だろうが、その威力も早さも正門で殺した男とは段違いだったことと、放たれる直前まで気が付けなかったということだ。

常日頃から殺気と闘争心が漲るソードには分からないことだったが、武術や武道の達人の中には、修練の過程で悟りや明鏡止水の境地に至り、気を乱さず、心静かなままに戦うことができる者もいるという。

それ程の領域に至っている剣士は、今宵この場所には、恐らく唯一人。

ソードが期待を込めて視線を送ると、斬撃が放たれた部屋の襖が開き、1人の男が現れた。

その男こそ、ソードが探していた最強の剣士 “サムライマスタ” 近衛詠春に相違なかった。

「あなたは……ソード、でしたか」

対峙し、詠春は静かに問うてきた。

老いによる為か、やはり資料映像に残されている20年前の雄姿と比べて痩せて見える。

だが、今向けられている凄烈たる剣気は、間違いなく極上のもの。期待に、魂こころが踊る。

「然り。武名高きサムライマスターに名を覚えて頂いていたとは、恐縮至極」

2つの世界の頂点に立った剣士への最低限の礼として、言葉で以って敬意を表す。

士官した武士ならば、このような時には様々な文句で言葉を飾って、遠回しに用向きを伝えるのだろう。

だが、ソードにとってそんなものは迂遠に過ぎる。

「願いが、御座る」

「願いが？」

「某と戦って頂きたい」

頭を下げることも無く、野獣のような視線を向けたまま、ソードは詠春に頼みをした。

予想外の申し出だったのか、詠春は沈黙考し、ソードも返答を待った。尤も、断られても無理矢理にでも戦うつもりだが。

「……一つ、訊きます」

「なんなりと」

「何人殺しました？」

詠春に問われ、今度はソードが沈黙考した。

明白に覚えているのは、最初の神鳴流の3人と、たまさか鉢合わせた呪術師8人ぐらいか。それ以外にも何人が殺したはずだが、あまり覚えていない。

人間とて、山道を進んで虫を何匹殺したか問われて、それを正確に答えられる人間は滅多にいるまい。それと同じだ。

「さて。10より先からは数えておりませんな」

取り敢えず、相手の神経を逆撫するように答える。

ソードの期待通り、詠春の表情と剣気に、怒りが増した。

「そうですか。……覚悟は宜しいですか？」

「無論のこと。寧ろ、それこそが望みに御座る」

詠春が瞬動術を発動させたのと同様、ソードも刀を抜いて詠春の刀を受け止める。

受けてすぐ、ソードは力比べでは自らが有利と悟った。それと同時に詠春は身を引き、間合いを取った。

打ち合って1分ほど経過して、詠春は自分の体力の限界を感じ始めていた。

なにも、動けないほど疲労が溜まったわけでも、肩で息をしているわけでもない。

目の前の強敵と戦うには、普通以上の体力を必要とするのだ。あと少しでも体力が落ちれば、そのまま押し負ける。

ならば体力が足らなくなる前に、次の一撃に全身全霊を込めて、目の前の敵　　大事な部下や後輩たちを殺した憎むべき魔を討つ。

刀を構え、精神を集中する。

すると、それに応えるかのように、ソードも動きを止めて構えを変えた。

先程までは、一般的な正眼の構えに似たものだった。だが、今のソードの構えは極めて異質なものであり、詠春にも見覚えがあった。一撃必殺の剣術で今も知られる、示現流の蜻蛉の構え。

あの堂に入った構えと、重みを増したプレッシャー。とても偶然の一致や猿真似とは思えない。よもや、このような所で示現流と思われる剣士と戦うことになるとは思わなかった。

だが、それならば対策はある。

古から京都を守り続けた神鳴流は、幕末の混乱期にも多くの示現流の剣士と戦い、その対策を練っていた。

詠春が神鳴流を学んだ当時では、他の剣術流派への対策までも学ぶ者は非常に少なかったが、詠春は真面目な性格ゆえに学んでいた。曰く、示現流は一の太刀をかわせ。

先に攻めるのも、防御に回るのも愚策。先んじて攻めようとして

も先に斬られ、防御はそれごと叩き斬られるという。

転じて、それほどの剛剣であるが故に、かわされれば多大な隙を生み出すことになる。そこを突くのだ。

最大の一撃の準備と、相手の攻めに対する警戒を同時に行うのは、歴戦の戦士である詠春にとつて難しいことではない。だが、体を動かさずとも、先程よりも一層激しく体力と精神力を消耗していく。

両者、構え、睨み合ったまま、時間が過ぎて行く。

実際の時間では10秒にも満たなかったが、詠春にとっては刹那を永劫に思うほど長く感じられた。

先に仕掛けたのは、ソードだ。

その踏み込みたるや、尋常のものではない。その瞬間を比喻するならば、爆ぜたとでも言うべきか。

瞬きよりも早く、ソードは間合いを詰め、雄叫びの如き掛け声と共に刀を振り下ろした。

常人どころか、一流の戦士でも目に映るかどうかという一撃を、詠春は絶妙の体捌きでかわした。

そして間髪を入れず、ソードの首目掛けて渾身の一撃を放った。

「神鳴流奥義、斬魔剣！」

魔を斬ること。それに一点特化した、神鳴流の基本にして真髄とも言える剣技で以って、先んじて刀を振り下ろしたソードよりも先に、詠春の剣がソードの首を落とした。

その鮮やかな一撃は、一連の動作も含めて、最盛期と比べても遜色のないものだった。

一瞬の間を置いて、ソードの刀が床を叩き斬った。その刃は床板に食い込むことなく、完全に床板を斬り裂いていた。

気や魔法による強化に頼らずにこれ程とは、恐るべき剛剣。

肝を冷やしながらも、斬って捨てたのだからと息を吐いた 直後、詠春は目を見張った。

ソードの首の断面が、異常なのだ。

肉も、骨も、神経も、血管も、気管や食道も、何も無い。

そこに溜まって、蠢いているのは 全て、血。
それもさることながら、驚くべきことに、首を落とされた肉体が
まだ動いているのだ。

戦いを終えたと、気を緩め、息を吐きながら、まだ敵が動くのな
らばと即座に臨戦態勢に移れたのは、流石は英雄と呼ばれた大剣士
か。

だが、先程の一撃に全身全霊を込めた反動で、体が思うように動
かない。

身を引いて、死こそ免れたが、刀を握っていた両腕を一辺に斬り
落とされた。

バランスを崩し倒れそうになるが、何とか踏みとどまり、壁に凭
れかかって何とか立ち続ける。

両腕の断面に気を集中させて止血をするが、それで精一杯。最早、
戦うことは出来ない。出来るとしたら、足止めぐらいのものか。

「……………まさか、首を落としても死なないほど、だったとは……………」
口を突いて出たのは、悔いの言葉。

リヴィオを通して、衛宮士郎から目の前の男に付いての忠告は聞
いていた。

ソード ケン・アーサーは魔術にも精通した凄腕の剣士である
と同時に、強力な吸血鬼であると。

しかし、詠春は見誤ってしまった。特に、ソードの生命力を。
無名と侮った吸血鬼の剣士が、まさかこれほどの実力と生命力を
兼ね備えた強敵だったとは。

結界を破られたことも含めて、完全に自身の油断と慢心が招いた
敗北だった。

詠春の両腕を斬ってから暫くの間佇んでいたソードは、やがて、
何か思い立ったように自らの刀で詠春に斬られた箇所より僅かに下
の部分の切り落としした。すると、見る見るうちに首から頭が生えて
来た。

「然り。小生、吸血鬼の中でも生命力は強い部類であります故、こ

の程度では滅びませぬ」

首の辺りを、何事かを確かめるように左手で触りながら、ソードはそのように返して来た。

首が無い状態でも声が聞こえていたのかと、詠春は半ば呆然としながら感心してしまった。

何かに納得したような素振りを見せると、ソードは刀を床に突き刺した。見ると、何時の間にか床一面が血の海になっていた。何処からともなく溢れている大量の血の中に、何故か、先程詠春が落としたソードの首は見当たらない。

刀の柄を握ったまま、ソードは詠春に向き直った。

「しかし、御見事に御座います。先の一瞬の業、私が及ぶものではありませんでした」

「……全盛期の力が出せても、一瞬では、意味がありませんでしたか」

「そのようで。戦いに関しても、相性というものは重要です」
確かに、と頷く。

ソード以外の同じ技量相手だったならば、先程の一撃で終わっていただろう。だが、相手がソードだったからこそ、詠春は倒し切れず、両腕を失った。

すると、ソードの目の色が変わり、先程までは詠春に集中していた殺気が、今度は別の方向に向けられた。

そちらから近付いて来る気配と足音に、詠春は覚えがあった。

「どうやら、彼が来てくれたようだ。」

「詠春さん、ご無事ですか？」

詠春が予期した通り、黒い帽子とマントを身に付けた男　リヴ
イオが駆けつけてくれた。肩に担いでいる人間が何者か気になるが、これで一安心だ。

「ええ。致命傷では、ありません」

壁に凭れたまま、肘から先が損失した手を僅かに振って、リヴィオに伝える。

リヴィオは詠春の傷を見ても全く動じず、命に別状が無い事を聞いて安心していた。それほど、彼はソードを危険視していたということだろう。

「ダブルファング……と、E2、何をやっている」

「見ての通り、捕まっただよ」

すると、ソードがリヴィオの通り名を呼ぶのと一緒に、肩に担がれている男の名前を呼んだ。

E2は顔を上げることもせず、声だけで返事を返した。

それを聞いたソードが溜息を吐いた、次の瞬間、彼は壁を突き破って外まで蹴り飛ばされた。

一瞬の出来事に、詠春も何が起きたかすぐに理解できなかった。

「表に出てる」

リヴィオの声が聞こえた。それと同じタイミングで、床にリヴィオが担いでいた男が落ちた。

先程の瞬間の出来事は、リヴィオが担いでいた男を放り投げて間合いを詰め、ソードに蹴りを見舞ったのだと、漸く理解できた。

「詠春さん、そいつを見張っておいて下さい。御令嬢達の下へはヴァッシュさんが向かっていますので、御安心を」

それだけ告げて、リヴィオは詠春からの返事を待たず、ソードを追って外へ出た。

気や魔法など、特殊な手段による身体強化を一切行わず、詠春が知覚出来ないほどの速度で動ける存在。それが、リヴィオ・ザ・ダブルファングだ。

しかも、彼の真価はそこには無く、それに匹敵するだけの力を複数持っている。

頼もしさと同時に、おそろしさまでも感じてしまうのは、人の性であろう。

詠春は壁に凭れ掛かりながら、ずるずると体を沈めて、やがて床に腰を下ろした。

何時の間にか、床に広がっていた血液が殆ど無くなっていた。

蹴り飛ばしたソードが突き破った壁の穴から外に出て、リヴィオは両手にダブルファングを携え、ソードと対峙した。

ソードはリヴィオの蹴りを受けた服が多少汚れた程度で、平然と立っていた。対するリヴィオも、それを見て特に驚くことは無かった。

先程の蹴りは、常人どころか気で強化した人間であろうとも即死するか、下手をすれば肉や骨が千切れて粉々になってもおかしくないほどの威力だった。だが、それも相手が人間だった場合の話だ。

ソードを蹴った時、リヴィオは今までに感じたことの無い感触だったことを覚えている。イメージとしては、以前、綺礼と共に祭りの縁日に行つて見つけた、水風船。紙が凄まじく強靱な水風船を、リヴィオは連想した。

その本質までは分からないが、目の前の魔人は完全に生物としても人間の枠を外れていると理解した。

一方、ソードは蹴り飛ばされながらも決して手放さず、握りしめていた刀を構え直していた。その表情は、先程の詠春の戦いの中では見られなかった、野獣が牙を剥いているような凄絶な笑みを浮かべていた。

戦いの火蓋を切つて落としたのは、リヴィオだ。

両手に構えたダブルファングを発射するが、それが尋常ではなかった。

銃を撃ちながら手を忙しなく動かして乱れ撃ちをしている。

言葉に表せば陳腐で幼稚であり、B級西部劇のギャングをイメージするだろう。

しかし、リヴィオが行っているそれは、そんなものではない。

個人が、点や線ではなく、面を制圧する程の弾幕を両手に構えた2丁の銃器で展開しているのだ。

人間の限界や領分を遥かに超えた攻撃に、ソードは回避も防御も

間に合わず被弾し、肉体と衣服は瞬く間に銃弾によって破壊される。10秒後には、ソードは人間で例えれば肉体の5割近くを損失していた。だが、未だ、表情には笑みが張り付いていた。

リヴィオは、ソードが被弾して飛び散らせたものが衣服の他に血液だけだったことに気付いた。それを訝しく思い攻撃を一時中断したのだが、ソードは肉体の5割以上を欠いた状態で動き出した。

見る見るうちに、ソードの肉体が修復されていく。

リヴィオに肉薄し刀を振り下ろした時には既に6割近くまで戻り、リヴィオが横に跳んで回避した間に、ほぼ完全な状態に修復されていた。

肉体の超高速回復は、リヴィオにとっては別に驚くべきことではない。問題なのは、その方法だ。人の皮を被った血液の内側から溢れ出て来た血液が、また人の皮を被ることで修復していたのだ。

人の理から外れた魔の法則を目の当たりにしても、リヴィオは怯まない。

「真正正銘、血で出来た化物ってわけか」

忌々しげに吐き捨てると、それを聞いたソードが、くくつ、と声を漏らした。

「そちらこそ、強いなあダブルファンク。本当にただの人間か？」

「いいや。実は改造人間さ」

「ほう。生まれは悪の秘密結社だが、今は人類の自由と平和の為に戦う正義の戦士、とでもいうのか？」

「いいね、それ。今度からそう名乗ってみようかな」

ソードの例えが日本では有名な文句であることを知らないリヴィオは素直に感心し、本心からそう返した。

そこで一拍の間を挟み。

戦闘、再開。

リヴィオがダブルファンクの銃口を向けるのと同時に、ソードも爆ぜるような加速で間合いを詰めて来る。

銃爪ひきがねを引き、ダブルファンクの銃口から次々と弾丸が放たれる。

先程のように回避動作等の動きを封じる為の面の制圧ではなく、敵を撃つことだけを狙った直線的な攻撃。一切の無駄無く、全ての弾丸がソードの肉体を決る。

だが、止まらない。

止まる素振りなど寸毫も見せず、一切の躊躇い無く、ソードは迫って来る。

ソードの殺傷範囲内 刀の届く距離に至る直前に、リヴィオは横へ跳んでソードの攻撃をやり過ぎし、射程の優位を活かせる距離まで移動してそのまま追撃を仕掛けようとした。だが、着地した場所にあつた何かを踏んで足を滑らせ、バランスを崩しそうになった。何を踏んだのか、足元に目を向けるまでもなく臭いで分かる。とても嗅ぎ慣れたこの臭いは、妙に濃密だが血の匂いだ。恐らくは、最初の銃撃で飛び散ったソードのものだろう。

だが、踏んだ感触は明らかに血のものではなかった。でなければ、リヴィオが血溜まりで足を滑らせるような事などありえない。

急いで体勢を立て直して、足を踏ん張って、また何かを踏んだ。今度は、異常に強い粘性を持った血だ。

まさか、これが魔術か！？

今までに何度か目にしてきた呪術や、映像資料で見せてもらった魔法使い達の魔法とは明らかに異なる、神の摂理に背く外法。

ソードは魔術の使い手でもあるから、魔術の知識に疎いリヴィオでは危険だ。士郎から受けていた忠告を、実際の対決の際に失念してしまっていた不覚に気付く。

リヴィオの動きが止まったのを見て、ソードは野獣の咆哮の如き叫びを上げ、刀を構えて突っ込んで来る。

その咆哮は聞くだけで怯み、向けられる殺気は下手に感じ取ってしまえば死を実感しかねないほどのものだ。

だが、リヴィオにそれらのものは通用しない。無論、この程度の足止めもだ。

「舐めるなあ！！」

血の粘着力によって動かせなくなった靴を、足に力を込めて破り捨てた。

脱ぎ捨てるならばいざしらず、脱げなくなった靴を履いた状態のまま、足の力だけで破壊して自由を取り戻すという離れ業。しかし、それを目の当たりにしても、ソードは驚きもしない。それどころか、速度は先程よりも増しており、次の瞬間には完全にリヴィオが間合いに捉われる。

そこでリヴィオは、自分からソードに突っ込み、刀が振り下ろされる前に体当たりを食らわせようと試みた。

それを察知したソードは刀を振り下ろすタイミングを早めたが、完全に振り下ろすよりも早く、リヴィオは鍔元の近く、刃の根元の部分を左腕とダブルファンングで受け止めた。

「ぐう　っ!？」

「ちい……」

だが、そこで止まってしまふ。

想像していた以上の臂力では無く、先程の俊敏な動きからは想像出来ないような質量によって押し切れないのだ。

これも魔術の一つかと適当に当たりを付けた、直後、直感的に危機を予感し、押し合っていた刀から上手く力を逸らしながら左腕を離しつつ、ソードから距離を取る。

回避が遅れ、脇腹を僅かに斬られた。

リヴィオの脇腹を掠めたのは、ソードの体から生えて来た刀だった。

体からムラマサを生やすなんて、本当にどういう体の構造をしているんだ、こいつは。それとも、これも魔術の一種なのか？

次々と起きる未知の現象を前にして、リヴィオはいよいよ慎重になつた。

手の内が全く分からないどころか、想像や予測もできないのは、戦う上では非常に厄介だ。

未知の切り札や予想外の手札は、勝負の命運を左右するほどに大

きな要素なのだ。あのクリムゾンネイルとの戦いの時のように、大きな実力差を覆す要素にもなりえる。

それが、相手の攻撃の多くが予想外の手札とあっては、射程の有無が揺るぎ無いとはいえず、慎重にならざるを得ない事態だ。

負ける気はしないが、勝てるイメージも湧いて来ない難敵だ。

それにしても、再生力と生命力を盾に突っ込んで来る手合いが、こんなにも厄介だったとは。自分を相手にしたウルフウッドやクリムゾンネイルも、今の自分のような気分だったのかとリヴィオは考えた。

その時、突然、遭遇してからずっとリヴィオに集中していたソードの殺気が僅かに揺らいだ。そして、表情から笑みが消えた。

「……ダブルファンク。この続きは、また次の機会に」

予想外の言葉にリヴィオが驚いていると、ソードは口から赤い霧を吐き出した。

今までのパターンから考えるに、血の霧か。

霧により視界を遮られ、血の臭いで嗅覚も鈍る。しかしそれ以上に、この霧は危険だと、リヴィオの本能が警鐘を鳴らした。

ならば仕方がない、と早くに割り切り、リヴィオは直接の追走を諦めて別のルートからの追跡を開始した。

「そう簡単に逃がさないぜ」

撤退の理由は、相手の作戦の成功か失敗か、2つに1つ。どちらにせよ、奴らの背面を突く好機を逃す手は無い。

リヴィオは闇夜を駆け抜ける。

まるで、懐かしい場所を走るかのように、颯爽と。

僅かに、時を遡る。

近衛詠春がソードと遭遇するよりも少し前。

プレイヤーは当初からの目論見通りに事を運んでいた。

衛宮士郎に斬り掛かられた時は肝を冷やしたが、余裕の態度は崩さない。

優位に立って交渉事を進めるのなら、過剰なまでに余裕を見せつける演出も重要だ。

「ナイン達を甘く見ない方がいいよ、衛宮士郎。彼らは君よりずっと強いし、とても残酷なんだ。まあ、そんなことはあれだけの修羅場を潜り抜けて来た君なら、こうして対峙しているだけで分かっているだろうけど」

ナインの腕の上に立ち、その巨軀を壁の向こう側に隠している本人を引き合いに出して、プレイヤーはそう告げる。

これはハツタリの類ではなく、プレイヤー自身の率直な見立てだ。衛宮士郎がどのような武器を投影しようとも、今の状況ならば絶対にナインは勝てるという自信があった。

「……やってみなければ分からん」

言って、衛宮士郎は両手に投影した陰陽の双刀を握る力を強めた。あれは恐らく、中国の伝説に伝わる宝具　干将と莫耶に相違あるまい。

その性質は、伝承の通りならば『互いに引かれ合う』『魔に対し効果が抜群』といったところか。

これ程の宝具をあっさり投影するあたり、封印指定されるのも納得というものだ。

そのような考えは少しも表に出さず、プレイヤーは土郎を宥めるような手振りを取った。

「まあまあ、落ち着いてよ。それに、度の過ぎた強がりや後ろの子達を危険に晒すことになる」

土郎が守っている3人の少年少女と、ついでに1匹のオコジョ妖精を指している。

どんな実力者だろうと、ナインを相手に3人と1匹を守りながら戦うのは自殺行為でしかない。

元の世界にいた頃の衛宮士郎ならば、ナインに捕らわれている少女も、後ろの3人と1匹も見殺しにして、ナインとプレイヤーを殺すことを最優先にする。そんな選択もありえただろう。

だが、こちらの世界に来てから、彼は変わったようだ。現に、彼は明らかに見捨てる、切り捨てるという選択肢に対して拒否を示している。

だからだろうか。最有力候補と見込んだ彼に、未だ“兆し”が見えないのは。

残念でならないが、それは、今は置いておこう。

今は仕事と『楽しみ』だ。

「せつちゃん！ せつちゃんを返してえ！！」

すると、怯えて、震えて、立ち竦んでいた少女が、張り裂けそうな切ない声で叫んで来た。

彼女が拉致するように依頼されたターゲット、近衛木乃香だ。どうやら彼女にとって、ナインが捕獲した少女 桜咲刹那はとても大事な存在らしい。

この様子なら、思っていたより円滑に事を進められる。そう判断し、プレイヤーは早速交渉を開始した。

「いいよ。けど、交換条件だ」

「なに？ うちに来ることならなんでもする！」

「こ、このか……待って。なんか、マズイよ」

木乃香が勢いで口走ると、隣のオッドアイの少女

神楽坂明日

菜が彼女を思い留まらせようと話しかけた。

もう遅い。この流れは絶対に止めない。

「その言質、確かに頂いた。それでは、とつても簡単なお願いだ。彼女を返す代わりに、大人しく僕らに捕まっておくれ」

「駄目だ、奴らが口約束を守る保証は無い」

プレイヤーからの要求を、士郎は素早く突っ撥ねた。

それを、プレイヤーは鼻で笑った。

「何を言っているんだい？ こういう状況下での交渉では、君達のような不利な立場の人間は絶対的優位に立っている者の言い分を信じる以外に無いんだよ」

「ここは貴様らにとって敵地だぞ」

「そうだったら、この子達の前で大量虐殺ショーの始まりだ。日本ではとても希少な経験だ、多感な年ごろの子供にとっては人生を左右するほどの事になりかねないね」

言うと、そこで士郎は口を噤んだ。

士郎の目的が、増援が到着するまでの時間稼ぎということを読んでいた。それをカードとして切つて、プレイヤーを焦らせようとした状況判断も悪くないだろう。実際、士郎1人だけの状況ならば通用したかもしれない。

しかし、今の士郎は多くの荷物を背負っている。足枷ならば外せばいい、余計な錘ならば捨てればいい。だが、大切に背負っている荷物を棄てるという決断はとても難しい。

案の定、士郎はその荷物 未来ある子供達の前途を憂い、それ以上は強気になれず、黙り込んだ。

プレイヤーの言葉がハツタリではないと、士郎も気付いているのだろう。ナインから発せられている殺気と臭いで。

殺気はともかく、少年少女達は嗅ぎ慣れていないことと、極限に近い緊張状態のために、この臭いに気付いていない。

人間の血肉の、独特な臭いに。

「本当に、約束を守ってくれるん？」

士郎が押し黙ったのを見て、木乃香は一步、前に出た。

「このかさ、駄目です！」

「そうよ、このか！ あんな奴の言うことなんか信じちゃだめよ！」
ネギと明日菜は、慌てて木乃香を引き止めようとした。

「そうだ、楔を打とう。」

この状況を最高に楽しめる手段を思い付き、すぐに実行する。

「冷たいねえ、君達。ナインに今にも握り潰されそうになっている子は、どうなるかと構わない、ってことかい？」

言つて、ナインが捕まえている少女をプレイヤーは指す。

仮にも神鳴流の剣士ということ、ナインには殺さない程度に締め上げておくようにリクエストをしていた。だが、顔色を見るに、どうやら圧迫された内臓が幾つか潰れているようだ。このままでは、すぐに適切な処置を施さなければ数時間以内に死ぬだろうが、別に構わない。

この状態でも今から暫くは生きている、ということとは間違いない。彼女らの選択次第で、少女の命が左右されることになる。これが重要なのだ。

「桜咲さん……！」

プレイヤーの指摘に、明日菜とネギ、ついでにオコジョ妖精の表情が歪んだ。

近衛木乃香と桜咲刹那。その双方を大事に思い、どちらも助けたという純真で無垢な想い。

しかし突き付けられた現実、木乃香を犠牲にして刹那を助けるしかないという、幼い子供には過酷な選択肢。

そして伏せている最悪の結末は、近衛木乃香以外の塵殺による状況の終了。

それらの中で必死に考え、葛藤して、どうしようもない現実を覆そうと苦心して 結局、何も分からず、何も選べない。

絶望の中での思考停止。認めたくない己の無力さの痛感。怒りと悲しみと屈辱に塗れた恐怖の表情。

ああ。どれも、実にイイ。

見て、知って、こんなにも楽しいものはない。

しかも最高なのは、まだこれ以上……いや、これよりさらに下の深淵があるということだ。

しかし、この状況ではこれが限界だ。未来ある少年少女の心と記憶に、楔を打ち込めただけでも良しとしよう。

それに、今は一応、仕事 중이다。

「お嬢さん、ご安心を。僕は約束を破ることに關しては抵抗なんて一切無いんだけど、嘘は大嫌いなんだ。だから、僕が言ったことに嘘は無い。君が僕らに捕まってくれるのなら、この子は速やかに返却するよ」

先程の木乃香からの質問に、プレイヤーは懇切丁寧に答えた。

この言葉に嘘は無い。

プレイヤーは本当に、嘘や偽りが大嫌いなのだ。

「ごめんな、アスナ、ネギくん、カモくん、衛宮さん。うち……行くわ」

プレイヤーの言葉を信じてか、それとも状況の打開にはこうするしかないと悟ってか、木乃香は仲間達にそのように告げた。

「……すまん」

ネギと明日菜、オコジヨ妖精が無力さに打ちひしがれるあまり言葉を失う中、士郎は一言だけ、少女に詫びた。

奇妙なことだ。士郎が謝る要素など一つもない。彼が此処にいないければ、もっとプレイヤーにとって楽しい状況になっていたのだから。

もしもここにいるのが士郎ではなくヴァッシュだったら、逆にプレイヤーの劣勢どころか作戦失敗で逃走せざるを得なかったのだからそこは、運が良かったと胸を撫で下ろす。

「君がナインに掴まれてから、この子を解放するよ。苦痛からの解放と称して殺すようなことは無いから、安心して捕まってるね」

「分かりました」

プレイヤーが言い、木乃香が頷くと、ナインがもう一方の腕を伸ばして来た。

木乃香は、大人しくそちらに向かうかと思っただが、先にナインに捕まっている刹那へと歩み寄った。

強引に捕まえても良かったが、何をするつもりか気になったので、プレイヤーは一先ずナインにも静観するように指示した。

返事の代わりに、ナインから発せられる殺気が強まる。士郎への牽制としては十分だろう。

「ごめんね、せつちゃん。うちのせいで」

「こ、の……ちゃ……。逃げ……て」

木乃香が呼びかけると、激痛のあまり悲鳴を上げることができず、呼吸にも苦しんでいた刹那が口を開いた。

出てきた言葉は、自らを省みず、木乃香の身を案じる言葉。

忠誠心や使命感によるものか。それとも、友情から来る純粋な思い遣りの心か。

前者ならばさっぱり分らないが、後者ならば分らないでもない。

「うっん。せつちゃんが死ぬなんて、うち、絶対いやや。だから…

…これは、うちのわがまま」

木乃香の手が、刹那の顔に触れる。

その時、不思議な事が起こった。

木乃香の体が淡い光に包まれたかと思うと、その手が触れていた刹那の顔色に、見る見るうちに生気が戻ったのだ。

不確定情報で、近衛木乃香には類稀なる治癒術の素養があると聞いていたが、これほどのものとは思わなかった。

「友を想う心が才能を開花させた、ってところかな。こう言う状況でなければとてもロマンチックだ、説明つき一枚絵でお金を取れたらうね。けど、現実はそのはいかない。さあ、お嬢さん、魔人の手へお入りなさい」

茶化しながら告げて木乃香から刹那を引き離し、ナインの手の中

へと促す。

木乃香は黙って頷いて、プレイヤーを睨みつけてからナインの手の中へと収まった。

無事に近衛木乃香を確保して、衛宮士郎から不穏な気配を感じるのと同時、ナインに仕上げの指示を出す。

「それじゃあ、ナイン、衛宮士郎にそっちの子を渡してくれ」

指示を聞くと、ナインは手首のスナップを利かせて、士郎目掛けて刹那を投げつけた。

プレイヤーとナイン達の視覚と聴覚は、共有の魔術によって繋がっている状態だった。だからこそ出来た、狙い澄ました投擲。

プレイヤーは一言も、刹那を普通に解放するとは言っていない。

無事に返すというのも、投げ渡した刹那を士郎が受け止めるという大前提での話だったのだ。

嘘を嫌う人間が、正直者とは限らない。

「じゃあね〜」

士郎が刹那を受け止めている間に、プレイヤーとナインは撤退を開始した。

同時に、念話で別行動を取っていたソードとE2にも連絡を入れる。

E2は自力での撤退が不可能とのことで、後で仮契約カードを使って回収することにした。

ソードは彼の楽しみみの真っ最中だったが、意外にもすぐに撤退を受け入れてくれた。ソードはプレイヤーの企てに絶対に欠かせない人材でもあるだけに、安堵の溜め息を吐く。

もうすぐ、この仕事も終わり。

その後が、今から楽しみだ。

士郎は、刹那が解放されたと同時に仕掛けるつもりだった。だが、その考えは読まれていた。ナインの投擲の勢いは強く、士郎が避けずまえば刹那が重傷を負うか、下手をすれば死にかねないほどだ。干将と莫耶の投影を破棄して、空いた両手で刹那を受け止める。だが、勢いは想像以上で、衝撃を和らげるために床を転がらざるを得なかった。その甲斐あって、目立った外傷もなく、無事に刹那を受け止めることができた。

受け止めた刹那を素早く床に寝かせて、士郎はプレイヤー達が去った壁の穴へと向かった。既にプレイヤー達の姿見えない。代わりにあるのは、濃密なまでの死の臭いと、ナインによるものと思われる蹂躞の痕跡。してやられた。

己の不甲斐なさに、士郎は拳をきつく握り締め、壁を叩いた。敵の戦力を、完全に侮っていた。まさか、ソードに匹敵するにしても、あんな化け物が出てくるとは思っていなかった。

人間離れた大きさの巨人を見るのは、士郎は初めてではなかった。

10年前、故郷の冬木市で起きた戦い 第五次聖杯戦争の中で、それと遭遇していた。

バーサーカーのクラスで召喚された、世に知らぬ者無き古代ギリシャの大英雄 ヘラクレス。

ヘラクレスの体躯は3m近くあり、その剛腕とプレッシャーは今でも鮮明に覚えている。

士郎はそれ以来、彼以上に巨大な人間を見ることは無く、ヘラクレスを人類で最大の存在だと、心のどこかで考えていた。

だが、違ったのだ。

ナインと呼ばれていた、腕だけを士郎達に見せていた謎の巨人。腕だけで士郎を上回る大きさは、最早人間であることを疑いたくな

るレベルだ。

士郎は自らの認識を超えた、あまりにも巨大な腕に驚くあまり、初動が遅れてしまった。

あの時、腕の大きさなどと言う瑣末なことに気を取られてさえいなければ、こんな事態にはならなかったはずだ。

或いは、奴の接近を感知した時点で宝具を投影し、射線上の人間の犠牲を顧みずに先手を打っていれば良かったのではないか。

結果だけを見れば、ここからの直線上にいた人間は全てナインによつて殺された。ならば、奴を止めるために士郎が巻き込む形で殺しても、それは最悪を防ぐ必要な犠牲であり、無駄死にはならなかったのではないか？

以前ならば、迷わずそうしていた。だが、誰かが止められる可能性も考慮して、士郎はそれを行わずに木乃香達を避難させることを選んだ。

人を殺さずに、人を守り、人を救おうとした。その選択が間違っていたのか？

大勢の人々を救うために、1人の人間を犠牲にした俺が、今更そんなことを選ぶのは歪だと、間違っているというのか……！

不意に、右手に鋭い痛みが走った。

壁にぶつけてどこかを痛めたにしては、タイミングも痛み方もおかしい。

右手の甲の装飾をずらして確認しようとした所で、こちらに向かって来る足音が聞こえた。

「士郎、みんな、無事かい!？」

部屋に飛び込んできたのは、ヴァツシュだった。

ネギ達を見ると、気の抜けたような顔をしている。もしかしたら敵が来たのかもしれないと、警戒していたのだろうか。

とにかく、ネギ達には状況を説明するような余裕は無いと考え、士郎は右手の痛みの事は後回しにして、ヴァツシュに状況の説明をした。

「すまん、ヴァツシュ。近衛木乃香を守れなかった」

「そうか……。けど、皆が無事なだけでも、良かったよ」

士郎から悪い報せを聞いて、ヴァツシュは一瞬、表情を暗くした。だが、直後に心の底から安堵したような、そんな声でネギ達の無事を喜んでいた。

しかし、刹那はそれを素直に受け止められなかった。

「そんな！ 私が不甲斐ないばかりにお嬢様が攫われて……。目の前で、私を人質に使って攫ったんです！ それで、何が無事で良かったと……！」

「姉ちゃん、ヴァツシュを責めたらあかんで」

ヴァツシュに食ってかかった刹那の前に割り込んだのは、頭に犬のような耳が生えている少年だった。

士郎には見覚えが無いが、聞き覚えのある特徴だ。確か、リヴィオが交戦して確保した敵側の少年だったか。

「君は……。えつと、小太郎くん、だったっけ？」

「せや。よう命拾いしたな、西洋魔術師の坊ちゃんの……。えつと、なんや、ニラやったか？」

「ネギだよ!？」

ネギが話しかけると、犬耳の少年　小太郎は気さくに、中々捻った冗談を交えて答えた。

そのやり取りを見て、つい、士郎は笑みを零した。

「確かに細ネギとニラは、見た目が良く似ているな」

「いや、そんな真面目に解説されても困るんやけど……」

外国人で日本の野菜の名前に馴染みの薄そうなネギの為に軽く解説したのだが、どうやら小太郎には迷惑だったようだ。流石は関西人、幼くとも笑いへの拘りは並み以上か。

「ありがとう。お陰で、気持ちを切り替えられた」

士郎は、小太郎とネギに礼を言った。

何もかも失われたわけでも、完全に手遅れになったわけでもない。それを、思い出すことができた。

今為すべきことは落胆し後悔と絶望に沈むことではない。他に、まだできることがある。

「ヴァツシュ、そっちの状況は？」

「僕と小太郎でE2つて人を捕まえたよ。それで、E2はリヴィオが連れて行って、多分、今は外でケンの相手をしている。これぐらい……かな」

今度は士郎がヴァツシュに状況を訊ねた。他にも分かっていることはあるだろうが、ここで話すことではない、といったところか。

「そうか……」

少ないながらも情報を得て、士郎は考える。

襲撃から木乃香の拉致までの時間は10分にも満たない。隠していた手札を活用し、こちらの油断を突いた電撃作戦、見事と言う他ない。

確認出来た敵の数は4人。プレイヤー、ナイン、ソード、E2。事前の小太郎からの聴取によれば、この4人は元からのチームらしい。ならば、連携の効率から考えれば最小限の人数で襲撃を仕掛けた可能性は大きい。

気になるのは、話にあつた助っ人だ。ケン・アーサーとナインという強力な戦力がありながら、尚もプレイヤーが呼び寄せた増援。切り札か、或いは何らかのコンボのキー・カードか。

今、建物の内部で戦いの気配が起こっている様子は無い。ならば、助っ人の役割は撤退の補助役と考えるのが妥当か。追手を退ける殿しんがり、追手を誘き寄せる囿、何らかの逃走手段の確保、といったところか。或いは、士郎達の知らない所で暗躍していた可能性も否定できない。その場合はケン・アーサーやナインに匹敵する戦力という可能性はほぼ潰えるのだが、それは楽観論に繋がってしまうので排除すべきだ。

思考を巡らせ、結論を出すと、士郎はヴァツシュに声を掛けた。

「……プレイヤー達を追撃する。ヴァツシュ、行こう」

不安要素は幾つもある。だが、それらに日々構っていても時間を

浪費して手遅れになってしまふ可能性が大きい。

ならば、考えるよりもまず行動だ。その過程で何らかの問題にぶつかったら、その都度打ち破ればいい。

「OK、急ごうか」

ヴァツシユは土郎の呼び掛けに迷いなく頷いた。

土郎は両手に干将と莫耶を再び投影し、外に面した壁を斬り崩した。ここまで破壊されているのだから、追加で壁が一つ壊れても大差はあるまい。

眼球を魔術で強化して闇夜に目を凝らし、プレイヤー達の痕跡を探す。

すぐに、隠しようのない巨大な足跡を見つけた。魔力の痕跡や魔術式の類も見てとれないからには、畏の可能性は低い。あれを追跡すれば追いつけるはずだ。

土郎が隣に立つヴァツシユに声を掛けようとした所で、別の声に呼び止められた。

「待って下さい！」

声の主は、ネギだった。

「僕も、連れて行って下さい！」

ネギの言葉を聞いて、すぐに土郎は表情を厳しくした。

土郎はネギ達を置いて行くつもりだった。戦力換算の問題ではなく、ネギ達にこれ以上恐怖を経験させないためだ。

いや、寧ろ、ネギ自身から付いて行くと言い出したことは意外だった。

幾つもの戦場を渡り歩き、何度となく格上の敵からの殺意や敵意に晒されて来た土郎でさえも息を呑み、死を予感した、ナインの殺気は尋常のものではなかった。しかも、あの殺気は殺意の感受性が発達していなくても感じてしまう類のものだ。そんなものに晒されて、ネギ達は暫く恐怖で動けなくなっていると考えていた。

だが、ネギは土郎を真っ直ぐに見ている。その表情には、やはり恐怖がありありと刻まれているが、瞳には恐怖に負けまいとする、

強い意志が宿っていた。

それを若さゆえの無謀や蛮勇と判じた士郎が口を開こうとすると、ヴァッシュが口元に手を当てて遮ってきた。見れば、ヴァッシュは自分の口の前に人差指を立てている。

ヴァッシュは、自分とは別のものを感じている。

それに気付いた士郎は、黙ってネギの言葉の続きを待った。

「このかさんは僕の生徒で、それで、いつも料理を作って貰って、お世話にもなってる……大事な人なんです！　お願いです、僕も連れて行って下さい！」

ネギが連れて行ってくれと言った理由は、あまりにも些細なことだった。

衛宮士郎はある種の精神的異常者であるが故に、些細な理由で他者の為に身を呈するという無謀を行ったことが多々ある。しかし、異常者ではあり得ないこの少年の場合は、違うのではないだろうか。強い意志を持つ少年が、些細なことの為に恐怖に立ち向かうことを、果たして、無謀や蛮勇と呼べるだろうか。

「私も連れて行って下さい。お嬢様の友情に報いる為にも、今度は私がお嬢様を助きたい。もし断つても、無理矢理ついて行きます」

「私も！　私だって、このかの友達だもん！　このまま、何もしないで黙って見ていただけなんて、できない！！」

「オイラも、アニキの行く所なら、たとえ火の中、水の中！　どこまでも付いて行くツス！」

ネギに触発されるように、刹那、明日菜、カモミールが続く。

先程までは恐怖と怒りと絶望に縛られていた少女達が、今はネギと同じく瞳に強い意志を宿していた。

カモミールは未だにガタガタ震えているが、武者震いということにしておこう。

「ワイは鼻が利くし、あいつらの臭いは覚えとる。連れてつたら役に立つで？」

何時の間にか、ヴァッシュとは反対側で士郎の隣にいた小太郎が、

不敵な笑みを浮かべてそう言った。

恐怖に立ち向かう、小さくとも強い意志。

正直、士郎にはそれが何か分からない。

士郎には幼い頃に養父から受け取った『正義の味方』という理想があった。どのような事態に直面しても、その理想に殉じようという気持ちが常にあった。

だから、恐怖を抱えたまま、他者の為に行動することに必要なものが、分からなかった。

それでも、無謀や蛮勇ではないことと、止めても勝手に付いて来るか、勝手に別行動を取られかねないことぐらいは分かる。

ヴァツシュと視線を合わせて、士郎が観念したように頷くと、ヴァツシュも力強く頷いた。

「よし、分かった！ みんなでこのかを助けに行こう！！」

「但し、俺達の傍から離れないことと、俺達より前には立たないこと。これだけは守ってくれ」

告げて、士郎とヴァツシュは踵を返し、ネギ達に背を向けた。

「はい！」

ネギの返事を背に受けると、士郎とヴァツシュは一緒に外へと飛び出した。

「目指すは一つ、近衛木乃香の奪還だ」

「後は、ついでに日本の平和も守っちゃおうか」

『おー！！』

士郎とヴァツシュの号令に、少年少女達は強い想いを込めて返事をした。

第十四話

巨人の残した足跡を頼りに、ネギ達は木乃香を攫った犯人達を追走していた。

先頭を走る土郎とヴァッシュに先導されながら、雲が流れて月明かりが差すようになった夜の森の中を駆け抜ける。他の全員が走っている中でネギだけは杖に跨って低空飛行を行っているが、ネギは運動が不得意である為だ。

目の前には、木々の間から差す月明かりに照らされて暗闇でも目を引く紅い背中。少し視線をずらせば、鬱蒼と茂った木々が月明かりを呑みこんで、暗闇を作り出している。

普段は穏やかさを感じる夜の闇も、まるで黒い巨人が作り出した暗黒のように感じられて、不安や恐怖を一層煽った。

こんなことではいけないと、気を紛らわせるためにネギは土郎に話しかけた。

「今から追いかけて、追いつけるんでしょうか？」

「アジトを放棄していたからには、奴らの仲間が近くで待機していて、合流しているはずだ。そこで少なからず足を止めるだろうから、絶対に追いつけない、ということはない」

「なるほど、そうですね」

速度を落とさず、視線もずらさず、土郎はネギからの問いに理路整然と答えた。それに、ネギも納得して頷く。

すると、それに触発されたように、明日菜もヴァッシュに話し掛けた。

「……ねえ、ヴァッシュって気とか魔法で速くなってるの？」

「うっん、地力だけど？」

明日菜からの問いにヴァッシュはあっさりと返したが、それはとんでもないことだった。

今、明日菜はネギとの仮契約に基づく契約執行による身体強化を

行っている。それによる身体能力の飛躍は凄まじく、障害物の多い森の中でトップスピードは出せなくとも、素人の明日菜でもプロの陸上選手をも凌ぐ程の速さと持久力を得ている。

それ程のレベルにまで強化された身体能力に、地力で匹敵、若しくは上回る。

リヴィオという前例を間近で見たばかりとはいえ、やはりネギには驚くべきことだった。

ちなみに、士郎はネギが知る身体強化とは全く別系統の強化の術を施しているようだった。どのような違いがあるかは見ただけでは分からないが、少なくともネギの知る強化の術よりも燃費で優れているように見えた。

「はあー……世の中、見た目によらず凄い人っているのねえ」

「やだなあ、照れちゃうよ」

明日菜が感心したように言うと、ヴァッシュは枝を避けながら分かり易く照れている動作を取った。

「ヴァッシュ、半分くらいバカにされてたで？」

「けど、半分くらいは褒められてたでしょ？」

小太郎からのツツコミにも、さらりと返す。

そのやり取りがなんだか面白くて、ネギはつい、小さく笑ってしまった。

だが、刹那にはそういう余裕が無いようで、ピリピリとした表情のまま、前を向いている。

「全員、止まれ！」

急に、士郎から号令が掛かり、全員が慌てて急停止する。

何事かと訝しんでいると、士郎とヴァッシュは森の奥、暗闇に閉ざされたその先を見ていた。

「この先に、凄い団体さんが見えるな……。しかも、多分、あれって本物のヨーカイなんですよ？」

「そうだな。鬼と天狗か。誰かが戦っているようだが……リヴィオか？」

視線を前に向けたまま、2人が言う。土郎の返事を聞いて、ヴァ
ツシユが辟易したような、呆れたような表情になった。

しかし、ネギが幾ら目を凝らしてもそんなものは見えなかった。
昼間なら見えたかもしれないが、暗幕で遮られたかのように、土
郎達の言った光景が見当たらない。

「2人とも、目えいいんやな」

「いや、目がいいってレベルじゃないでしょ」

小太郎が感心して言うと、今度は明日菜がツツコミを入れた。

「戦ってるのがリヴィオの旦那なら、合流した方がいいんじゃない
ツスか？」

ネギの懐から顔を出して、カモミールがそのように進言する。

それを聞いて、暗幕の向こうの様子を窺っていた2人も頷いた。

「よし、行ってみよう」

ヴァツシユからの指示に従って進行を再開し、暫くすると、物音
と声が聞こえて来た。

物音は、何か大きなもの同士がぶつかる音と、大きなものがぶつ
かって木々や枝葉がざわめく音。

声は

「ひ、ひいいいいい！」

「やっぱり無理やったんや！一騎当千の鬼殺しに、ワイらが勝と
うなんて無理な話やったんや！」

野太い、大人の男の悲鳴と泣き言だった。

男の悲鳴 先程の土郎の言葉通りなら鬼のものだ を聞いて、

ネギ達はぎよつとした。あまりにも似つかわしくない、奇妙なもの
に思えたからだ。

やがて、暗幕に切れ目が見えた。

森の中でも開けた場所に出たのだ。土郎とヴァツシユが立ち止ま
り、ネギはその後ろから様子を窺い、状況を視認して息を呑んだ。

ネギが見たのは、森の広場を埋め尽くすほどの鬼の大群と、それ
ら全てに畏怖の感情を懐かせている、黒い鬼神の後ろ姿だった。

「おーい、リヴィオー」

ヴァツシュが呼びかけると、鬼神　リヴィオは振り返った。

「あ、ヴァツシュさん。すいません、奴らに追いつけたんですけど足止めを食らっちゃって」

こんな状況とは思えない、明るく軽妙な声でリヴィオは言った。

いや、リヴィオの声が浮かれていたり軽薄だったりするわけではない。ただ、周囲を怪物に囲まれているのに、あまりにも平然としているから、ネギにはそう聞こえてしまったのだ。

人ではない怪物デモンに包囲されて、平気でいられることは、ネギには出来なかった。

「……アニキ？」

気付かぬ内に、懐のカモミールに浴衣の上から触れていた。心配したように顔を覗き込んで来たカモミールに、ネギは精一杯の強がりで返した。

「ごめん、カモくん。大丈夫だから」

ネギの人生を一変させた幼少期トラウマの事件を、今は木乃香を助けるという使命感で塗りつぶす。

今は、足を引っ張るわけにはいかない。

「ま、まさか……これだけの鬼を召喚して使役するような術師がいたのですか!？」

刹那が驚愕しながら問うと、リヴィオは首を横に振った。

「いや。予行練習だとか言って、あの女が御令嬢の力を使って呼び出していたよ。数だけはいから梃子摺っててさ」

リヴィオから返って来た答えに、刹那だけでなくネギも表情を陰しくした。

他人の魔力を自分で使うという行為は極めて危険だ。魔力を使う側が調子に乗って大量の魔力を使ってしまえば、魔力を使われる側に負担の殆どが行く。もしも、使用する魔力量が使われる側の容量を超過してしまえば、命に関わる。

木乃香を道具のように扱う天ヶ崎千草のやり方に、強い嫌悪を覚

える。なにより、日本の平和を脅かしてまで自分の欲望のままに行動しようという姿勢が、父のような『立派な魔法使い』を目指すネギには許し難いものだった。

「……ええっと、こいつら何人いるの？」

「千ぐらい呼び出したとか言ってたな。銃が通じないから面倒だけど、それ以外は問題ないよ」

すると、明日菜からの問いにリヴィオは何でもないことのように、さらりと答えた。

敵の数は千だと言った。どれも、見るからに屈強そうな者や、一筋縄ではいかない曲者ばかりだ。それを相手に、一切の強化の術を使わずに、素手で問題無いという。

「君、本当に人間か？」

ネギが懐いた疑問を、土郎が代弁してくれた。

すると、リヴィオは苦笑した。

「一応は。それよりも、ここは俺に任せて先に行って下さい」

言って、リヴィオは鬼や天狗など、魑魅魍魎の百鬼夜行ならぬ千鬼夜行を睨みつけた。

「お前ら、この人達を御通ししろ。手を出したら只じゃおかないぞ」
『は、ハイイ！』

リヴィオが脅すと、妖怪達はすぐに返事をして道を開けた。

その光景に、ヴァッシュ以外の全員が呆然とした。

一体、リヴィオと妖怪達の間にとのような力関係ができているのだろうか。

「奴らは湖に向かって儀式を行うとも言っていました。お気を付けて」

畏まった挨拶をして、リヴィオは先を促した。

ヴァッシュがすぐに応じて先に向かって走り出したので、それに続く。

ネギ達が妖怪達の群れの真ん中を縦断してから、数十秒後。

また、先程と同じ物音が聞こえ始めた。

「……どちらが鬼なんでしょうか」

「本人には言わないであげてね。傷ついちゃうから」
刹那が零した言葉に、ヴァッシュは笑みを浮かべながら返した。

鬼を始めとした妖怪の類に対しては、銃弾が通用しない。

全く理不尽な話だが、歴然とした事実としてそれは存在していた。普通のガンマンや傭兵なら、主力兵装が無力化されただけで呆気なく鬼の餌食となるか、命からがら逃げ出すしかない。

だが、リヴィオはあらゆる意味で普通ではなかった。

その身体能力は、人間の身体物理限界を超えている。

反射・反応速度、腕力、脚力、瞬発力、跳躍力、再生力、全てが故に。自らの身の丈の倍以上はある巨躯を一撃で沈め、その足を掴んで鈍器として使うことも、リヴィオにとっては何ら異常なことではなかった。

万が一、武器を失ったら、武器が使えなくなったら。そういう状況を想定した訓練も、リヴィオは積んでいる。その最も簡単に優れた答えが、肉弾戦だ。

鈍器代わりに振り回していた鬼が、20ほどの鬼を潰した所で消失した。そこへ、金棒を持った鬼が4匹、前後左右から襲いかかって来る。

右方向へと踏み込み、向かって来た鬼を文字通り蹴散らす。その先にいた鬼の頭上へと跳躍し、その頭を踏み台にして、踏み砕きながら跳躍。厄介な翼を持ち飛行能力を有する者を潰す。

空中で無理に打撃を打ちこもうとはせず、しがみついてから首を押し折る。天狗が消失して、そのまま地面へと自由落下する。そこには、これを好機とばかりに群がっている鬼の群れ。

それに対して、リヴィオは、怒りを込めて殺気をぶつけた。

闘争を喜びとする種族というだけあり、そういった感受性に優れた鬼どもはリヴィオの殺気を敏感に感じ取り、殆どが濃密な死の予感に動きを止めた。動きを止めた群れの中、辛うじて一人分が空いている隙間に着地し、両脇の鬼を掴んで持ち上げ、頭同士をぶつけ合わせて木の実を割るように叩き割る。

その光景を目の当たりにした魑魅魍魎は、恐れから身を引き、間を開けた。

だが、すぐに1匹、リヴィオに正面から向かって来た。

「まったく。殺されても死なないやつは、これだから」

表情と声、その両方に嫌悪を露わにし、それを拳に込めてぶつける。

すぐに鬼の体は四散し、消滅する。

だが。どれだけ殺そうとも、鬼どもは1匹も死んでいない。鬼を始めたとした人間に召喚された妖怪の類は、殺されて消滅しても死なないのだ。

矛盾しているとしたか思えない話だが、呪術的にれっきとしたカラクリがあるらしい。だが、リヴィオにはさっぱり分からなかったし、牧師見習いである以前にその事実を受け容れがたかった。

命は、誰しもに1つ。

人は、殺されれば死ぬ。死んだら、ずっと死んだままだ。死人が生き返るようなことは、決してない。

だからこそ、たった一度きりの人生で、誰もが死を恐れ、生を謳歌する。

だというのに、このバケモノどもは『この世のものではない』という訳の分からない理由で、その理から逸脱する。

ここで殺されても死ぬわけじゃないから、命に対して無頓着でいられる。自分の命をも玩具のように扱えるほど。

ヴァッシュさんやあの人、たった一つの命に全てを懸けたというのに、こいつらは……！

今も共にいる尊敬する人と、今もその背を追っている憧れの人。彼らの生き様を根本から否定するような在り方を、リヴィオは決して許容しない。

すると、背後から鬼が一拳に押し寄せて来た。

この時、何故かリヴィオは背後への警戒を疎かに 否、解いていた。

それを察知した鬼どもが、これぞ天佑とばかりに襲いかかって来たのだ。

リヴィオは気付いている。だが、迎撃しようとも、防ごうとも、避けようもしない。

先頭の鬼が金棒を振り上げた、その瞬間。

闇夜を紅い一閃が貫き、リヴィオに背後から迫っていた鬼達を一網打尽にした。

「君らしくもない。背後が無防備だったぞ」

いつの間にかこの場に参上した、紅い一閃を放った当人が、リヴィオに親しげに声を掛けた。

その男は、黒い装束に身を纏った リヴィオがこの世界に来た時に初めて出会った人物である、黒い騎士だった。

リヴィオに熱中していた妖怪達は、黒い騎士の登場を知るや、熱が奪われたように震撼し、身震いしていた。

察知したのだ。黒い騎士が自分達にとって、遥かに格上の存在であることを。

「あんたが来るのが分かったからな。助かったよ」

颯爽と参上した黒い騎士に、リヴィオも親しげに返事をした。

リヴィオと黒い騎士は、リヴィオがこの世界に放り出された直後に出会い、後に再会し、些細なことで対決して以来、親しい付き合いをする関係だ。

当時の黒い騎士は自暴自棄に陥り、当て所のない怒りと憎しみと哀しみに苛まれていたが、リヴィオとのケンカを経てからはスッキリとした様子で、前向きに日々を過ごすようになっていた。

それ以来、時々手合わせをしたり、世間話をしたり、アウトドア料理を御馳走になったりと、そういう間柄になっていた。

黒い騎士は周囲を見渡した。彼の眼に映るのは、リヴィオが見るのとほぼ同じ状況だ。

「しかし、今宵は随分と数が多いな」

「ちよつと厄介な問題が起こってるんだ。掻い摘んで説明すると、囚われのお姫様の力が悪用されているんだよ」

犇めく数百の魑魅魍魎を前にしても、黒い騎士はリヴィオと同様に少しも気負った様子を見せなかった。

それよりも、リヴィオの言った『囚われのお姫様』という言葉に敏感に反応していた。やはり本物の騎士だけに、そういうことには思う所があるのだろう。

「穏やかな話ではないな。早々に蹴散らすか」

言つて、掌中の紅い槍を翻し、黒い騎士は鬼どもを睨みつける。

「ああ。あんたが一緒に戦ってくれるなら、百人力だ」

騎士と背中合わせの位置に移動して、リヴィオも戦闘態勢を取る。深い森の中、木々に抱かれた仮初の舞台。2人の勇者と千の鬼の舞踏／武闘の幕が開き、閉じるまでの時間は十数分。

見届ける者が誰一人としていない空の劇場の演目は、千の鬼が2人の勇者によつて退散される、物語とも言えない寸劇。

リヴィオが告げた『湖での儀式』というキーワード。それに思い当たったのは刹那で、どうやら天ヶ崎千草はかなり良からぬことを企んでいたようだ。

曰く、総本山近くのとある湖の底には、最盛期の詠春達でさえも封印することしかできなかつたような、海千山千の妖怪とは格の違

う怪物が眠っているという。

その封印を解き放ち、使役しようというのが千草の企みだと思われる。

前者には近衛の血筋が、後者には莫大な魔力が必要となるようだが、その両方の条件を満たしているのが、木乃香だったのだ。

巨人の足跡が途絶えていたこともあり、その情報を頼りに追跡を再開する。

走りながら、ヴァツシユは詠春から聞いた千草の動機を思い返す。千草は20年ほど前に起こった魔法関連の大きな戦いで、西洋魔術師が原因で両親を失っている。今回の事はそれを原因とする復讐に違いあるまい。そのように、詠春はヴァツシユに語った。

ヴァツシユは、千草の心を想った。

20年経っても薄れなかった復讐心は、両親への深い愛情の裏返しだろう。ただ、彼女は両親を失った悲しみよりも、両親の命を奪った者達への怒りが勝ってしまった為に、復讐に走ってしまった。20年という、人間には決して短くない、寧ろ長過ぎる時間を経ても、立ち止まることなく。

大切な人を奪われた、怒り、悲しみ、憎しみ。全て、ヴァツシユにも覚えがあることだ。

嘗て、絶望の底に沈んだヴァツシユを救ってくれた女性　レム・セイブレムを殺した、ヴァツシユと同じ絶望の中で憤怒と憎悪に狂った双子の兄　ミリオンズ・ナイブズ。

ナイブズへの感情は、ほんの数年前まで、怒りと憎しみに満ちていた。それこそ、ナイブズから放たれた刺客　GUNG・HONG・GUNSの1、モネヴ・ザ・ゲイルにナイブズへの怒りと憎しみをぶつけて、殺してしまおうとしたほどに。

それでも、ヴァツシユが思い止まることができたのは、それ以外の感情が溢れて来たからだ。

それが、悲しみ。

レムを失った時の悲しみを思い出し、レムへの誓いを裏切ること

への悲しさが溢れて、ヴァツシユは銃爪じきがねを引かなかった。

千草にも知って欲しい、そして思い出して欲しいのだ。悲しみと、その悲しみが生まれて来る根源を。

そうすれば、きつと間に合う。きつとやり直せる。

こんなにも、暖かくて穏やかな世界の住人である彼女ならば……必ず。

ヴァツシユが決意を新たにした、直後、嫌な殺気を感じた。

まるで、首筋に刃物を突きつけられるような錯覚を覚える程の、研ぎ澄まされた鋭利な殺気。この先に何者かが待ち受けていることは間違いない。

それはつまり、このルートが正解であるということでもある。

暫くすると、殺気の主である魔人が現れた。

「ケン・アーサー」

立ち止まり、土郎が忌々しげに名を口にします。

ヴァツシユは初対面だが、雷泥のような如何にも『サムライ』らしい格好だと聞いていただけに、その姿にはちよつと気が抜けてしまった。

ケンの衣服はボロボロになってしまったようで、腰にボロ布を巻いて腰に鞘を差しているだけで、他はほぼ全裸だった。辛うじて、足に履いているワラジだけはそれらしいか。

恐らく、リヴィオとの交戦でああったのだろうが、その割に、体に傷が見えないのは妙だ。ケンは本物の吸血鬼だと土郎は言っていた。ならば、尋常ならざる再生力を持っているということなのだろうか。

「ヴァツシユ・ザ・スタンピード以外は通れ」

不意に、ケンはそう告げてヴァツシユの前へと移動して、他の人間には一切気を向けなくなった。

代わりに、ヴァツシユへと殺気が集中する。

殺気を向けられるこの感覚は、どうしても慣れない。不快感と恐怖で体が震えそうになる。

だが、他の皆が足止めにされずに済むという点では、悪くない状況だ。

「本当かい？」

ヴァッシュが問うと、ケンはすぐに頷いた。

「戦う前から勝ち方の見える相手との戦いに興味は無い。俺が戦いに求めるのは、極限での鍛練だ」

「鍛練……？」

ケンが告げた言葉の中で不可解な単語を、ネギが繰り返した。

確かに、戦いに鍛練を求めるとは奇妙な話だ。不本意ながらも数多くの戦闘狂と対決して来たヴァッシュだが、こういうことを言うタイプは初めてだった。

だが、今はそれよりも大切なことがある。深く考えるのは、後にしよう。

「おおっと、お喋りは厳禁だ。Time is money 先へ行ってくれ」

身振り手振りも加えて、ネギ達に先を促す。

大きく出遅れてしまっている以上、木乃香を助け、千草の復讐を防ぐには時間との戦いにもなっている。早く先に進むに越したことは無い。

「分かった。気を付けるよ、ヴァッシュ」

「できるだけ、すぐに追いかけるよ」

ヴァッシュの言葉にすぐに応じて、士郎はネギ達を連れて先へと急いだ。

1人1人がエールを送ってくれて、それに力強く答える。

全員の姿が見えなくなると、ケンは刀を抜いた。

「銃を抜け」

「あ、先に聞いていいかな？」

ケンの言葉を聞き流して、ヴァッシュは逆に聞き返した。それに苛立つこともなく、ケンは刀を抜いたまま頷いた。

「なんだ」

「君、どうやったらず負けを認めてくれる？」

真剣な表情で、ヴァッシュは問うた。

それを聞いて、ケンは笑みを更に深くし、視線にさえも刃のように研ぎ澄ませて睨んで来た。

「如何なる形でも構わない。俺が負けを認める程、戦うのを諦める程の圧倒的な力の差を示せ。魔人すら震わせる超人よ」

言って、ケンは刀を構えた。

どつという訳かは分からないが、ケンはヴァッシュの素性を知っているらしい。そうでなければ、今の言葉が出て来るはずが無い。

どこまで知っているか分からない。だが、知った上で挑んで来ていることは間違いない。

脳裏に、かつて戦ったムラマサ使いの魔人　雷泥・ザ・ブレイドの姿が過る。

「……分かった」

頷いて、身構える。銃を手取るうとはせず、無手のまま。

その様子を見て、ケンも訝しんでいる。だが、次第に気付く。

少しずつ、少しずつ。自分の殺気が、もっと強大なものに吞まれ、
圧され、萎縮していくことに。

ケンの肌が、間合いを置いているヴァッシュの目からも分かるほどに粟立つ。それを見ても、ヴァッシュは無言のまま、無手のまま、
佇む。

対峙してから1分ほど、2人は動かなかつた。

そして戦いは、銃声と共に始まり、同時に終わった。

「あ……？」

ケンは、突然の衝撃と銃声に何が起きたのか理解できず、呆然と
声を漏らして、衝撃が伝わって来た自分の刀を構えたまま検める。

そして、気付く。いつの間にか、刀の鏝が砕け散っていることに。
「まだやるかい？」

銃口を向けて、ヴァッシュはケンに問うた。

先程の一瞬の出来事は、単純明瞭。ヴァッシュがケンの刀を、銃

を抜いて鐔の部分を狙って撃つたというだけだ。

但し、ケンの知覚が及ばないほどの速さでの抜き撃ちと、刀の鐔という小さな標的に寸分違わず命中させる精密射撃で。

刀の鐔を見た後、ケンはヴァツシュの右手に握られている銃を見て、それらを交互に数度見ると、やがて、風船から空気が抜けるように両腕がガクリと落ちた。

「は……は、はは……」

ケンは力が抜けた、乾いた笑いを漏らした。

人間には、驚くべき事態に直面した時、感情とは関係無しに何故か笑ってしまうことがある。今のケンの心境が、正しくそれなのだろう。

勝負は付いたと、ヴァツシュは銃を仕舞おうとして　その手を止めた。

「はっ　！　はは、は　っ！　あ！」

笑い声が止まらず、その声には次第に張りど力が込められていき、やがて、昂り過ぎて呼吸しているのか発声しているのか分からないまでになった。

「え〜と……大丈夫？」

明らかに尋常ではない様子に、取り敢えず、ヴァツシュは声を掛けてみた。すると、ケンはヴァツシュに目を向けて、意外なことを口走った。

「こわい、なあ……。何をされたのか、理屈では理解出来た。だが……実際に、目の当たりにした瞬間には、何が起きたのかも分からなかった、なんて……！　理解しても、まるで実感が湧かない、なんて……！　ああ！　なんて、こわい……！」

気が狂れたかのように、ケンは同じ言葉を呪詛のように繰り返し始めた。こわい、こわい、と。

ヴァツシュの先程の一撃に恐怖したと、ケンは言っている。実際、声も体も震えているのは、それらしい態度に見える。

だが、その表情からは未だに笑みが消えていないし、目からは闘

志が全く失せていない。そして、声色からは殺気が失せた代わりに、狂気が滲み出ていた。

今まで出会ったどの戦闘狂とも違う姿に、ヴァッシユは困惑し、思わず身を引いた。正直、見ている側が怖くなって来る。

「俺の負けだ」

震えたまま、小さな声で告げて、ケンはヴァッシユの前から退き、夜の闇の中へと消えて行った。

声を掛けようかとも思ったが、どう声を掛けていいのか分からず、ヴァッシユは士郎達との合流を優先し、先を急いだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4593o/>

正義の味方と夢見る聖者

2011年10月2日03時10分発行